

財団法人山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第93集

長倉鍛冶屋台遺跡

— 国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書 V —

2007
千葉県道路公社
財団法人 山武郡市文化財センター

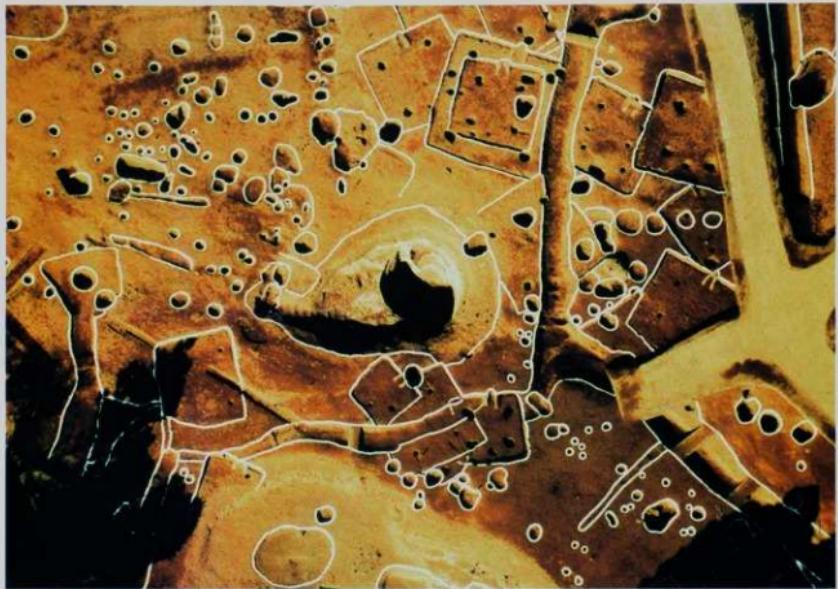
長倉鍛冶屋台遺跡

— 国道126号山武東総道路建設に伴う発掘調査報告書 V —



長谷川信吾著
長谷川信吾著

巻頭図版2



D-211



鎌治屋台から寺方をのぞむ



弥生土器



土器

卷頭図版 4



鏡形模造品



子持勾玉

序 文

財団法人山武郡市文化財センターは、山武郡市内における埋蔵文化財の調査研究、地域住民の文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和59年に設置され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、山武郡市文化財センター発掘調査報告書第93集として、国道126号山武東縦道路建設に伴って実施した、長倉鍛冶屋台遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査では、旧石器時代から近世までのさまざまな遺構や遺物を検出することができました。特に古墳時代の鏡形土製品や子持勾玉の出土や中世の井戸状遺構の検出など、この地域において、連綿と営まれた人々の生活を知る上で、貴重な成果が得られました。

刊行にあたり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し、ご指導、ご協力をいただきました千葉県道路公社、千葉県教育庁教育振興部文化財課、横芝光町教育委員会及び地元関係の皆様や関係機関、また、発掘調査から整理までご苦労をおかけした作業員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成19年3月

財団法人山武郡市文化財センター
理 事 長 石井 利夫

例　　言

- 1 本書は、銚子連絡道建設事業に先立つ長倉鍛冶屋台遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 長倉鍛冶屋台遺跡は千葉県山武郡横芝光町長倉字鍛冶屋台にそれぞれ所在する。
- 3 調査は、千葉県道路公社の委託により、千葉県教育委員会及び横芝光町教育委員会の指導を得て、財団法人山武都市文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査面積は、確認調査面積（上層）1,052m²/10,500m²、（下層）484m²/10,400m²、本調査面積（上層）10,780m²、（下層）484m²である。
- 5 調査及び整理・報告書作成の機関は下記の通りである。

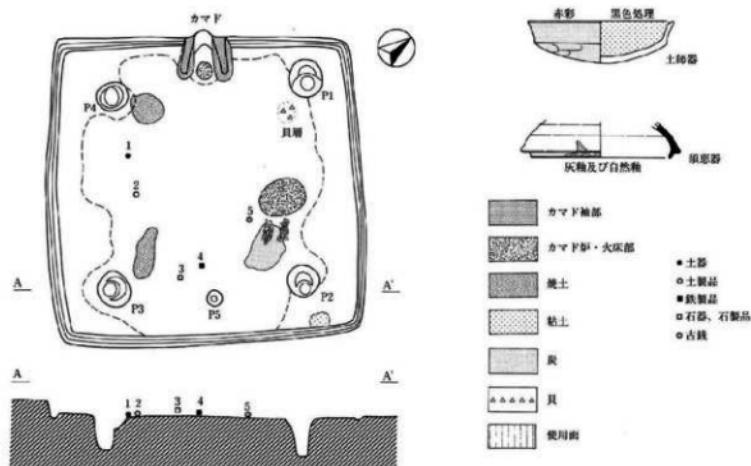
確認調査期間	（上層）平成14年2月25日～平成14年3月27日 平成16年2月2日～平成16年2月3日 (下層) 平成14年5月1日～平成15年3月31日 平成16年4月12日～平成16年6月15日
本調査期間	平成14年4月1日～平成14年4月30日 平成14年5月1日～平成15年3月31日 平成15年4月1日～平成16年3月23日 平成16年4月12日～平成16年6月15日
整理期間	平成14年4月1日～平成15年3月28日 平成15年4月1日～平成15年12月24日 平成16年4月1日～平成17年3月25日 平成17年4月1日～平成18年3月31日 平成18年8月1日～平成18年月日
- 6 発掘調査は、調査課長　土屋潤一郎、島立桂の指導のもとに調査課長補佐　渡辺修司、主任調査研究員　稲見英輔、調査研究員　田中万里子が担当し、整理・報告書の作成は、調査課長　島立桂、調査係長　渡辺修司、主任調査研究員　吉田直也、調査研究員　田中万里子　調査課全員の協力を得た。
- 7 本書の執筆は第1章を島立桂、それ以外を田中が行い、島立、渡辺が加筆・補正を行った。
- 8 挿図の第1図は、国土地理院発行の1/25,000の地形図「多古」・「成東」を使用して作成した。
- 9 出土遺物、実測原図、写真是、財団法人山武都市文化財センターが管理保管している。
- 10 発掘調査及び整理作業にあたり、次の方々から多大なるご指導・ご協力を賜った。ここに期して厚く御礼申し上げます。（敬称略・順不同）
千葉県教育庁教育振興部文化財課、横芝光町教育委員会、渡辺修一、井上哲郎、植木雅博

凡例

1 描く実測図の縮尺については原則として下記のとおりに統一した。

遺構 堪穴住居跡 1/80, 挖立柱建物 1/100, 土坑・土坑墓・陥穴 1/60 溝状造構 1/1,000

遺物 土器 1/4, 石製品 1/4, 土製品 1/4, 鉄製品 1/2, 玉・勾玉等 2/3



凡　例

石器	▲ 石刃	○ 使用痕ある剥片	■ 石斧
	● 剥片	□ 石核	
石材	▲ 安山岩	■ 页岩	● 黑曜石
	○ 瑞岩	□ 蛇紋岩	△ 砂岩
			● チヤート

本文目次

序 文	
例言・凡例	
序 章 調査概要	1
第1節 発掘調査に至る経緯と経過	
第2節 調査の方法	
第3節 遺跡の位置と周辺の地域	
第1章 旧石器時代	7
第1節 概 要	
第2節 基本層序	
第3節 石器群の分布と出土遺物	
第2章 縄文時代	29
第1節 概 要	
第2節 陥 穴	
第3章 弥生時代	33
第1節 概 要	
第2節 積穴住居跡	
第4章 古墳時代	53
第1節 概 要	
第2節 積穴住居跡	
第3節 土 坑	
第5章 奈良・平安時代	196
第1節 概 要	
第2節 積穴住居跡	
第3節 掘立柱建物跡	
第4節 横 列	
第5節 土 坑	
第6節 潟	
第6章 中 世	224
第1節 概 要	
第2節 掘立柱建物跡および横列	
第3節 横 列	
第4節 土 坑	
第5節 土坑墓および粘土貼り土坑墓	
第6節 潟	
第7章 近 世	305
第1節 概 要	
第2節 土坑および地下式坑	

第3節 溝	
第8章 時期不明遺構・遺構外遺物・ピット群	321
第1節 概要	
第2節 堪穴住居跡	
第3節 遺構外遺物	
第4節 ピット群	
終章 まとめ	334
第1節 繩文時代の様相	
第2節 弥生時代の様相	
第3節 古墳時代の様相	
第4節 奈良・平安時代の様相	
第5節 中世の様相	
第6節 近世の様相	

挿図 目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第29図 H-022出土遺物(2)	43
第2図 長倉鐵冶屋台遺跡周辺の地形	3	第30図 H-023実測図・出土遺物	44
第3図 長倉鐵冶屋台遺跡周辺の地形	4	第31図 H-025実測図・出土遺物	45
第4図 本調査検出遺構	5	第32図 H-039・H-052実測図・出土遺物	46
第5図 本調査検出遺構	6	第33図 H-054実測図・出土遺物	47
第6図 基本土層図	7	第34図 H-055実測図・出土遺物	48
第7図 旧石器時代調査概要図	8	第35図 H-057実測図・出土遺物	49
第8図 第1地点出土遺物分布図(1) —石器 別分布図	10	第36図 H-063実測図・出土遺物	50
第9図 第1地点出土遺物分布図(2) —石材 別分布図	10	第37図 H-073・H-104実測図	51
第10図 第1地点出土遺物実測図	11	第38図 H-112実測図	52
第11図 第2地点出土遺物分布図(1) —石器 別分布図	13	第39図 古墳時代遺構配置図	53
第12図 第2地点出土遺物分布図(2) —石材 別分布図	14	第40図 H-001実測図・出土遺物(1)	104
第13図 第2地点出土遺物実測図(1)	16	第41図 H-001出土遺物(2)	105
第14図 第2地点出土遺物実測図(2)	17	第42図 H-002実測図・出土遺物	106
第15図 第3地点出土遺物分布図(1) —石器 別分布図	19	第43図 H-003実測図・出土遺物(1)	107
第16図 第3地点出土遺物分布図(2) —石材 別分布図	20	第44図 H-003出土遺物(2)	108
第17図 第3地点出土遺物実測図(1)	22	第45図 H-004実測図(1)	109
第18図 第3地点出土遺物実測図(2)	23	第46図 H-004実測図(2)・出土遺物	110
第19図 第3地点出土遺物実測図(3)	24	第47図 H-005実測図・出土遺物(1)	111
第20図 第4地点出土遺物分布図—石器別分布 図	25	第48図 H-005出土遺物(2)	112
第21図 第4地点出土遺物実測図	25	第49図 H-006実測図・出土遺物(1)	113
第22図 第2地点(1~9; IXc層)と第3地点 (10~18; IXa~IXc層)の主要石器	28	第50図 H-006出土遺物(2)	114
第23図 桶文時代遺構配置図	29	第51図 H-007実測図・出土遺物(1)	115
第24図 D-004・005・025・032実測図・出土遺 物	31	第52図 H-007出土遺物(2)	116
第25図 D-050・051・188・200・209実測図	32	第53図 H-007出土遺物(3)	117
第26図 弥生時代遺構配置図	33	第54図 H-008実測図・出土遺物	118
第27図 H-021実測図・出土遺物	41	第55図 H-009実測図・出土遺物(1)	119
第28図 H-022実測図・出土遺物(1)	42	第56図 H-009出土遺物(2)	120
		第57図 H-010実測図・出土遺物	121
		第58図 H-011実測図・出土遺物(1)	122
		第59図 H-011出土遺物(2)・H-013実測図・ 出土遺物	123
		第60図 H-014・H-016実測図	124
		第61図 H-016出土遺物・H-018実測図・出土 遺物	125
		第62図 H-019実測図・出土遺物(1)	126
		第63図 H-019出土遺物(2)	127

第64図	H-020実測図・出土遺物・II-024実測図	128	第98図	H-057実測図・出土遺物（1）	162
第65図	H-026実測図・出土遺物（1）	129	第99図	H-067出土遺物（2）	163
第66図	H-026出土遺物（2）	130	第100図	H-069実測図・出土遺物	164
第67図	H-027実測図・出土遺物	131	第101図	H-071実測図・出土遺物	165
第68図	H-028実測図	132	第102図	H-072実測図・出土遺物	166
第69図	H-028出土遺物	133	第103図	H-074・H-077実測図・出土遺物	167
第70図	H-029実測図・出土遺物（1）	134	第104図	H-076実測図・出土遺物	168
第71図	H-029出土遺物（2）	135	第105図	H-078実測図・出土遺物（1）	169
第72図	H-030実測図・出土遺物	136	第106図	H-078出土遺物（2）・H-080実測図・出土遺物（1）	170
第73図	H-031実測図・出土遺物	137	第107図	H-080出土遺物（2）・H-081実測図・出土遺物（1）	171
第74図	H-032実測図・出土遺物	138	第108図	H-081出土遺物（2）・H-082実測図・出土遺物（1）	172
第75図	II-033・II-034実測図・出土遺物	139	第109図	H-082出土遺物（2）・H-083実測図・出土遺物（1）	173
第76図	H-035実測図・出土遺物（1）	140	第110図	H-083実測図・出土遺物（2）	174
第77図	H-035出土遺物（2）	141	第111図	H-083出土遺物（3）・H-084実測図	175
第78図	H-036実測図・出土遺物	142	第112図	H-085実測図・出土遺物・H-087実測図	176
第79図	H-038実測図・出土遺物	143	第113図	H-086実測図・出土遺物	177
第80図	H-040実測図・出土遺物	144	第114図	H-088実測図・出土遺物	178
第81図	H-041・H-042・H-059実測図	145	第115図	H-089実測図・出土遺物	179
第82図	H-041出土遺物（1）	146	第116図	H-090実測図・出土遺物	180
第83図	H-041・H-059出土遺物（2）・H-043実測図・出土遺物	147	第117図	H-091実測図・出土遺物	181
第84図	H-045実測図・出土遺物	148	第118図	H-092実測図・出土遺物（1）	182
第85図	H-046実測図・出土遺物	149	第119図	H-092出土遺物（2）・H-094実測図・出土遺物	183
第86図	H-047実測図・出土遺物（1）	150	第120図	H-093実測図・出土遺物（1）	184
第87図	II-047出土遺物（2）	151	第121図	H-093出土遺物（2）	185
第88図	H-048実測図・出土遺物	152	第122図	H-095実測図・出土遺物	186
第89図	H-049実測図・出土遺物	153	第123図	H-096実測図・出土遺物・H-102実測図	187
第90図	H-050実測図・出土遺物（1）	154	第124図	H-102出土遺物・H-105実測図・出土遺物	188
第91図	H-050出土遺物（2）・H-051実測図	155	第125図	H-106実測図・出土遺物	189
第92図	H-051出土遺物（2）・H-053実測図	156	第126図	H-107実測図・出土遺物	190
第93図	H-056実測図・出土遺物（1）	157	第127図	H-110実測図・出土遺物（1）	191
第94図	H-056出土遺物（2）・H-058実測図・出土遺物	158			
第95図	H-060実測図・出土遺物	159			
第96図	H-062実測図・出土遺物	160			
第97図	H-064実測図・出土遺物	161			

第128図	H-110出土遺物 (2)・H-111実測図・ 出土遺物	192	第156図	B-019実測図	238
第129図	H-114実測図・出土遺物	193	第157図	B-020実測図	239
第130図	D-028・029・030・035・193・194実 測図	195	第158図	B-1001実測図	240
第131図	奈良・平安時代遺構配置図	196	第159図	B-1002・1003実測図	241
第132図	H-012実測図・出土遺物	204	第160図	B-1004・1005実測図	242
第133図	H-015実測図・出土遺物・H-017実 測図	205	第161図	B-1006・1007実測図	243
第134図	H-017出土遺物・H-037実測図・出 出土遺物	206	第162図	B-1008実測図	244
第135図	H-061・H-065実測図・出土遺物	207	第163図	S-1001・1002・1003・1004実測図	246
第136図	H-066実測図・出土遺物・H-079実 測図	208	第164図	D-001・002・003・008・011・024・ 036実測図・出土遺物	262
第137図	H-079出土遺物・H-099実測図・出 出土遺物	209	第165図	D-041・042・043・045・053実測図・ 出土遺物	263
第138図	H-100実測図・出土遺物	210	第166図	D-044・054・065・068・074・078実 測図	264
第139図	H-101実測図・出土遺物	211	第167図	D-081～083・090～096実測図	265
第140図	H-103・H-108実測図・出土遺物	212	第168図	D-097・100・102・103・104・112・ 113・119～123実測図・出土遺物	266
第141図	H-113実測図・出土遺物	213	第169図	D-124実測図・出土遺物	267
第142図	B-010・011実測図	215	第170図	D-128～136実測図	268
第143図	横列実測図	217	第171図	D-137～140・142・143・145・146実 測図	269
第144図	D-006・007・012・013・014・015実 測図	220	第172図	D-147・148・151・153～159実測図	270
第145図	D-016・017・021・022・023・027・ 031実測図・出土遺物	221	第173図	D-161・162・165～167・169・170・ 174・179・182実測図	271
第146図	溝実測図	223	第174図	D-184・187・189・190・192実測図	272
第147図	中世遺構配置図	224	第175図	D-195～199・201～204実測図	273
第148図	B-001・002・S-001 (A)・(B) 実 測図	230	第176図	D-207・208・210・213・215～217・ 227実測図	274
第149図	B-003・004・S-007・008・009実測 図・出土遺物	231	第177図	D-211実測図・出土遺物 (1)	275
第150図	B-005・006実測図	232	第178図	D-211出土遺物 (2)	276
第151図	B-007・008・S-002・003・004実測 図・出土遺物	233	第179図	D-228～230・1001・1014・1023実測 図・出土遺物	277
第152図	B-009・012実測図	234	第180図	D-1003実測図・出土遺物	278
第153図	B-013・014実測図	235	第181図	D-055～058・110・111・114実測図・ 出土遺物	288
第154図	B-015・016実測図	236	第182図	D-105～107・115～117実測図	289
第155図	B-017・018実測図	237	第183図	D-118・141・144・149・150・152実	

測図・出土遺物	290	第196図	D-026・037~039・046~048実測図・ 出土遺物	312	
第184図	D-163・168・172・173・175・176実 測図	291	第197図	D-049・059・060~064・066・067実 測図	313
第185図	D-164・177・178・180・181・183・ 218・220実測図	292	第198図	D-069~071・073・075~077・079・ 080実測図	314
第186図	D-1000・1004・1012実測図・出土遺 物	293	第199図	D-084~089・098・099・125~127実 測図	315
第187図	D-1006実測図・出土遺物・1013・ 1015実測図	294	第200図	D-185・186・221~226実測図	316
第188図	D-1015出土遺物・D-1016・1028実 測図・出土遺物	295	第201図	D-033・206実測図	317
第189図	D-1024・1022・1026・1027実測図・ 出土遺物・N-001実測図	296	第202図	溝実測図・出土遺物	320
第190図	N-002・004実測図・N-003実測図・ 出土遺物	297	第203図	H-044・075・097・098・109実測図	322
第191図	N-005実測図・出土遺物・N-006・ 007実測図	298	第204図	遺構外遺物（1）	325
第192図	N-008・009・011~014実測図	299	第205図	遺構外遺物（2）	326
第193図	溝実測図	303	第206図	遺構外遺物（3）	327
第194図	溝実測図・出土遺物	304	第207図	ピット群エリア分割図	328
第195図	近世遺構配置図	305	第208図	ピット群実測図（1）	329
			第209図	ピット群実測図（2）	330
			第210図	ピット群実測図（3）	331
			第211図	ピット群実測図（4）	332

図 版 目 次

図版1	旧石器時代遺物出土状況	図版17	奈良・平安時代集落（1）
図版2	第1地点・第2地点出土遺物（1）	図版18	奈良・平安時代集落（2）
図版3	第1地点・第2地点出土遺物（2）	図版19	弥生時代集落の出土遺物（1）
図版4	第3地点・第4地点出土遺物（1）	図版20	弥生時代集落の出土遺物（2）
図版5	第3地点・第4地点出土遺物（2）	図版21	古墳時代集落の出土遺物（1）
図版6	弥生時代集落（1）	図版22	古墳時代集落の出土遺物（2）
図版7	弥生時代集落（2）	図版23	古墳時代集落の出土遺物（3）
図版8	古墳時代集落（1）	図版24	古墳時代集落の出土遺物（4）
図版9	古墳時代集落（2）	図版25	古墳時代集落の出土遺物（5）
図版10	古墳時代集落（3）	図版26	古墳時代集落の出土遺物（6）
図版11	古墳時代集落（4）	図版27	古墳時代集落の出土遺物（7）
図版12	古墳時代集落（5）	図版28	古墳時代集落の出土遺物（8）
図版13	古墳時代集落（6）	図版29	古墳時代集落の出土遺物（9）
図版14	古墳時代集落（7）	図版30	古墳時代集落の出土遺物（10）
図版15	古墳時代集落（8）	図版31	古墳時代集落の出土遺物（11）
図版16	古墳時代集落（9）	図版32	古墳時代集落の出土遺物（12）

- 図版33 古墳時代集落の出土遺物（13）
図版34 古墳時代集落の出土遺物（14）
図版35 古墳時代集落の出土遺物（15）
図版36 古墳時代集落の出土遺物（16）
図版37 古墳時代集落の出土遺物（17）
図版38 古墳時代集落の出土遺物（18）
図版39 古墳時代集落の出土遺物（19）
図版40 古墳時代集落の出土遺物（20）
図版41 古墳時代集落の出土遺物（21）
図版42 古墳時代集落の出土遺物（22）
図版43 古墳時代集落の出土遺物（23）
図版44 古墳時代集落の出土遺物（24）
図版45 古墳時代集落の出土遺物（25）
図版46 古墳時代集落の出土遺物（26）
図版47 古墳時代集落の出土遺物（27）
図版48 古墳時代集落の出土遺物（28）
図版49 古墳時代集落の出土遺物（29）
図版50 古墳時代集落の出土遺物（30）
図版51 古墳時代集落の出土遺物（31）
図版52 古墳時代集落の出土遺物（32）
図版53 古墳時代集落の出土遺物（33）
図版54 古墳時代集落の出土遺物（34）
図版55 奈良・平安時代集落の出土遺物（1）
図版56 奈良・平安時代集落の出土遺物（2）
図版57 奈良・平安時代集落の出土遺物（3）
図版58 奈良・平安時代、中世集落の出土遺物（1）
図版59 楩文、古墳時代集落
図版60 奈良・平安時代集落および中世集落（1）
図版61 中世集落（2）
図版62 中世集落（3）
図版63 中世集落（4）
図版64 中世集落（5）
図版65 中世集落（6）
図版66 中世集落（7）
図版67 中世集落（8）
図版68 中世集落（9）
図版69 中世土坑墓（1）
図版70 中世土坑墓（2）
図版71 中世土坑墓（3）
図版72 中世土坑墓（4）
図版73 中世粘土貼り土坑墓（1）
図版74 中世粘土貼り土坑墓（2）
図版75 近世集落（1）
図版76 近世集落（2）
図版77 近世集落（3）、地下式坑
図版78 奈良・平安時代、中世および造構外出土遺
物
図版79 弥生土器
図版80 玉・勾玉類
図版81 砥石・羽口
図版82 石製品・支脚
図版83 中世、近世陶磁器
図版84 紗錘車・古錢
図版85 軽石
図版86 土製品・種子
図版87 鉄製品（1）
図版88 鉄製品（2）
図版89 鉄製品（3）
図版90 鉄製品（4）
図版91 檜形浮他

序 章 調査概要

第1節 発掘調査に至る経緯と経過

長倉殿治屋台遺跡の所在した山武郡横芝光町長倉字上北田763番地地先の土地について、国道道路改築委託事業が計画され、平成10年1月26日付けで、千葉県道路公社より有料道路を建設する旨、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱について(照会)」が横芝町教育委員会宛に提出された。横芝町教育委員会では、千葉県教育委員会へ副申し、平成10年2月25日に照会地が绳文時代から古墳時代にかけての散布地であるとの回答を得た。その後、埋蔵文化財の取扱について、県教育委員会・町教育委員会・開発事業者での三者協議を行い、有料道路の建設に先駆けて、遺跡の範囲・性格を把握するための埋蔵文化財確認調査を行うことになった。

確認調査は、上層については、確認調査対象面積の10%をトレンチ方式で、下層については、確認調査対象面積の4%をテスト・ピット方式で調査した。調査の結果、古墳時代を主体とする遺構・遺物が検出された。下層については、遺物が検出された。

この結果に基づき、再度、三者協議がもたれ、記録保存の措置としての埋蔵文化財の本調査を行うことになった。

確認・本調査を含む埋蔵文化財調査は、財團法人山武郡市文化財センターが、千葉県道路公社の委託を受け、県教育委員会・町教育委員会の指導のもとに実施した。

第2節 調査の方法

確認・本調査は、表土除去・遺構確認・実測・発掘・写真撮影という手順で行った。表土除去は、地形や遺跡の性格、遺構の分布などに十分留意して、重機で行い、それ以後の調査過程は手作業を行った。

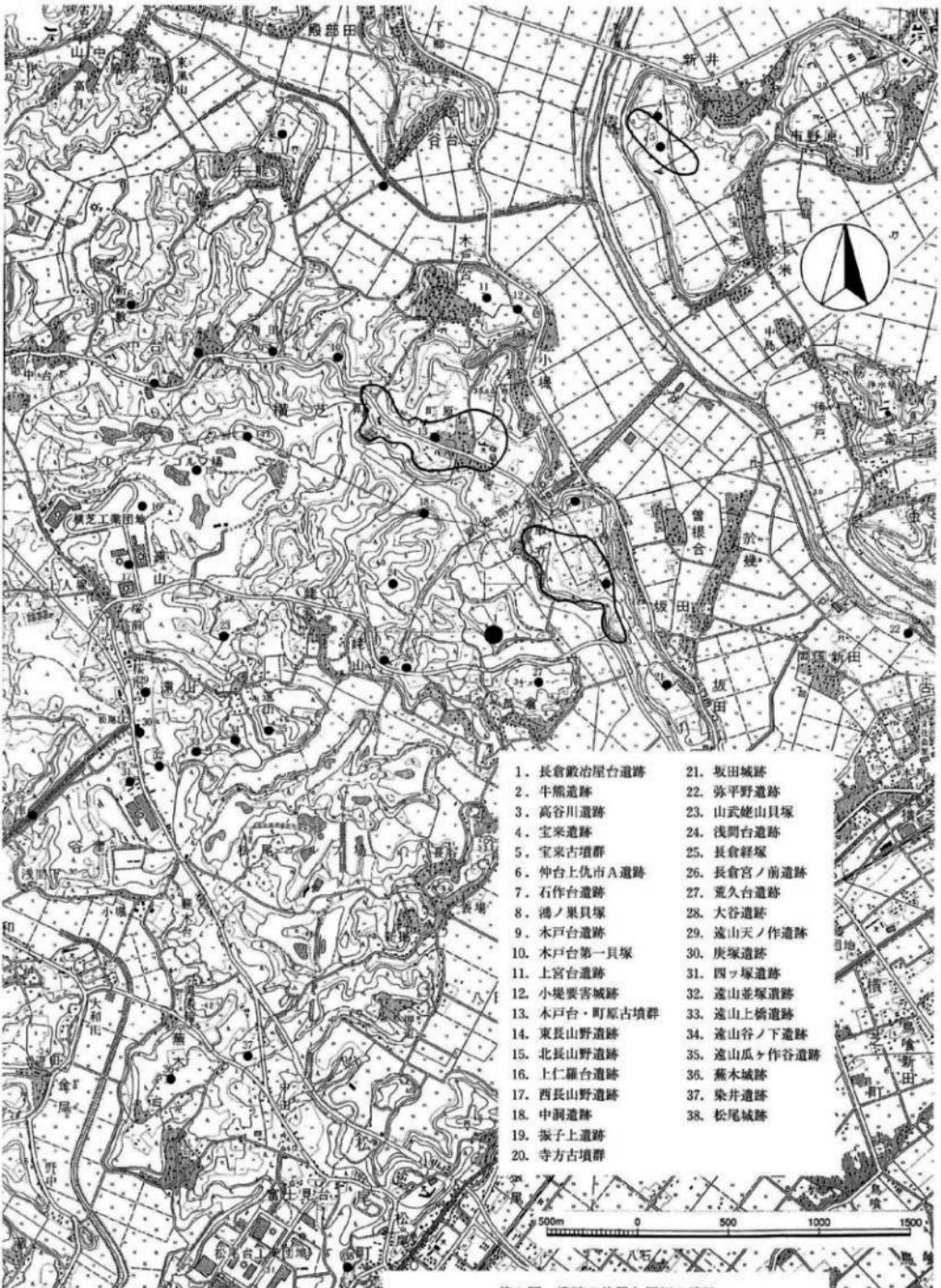
グリッドは、公共座標を基準にして、国道道路改築委託事業地全域に40m方眼を大グリッド、その中に4m方眼の100個の小グリッドを設定した。グリッドは、大グリッドが北から南へ1・2・3、西から東へA・B・Cと呼称し、小グリッドが00~99まで表記した。

第3節 遺跡の位置と周辺の地域(第1・2図)

長倉殿治屋台遺跡が所在する台地は、太平洋に注ぐ栗山川水系、長倉支谷により樹枝状に開析された独立丘を呈している。標高28~34mを測る長倉支台上に位置する。

本遺跡の南西約200mの位置には、小支谷を隔てて長倉宮ノ前遺跡が所在する。一方、東側約500mの位置には、前方後円墳を含む8基の古墳が分布する寺方古墳群が所在する。

周辺の遺跡の分布を第1図に示し、そのうち調査された遺跡には番号を記した。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 長倉鐵治屋台遺跡周辺の地形



第3図 長倉鍛冶屋台遺跡周辺の地形

第4図 本調査検出面標



第5圖 本調查檢出道路

1 : 1000

NE-01

NE-02

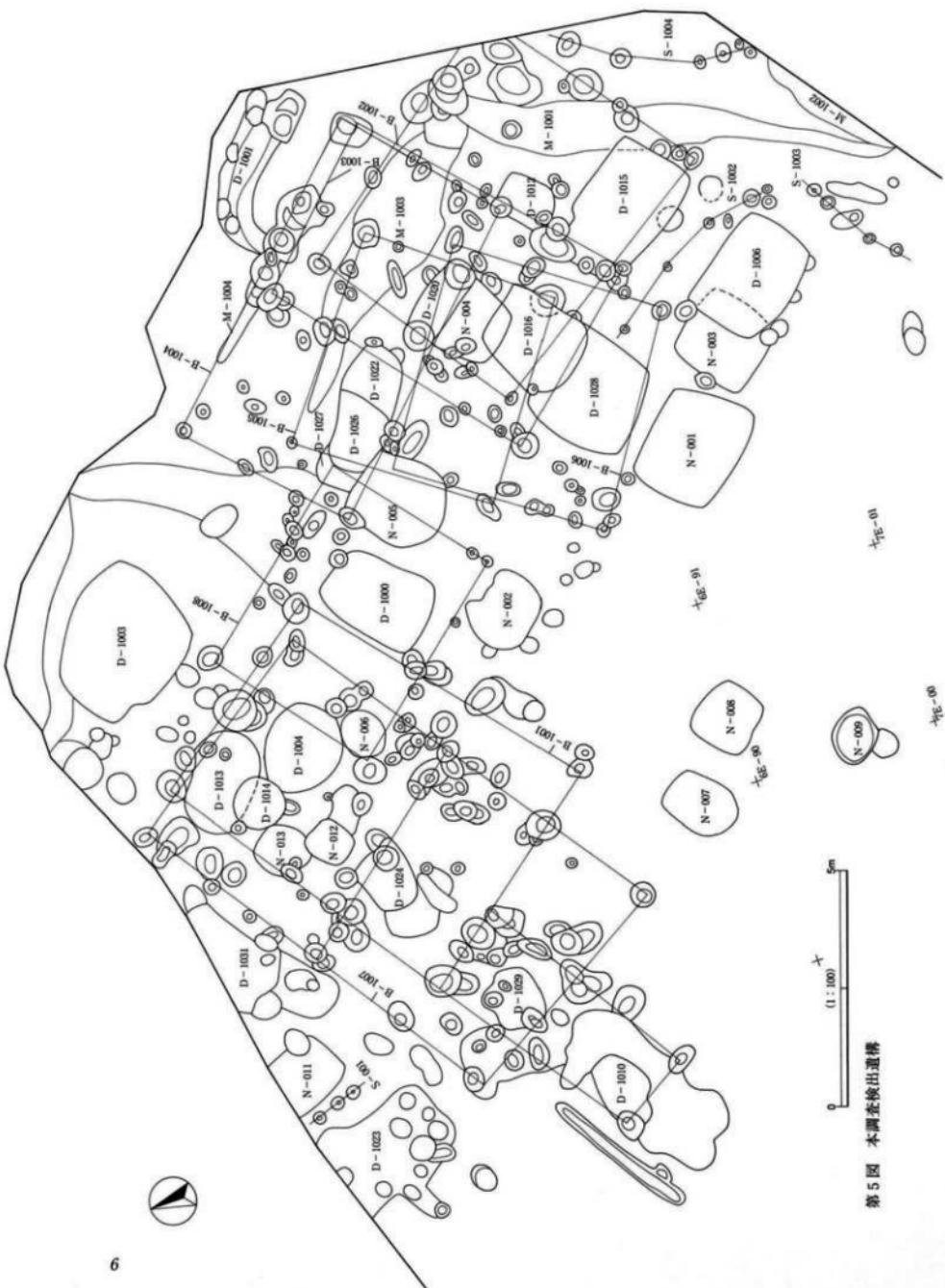
NE-03

NE-04

NE-05
NE-06

NE-07

NE-08
NE-09



第1章 旧石器時代

第1節 概要

長倉鍛冶屋台遺跡では、平成14年度から平成16年度にかけて下層の発掘調査を行った。

平成14年度は、調査範囲の東部を鍛冶屋台遺跡763地点として、4,100m²の確認調査を実施し（164m²を掘削）、284m²の本調査を行った（第3・4地点）。調査の結果、調査区中央部で旧石器時代の石器ブロックを1か所と単独出土地点1か所を検出した。

平成15年度は、調査範囲の西部を鍛冶屋台遺跡725地点として、3,600m²の確認調査を実施し（236m²を掘削）、3か所のグリッドから旧石器時代の石器が出土した。このうち、調査区北西隅のグリッドから出土したものについては、周囲を精査した結果、遺物の広がりが限定されることが判明したことから、確認調査をもって調査終了とした（第1地点）。残りの2か所については、平成16年度に本調査を行った（第2地点）。

平成16年度は、調査範囲中央の現道部分を鍛冶屋台遺跡766地点として、2,700m²の確認調査を実施し（84m²を掘削）、平成15年度に決定された本調査範囲と併せて、200m²の本調査を行った（第2地点）。

第1点は、調査区北西隅の台地縁辺部に位置し、立川ローム層第2黒色帶下部のIXa層とIXc層の境界付近の層準で、石器ブロック1か所を検出した。小規模なブロックで、安山岩、頁岩による不定型の剥片類3点で構成される石器群である。

第2点は、調査区中央の台地平坦部に位置し、立川ローム層第2黒色帶下部のIXa層からIXc層にかけての層準で、石器ブロック2か所を検出した。Aブロック（西側）が10点、Bブロック（東側）が8点と、両ブロックとも小規模であるが、信州産黒曜石や瑪瑙による石刃、砂岩を用いた刃部磨製石斧など、IX層に特徴的な石器が出土している。また、両ブロックから離れて、信州産黒曜石の石刃1点が、単独で分布している。

第3点は、第2地点の東側に隣接する台地平坦部に位置し、立川ローム層第2黒色帶下部のIXa層からIXc層にかけての層準で、石器ブロック1か所を検出した。長軸15mにおよぶ範囲から、安山岩やチャートによる剥片類41点、礫1点が出土した。

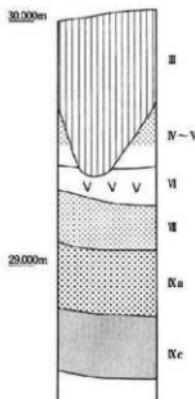
第4点は、調査区東側の台地縁辺部に位置し、立川ローム層第2黒色帶下部のIXa層とIXc層の境界付近の層準で、嶺岡産頁岩による剥片1点が単独で出土した。

第2節 基本層序

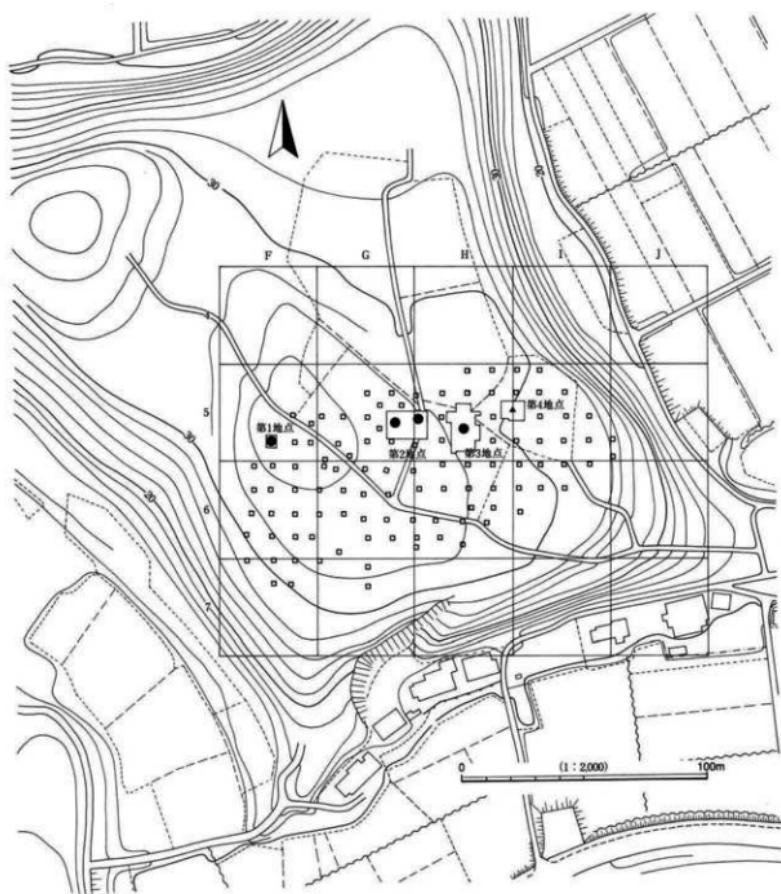
本遺跡の立川ローム層は、下総台地における標準的な土層とおおむね一致する。

Ⅲ層：黄褐色軟質ローム層で、厚さは50cm～60cmである。

IV～V層：黄褐色硬質ローム層で、下半部は立川ローム層第1黒色帶に相当する。厚さは20～



第6図 基本土層図



第7図 旧石器時代調査概要図

30cmである。IV層とV層は、区分できなかった。

VI層：明黄褐色硬質ローム層で、黒色粒と火山ガラスを多く含み、姶良丹沢火山灰層（AT層）に相当する。厚さは15cm～20cmである。

VII層：黄褐色硬質ローム層で、立川ローム層第2黑色帯上部に相当する。厚さは20cm～30cmである。

IXa層：褐色硬質ローム層で、第2黑色帯下部の上層である。赤色、暗緑色のスコリアを含む。厚さは30cmほどである。

IXc層：暗褐色硬質ローム層で、第2黑色帯下部の下層である。赤色、暗緑色のスコリアを多く含む。厚さは20cm～30cmである。

X層：黄褐色硬質ローム層で、IX層に比べて軟質になる。スコリアは激減するが、部分的に赤橙色で小型のスコリアを含む。本層下底は波状を呈する。厚さは30cm～40cmである。

第3節 石器群の分布と出土遺物

1. 第1地点（第8～10図、第1表）

1) 概要

第1地点は、調査区の西端で、傾斜変換点から30mほどの台地縁辺部に位置する（第7図）。5F-75・84グリッドのIXa層とIXc層の境界付近から、安山岩の剥片2点と頁岩の剥片1点が出土した。なお、周囲を精査したが、石器群の広がりはみられなかった（第8・9図）。

2) 母岩の特徴と内容（第1表）

本地点では、石器3点を対象として母岩分類した。内訳は、安山岩1母岩（5F-①；2点）、頁岩1母岩（5F-②；1点）である。

5F-①：灰褐色に風化した安山岩である。夾雜物が、わずかに含まれる。自然面は紙ヤスリ状を呈し、緩やかな曲面となっており、原石は大型の円錐と推定される。同一母岩は、中型不定型の剥片2点で、相互に接合する（総重量69.0g）。

5F-②：淡黄褐色～灰白色に風化した、硬質緻密な珪質の頁岩である。北関東産と想定される。中型不定型の剥片1点の単独資料（3.2g）である。

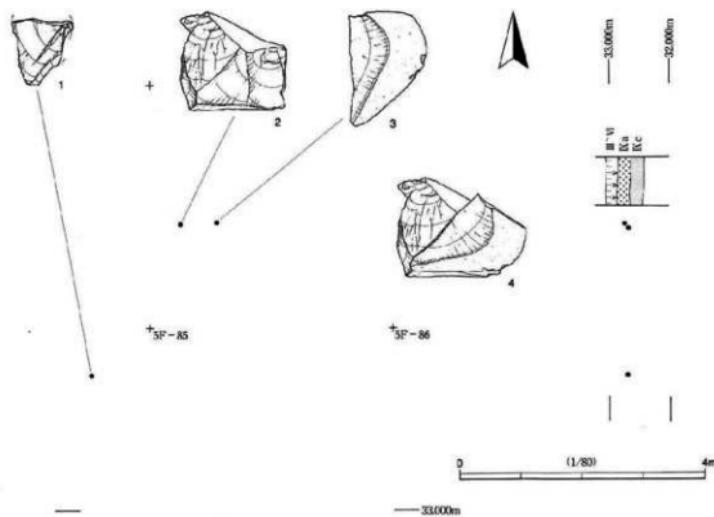
3) 出土遺物（第10図）

1は、頁岩による不定型の剥片である。表面は裏面（主要剥離面）と90度近く異なる方向の剥離面によつて構成されている。上半部は欠損する。2・3は、安山岩による不定型の剥片で、4はその接合資料である。2・3の表面→2の打面→2→3の打面→3の順で剥離しており、打面側と表面側で交互に剥片を剥離している。

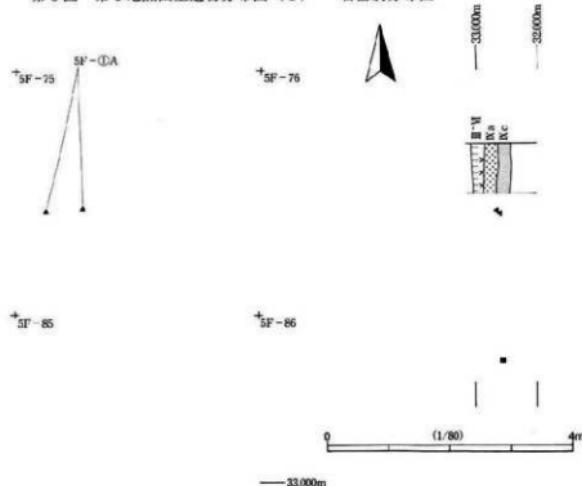
第1表 第1地点出土遺物組成表 —母岩別組成表—

母岩番号	石材	Ka	Tr	Ss	Pi	Bl	Rf	Uf	Ax	Fl	Ch	Co	合計	確	重量
5F-① 安山岩										2			2		69.0
5F-② 頁岩										1			1		3.2
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3	0	72.2

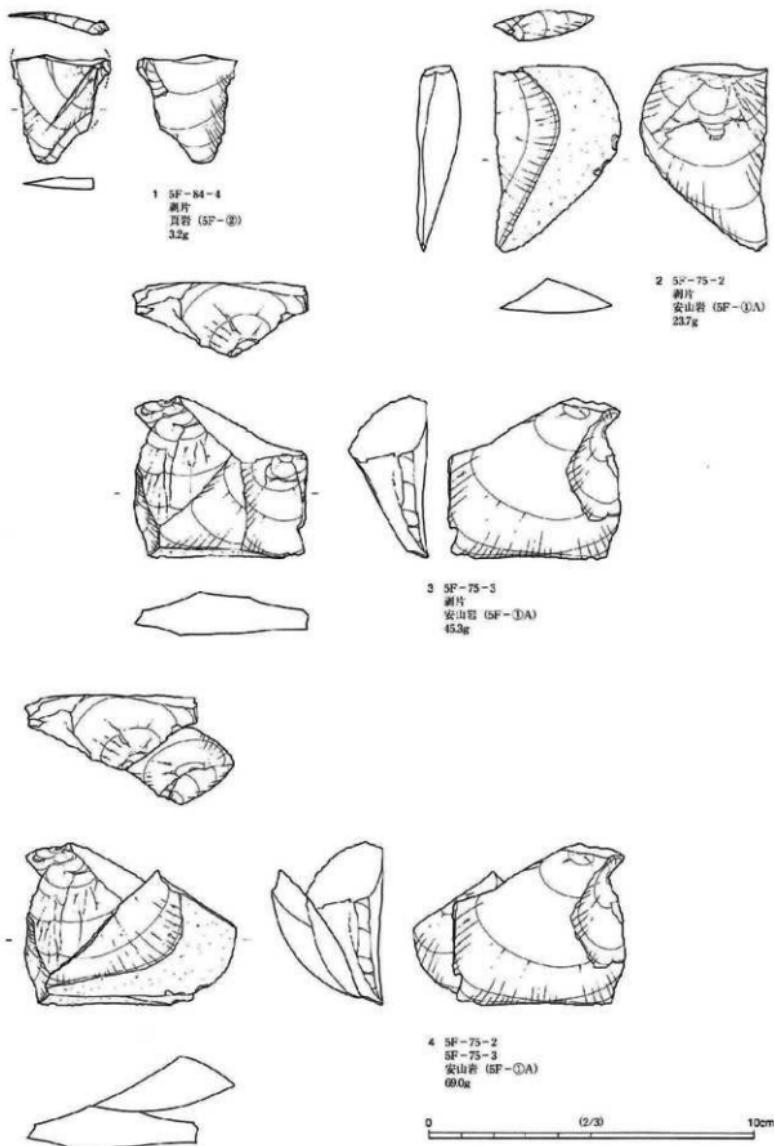
第3節 石器群の分布と出土遺物



第8図 第1地点出土遺物分布図(1) —石器別分布図—



第9図 第1地点出土遺物分布図(2) —石材別分布図—



第10圖 第1地点出土遺物実測図

2. 第2地点（第11～14図、第2・3表）

1) 概要

第2地点は、調査区中央部にあり、台地のはば中央に位置する（第7図）。南北方向は、ほぼ平坦であるが、東西方向は、東に向かって下っている。石器群の出土したグリッドは、5G-47・49・57・68、5H-40・50グリッドである。

ブロックの規模と形状は、長軸13m、短軸10mほどの不整円形の範囲に19点の石器が分布する。ただし、この範囲に石器がまんべんなく分布しているわけではなく、小規模なまとまりが2か所あり、西側をAブロック（長軸3m、短軸1m）、東側をBブロック（長軸6.5m、短軸2m）とした。また、5G-68グリッドには、2か所のブロックから離れて、石刃が1点分布する（第11・12図）。出土層位は、いずれもⅩc層を中心としており、地形の傾斜に沿って包含されている。

石器組成は、第2地点全体では、石刃7点、使用痕ある剥片2点、石斧6点（2個体）、剥片4点、石器石材は、黒曜石8点、チャート1点、砂岩6点、瑪瑙4点である。

ブロックごとにみると、Aブロックは、石器組成は、石刃4点、使用痕ある剥片1点、石斧5点（1個体）、石器石材は、黒曜石5点、砂岩5点である。Bブロックは、石器組成は、石刃2点、使用痕ある剥片1点、石斧1点（Aブロックとは別個体の破片）、石器石材は、剥片4点、黒曜石2点、チャート1点、砂岩1点、瑪瑙4点である。単独出土は、黒曜石による石刃1点である。

A・B両ブロックの間には、8mほどの空白があるが、石器組成、同一母岩の共有、出土層準からみて、同時期に形成されたと考えられる。

2) 母岩の特徴と内容（第2・3表）

本地点では、石器19点のうち18点を対象として母岩分類した。内訳は、黒曜石3母岩（5G-①～③）、チャート1母岩（5H-③）、砂岩2母岩（5G-④、5H-②）、瑪瑙1母岩（5H-①）である。

5G-①：漆黒色不透明の黒曜石である。白色で幅0.5mmの縞が平行して多数みられるが、夾雜物はほとんど含まれていない。信州産と推定される。同一母岩は、石刃2点、使用痕ある剥片2点で、総重量は87.1gである。

接合資料、細かな破片等ではなく、製品で構成されることから、すべて遺跡外で製作された搬入品と考えられる。

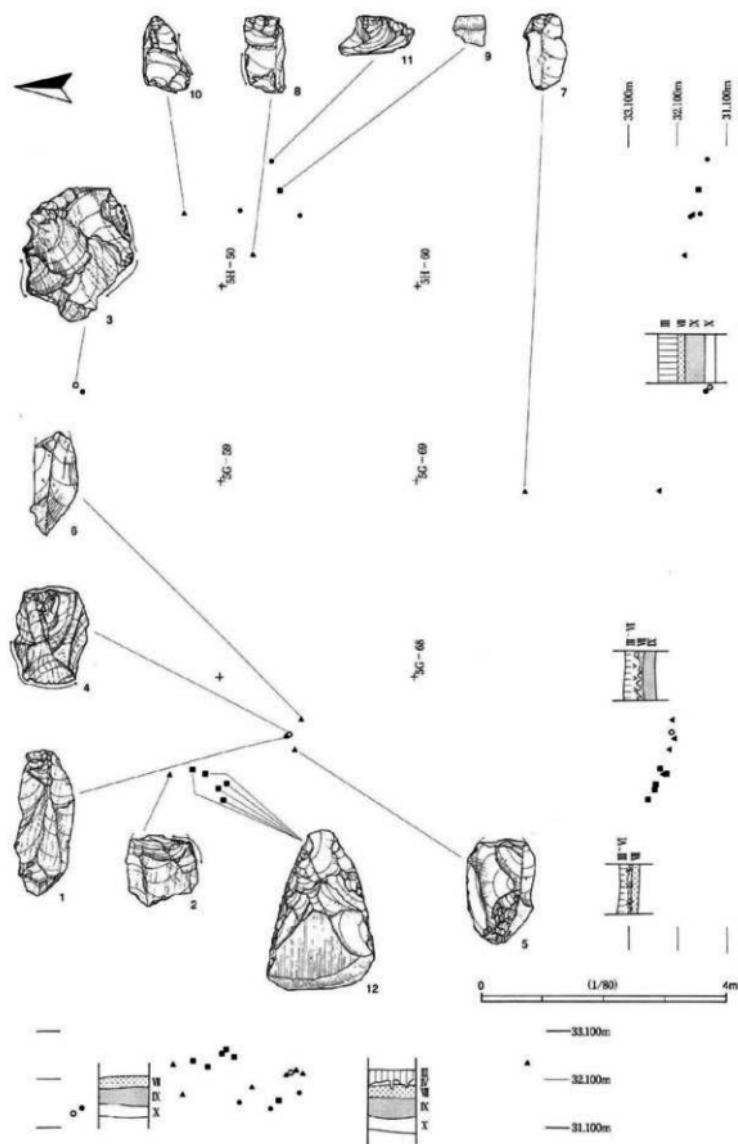
5G-②：灰色半透明の地に、淡黒色のモヤがかかったような黒曜石である。 $\phi 1\text{ mm}$ ほどの白色の夾雜物を少量含む。信州産と推定される。同一母岩は石刃2点で、総重量は39.4gである。

5G-③：灰色半透明の地に、淡黒色のモヤがかかったような黒曜石である。5G-②母岩は、モヤがより均質であるが、本母岩はモヤが編み目状になっており、異なっている。 $\phi 1\text{ mm}$ ほどの白色の夾雜物が、わずかに含まれる。自然面は平滑で、磨りガラスのようである。小型の石刃1点の単独資料（3.5g）である。

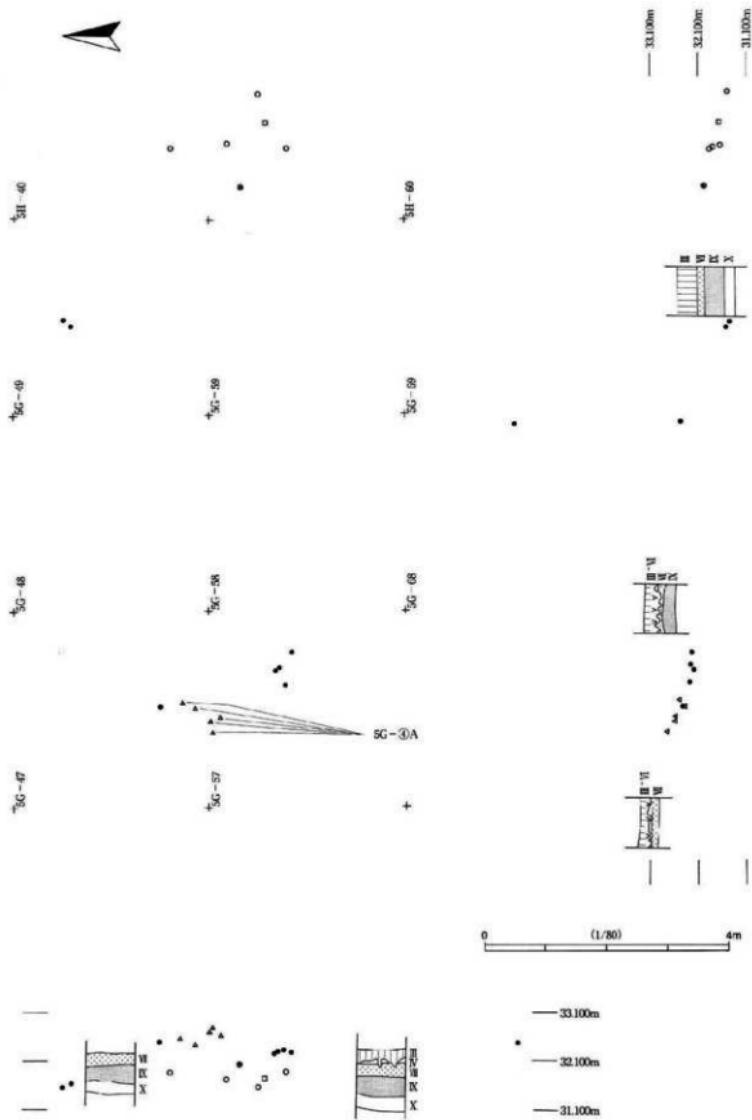
5G-④：淡灰褐色に風化した砂岩（あるいはホルンフェルス）である。全体に均質で、粒子は細かい。同一母岩は、石斧の破片5点（接合して1個体；68.5g）である。意図的に剥片を剥離したもので、刃部再生作業に失敗したものであろう。

5H-①：淡灰褐色半透明の地に、紫がかかった淡黒灰色のモヤが入る瑪瑙（玉髓）である。同一母岩は、小型の石刃1点、中・小型不定型の剥片3点で、総重量は8.6gである。

5H-②：淡黒灰色の粗悪な蛇紋岩である。石斧の刃部再生に係る小型の剥片1点の単独資料（1.1g）である。



第11図 第2地点出土遺物分布図（1）—石器別分布図—



第12図 第2地点出土遺物分布図(2) —石材別分布図—

5H-③：暗青灰色のチャートである。小型の石刃1点の単独資料(7.4g)である。

上記以外に、黒曜石の剥片1点がある。5G-②に似るが、小破片のため、同一母岩に認定しなかった。

以上、本ブロックは、おおむね撤入品によって形成されたと考えられる。ただし、5H-①母岩については、小規模な剥片生産が行われた可能性がある。

3) 出土遺物 (第13~14図)

1~4は、黒曜石による5H-①母岩の石刃、使用痕ある剥片である。1は、比較的大型厚手で粗製の石刃である。表面の多くは裏面(主要剥離面)と同一方向の剥離面によって構成されるが、末端部には、逆方向の剥離面が観察される。打面は、本石刃剥離時にじいている。表面右側縁全体に、細かな刃こぼれがある。2は、大型の石刃の末端部である。表面左側には、裏面とは逆方向の剥離面がある。表面右側縁から折れ面にかけて刃こぼれがあり、分割ないしは欠損後に利用されたと考えられる。なお、表面全体には細かな傷が多いことから、長期にわたって保持されていたと想定される。

3は、大型不定型の剥片を用いた使用痕ある剥片である。表面は多方向からの不定型な剥離面で構成されることから、石刃技法による打面形成、ないしは打面再生に係る剥片の可能性がある。なお、本資料も2と同様、表面に細かな傷がある。4は、中型不定型の剥片を用いた使用痕ある剥片である。表面は、おもに上下両方向からの剥離面であり、幅広の石刃にもみえるが、裏面は、表面とは直交する方向の剥離である。表面中央の自然面は平坦で、原石は大型の角礫と想定される。打面は、剥片剥離時に欠失している。

5・6は、黒曜石による5G-②母岩の石刃である。5は、中型厚手で幅広の石刃である。表面には、裏面と同一方向の剥離面のほかに、裏面とは直交する方向の剥離面もあり、後形成に伴う石核調整と石刃剥離とが交互になされたと考えられる。打面は欠損する。なお、表面左側縁には、微細な剥離痕が散在する。6は、中型で、横断面が三角形の石刃である。

7は、黒曜石による5G-③母岩の小型の石刃である。表面は、裏面と同一方向の剥離面と自然面とで構

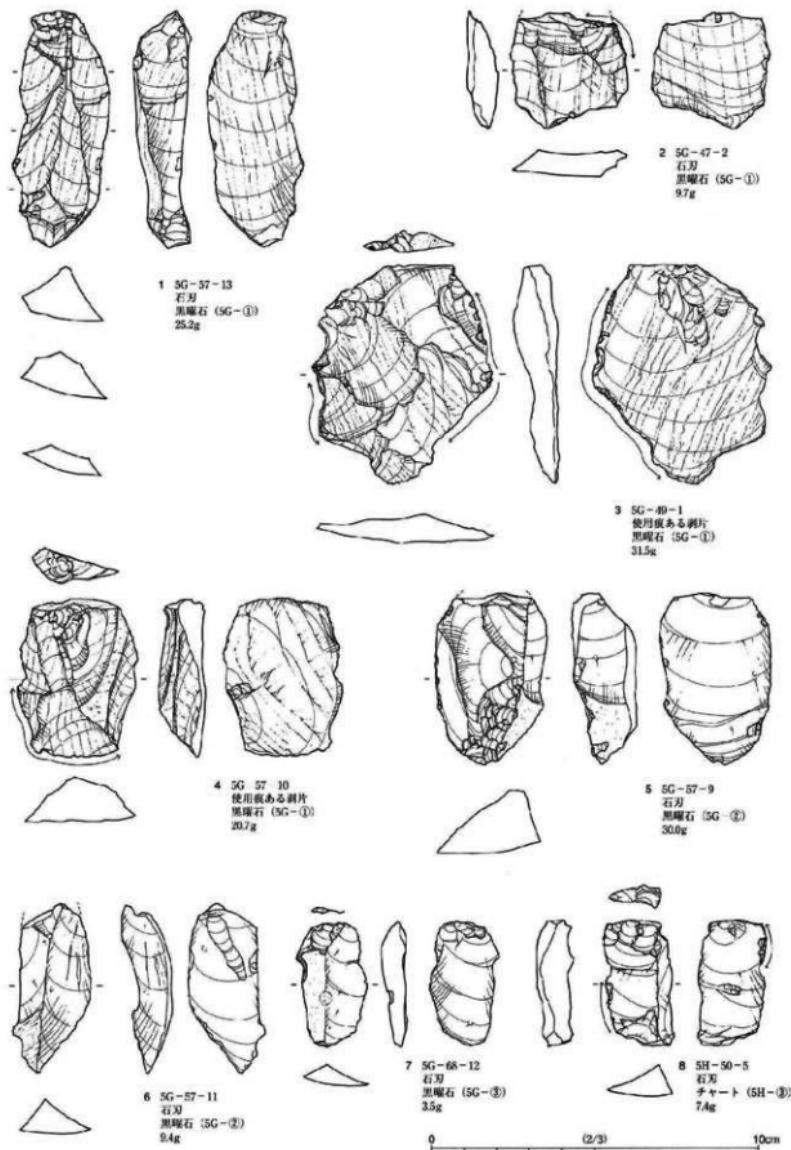
第2表 第2地点出土遺物組成表(1) 一母岩別組成表

母岩番号	石材	Kn	Tr	Ss	Pi	Bl	Rf	Uf	Ax	Fl	Ch	Co	合計	確	重量
5G-①	黒曜石					2		2					4		87.1
5G-②	黒曜石					2							2		39.4
5G-③	黒曜石					1							1		3.5
5G-④	砂岩								5				5		68.5
5H-①	瑪瑙					1				3			4		8.6
5H-②	蛇紋岩								1				1		1.1
5H-③	チャート					1							1		7.4
その他	黒曜石										1		1		0.2
合計		0	0	0	0	7	0	2	6	4	0	0	19	0	215.8

第3表 第2地点出土遺物組成表(2) 一石材別組成表

石材	Kn	Tr	Ss	Pi	Bl	Rf	Uf	Ax	Fl	Ch	Co	合計	確	重量
黒曜石						5	2		1			8		130.2
チャート						1						1		7.4
砂岩								5				5		68.5
蛇紋岩								1				1		1.1
瑪瑙						1			3			4		8.6
合計	0	0	0	0	7	0	2	6	4	0	0	19	0	215.8

第3章 石器群の分布と出土遺物



第13図 第2地点出土遺物実測図（1）

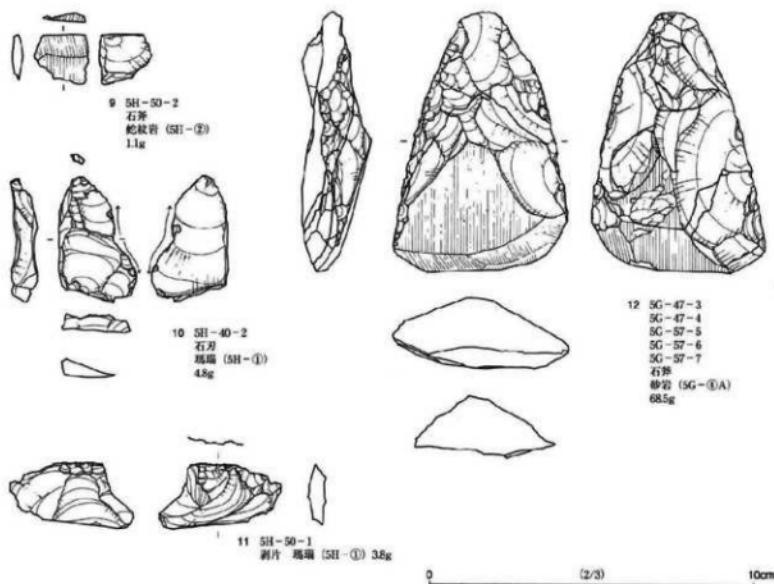
成される。打面は小さく、詳細ははっきりしないが、細かな調整のない複剥離打面と考えられる。

8は、チャートによる5H-③の小型の石刃である。末端部はウートラバッセになっており、石核の作業面が比較的低かったことを示している。打面は、非調整の平坦な打面である。表面右側面は、石刃剥離面ではなく、石核の素材時の分割面のようである。鋭利な表面左側縁に刃こぼれがみられる。

9は、蛇紋岩による5H-②母岩を用いた刃部磨製石斧の刃部再生剥片である。表面は方向が若干異なる2枚の研磨面で構成され、打面は表面とは70度の角度で交差する研磨面である。打面と表面の境界は鋭利な直線をなすところから、石斧の刃部と想定される。

10・11は、瑪瑙（玉隨）による5H-①母岩の石刃、剥片である。10は、上下両端に打面をもつ小型の石核より剥離された石刃である。表面は、上下両方向の剥離面で構成されるが、左側面にはこれらとは直交する方向の節理面があり、石核素材時の分割面と考えられる。下端部に付着する打面は広く平坦であるが、上位の本石刃の打面は小さく、詳細は不明である。右側縁に刃こぼれがある。11は、横長不定型の剥片である。表面には石核素材時のポジティブな面が広く残っており、これを表面とは逆方向の剥離面が切っている。打面は、線状になっている。

12は、砂岩による刃部磨製石斧である。求心的に剥離した不定型の剥片3点と、大きく2点に割れた本体と併せて、5点の接合資料である。刃部再生に伴う形状変更の過程で破損し、機能が停止したと考えられる。なお、上半部は、研磨痕を切る剥離面によって広く覆われていることから、形状変更に伴って、かなりの枚数の剥片が剥離されたことがわかる。また、本ブロックに分布する剥片類が少ないとから、ブロック外で形状変更の作業が行われ、一定の大きさのものに限って、ブロック内に持ち込まれた可能性がある。



第14図 第2地点出土遺物実測図(2)

3. 第3地点（第15～19図、第4・5表）

1) 概要

第3地点は、調査区の中央部にあり、第2地点の東側に隣接する（第7図）。石器群の出土したグリッドは、5H44・53～55・64～66・74・75グリッドである。

ブロックの規模と形状は、長軸15m、短軸10mほどの不整円形の範囲に42点の石器・礫が散在する（第15・16図）。出土層位は、IXa層とIXc層の境界付近を中心として、60cmほどの高低差をもって包含されている。

石器組成は、石刃6点、使用痕ある剥片1点、剥片28点、石核6点、礫1点、石器石材は、安山岩16点、頁岩2点、チャート22点、瑪瑙（玉隨）1点、礫の石材は、砂岩1点である。

砂岩の礫は、4cm×3cm×0.4cmほどの小型の扁平礫の半分ほど遺存したものである。被熱した形跡はなく、性格不明である。

2) 母岩の特徴と内容（第4・5表）

本地点では、石器41点のすべてを対象として母岩分類した。内訳は、安山岩3母岩（5H-④～⑥）、頁岩2母岩（5H-⑦・⑧）、チャート6母岩（5H-⑪～⑯）、瑪瑙2母岩（5H-⑨・⑩）である。

5H-④：灰褐色に風化した安山岩である。φ0.5mmの夾雜物が散在する。自然面は紙ヤスリ状で、緩やかな曲面をなす。同一母岩は、中型の石刃1点、使用痕ある剥片1点、中・小型不定型の剥片7点、剥片素材の石核2点で、総重量は135.5gである。

5H-⑤：淡赤紫色（小豆色）に風化した火成岩で、ここでは安山岩とした。通常の安山岩と同じ質感で、φ1mmほどの白色の夾雜物を含む。自然面は、水磨されてなめらかな曲面をしており、原石は円礫であることがわかる。ただし、大きさははっきりしない。同一母岩は、小型不定型の剥片1点、剥片素材の石核3点（接合して2個体）で、総重量は130.7gである。

5H-⑥：灰白色に風化した軟質の安山岩（トロトロ石）である。中型不定型の剥片1点の単独資料（11.5g）である。

5H-⑦：緑がかった淡褐色～暗褐色に風化した、硬質緻密質な珪化した頁岩である。産地ははっきりしないが、北関東産であろうか。小型の石刃1点の単独資料（3.0g）である。

5H-⑧：自然面は赤みがかった褐色、内部は明灰緑色に風化した、硬質緻密質な珪化した頁岩である。北関東産と推定される。小型の石刃1点の単独資料（3.4g）である。

5H-⑨：青灰色の地に、褐色の斑が入る瑪瑙である。中型不整形の石刃1点の単独資料（4.2g）である。

5H-⑩：淡黄褐色半透明の瑪瑙である。小型の石刃の頭部片1点の単独資料（0.7g）である。

5H-⑪：自然面は暗灰緑色、内部は灰緑色のチャートである。同一母岩は、中型厚手の剥片1点、剥片素材の小型の石核1点で、総重量は57.3gである。

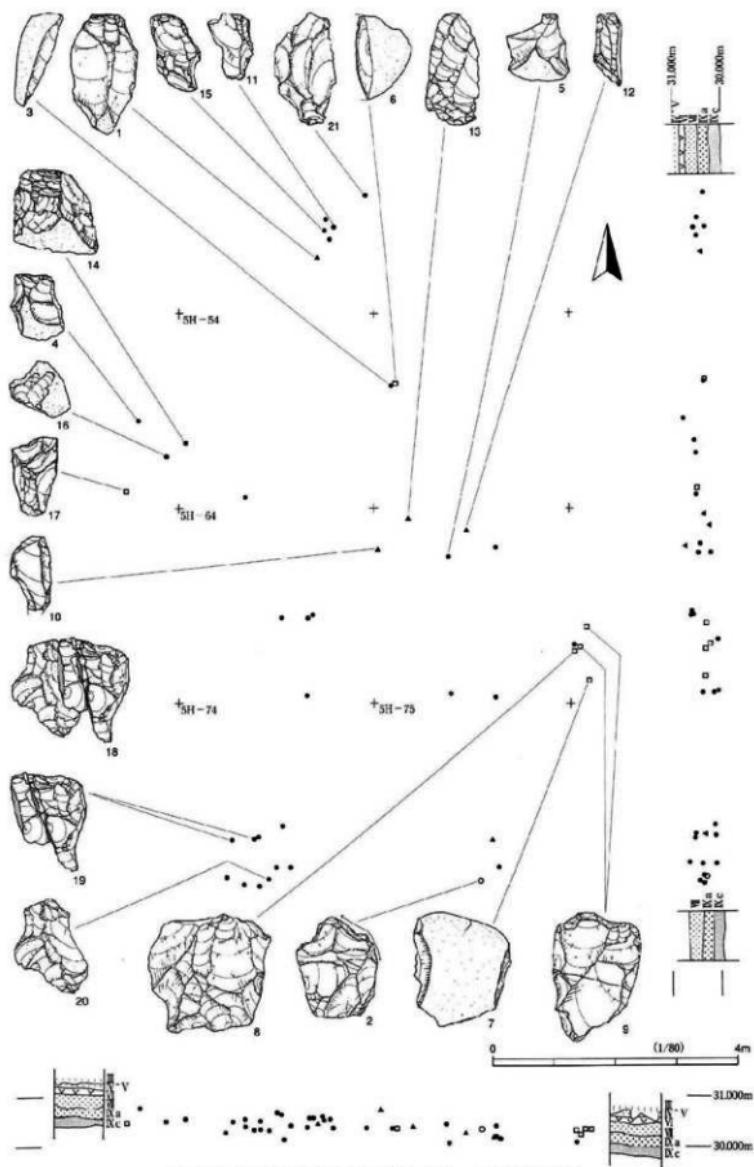
5H-⑫：通常部分は青灰色、節理面は灰緑色のチャートである。中型の石刃1点の単独資料（12.9g）である。

5H-⑬：灰白色半透明の地に、青灰色のモヤが入る良質なチャートである。小型不定型の剥片1点の単独資料（0.8g）である。

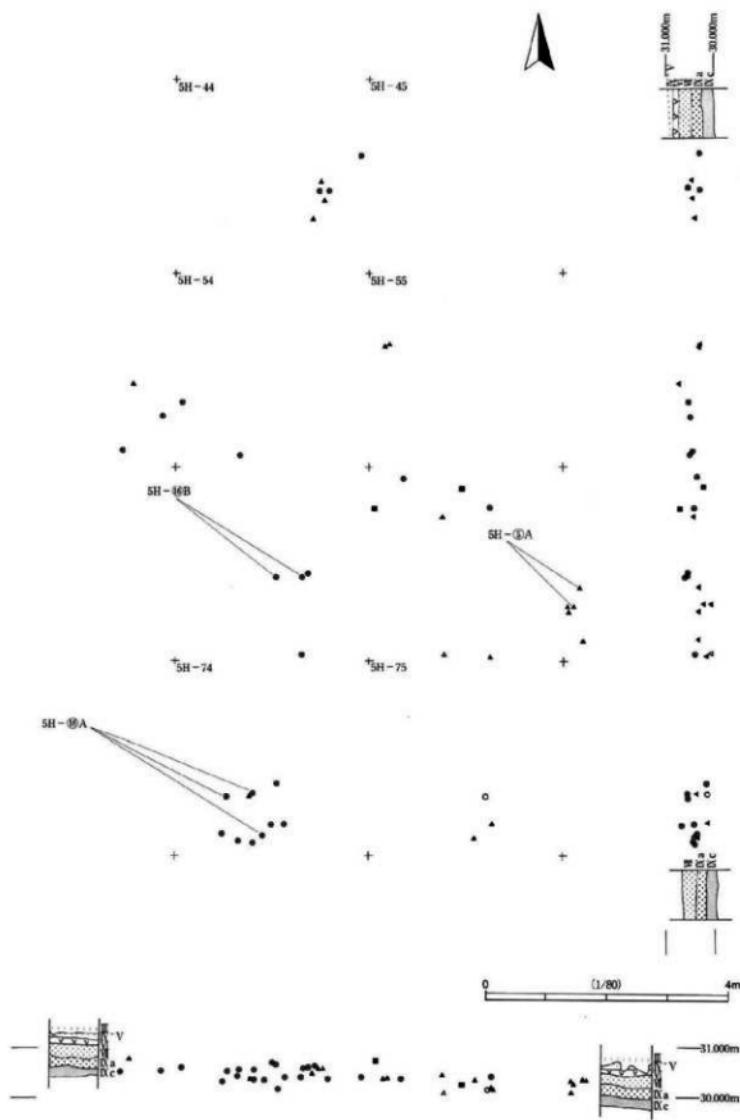
5H-⑭：灰白色の地に、淡黒色や黄褐色の縞が入るチャートである。節理が発達しており、荒れた部分が多い。同一母岩は、中・小型不定型の剥片2点で、総重量は9.5gである。

5H-⑮：暗青灰色のチャートである。不定型の剥片（破片）1点の単独資料（2.3g）である。

5H-⑯：灰緑色で灰白色の斑が入る粗悪なチャートである。同一母岩は中・小型不定型の剥片14点で、総



第15図 第3地点出土遺物分布図（1）—石器別分布図—



第16図 第3地点出土遺物分布図（2）—石材別分布図—

重量は72.2gである。とくに、石質が不良のため、破損品が多い。

接合資料は、A：中型不定型の剥片3点（接合して2個体）が表裏で接合するもの、B：小型不定型の剥片2点が接合して1個体になるものがある。

3) 出上遺物（第17～19図）

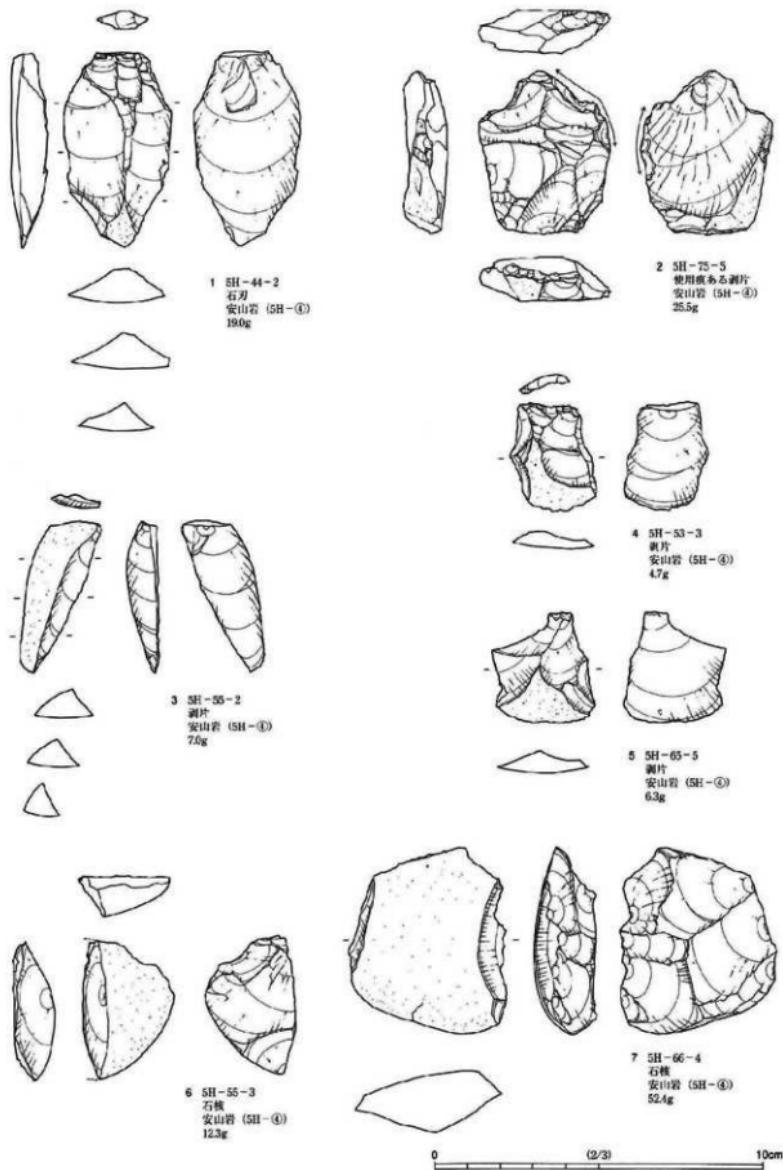
1～7は、安山岩による5H-④母岩に帰属する石器群である。1は、中型の石刃である。平坦打面で、表面を構成する剥離面は、おむね裏面と同一方向である。打面下には頭部調整があり、打面幅がこの石刃の最大幅にはなっていない。2は、中型不定型の剥片を用いた使用痕ある剥片である。表面は、多方向からの剥離面で構成されており、剥片剥離作業にあたって求心的な打点移動がなされたことがわかる。裏面には、石核裏面の剥離面および自然面がウートラバッセとして付着しており、素材剥片を剥離した石核が、比較的薄手の両面体であったと判断される。裏面左側縁に、不規則な剥離痕がある。3は、表面が自然面と1枚の剥離面で構成される中型の短長剥片、4・5は、中型不定型の剥片である。6は、表面が自然面、裏面に作業面をもつ石核の欠損品である。石核素材時の主要剥離面を作業面として、上下から不定型の剥片を生産している。7も6と同様の石核で、完存品である。厚手の剥片を石核の素材とし、表面（自然面側）の左右で剥片を剥離した後、それぞれの剥離面を打面、裏面を作業面として、左右から中型不定型の剥片を剥離

第4表 第3地点出土遺物組成表(1) —母岩別組成表—

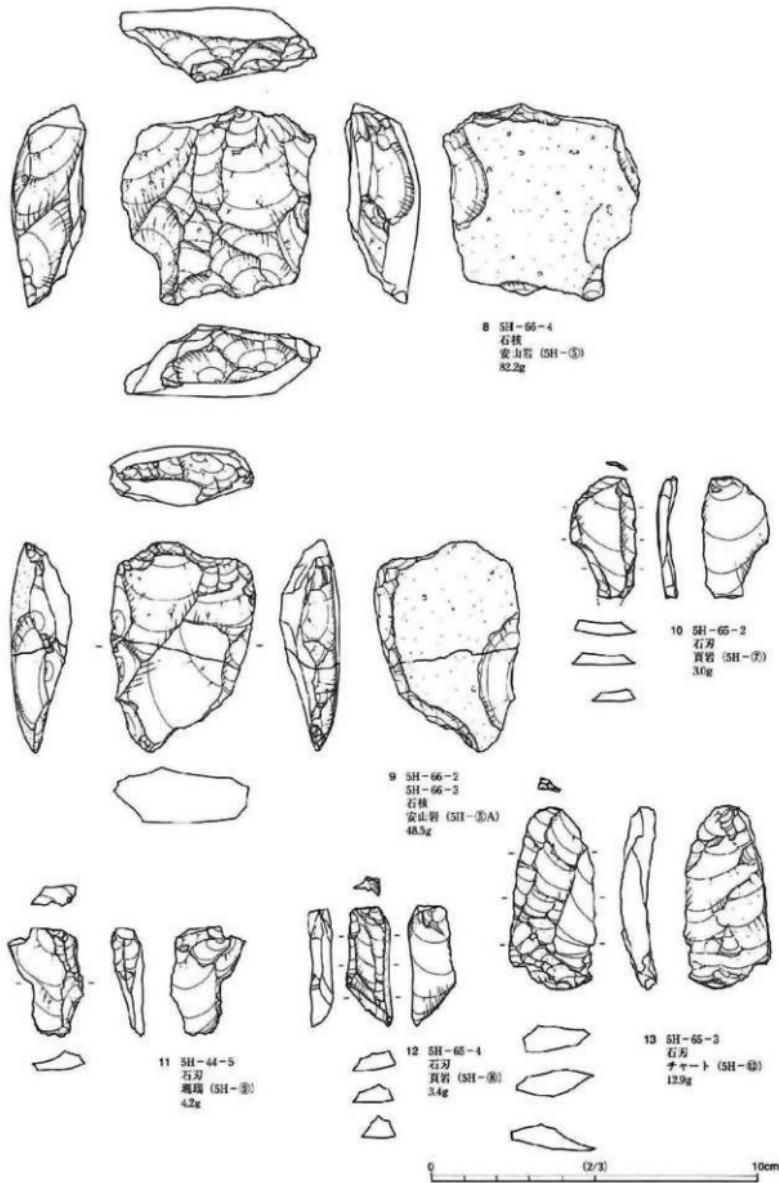
母岩番号	石 材	Kn	Tr	Ss	Pi	Bl	Rf	Uf	Ax	Fl	Ch	Co	合計	確	重量
5H-④	安山岩					1		1		7		2	11		135.5
5H-⑤	安山岩									1		3	4		130.7
5H-⑥	安山岩									1			1		11.5
5H-⑦	頁 岩					1							1		3.0
5H-⑧	頁 岩					1							1		3.4
5H-⑨	瑪 瑪					1							1		4.2
5H-⑩	瑪 瑪					1							1		0.7
5H-⑪	チャート									1		1	2		57.3
5H-⑫	チャート					1							1		12.9
5H-⑬	チャート									1			1		0.8
5H-⑭	チャート									2			2		9.5
5H-⑮	チャート									1			1		2.3
5H-⑯	チャート									14			14		72.2
5HR-①	砂 岩												0	1	5.5
合 計		0	0	0	0	6	0	1	0	28	0	6	41	1	449.5

第5表 第3地点出土遺物組成表(2) —石材別組成表—

石 材	Kn	Tr	Ss	Pi	Bl	Rf	Uf	Ax	Fl	Ch	Co	合計	確	重量
安山岩					1		1		9		5	16		277.7
頁 岩					2							2		6.4
チャート					1				19		1	21		155.0
砂 岩												0	1	5.5
瑪 瑪					2							2		4.9
合 計	0	0	0	0	6	0	1	0	28	0	6	41	1	449.5

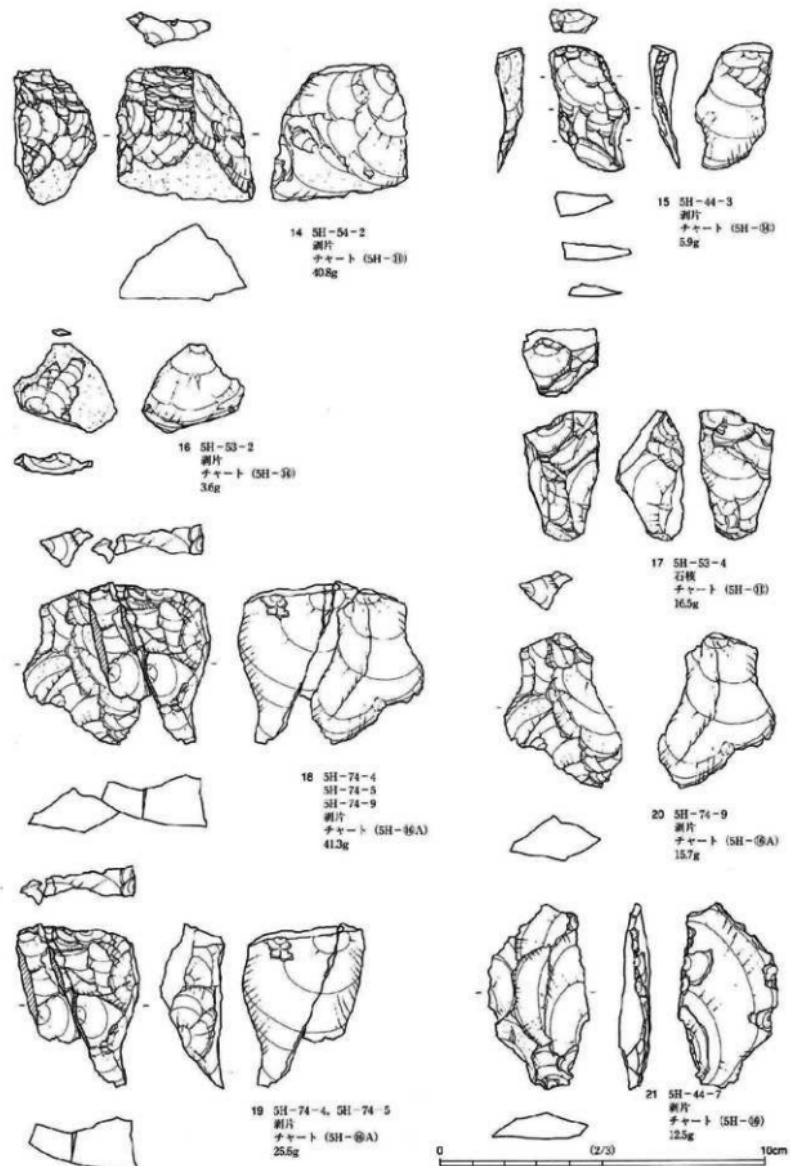


第17図 第3地点出土遺物実測図(1)



第18図 第3地点出土上遺物実測図（2）

第3節 石器群の分布と出土遺物



第19図 第3地点出土遺物実測図 (3)

している。作業面は、不定型の剥離面に覆われており、素材時の主要剥離面は残されていない。

8・9は、安山岩による5H-⑤母岩の石核である。いずれも、7と同様、厚手の剥片を石核の素材として、おもに主要剥離面側を作業面にあて、打点を各所に移動しながら、中型不定型の剥片を生産している。

10は、頁岩による5H-⑦母岩の小型の石刃、12は、頁岩による5H-⑧母岩の小型の石刃、13は、チャートによる中型の石刃である。いずれも、単独資料の搬入品であるが、明瞭な刃こぼれ等は観察できない。11は、瑪瑙による5H-⑨母岩を用いた石刃である。

14・17は、チャートによる5H-⑪母岩の剥片・石核である。14は、不定型厚手の剥片である。左側面に中・小型の剥離痕が連続するが、これは裏面（主要剥離面）を切っているものではなく、左側面と裏面との間に線状に残る打面から剥離されたものである。表面上部のものも含めて、石質が粗悪なためか、剥離がスムーズに通っていない短めの剥離面が多い。17は、厚手の剥片ないしは分割標素材の石核である。表面右側面に大きなネガティブな剥離面が、左側面にポジティブな剥離面があり、さらに、この二つの剥離面を切って、裏面下部にポジティブな剥離面があり、これらが石核素材時の剥片の表裏に対応する可能性が高い。表裏の上端で、交互剥離によって小型不定型の剥片を剥離している。

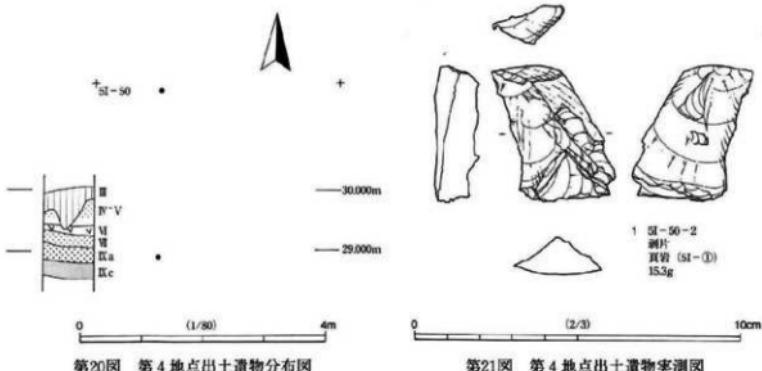
15・16は、チャートによる5H-⑩母岩の中型不定型の剥片である。ほかの剥片類と同様、打点は一定しない。

18は、剥片3点（接合して2個体；19・20）の接合資料、21は、中型薄手の不定型な剥片で、いずれもチャートによる5H-⑩母岩に帰属する。19・20は同一の打面を用いて連続的に剥離されたものであるが、表面は多方向からの剥離面で構成される。不純物が層状に入り、各所で偶発的な折れが生じている。21の表面も同様に多方向からの剥離面で構成されるが、裏面の打面付近には不規則な剥離痕が並んでおり、台形石器として調整加工がなされたものかも知れない。

4. 第4地点（第20～21図）

1) 概要

第4地点は、調査区東側で、傾斜変換点から20mほど北の台地縁辺部に位置する。石器は、5I-50グリフ



ドの立川ローム層第2黒色帶下部から単独で出土した。

1は、嶺岡産の頁岩による不定型な剥片である。表面は、裏面と同一方向の剥離面と節理面で構成される。節理面は橙褐色、内部は灰緑色に風化しており、比較的珪化した石材である。

5.まとめ

本遺跡では、第2地点と第3地点において、立川ローム層Ⅳ層に帰属する資料が出土した。とくに、第2地点からは、信州産と推定される黒曜石を用いた石刃とそれに関連する資料を得ることができた。類例の多くはない資料であるので、若干の検討を行い、まとめとしたい。

はじめに、第2地点から出土した黒曜石による石刃関連資料からは、①石刃は、比較的大型であること、②打面調整や頭部調整の有無については、欠損等によりはっきりしないが、打面は、幅広の剥片を多方向から剥離して形成する複剥離打面であること、③両設打面により石刃生産を行っていること、④石刃の剥離方向と直交する剥離による側面調整をもつこと、⑤作業面は小口等に限定されず、比較的広いこと、などの内容がわかる。また、小型の剥片類や石核がみられないことから、本遺跡外で生産された石刃、剥片類が搬入されたと考えられる。資料数が少ないうえに、ナイフ形石器等定型的な石器も含まれていないため、細かな対比は困難であるが、県内から出土している既存資料との関連について考えてみたい。

房総半島では、立川ローム層Ⅳ層を出土層とする信州産黒曜石を用いた石刃石器群として、千葉市餅ヶ崎遺跡第II文化層、市原市草刈六之台遺跡第3文化層、同ヤジ山遺跡第2文化層、東金市鉢ヶ谷遺跡第5地点第I文化層などがあげられる。

上記諸遺跡のなかで、資料のまとまっている草刈六之台遺跡第3文化層では、信州麦草峠産や和田崎周辺産による黒曜石を用いて、大・小の多種多様な石刃を遺跡内で生産しており、その一部は小型の基部調整、2個縁調整のナイフ形石器（石器の長軸と素材の長軸は概ね一致し、基部に打面を残すものが多い）に加工されている。石刃技法は、複剥離打面で、単設打面と両設打面の両者がある。打面調整、頭部調整、石核の側面調整は、いずれも顕著ではない。黒曜石以外には、北関東産と推定される頁岩を用いた大型の石刃が搬入品として存在し、また、石斧や刃部再生剥片類、砥石も伴っている。出土層はⅣ層上部で、他の遺跡も概ね同時期と考えられる。

つぎに、Ⅳ層下部出土の石器群をみると、石刃関連資料は黒曜石を用いた例が少なく、北関東産と推定される各種頁岩系の石材が主流である。黒曜石については、安山岩とともに、横長剥片や不定型な剥片、それらを素材とした台形石器などに用いられることが多い。こうした、台形石器等に用いられる黒曜石は、分析例は多くはないが、柏市中山新田1遺跡下層では栃木県高原山産、草刈六之台遺跡第2文化層では東京都神津島産、成田市南三里塚宮原第1遺跡では東京都神津島産を主体として、少量の栃木県高原山産が含まれるという結果が得られており、信州産はみあたらない。

Ⅳ層下部出土の黒曜石による石刃については、富里市古込遺跡で、栃木県高原山産と推定される黒曜石を用いた石刃関連資料が台形石器とともに出土している。石刃技法は、分割された素材の小口面を作業面とし、先細りの石刃を生産するものである。黒曜石の原産地、石刃技法とともに、本遺跡と異なる。

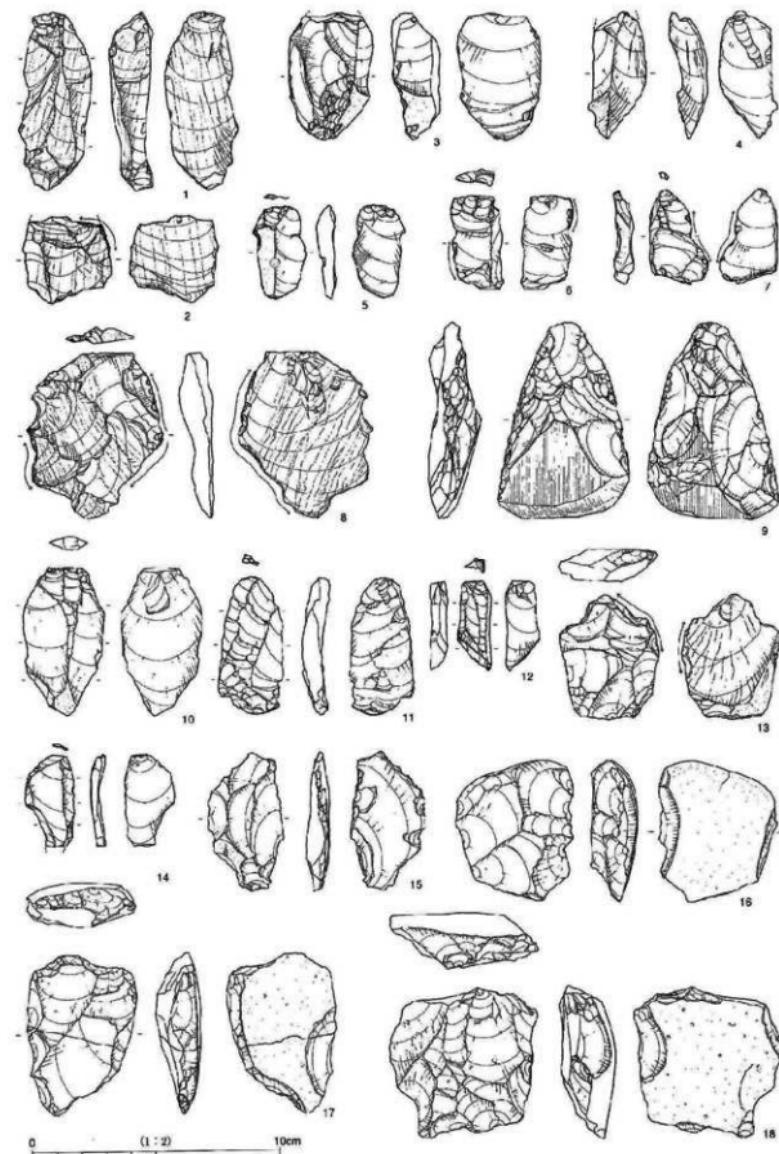
栃木県高原山産黒曜石を用いた石刃石器群は、柏市石堀遺跡において典型的にみられるところ、Ⅶ層にまとめており、Ⅳ層には少ない。

以上のとおり、Ⅳ層出土の信州産黒曜石による石刃石器群は、概ねⅣ層上部に位置づけられ、本遺跡の出土例も、その脈絡で考えるべきかもしれない。ただし、現在整理中の資料ではあるが、山武市四ツ塚遺跡で、信州産黒曜石による石刃、基部調整のナイフ形石器、平坦剥離による台形石器などをもつ石器群が出土して

おり、刃部磨製石斧が伴うことも含めて、Ⅸ層下部の可能性が高い。したがって、さらなる資料の検索と検討のなかで、Ⅸ層下部とⅩ層上部における石刀石器群と黒曜石との関連を考えいかねばならない。

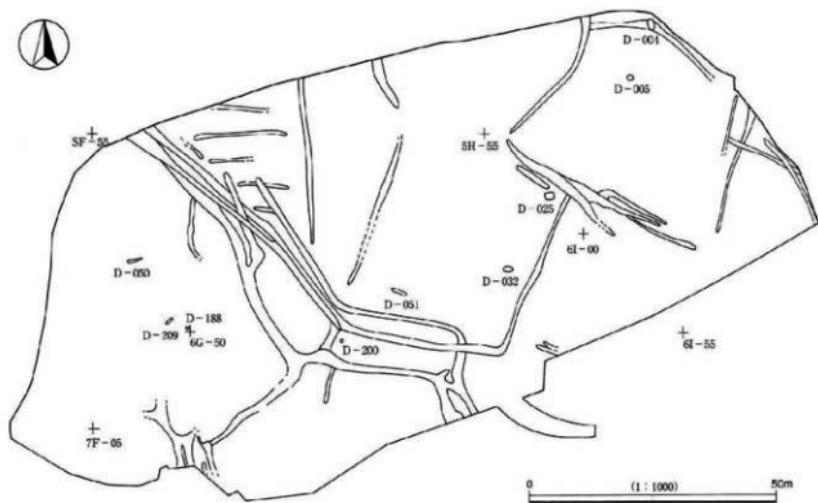
参考文献

- 宇井義典ほか編 2004年『千葉県成田市南三里塚宮原第1遺跡・宮原第2遺跡 一(仮) 南三里塚物流基地建設予定地内埋蔵文化財調査一』(財) 印旛都市文化財センター
- 太田文雄ほか編 1994年『石揚遺跡 一手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』(財) 千葉県文化財センター
- 白井久美子編 1994年『千原台ニュータウンVI 一草刈六之台遺跡一』(財) 千葉県文化財センター
- 杉原重夫ほか 2005『千葉県成田市南三里塚宮原第1遺跡出土旧石器時代黒曜石遺物の産地推定』『財団法人印旛都市文化財センター年報21 一平成16年度一』(財) 印旛都市文化財センター
- 田村 隆編 1986年『常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV 一元割・聖人塚・中山新田Iー』(財) 千葉県文化財センター
- 豊田修治ほか編 2000年『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書5 一市原市中伊沢遺跡・百目木遺跡・下椎木遺跡・志保知遺跡・ヤジ山遺跡・細山(1)(2)遺跡一』(財) 千葉県文化財センター
- 二宮修治 1987年「第3章第6節 黒曜石、黒色緻密質安山岩、メノウの機器中性子放射化分析による原産地推定」「千葉県文化財センター研究紀要11 自然科学の手法による遺跡、遺物の研究5 一先土器時代の石器石材の研究一」(財) 千葉県文化財センター
- 二宮修治ほか 1994年「第9章第1節 草刈六之台遺跡出土黒曜石資料の原産地推定 一エネルギー分散型蛍光X線分析を用いる非破壊測定による予備的調査一」「千原台ニュータウンVI 一草刈六之台遺跡一」(財) 千葉県文化財センター
- 村田六郎太編 1988年『千葉市鮮ヶ崎遺跡 一昭和60年度発掘調査報告書一』(財) 千葉市文化財調査協会
- 吉田直哉編 2001年『小野山田遺跡群III(第2分冊) 一先土器時代篇一』(財) 山武都市文化財センター



第22図 第2地点（1～9；IXc層）と第3地点（10～18；IXa～IXc層）の主要石器

第2章 繩文時代



第23図 繩文時代遺構配置図

第1節 概要

陥穴が9基を検出した。

第2節 陥穴

D-004（第24図）

調査区北東部に位置する。平面形は、プラン・底部とも円形を呈する。長径1.95m×短径1.90m×深さ0.81mを測る。

本土坑は陥穴であると思われる。

D-005（第24図）

調査区北東部に位置する。平面形は、プラン・底部とも楕円形を呈する。長径1.30m×短径0.90m×深さ1.20mを測る。

本土坑は陥穴である。

第2節 陷穴

D-025 (第24図)

調査区北東部に位置する。平面形は、プラン・底部とも隅丸長方形を呈する。長径1.93m×短径1.30m×深さ2.09mを測る。

本土坑は陷穴である。

本遺構より砥石1点を回示した。現存長5.1cm、幅3.2cm、厚さ1.30cm、重量30.8gである。

D-032 (第24図)

調査区中央部に位置する。平面形は、プラン・底部とも隅丸長方形を呈する。長径1.75m×短径1.25m×深さ1.63mを測る。

本土坑の性格は不明である。

D-050 (第25図)

調査区西部に位置する。平面形は、プラン・底部とも梢円形を呈する。長径3.35m×短径0.46m×深さ0.88mを測る。

本土坑は陷穴である。

D-051 (第25図)

調査区中央部に位置する。平面形は、プラン・底部とも梢円形を呈する。長径3.60m×短径1.0m×深さ1.19mを測る。

本土坑は陷穴である。

D-188 (第25図)

調査区西部に位置する。平面形は、プラン・底部ともやや梢円形を呈する。長径0.83m×短径0.70m×深さ0.76mを測る。

本土坑は陷穴である。

D-200 (第25図)

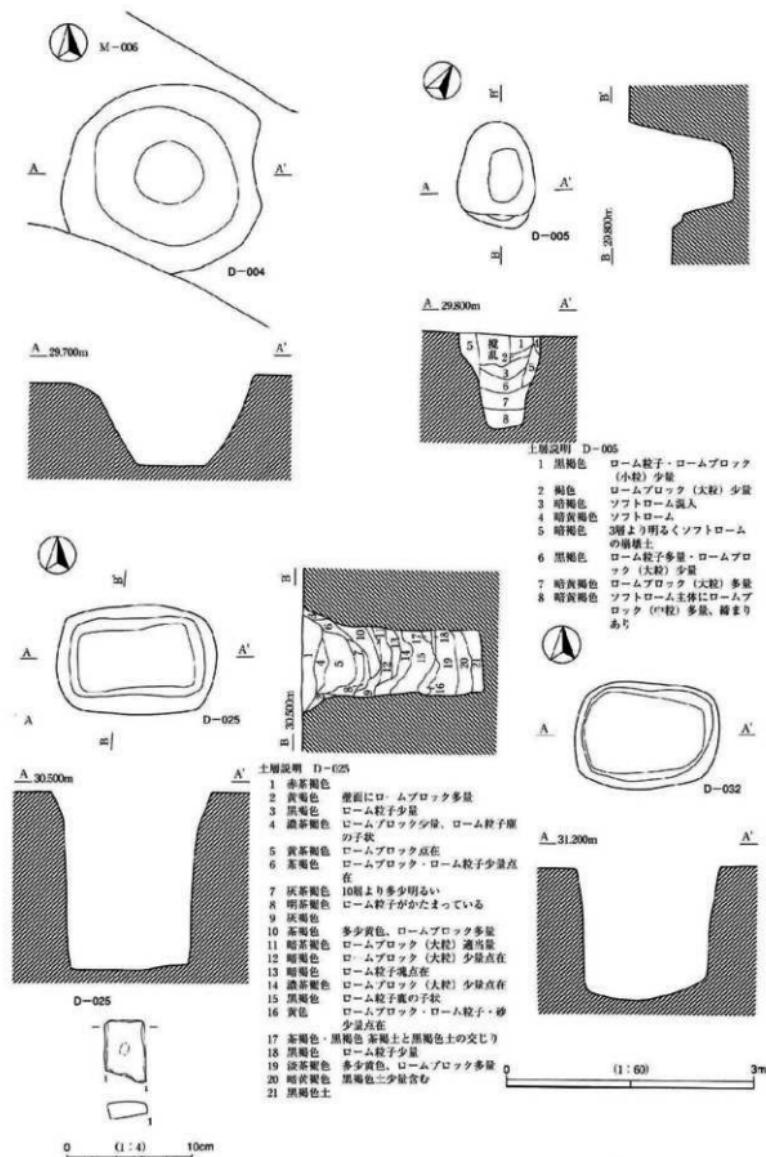
調査区南西部に位置する。平面形は、プラン・底部とも円形を呈する。長径1.48m×短径1.20m×深さ1.85mを測る。

本土坑は陷穴である。

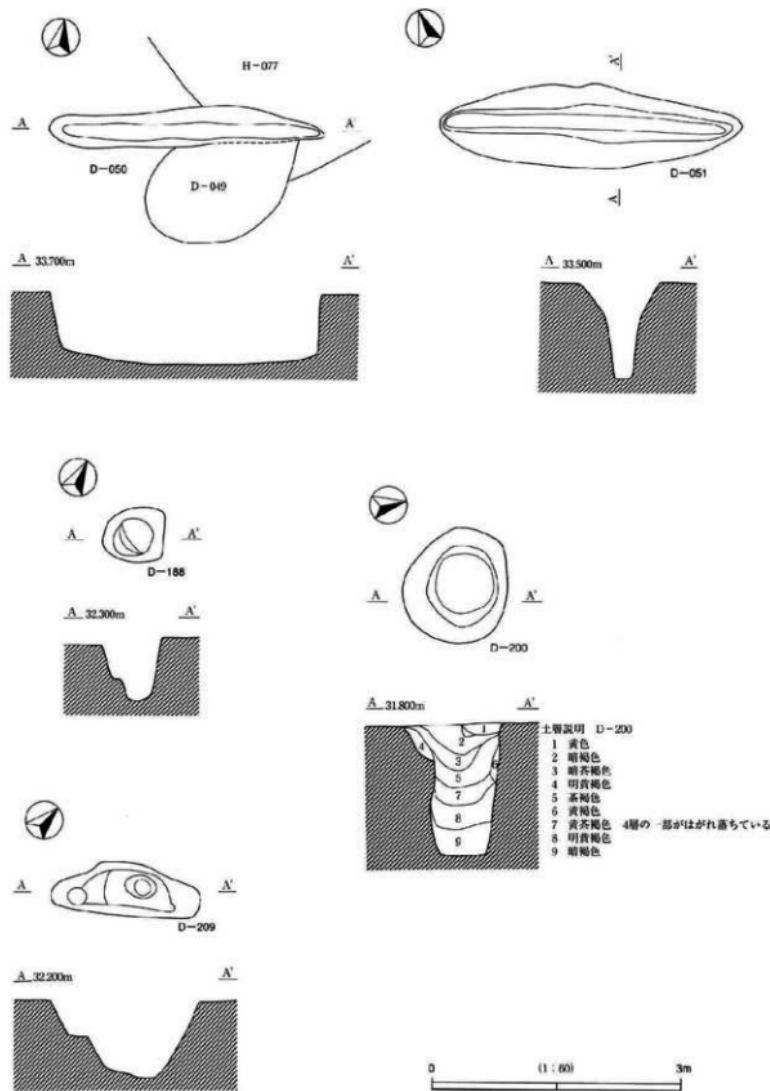
D-209 (第25図)

調査区南西部に位置する。平面形は、プラン・底部とも長梢円形を呈する。長径1.78m×短径0.65m×深さ0.64mを測る。

本土坑の性格は陷穴である。

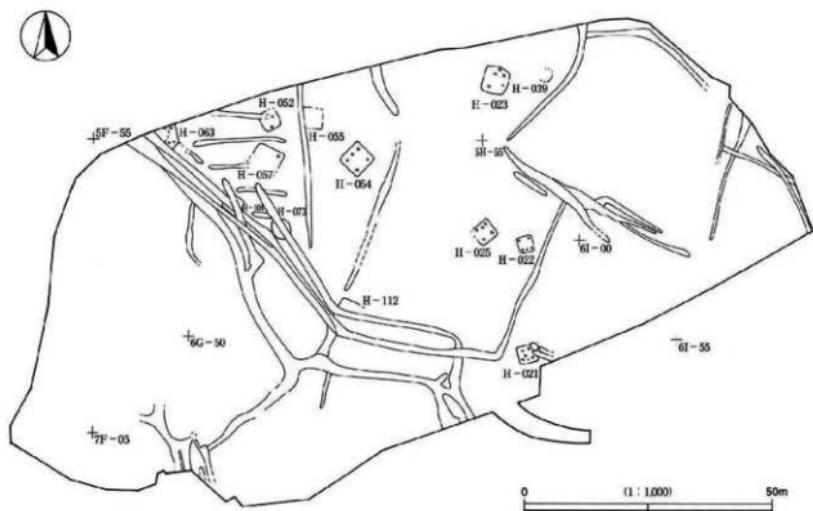


第24図 D-004・005・025・032実測図・出土遺物



第25図 D-050・051・188・200・209実測図

第3章 弥生時代



第26図 弥生時代遺構配置図

第3章 弥生時代

第1節 概要

住居跡13軒が出土した。調査区中央部に点在している。

第2節 竪穴住居跡

H-021 (第27図)

調査区東南部に位置する。M-009とD-023に切られている。規模は4.00m (推定) × 4.25mを測り、形状は隅丸方形を呈する。

覆土は4層に分層され、人為的に埋め戻されている。床面に焼土あり。壁高は約43cm (西壁) を測る。

ピットは床面に7本検出された。主柱穴はP-1 (径30cm × 32cm, 深さ64cm)・P-2 (径33cm × 25cm, 深さ68cm)・P-3 (径38cm × 26cm, 深さ61cm)・P-4 (径27cm × 25cm, 深さ62cm)の4本が対角線上に配置している。梯子穴と考えられるP-5は (径34cm × 26cm, 深さ23cm) を測る。P-6 (径42cm × 35cm, 深さ14cm)・P-7 (径17cm × 17cm, 深さ16cm) は補助柱穴である。炉は北壁付近より検出した。単式炉が、なしくずしに括がった様相である。火床部はよく焼けている。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺1点、石製品4点、計5点を図示した。

1は土師器壺である。底部のみ遺存する。外面ヘラケズリ、底部に木葉痕あり。残存器高2.5cm、底径6.8cmを測る。

2は用途不明の石である。長さ7.3cm、幅3.4cm、厚さ2.1cm、重量76.0gを測る。

3は軽石である。長さ7.90cm、幅9.00cm、厚さ6.90cm、重量56.5gを測る。

4は石製の紡錘車である。径5.5cm、厚さ2.7cm、重量74.8gを測る。

5は火打ち石である。長さ1.3cm、幅1.3cm、厚さ0.9cm、重量2.2gを測る。

H-022 (第28・29図)

調査区中央部に位置する。規模は3.17m × 3.63mを測り、形状は隅丸方形を呈する。

覆土は7層に分層され、人為的に埋め戻されている。壁高は約50cm (西壁) を測る。

ピットは床面に7本検出された。主柱穴はP-1 (径22cm × 29cm, 深さ57cm)・P-2 (径21cm × 28cm, 深さ49cm)・P-3 (径23cm × 25cm, 深さ54cm)・P-4 (径36cm × 32cm, 深さ58cm)の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5は (径26cm × 32cm, 深さ28cm) を測る。P-6 (径35cm × 26cm, 深さ10cm)・P-7 (径21cm × 19cm, 深さ20cm) は壁柱穴である。炉は北壁付近より検出した。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺1点、鉢1点、壺7点、小型壺1点、壺12点、手捏土器1点、石製品1点、計24点である。

1は土師器壺である。口縁部～底部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。口径13.6cm、器高5.5cm、底径6.5cmを測る。

2は鉢である。口縁部～胴部を1/4遺存する。複合口縁をもつ。口縁部外面單節LR繩文、外面胴部ヘラケズリ、内面ナデ。復元口径13.0cm、残存器高5.4cmを測る。

3は小型壺である。口縁部～底部1/2遺存する。口縁部外面輪積痕を残す。胴部外面S字結束文、撲糸文を施している。内面ナデ、輪積痕もみられる。法量は口径12.0cm、器高11.4cm、底径4.6cmを測る。

4～8は壺である。4は口縁部～胴部1/2遺存する。折返口縁をもつ。輪積痕を残している。外面は綴

密にミガキあり。内面器面剥離のため調整不明。法量は口径12.8cm、残存器高9.2cmを測る。5は底部2/5遺存する。外面ヘラケズリ、単節RL繩文。内面ナデ。底部に木葉痕有り。法量は残存器高4.3cm、底径8.0cmを測る。6はほぼ完形である。口縁部と高台に輪積痕がみられる。全体に雑な作りである。外面ヘラケズリ後へラミガキ、内面ヘラミガキ。底部に木葉痕あり。法量は口径18.6cm、器高16.7cm、底径8.1cmを測る。7は胴部下端～底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高6.0cm、底径8.0cmを測る。8は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部原体波状押圧、胴部円形竹管文、胴部外面ヘラケズリ、口縁部内面ヘラナデ、内面胴部ナデ。法量は復元口径17.0cm、器高17.3cm、底径6.0cmを測る。

9～15は壺である。9は頸部1/4遺存する。頸部外面に貼り付け文、ヘラケズリ、内面ナデ後へラミガキ。法量は残存器高4.7cmを測る。10は頸部～底部1/2遺存する。頸部半截竹管文、胴部山形状沈線文、残存器高17.8cm、底径7.0cmを測る。11は胴部1/2遺存する。胴部外面単節RL繩文、結束文、内面ナデ。法量は残存器高10.5cmを測る。12は頸部～底部1/5遺存する。頸部波状の沈線文、胴部結束繩文、内面剥落のため調整不明。法量は残存器高62.0cm、復元底径18.6cmを測る。13は底部のみである。法量は残存器高1.9cm、復元底径5.6cm。14は底部のみである。外面ヘラケズリ、内面ナデ。底部に木葉痕あり。法量は残存器高1.8cm、底径4.0cmを測る。15は底部のみで1/2遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。底部に木葉痕あり。法量は残存器高3.0cm、復元底径7.0cmを測る。

16は手捏土器である。完形である。指頭痕、指ナデ。法量は口径5.4cm、器高2.6cm、底径3.2cmを測る。

17は壺底部のみである。外面ヘラケズリ、内面ナデ。残存器高2.6cm、復元底径5.0cmである。

18は壺の口縁片である。口縁部外面輪積痕を残し、撚糸文を施している。19は壺の口縁片である。口縁部外面に輪積痕を残し、撚糸文を施している。

20～23は壺である。20は壺の胴片である。外面頸部波状沈線文、胴部単節RL繩文、内面は器面剥離のため調整不明。21は頸部片である。外面貼り付け文、単節RL繩文。内面ナデ。内面赤彩。22は頸部片である。頸部外面結束文、単節RL繩文、貼り付け文、内面ナデ。内面赤彩。23は胴部片である。外面単節RL繩文、結束文、内面器面剥離で調整不明。外面一部赤彩か（結束文と結束文の間）。

24は砥石か。長さ6.8cm、幅3.7cm、厚さ0.5cm、重量25.1gを測る。

H-023（第30図）

調査区北東部に位置する。規模は5.25m×6.35mを測り、形状は格円形を呈する。

覆土は1層で人為的に埋め戻されている。壁高は約16cm（東壁）を測る。

ピットは床面に14本検出された。主柱穴はP-1（径42cm×40cm、深さ74cm）・P-2（径38cm×32cm、深さ64cm）・P-3（径31cm×27cm、深さ69cm）・P-4（径37cm×26cm、深さ69cm）の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5は（径48cm×29cm、深さ41cm）を測る。補助柱穴はP-6（径55cm×40cm、深さ21cm）・P-7（径44cm×28cm、深さ8cm）・P-8（径25cm×32cm、深さ11cm）・P-9（径24cm×25cm、深さ6cm）・P-10（径19cm×21cm、深さ5cm）・P-11（径11cm×13cm、深さ21cm）・P-12（径29cm×25cm、深さ6cm）・P-13（径17cm×17cm、深さ20cm）・P-14（径27cm×18cm、深さ17cm）である。炉は北壁付近より検出した。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺6点、壺2点、計8点を図示した。

1～6は壺である。1は口縁部～頸部1/4遺存する。口縁部原体波状押圧、内外面ナデ、内面に一部赤彩か。法量は復元口径21.0cm、残存器高5.6cmを測る。2は底部一部である。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高3.1cm、復元底径8.4cmを測る。3は底部のみである。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残

第2節 壁穴住跡

存器高2.6cm、底径7.6cmを測る。4は胴部片である。口縁部外面に輪積痕残す。外面ヘラケズリ、内面ナデ。5は口縁片である。口縁部外面に輪積痕残す。内外面ナデ。6は口縁片である。口縁部外面に輪積痕残す。内面ナデ。

7・8は壺である。7は底部1/4遺存する。法量は残存器高3.8cm、復元底径8.4cmを測る。8は底部片である。外面ヘラケズリ、内面器面剥離のため調整不明。法量は残存器高1.7cm、復元底径8.0cmを測る。

H-025（第31図）

調査区中央部に位置する。規模は4.50m×4.94mを測り、形状は梢円形を呈する。

覆土は8層に分層され、人為的に埋め戻されている。壁高は約40cm（西壁）を測る。周溝は、断続的に南壁を除いて、断続的に存在する。幅12cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に34本検出された。主柱穴はP-1（径45cm×38cm、深さ80cm）・P-2（径55cm×26cm、深さ82cm）・P-3（径55cm×28cm、深さ74cm）・P-4（径48cm×42cm、深さ79cm）の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5（径25cm×33cm、深さ79cm）・P-6は（径48×71cm、深さ13cm）を測る。補助柱穴はP-7（径40cm×28cm、深さ19cm）・P-8（径42cm×28cm、深さ50cm）・P-9（径28cm×28cm、深さ64cm）・P-10（径26cm×26cm、深さ4cm）・P-11（径28cm×30cm、深さ10cm）・P-12（径24cm×28cm、深さ54cm）・P-13（径24cm×28cm、深さ51cm）・P-14（径28cm×28cm、深さ4cm）・P-15（径42cm×38cm、深さ4cm）・P-16（径30cm×20cm、深さ3cm）・P-17（径28cm×32cm、深さ43cm）・P-18（径20cm×30cm、深さ3cm）・P-19（径24cm×24cm、深さ9cm）・P-20（径20cm×26cm、深さ5cm）・P-21（径24cm×36cm、深さ9cm）・P-22（径28cm×38cm、深さ5cm）・P-23（径24cm×36cm、深さ5cm）・P-24（径20cm×20cm、深さ10cm）・P-25（径28cm×40cm、深さ6cm）・P-26（径32cm×60cm、深さ9cm）・P-27（径28cm×28cm、深さ8cm）・P-28（径38cm×38cm、深さ6cm）・P-29（径36cm×28cm、深さ6cm）・P-30（径24cm×24cm、深さ7cm）・P-31（径28cm×30cm、深さ8cm）・P-32（径28cm×38cm、深さ10cm）・P-33（径20cm×20cm、深さ7cm）・P-34（径28cm×36cm、深さ5cm）である。炉は北壁付近より検出した。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺4点、石製品1点、計5点を図示した。

1～4は壺である。1は胴部～底部1/6遺存する。外面単節RL繩文、内面ナデ。法量は残存器高4.7cm、復元底径8.0cmを測る。2は胴部片である。単節RL繩文、結束撚糸文、内面ナデ。3は壺の口縁片である。口縁部ヨコナデ、口縁部外面に貼り付け文、外面単節RL繩文、内面ナデ。4は口縁片である。口縁部外面に浅く薄く原体波状押圧がみとめられる。外面単節RL繩文、内面ナデ。

5は砥石である。長さ7.0cm、幅6.1cm、厚さ1.1cm、重量80.4gを測る。

H-039（第32図）

調査区北東部に位置する。H-035に切られて規模は不明。

壁高は約20cm（東壁）を測る。床面は全体に貼っている。

ピットは床面に1本検出された。P-1（径22cm×22cm、深さ55cm）は主柱穴と考えられる。

本住居跡の遺物は出土しなかった。

H-052（第32図）

調査区北西部に位置する。M-015、B-008に切られる。規模は4.55m×4.03mを測り、形状は梢円形である。

覆土は7層に分層され、人為的に埋め戻されている。壁高は約30cm（南壁）を測る。

ピットは床面に16本検出された。主柱穴はP-2（径40cm×35cm、深さ50cm）・P-4（径30cm×28cm、深さ50cm）・P-6（径35cm×38cm、深さ54cm）・P-8（径28cm×30cm、深さ48cm）の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5は（径20cm×30cm、深さ16cm）を測る。P-1（径33cm×28cm、深さ82cm）・P-3（径15cm×18cm、深さ41cm）・P-7（径22cm×26cm、深さ11cm）は補助柱である。P-11（径13cm×19cm、深さ4cm）・P-12（径15cm×20cm、深さ6cm）・P-13（径13cm×14cm、深さ3cm）・P-14（径15cm×17cm、深さ4cm）・P-15（径12cm×14cm、深さ3cm）・P-16（径16cm×15cm、深さ4cm）は補助柱か。P-9（径50cm×61cm、深さ20cm）・P-10（径73cm×62cm、深さ15cm）は貯蔵穴である。炉は東壁付近より検出した。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺1点、石製品3点、計4点を図示した。

1は壺である。口縁部のみ遺存する。口縁部外面輪積痕残す。外面ナデ後燃り戻し網文、内面ナデ。法量は口径22.5cm、残存器高8.5cmを測る。

2～4は軽石である。2は長さ8.1cm、幅6.4cm、厚さ4.5cm、重量54.9gを測る。3は長さ7.0cm、幅6.1cm、厚さ4.5cm、重量33.9gを測る。4は長さ6.5cm、幅8.8cm、厚さ5.5cm、重量46.7gを測る。

H-054（第33図）

調査区中央北部に位置する。規模は5.05m×6.03mを測り、形状は隅丸方形を呈する。

覆土は3層に分層され、人為的に埋め戻されている。床面はほぼ全体に硬化面がみられる。壁高は約30cm（東壁）を測る。周溝は搅乱に切られているもの全周している。幅21cm、深さ2cmを測る。

ピットは床面に16本検出された。主柱穴はP-1（径45cm×22cm、深さ50cm）・P-2（径33cm×37cm、深さ57cm）・P-3（径59cm×27cm、深さ52cm）・P-4（径43cm×21cm、深さ61cm）の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5は（径21cm×22cm、深さ19cm）を測る。壁柱穴はP-6（径53cm×48cm、深さ19cm）・P-9（径24cm×19cm、深さ33cm）・P-10（径26cm×32cm、深さ8cm）・P-11（径33cm×26cm、深さ38cm）である。補助柱穴と思われるものはP-7（径29cm×27cm、深さ36cm）・P-8（径27cm×23cm、深さ28cm）・P-12（径55cm×43cm、深さ20cm）・P-13（径32cm×26cm、深さ7cm）・P-14（径23cm×21cm、深さ6cm）・P-15（径23cm×26cm、深さ4cm）・P-16（径約14cm×29cm、深さ5cm）である。炉は北壁付近より検出した。

本住居跡の出土遺物のうち、壺1点、土製品1点、石製品1点、計3点を図示した。

1は壺の口縁片である。複合口縁をもつ。外面羽状網文、内面ナデ。

2は砥石である。長さ3.1cm、幅3.8cm、厚さ1.2cm、重量19.65gを測る。

3は土製紡錘車である。径6.8cm、厚さ2.3cm、孔径0.9cm、重量111.1gを測る。

土製品1点は写真のみの掲載である。

H-055（第34図）

調査区中央北部に位置する。H-047・H-048とM-014と搅乱に切られる。規模は4.98m×4.09mを測り、形状は隅丸方形と思われる。

覆土は3層に分層され、人為的に埋め戻されている。

炉の周辺に硬化面がみられる。床面に焼土検出。壁高は約30cm（西壁）を測る。周溝は西壁および南壁より検出された。幅は26cm、深さ4cmを測る。

第2節 壺穴住居跡

ピットは床面に7本検出された。主柱穴はP-1(径43cm×43cm, 深さ50cm)・P-2(径31cm×23cm, 深さ46cm)・P-3(径41cm×21cm, 深さ61cm)・P-4(径50cm×24cm, 深さ53cm)の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5は(径53cm×26cm, 深さ17cm)を測る。補助柱穴はP-6(径45cm×36cm, 深さ9cm)・P-7(径18cm×19cm, 深さ21cm)である。炉は西壁付近より検出した。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺2点を図示した。

1～2は壺である。1は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部に輪積痕残す。燃糸文(頸部除く), S字結束文, 内面ナデ。法量は復元口径12.2cm, 残存器高14.4cmを測る。2は胴部～底部2/3遺存する。胴部上端にS字結束文が巡り、胴部下端には主に燃糸文が施されているがS字結束文とナデが不定期に存在する。内面ナデ。法量は残存器高12.5cm, 底径7.0cmを測る。

H-057(第35図)

調査区北西部に位置する。H-056と搅乱に切られている。規模は6.33m×5.88mを測り、形状は隅丸方形を呈する。

壁高は約30cm(西壁)を測る。周溝は断続的に巡っている。幅20cm, 深さ4cmを測る。

ピットは床面に40本検出された。主柱穴はP-1(径45cm×74cm, 深さ61cm)・P-2(径28cm×52cm, 深さ54cm)・P-3(径34cm×60cm, 深さ61cm)・P-4(径40cm×85cm, 深さ70cm)の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5は(径28cm×36cm, 深さ32cm)を測る。補助柱穴はP-6(径20cm×36cm, 深さ12cm)・P-7(径18cm×22cm, 深さ15cm)・P-8(径20cm×20cm, 深さ6cm)・P-9(径24cm×26cm, 深さ7cm)・P-10(径30cm×32cm, 深さ30cm)・P-11(径34cm×34cm, 深さ4cm)・P-12(径14cm×14cm, 深さ10cm)・P-13(径35cm×35cm, 深さ27cm)・P-14(径25cm×35cm, 深さ12cm)・P-15(径35cm×30cm, 深さ11cm)・P-17(径20cm×25cm, 深さ24cm)・P-18(径32cm×36cm, 深さ23cm)・P-19(径30cm×35cm, 深さ13cm)・P-20(径28cm×34cm, 深さ15cm)・P-21(径22cm×26cm, 深さ17cm)・P-22(径40cm×46cm, 深さ10cm)・P-23(径18cm×18cm, 深さ24cm)・P-24(径22cm×32cm, 深さ29cm)・P-25(径18cm×22cm, 深さ40cm)・P-26(径20cm×32cm, 深さ17cm)・P-27(径20cm×20cm, 深さ14cm)・P-28(径34cm×34cm, 深さ11cm)・P-29(径40cm×42cm, 深さ17cm)・P-30(径34cm×34cm, 深さ17cm)・P-31(径34cm×34cm, 深さ8cm)・P-32(径24cm×28cm, 深さ13cm)・P-33(径30cm×34cm, 深さ13cm)・P-34(径26cm×26cm, 深さ5cm)・P-35(径28cm×32cm, 深さ4cm)・P-36(径30cm×36cm, 深さ9cm)・P-37(径28cm×32cm, 深さ8cm)・P-38(径20cm×20cm, 深さ11cm)・P-39(径20cm×30cm, 深さ3cm)・P-40(径24cm×32cm, 深さ10cm)である。P-16(径66cm×60cm, 深さ20cm)は貯蔵穴である。炉は検出できなかった。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺7点、壺2点、玉1点、計10点を図示した。

1・2は壺である。1は底部のみである。燃糸文、内面ナデ、底部に木葉痕あり。法量は残存器高3.6cm、底径7.8cmを測る。2は胴部のみ1/2遺存する。外面燃り戻し繩文、内面ナデ。法量は残存器高12.3cmを測る。

3は壺底部のみである。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高1.8cm、底径3.4cmを測る。

4は壺片である。外面原体鋸歯状押圧文、羽状繩文、内面ナデ。

5は壺片である。鋸歯状に沈線区画し、上端に単節LR繩文、結束文、下端に単節RL繩文。鋸歯状沈線の部分に赤彩か。

6～9は壺片である。6は外面単節RL繩文、口唇部単節LR繩文、内面ナデ。7は外面燃糸文、内面ナデ。8は外面燃り戻し繩文、S字結束文が二条、内面ナデ。9は外面燃り戻し繩文、内面ナデ。

H-10は土製管玉で完形である。長さ2.6cm、径0.7cm、孔径0.1cm、重量1.7gを測る。

H-063（第36図）

調査区西北部に位置する。H-062、M-042に切られる。形状は不明である。

床面にはP-4、P-5の周辺に硬化面がみられる。壁高は約16cm（西壁）を測る。

ピットは床面に6本検出された。主柱穴はP-1（径40cm×30cm、深さ50cm）・P-2（径39cm×40cm、深さ49cm）・P-3（径25cm×24cm、深さ10cm）である。補助柱穴はP-4（径45cm×82cm、深さ30cm）・P-5（径31cm×35cm、深さ16cm）である。P-6（径88cm×82cm、深さ18cm）は貯蔵穴か。炉は検出されなかつた。

本住居跡の出土した遺物のうち、壺2点、壺1点、土製品1点、計4点を図示した。

1・2は壺である。1は胴部～底部3/4遺存する。外面S字結束文二条、単節RL縄文、内面ナデ、輪積痕あり。法量は現存器高18.4cm、底径7.5cmを測る。2は片である。外面単節RL縄文、内面ナデ。

3は壺の胴部片である。外面頸部および胴部結束縄文、縄文の縁にS字結束文。内面器面剥離。

4は土製鋤鍤車で完形である。径6.8cm、厚さ2.6cm、孔径1.1cm、重量140.2gを測る。

H-073（第37図）

調査区中央部やや西よりに位置する。M-013に切られる。規模は不明です。形状は円形である。

覆土は2層に分層され、人為的に埋め戻されている。壁高は約50cm（西壁）を測る。

ピットは床面に12本検出された。P-1（径25cm×28cm、深さ11cm）・P-2（径20cm×24cm、深さ17cm）・P-3（径35cm×34cm、深さ11cm）・P-4（径27cm×18cm、深さ9cm）・P-5（径30cm×29cm、深さ29cm）・P-6（径28cm×24cm、深さ29cm）・P-10（径30cm×23cm、深さ24cm）は、壁柱穴のように巡る。P-7（径18cm×12cm、深さ9.0cm）・P-8（径13cm×24cm、深さ11cm）・P-9（径12cm×10cm、深さ9.0cm）は補助柱か。P-11（径40cm×35cm、深さ9.0cm）・P-12は（径36cm×30cm、深さ40cm）を測る。

炉は東壁付近より検出した。

本住居跡から出土した遺物は、流れ込みであったため、図示しなかった。

H-104（第37図）

調査区西北部に位置する。M-020に切られ、M-042と重複している。規模は3.60m×3.43mを測り、形状は隅丸方形を呈する。

床面は全体に貼っている。壁高は約6cm（東壁）を測る。周溝はM-020に切られている。幅は19cm、深さ2cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。P-1（径23cm×24cm、深さ9cm）・P-2（径13cm×11cm、深さ4cm）・P-3（径20cm×19cm、深さ4cm）が壁柱穴のように巡る。P-4（径約44cm×30cm、深さ15cm）は貯蔵穴か。炉は西壁付近より検出した。

本住居跡からの出土遺物は流れ込みであったため、図示しなかった。

H-112（第38図）

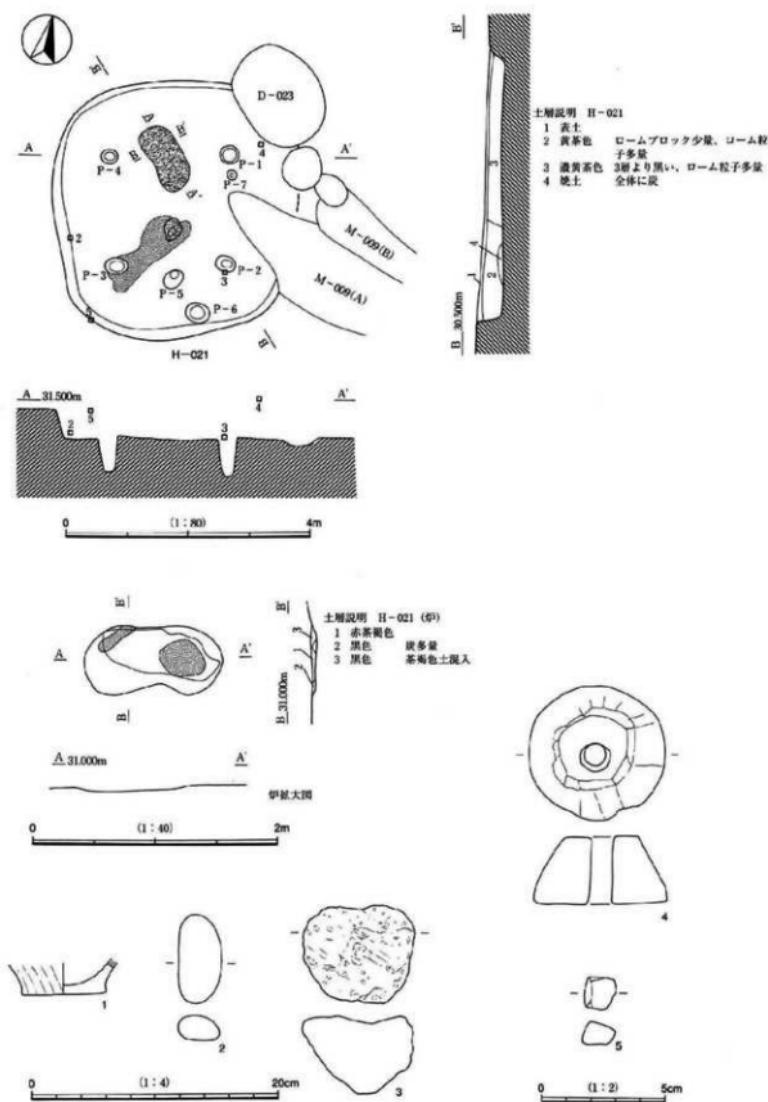
調査区中央部やや南よりに位置する。H-110、M-001、041に切られる。規模は3.17m×3.63mを測り、形状は稍円形と思われる。

第2節 壁穴住居跡

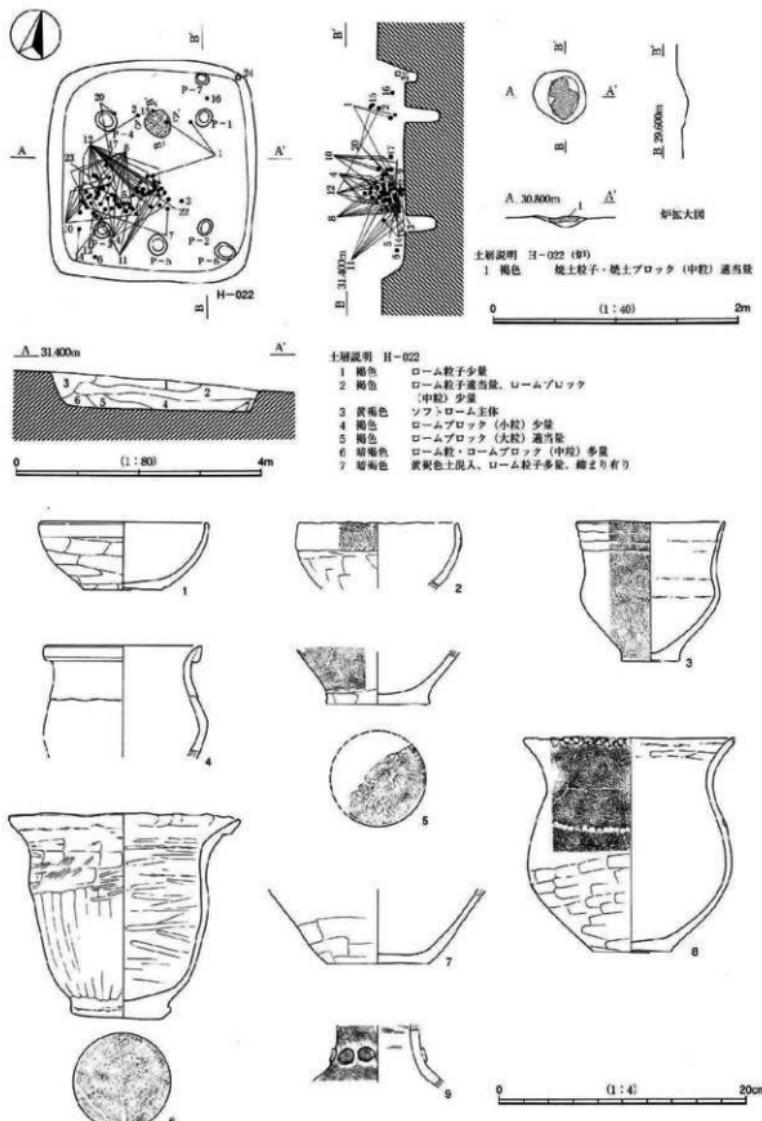
壁高は約16cm（西壁）を測る。周溝は他遺構に切られる。幅16cm、深さ2cmを測る。

ピットは床面に6本検出された。P-1（径24cm×18cm、深さ24cm）・P-2（径19cm×16cm、深さ19cm）・P-3（径16cm×16cm、深さ19cm）・P-4（径16cm×18cm、深さ26cm）・P-5（径18cm×18cm、深さ47cm）・P-6（径26cm×26cm、深さ72cm）のピットを検出した。炉は検出できなかった。

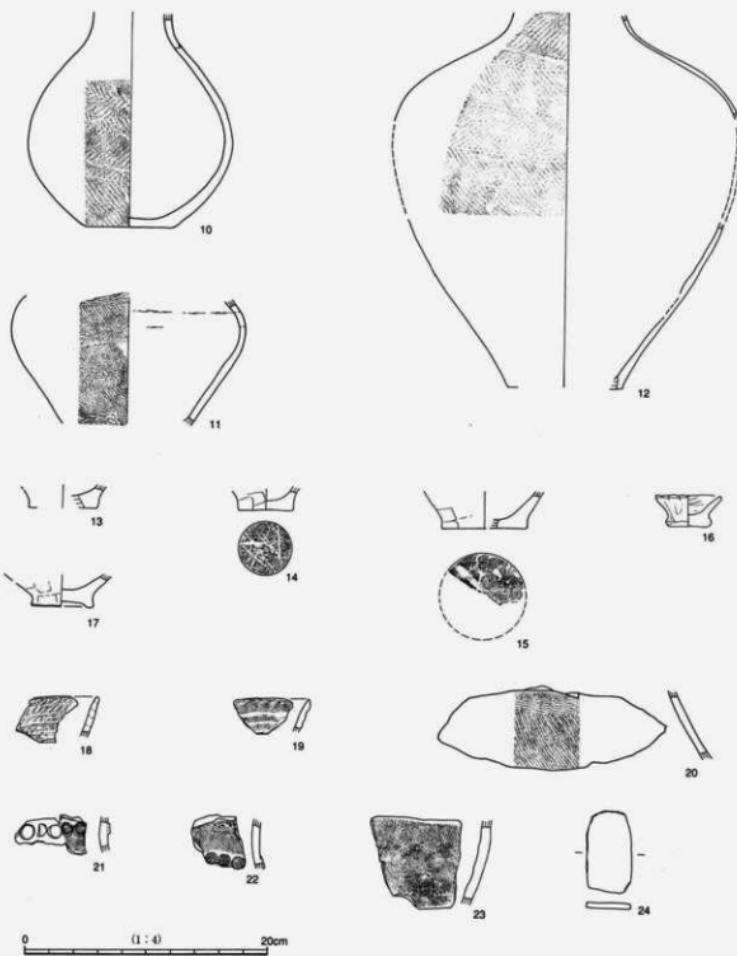
本住居跡から出土した遺物は流れ込みであったため、図示しなかった。



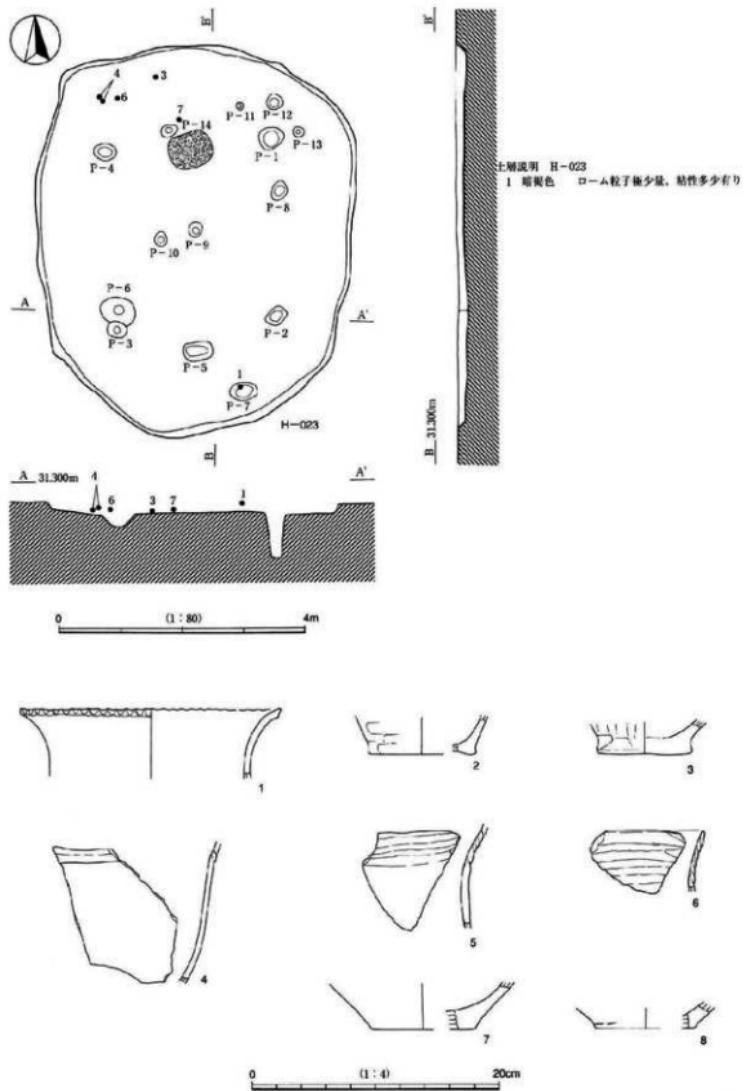
第27図 H-021実測図・出土遺物



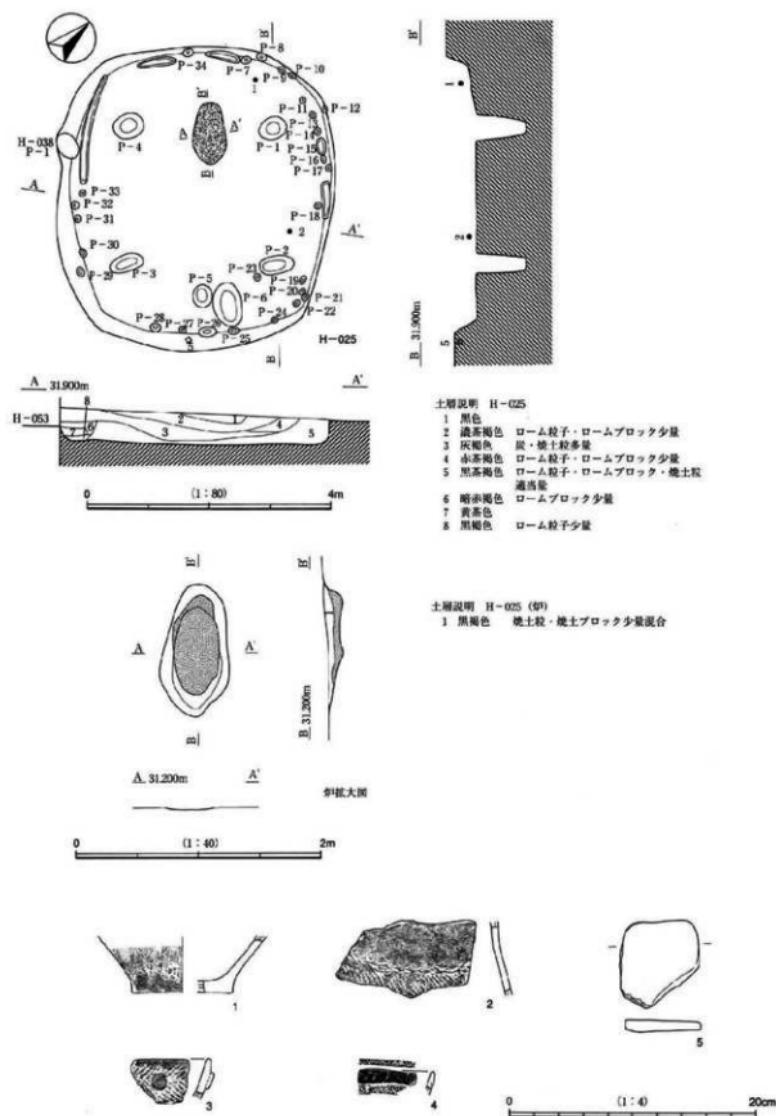
第28図 H-022実測図・出土遺物 (1)



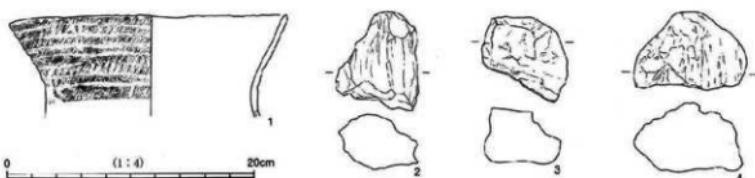
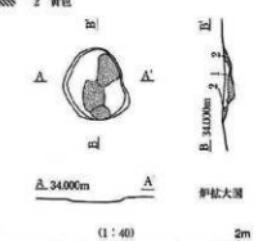
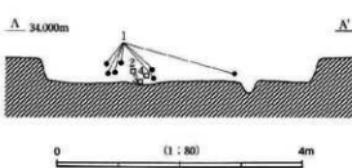
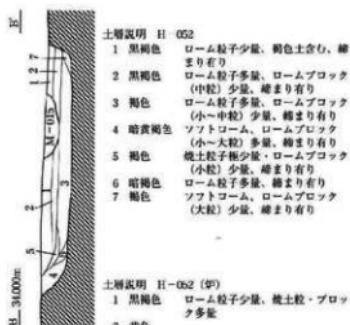
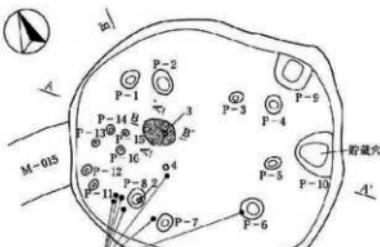
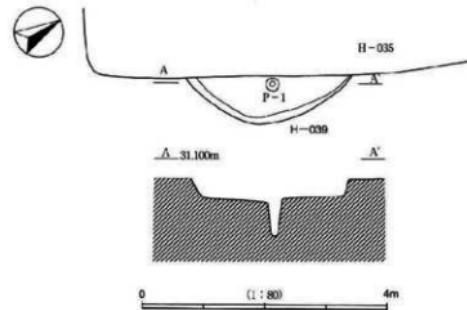
第29図 H-022出土遺物（2）



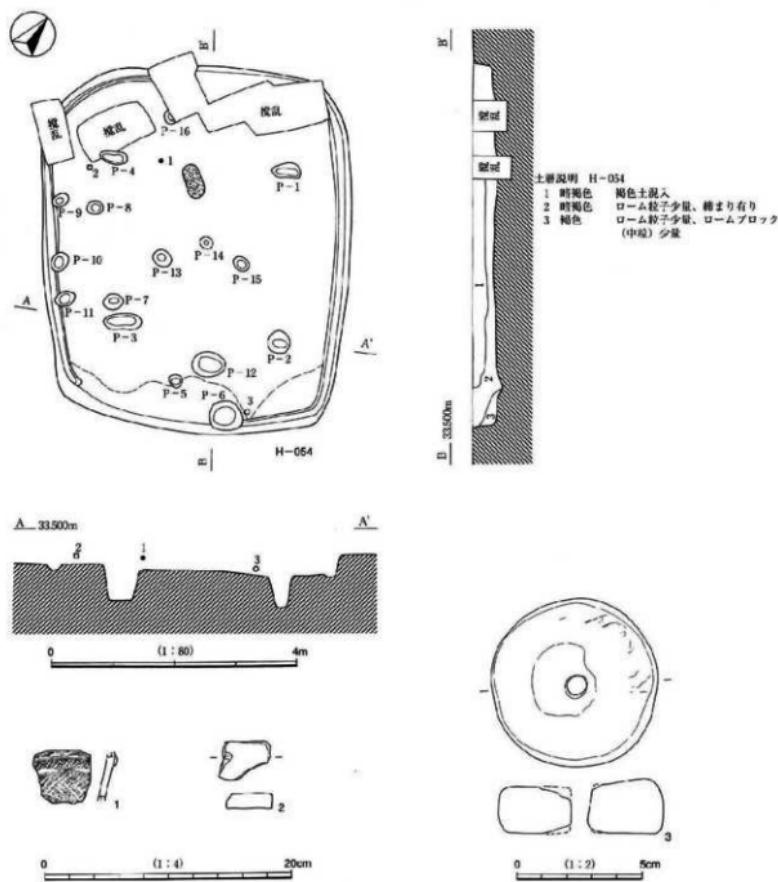
第30図 H-023実測図・出土遺物



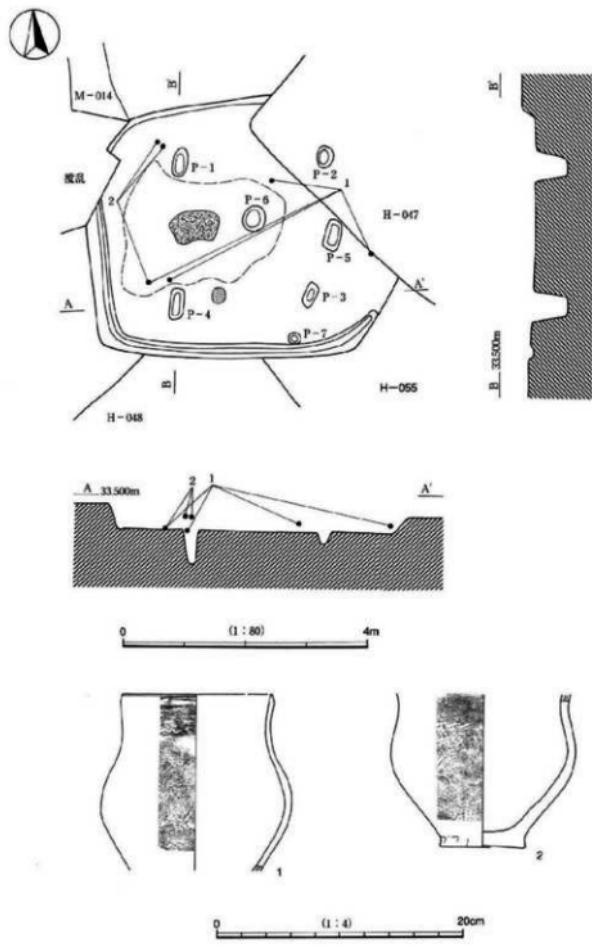
第31図 H-025実測図・出土遺物



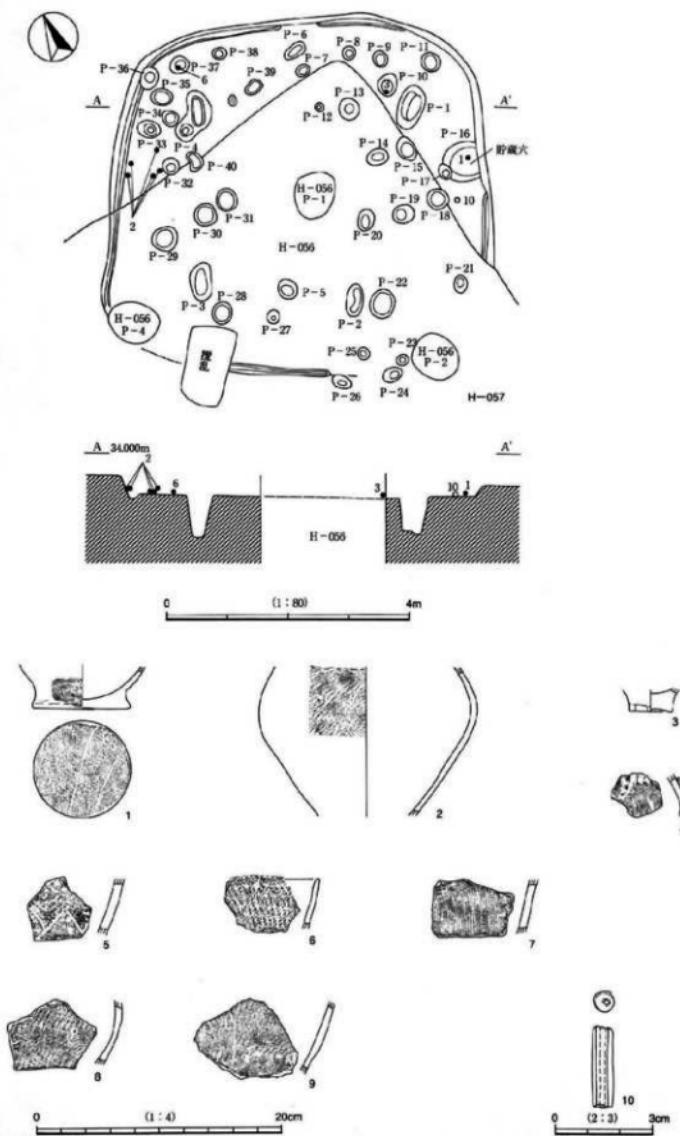
第32図 H-039・H-052実測図・出土遺物



第33図 H-054実測図・出土遺物

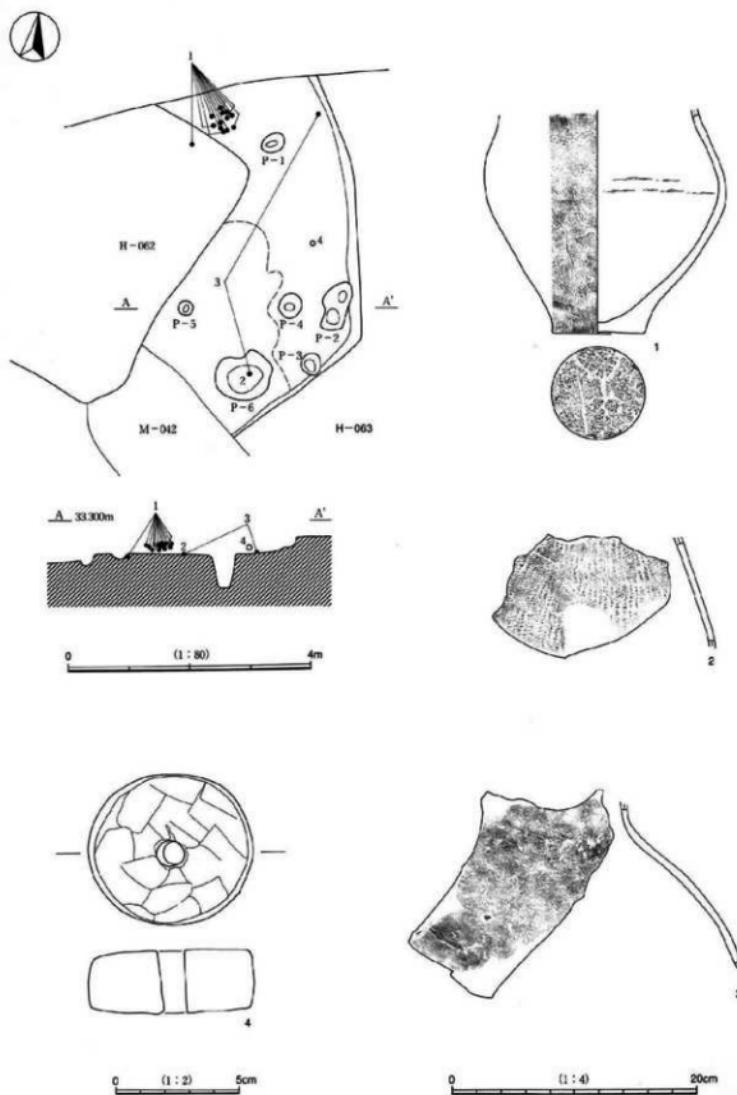


第34図 H-055実測図・出土遺物

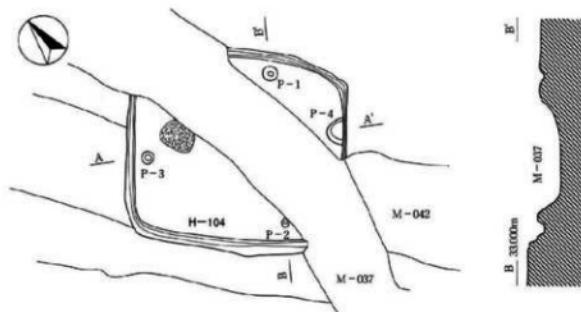
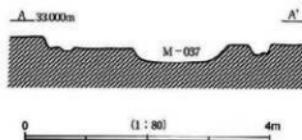
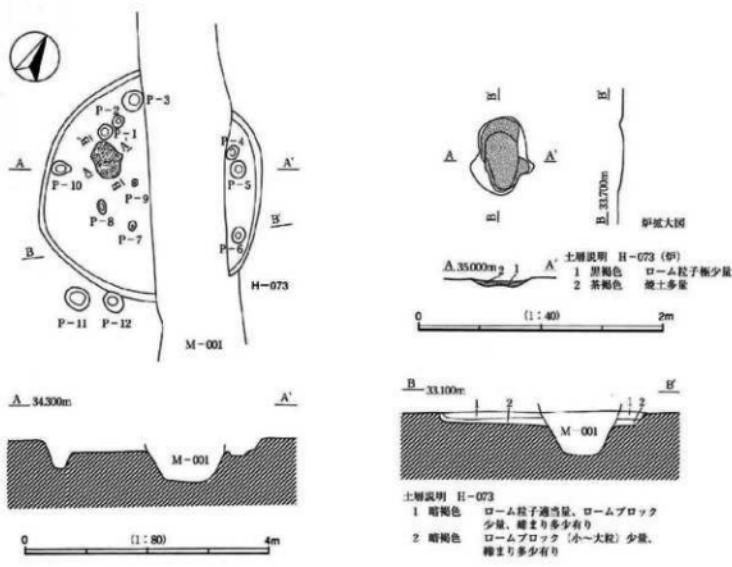


第35図 H-057実測図・出土遺物

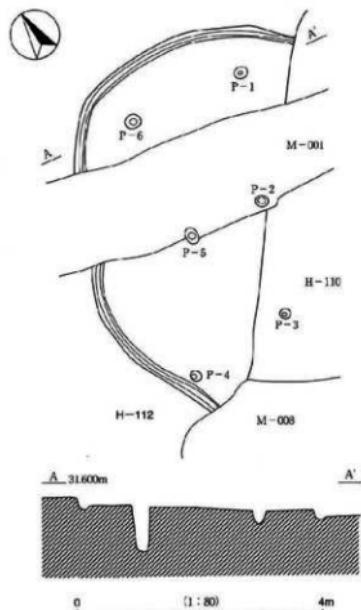
第2節 壁穴住居跡



第36図 H-063実測図・出土遺物



第37図 H-073・H-104実測図



第38図 H-112実測図

第4章 古墳時代



第39図 古墳時代遺構配置図

第4章 古墳時代

第1節 概要

住居跡81軒、土坑墓6基、溝4条を検出した。

集落が拡大するとともに住居跡も調査区一帯に拡散する。

第2節 墓穴住居跡

H-001 (第40・41図)

調査区東部に位置する。規模は $5.37m \times 5.45m$ を測り、形状は方形を呈する。

覆土は人為的に埋め戻され、6層に分層される。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約50cm(西壁)を測る。周溝はほぼ全周し、幅30cm、深さ2.5cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1(径28cm×26cm、深さ59cm)・P-2(径34cm×33cm、深さ59cm)・P-3(径40cm×35cm、深さ61cm)・P-4(径36cm×37cm、深さ54cm)の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5は(径19cm×17cm、深さ9.2cm)を測る。カマドは検出されず、炉が西壁側に検出された。造遣状態は良好で、火床部束縛がよく焼けている。各主柱穴の外側から周溝に向かって3条の間仕切り溝が東西に走る。南壁側に貯藏穴が検出され、径102cm×62cm、深さ22cmを測り、梢円形を呈する。廐床後に廐材の焼却処理を行っており、炭や焼土が散乱している。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺5点、鉢1点、甕2点、土製品2点、石製品1点、計11点を図示した。

1～5は土師器壺である。1はほぼ完形。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径15.6cm、器高6.0cmを測る。底部は丸底。2は口縁部～底部が2/3遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部外面ヨコナデ。内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径15.1cm、器高6.1cmを測る。底部は丸底。3は口縁部～底部が4/5遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は口径16.6cm、器高6.8cmを測る。底部は丸底。4はほぼ完形である。外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は、口径14.8cm、器高5.3cm、底径6.6cmを測る。5は口縁部～底部が1/3遺存する。外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデ、内外面赤彩。法量は口径14.6cm、器高6.7cmを測る。底部は丸底。

6は土師器鉢で、口縁部～胴部3/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径15.6cm、残存器高12.5cmを測る。

7は土師器壺で口縁部～胴部1/8が遺存する。外面ヘラケズリ、外面赤彩、内面口縁部のみ赤彩。法量は復元口径12.2cm、残存器高5.5cmを測る。8は土師器甕で口縁部～胴部1/2が遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径17.6cm、残存高11.8cmを測る。

9は軽石で、長さ6.9cm、幅3.2cm、厚さ2.5cm、重量6.82gである。10は土製品で有孔土製品である。径20.0cm、厚さ0.9cm、両孔径約0.1cm、重量3.08g。11は有孔石製品で、長さ4.2cm、幅1.9cm、厚さ0.45cm、重量7.48gである。

H-002 (第42図)

調査区東部に位置する。H-003と重複する。規模は $5.07m \times 5.10m$ を測り、形状は方形を呈する。

覆土は人為的に埋め戻され、4層に分層される。

床面は全体に強く貼っている。壁高は約52cmを測る（西壁）。周溝は、南東の一部を除いて全周しており、幅28cm、深さ4.5cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径32cm×37cm、深さ57cm）・P-2（径33cm×34cm、深さ58cm）・P-3（径32cm×32cm、深さ18cm）・P-4（径32cm×35cm、深さ42cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径25cm×22cm、深さ63cm）を測る。カマドは北壁中央部に位置し、両袖部は残存し、山砂を主とする構築土を用いる。床面中央部に焼土の痕が残る。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺3点、蓋2点、高壺3点、甕2点、玉1点、石製品1点、計12点を図示した。

1～3は土師器壺である。1は口縁部1/4～底部遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、内面ナデ。法量は復元口径で12.4cm、器高3.8cmを測る。底部は丸底。2は口縁部1/4～体部遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、内面ナデ。法量は復元口径14.0cm、残存器高2.5cmを測る。3は口縁部～底部1/3遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は復元口径21.8cm、器高7.1cmを測る。

4・5は須恵器蓋である。4はほぼ完形である。外面ロクロ成形、天井部回転ヘラケズリ。法量は口径7.9cm、器高2.5cmを測る。5は口縁部～天井部3/4遺存する。外面ロクロ成形、天井部回転ヘラケズリ。法量は残存器高3.3cmを測る。

6～8は土師器高壺である。6は口縁部～体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、壺部ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。外面赤彩、内面黒色処理。法量は復元口径で18.0cm、残存器高4.9cmを測る。7は脚部のみである。外面ヘラケズリ、裾部横方向のヘラナデ、内面ヘラケズリ後ヘラナデ。法量は残存器高7.5cm、復元底径で12.6cmを測る。8は脚部1/4遺存する。外面横方向と縦方向にヘラケズリ、内面ヘラケズリ。法量は残存器高5.8cm。復元底径で12.0cmを測る。

9・10は土師器甕である。9は口縁部～胴部1/8遺存する。法量は復元口径16.0cm、残存器高13.0cm、胴上部横方向・中央縦方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ。10は口縁部～胴部1/4遺存する。内外面ヘラケズリ後ヘラナデ、器面剥落が激しいため、胴部の調整は不明。法量は口径21.9cm、残存器高21.5cmを測る。

11は砾石である。長さ6.3cm、幅2.2cm、厚さ1.9cm、重量51.69gである。12は土玉である。径1.90cm、厚さ1.60cm、孔径0.5cm、重量6.40gである。

H-003（第43・44図）

調査区東部に位置する。H-002に切られる。規模は5.57m×5.70mを測り、形状は方形を呈する。

廐屋後焼却処分し、埋め戻され、3層に分層される。

床面は全体に硬化面がみられる。焼却の際の焼土が東側にみられる。壁高は約40cmを測る。周溝は、H-002によって切られた部分を除き、ほぼ全周し、幅27cm、深さ6.2cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径28cm×28cm、深さ74cm）・P-2（径28cm×23cm、深さ34cm）・P-3（径30cm×27cm、深さ66cm）・P-4（径21cm×28cm、深さ49cm）の4本が対角線上に配される。炉は北壁中央付近に位置し、火床部はよく焼けている。炉と正対して位置する貯蔵穴は、隅丸長方形と思われるが規模は不明。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺6点、蓋1点、高壺1点、甕2点、甕5点、土製品1点、石製品2点、鉄製品2点、手捏1点、計21点を図示した。

1～6は土師器壺である。1はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面体部ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩、

第2節 壺穴住居跡

外面一部すす附着。法量は口径13.2cm, 器高6.4cm, 底部は丸底である。2は口縁部～底部3/4遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ, 内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径12.6cm, 器高5.3cm, 底径3.6cmを測る。3は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面体部ヘラケズリ, 内面ナデ。法量口径16.0cm, 器高5.7cm, 底径5.80cmを測る。4は口縁部～底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ, 内面ナデ, 内外面赤彩。法量は復元口径で14.0cm, 器高5.4cm, 底部は丸底である。5は口縁部～底部3/4遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ, 内面ナデ, 内外面赤彩, 底部に線刻あり。法量は復元口径16.6cm, 器高4.9cm, 底部は丸底である。6は口縁部～体部2/5遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ, 内面ナデ, 内外面赤彩。法量は復元口径で13.4cm, 残存器高4.8cm, 底部は丸底である。

7は須恵器蓋である。天井部～口縁部1/4遺存する。外面クロ成形。法量は復元口径で12.0cm, 残存器高4.4cmを測る。

8は土師器高杯の脚部である。脚部1/4遺存する。外面ヘラケズリ。底部に孔が穿たれている。外面脚部赤彩。法量は残存器高3.5cm, 復元底径で7.0cmを測る。

9・10は土師器壺である。9はほぼ完形。口縁から胴部上端ヘラナデ, 外面胴部下端ヘラケズリ, 口縁部ヨコナデ。内面指頭痕有り。外面と内面口縁部に赤彩。法量は口径10.0cm, 器高10.9cm, 底径6.3cmを測る。10は完形。口縁部～頸部横方向のヘラミガキ, 胴部横方向のヘラケズリ後ヘラナデ, 内面ナデ, 内外面赤彩。法量は口径10.0cm, 器高16.5cm, 底径5.4cmを測る。

11は土師器壺である。ほぼ完形。内外面口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ後ヘラナデ, 内面ナデ。法量は口径14.4cm, 器高20.1cm, 底径8.8cmを測る。

12は和泉式土師器壺である。口縁部～胴部1/4遺存する。法量は復元口径17.6cm, 残存器高23.80cmを測る。口縁部外面に2段の輪積みがみられる。頸部外面無文。口縁部と胴部の外面に撻糸文が施されている。内面ナデ。

13～15は土師器壺である。13は口縁部～胴部1/2遺存する。外面ヘラケズリ, 内面ナデ後口縁部ヘラミガキ。法量は口径17.0cm, 残存器高27.5cmを測る。14はほぼ完形。外面ヘラケズリ後ヘラナデ, 内面ナデ, 口縁部ヨコナデ。法量は口径17.0cm, 器高34.0cm, 底径8.0cmを測る。15は口縁部4/5, 胴部1/3遺存する。外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は口径14.6cm, 残存器高24.4cmを測る。

16は手捏土器である。口縁部～底部1/2遺存する。指頭痕有り。法量は復元口径で9.2cm, 器高4.5cm, 底径5.0cmを測る。

17は刀子型模造品である。長さ9.70cm, 幅2.5cm, 厚さ0.45cm, 重量は27.41gである。18は軽石である。長さ4.5cm, 幅4.8cm, 厚さ4.3cm, 重量32.06gである。19は土製品の円盤である。1/2遺存する。現存径2.9cm, 厚さ0.6cm, 重量5.94gである。20・21は鉄器の刀子である。20は刀子の刃から茎の部分である。現存長4.7cm, 幅0.7～1.1cm, 厚さ0.2～0.25cm, 重量2.93gである。21は刀子の茎の部分である。現存長5.70cm, 幅0.5cm～0.55cm, 厚さ0.2～0.3cm, 重量2.91gである。

H-004 (第45・46図)

調査区東部に位置する。M-003, M-005に切られる。規模は5.35m×5.36mを測り, 形状は方形を呈する。

覆土は12層に分層され, 廃屋を焼却処分し, 埋め戻している。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約70cmを測る(北壁)。周溝は全周し, 幅24cm, 深さ5.5cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1(径31cm×34cm, 深さ88cm)・P-2(径31cm×39cm, 深さ86cm)・P-3(径45cm×43cm, 深さ78cm)・P-4(径32cm×28cm, 深さ86cm)の4本が対角線上に配される。炉は4基検出された。西側の壁付近の火床部はよく焼けていて使用痕もあるが、東側の壁付近及び床面中央部やや西よりの火床部の使用痕と比べると使用期間は短い。北西の壁付近の火床部は非常によく焼けていて、使用痕も著しい。主柱穴P-1～P-3の外側から周溝に向かって4条の間仕切り溝が北東と北西に走る。貯蔵穴は隅丸長方形を呈し、径68cm×98cm, 深さ23cmを測る。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺4点、壙1点、甕3点、小甕1点、石製品1点、計10点を図示した。

1～4は土師器壺である。1はほぼ完形。外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は口径15.8cm、器高5.9cmを測る。底部は丸底である。2は口縁部～底部2/3遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は復元口径で14.2cm、器高7.6cm、底部は丸底である。3はほぼ完形。外面横方向のヘラケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ、内外面赤彩、底部内面に赤彩による「X」が施されている。法量は口径15.2cm、器高6.7cm、底部は丸底である。4は口縁部～体部1/4遺存する。内外面ヘラナデ、内外面赤彩。法量は復元口径で16.6cm、残存器高6.0cmを測る。

5は土師器壺である。口縁部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は復元口径で8.6cm、残存器高5.7cmを測る。

6～8は土師器甕である。6は口縁部のみ1/3遺存する。口縁部外面ヘラケズリ後ヘラナデ。内面口縁部ヘラナデ。法量は復元口径で15.0cm、残存器高4.9cmを測る。7は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリがみられる。内面輪積痕あり。一部スヌ附着。法量は口径14.0cm、器高15.8cm、底径6.0cmを測る。8は口縁部～胴部4/5遺存する。外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリがみられる。口縁部ヨコナデ。法量は口径15.0cm、残存器高27.5cmを測る。

9は土師器小甕である。胴部～底部2/3遺存する。外面ヘラケズリ、内面には輪積痕がみられる。法量は残存器高3.0cm、底径3.0cmを測る。

10は軽石。長さ4.9cm、幅4.5cm、厚さ1.7cm、重さ83.0gを測る。

H-005 (第47・48図)

調査区東北部に位置する。M-006に切られる。規模は5.25m×5.27mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は8層に分層され、埋め戻される際に貝も廃棄された。

床面は中央一帯に硬化面が認められる。壁高は約84cmを測る(西壁)。周溝は、東側の一部を除き、ほぼ全周し、幅21cm、深さ6cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1(径57cm×64cm、深さ55cm)・P-2(径71cm×54cm、深さ61cm)・P-3(径62cm×87cm、深さ36cm)・P-4(径71cm×72cm、深さ38cm)の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は(径38cm×44cm、深さ36cm)を測る。カマドは北壁東よりに位置し、遺存状態は良好で、火床部はよく焼けている。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺12点、高壺3点、壙1点、甕5点、瓶1点、壺1点、石製品2点、鉄製品1点、計26点を図示した。

1～10は土師器壺である。1はほぼ完形。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径11.0cm、器高4.3cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部3/4遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は口径14.6cm、器高4.5cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部1/2遺存する。外面体部ヘラケズリ、外面口縁部ヨコナデ、内面ヨコナデ、外面口縁部と内面に赤彩。法量は復元口径で15.0cm、器高

第2節 堅穴住居跡

3.0cmを測る。4は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面体部ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ、口縁部から体部内外面赤彩。底部に「X」の線刻が施されている。法量は復元口径で16.8cm、器高6.0cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部2/3遺存する。体部外面ヘラケズリ、口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は復元口径で13.8cm、器高3.9cm、底部は丸底である。6は口縁部～底部1/3遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、内面ナデ、法量は口径11.8cm、残存器高4.7cmを測る。7は口縁部～底部1/2遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、内面ミガキ。法量は口径11.6cm、器高3.1cm、底部は丸底である。8は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径で10.0cm、残存器高4.4cmを測る。9は口縁部～底部1/2遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、内面ヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は口径11.8cm、器高3.3cmを測る。底部は丸底である。10は口縁部～底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、口縁部外面ヨコナデ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ、外面黒色処理。法量は復元口径で13.4cm、残存器高4.0cmを測る。底部は丸底である。

11～13は土師器壺である。11は脚部のみ3/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面輪積痕がみられる。内面一部赤彩か。法量は残存器高9.60cm、推定底径13.0cmを測る。12は脚部のみ1/2遺存する。内外ヘラケズリ。法量は残存器高6.0cm、底径9.8cmを測る。13は脚部のみ1/2遺存する。内外面ヘラケズリ、法量は残存器高5.2cmを測る。

14は土師器壺である。頸部～底部1/2遺存する。外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ、外面赤彩、内面頸部赤彩。法量は残存器高10.8cm、底部6.0cmを測る。

15～19は土師器壺である。15は口縁部～底部1/2遺存する。外面口縁部ヨコナデ、頸部・胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ、内面輪積痕あり。法量は口径12.6cm、器高14.8cm、底径6.2cmを測る。16は口縁部～胴部3/4遺存する。外面頸部・胴部ヘラケズリ、内面ナデ、内外面口縁部ヨコナデ。法量は口径14.6cm、残存器高13.5cmを測る。17は口縁部～胴部1/4遺存する。内外面口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面ヘラミガキ。法量は復元口径で15.0cm、残存器高15.8cmを測る。18は口縁部～胴部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面胴部ヘラケズリ。法量は復元口径で17.0cm、残存器高8.5cmを測る。19は口縁部～胴部1/3遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。法量は口径16.8cm、残存器高8.3cmを測る。

20は土師器瓶である。口縁部～胴部1/3遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、内面ナデ。法量は復元口径で29.7cm、残存器高16.2cmを測る。

21は須恵器壺である。胴部片1/4遺存する。法量は計測不能である。胴部にハケ状の工具での調整か。

22・23は須恵器壺である。ともに口径、器高測定不能である。同一個体の可能性がある。

24・25は砥石である。24は長さ5.9cm、幅3.5cm、厚さ1.7cm、重量42.5gである。25は長さ10.3cm、幅5.2cm、厚さ3.5cm、重量205.7gである。

26は火打ち金である。長さ4.0cm、幅3.1cm、厚さ0.4cm、重量7.71gである。

H-006 (第49・50図)

調査区東北部に位置する。規模は5.04m×4.79mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は3層に分層される。廐屋後、焼却し埋め戻した。

床面は中央一帯に硬化面が認められる。周溝は切れている南壁と東壁を除いて巡らされている。幅31cm、深さ3.1cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1 (径33cm×37cm、深さ70cm)・P-2 (径34cm×40cm、深

さ64cm)・P-3(径31cm×29cm, 深さ50cm)・P-4(径32cm×27cm, 深さ70cm)の4本が対角線上に配される。炉は北壁側やや中央部に位置し, 火床部はよく焼けている。炉に正対して位置する貯蔵穴は径141cm×64cm, 深さ18cmを測り, 四角長方形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち, 坯8点, 蓋1点, 堆1点, 麦7点, 小甕1点, 計18点を図示した。

1~7は土師器壺である。1は口縁部~底部が一部欠損の4/5遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 内外面赤彩。法量は口径15.4cm, 器高4.9cm, 底部は丸底である。2は口縁部~底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ一部ヘラミガキ, 内面ヘラミガキ。内外面赤彩。法量は口径13.2cm, 器高5.0cm, 底径7.0cmを測る。3は口縁部~底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 内外面赤彩, 内面は赤彩で「一」が施されている。法量は口径14.8cm, 器高5.5cm, 底部は丸底である。4は口縁部~底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 内外面赤彩。法量は復元口径13.0cm, 器高6.3cm, 底部5.7cmを測る。5は口縁部~体部3/8遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 内外面赤彩。法量は復元口径15.6cm, 残存器高6.1cmを測る。6は口縁部~体部3/8遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 内外面赤彩。法量は復元口径16.6cm, 残存器高6.1cmを測る。7は体部~底部3/4遺存する。外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 内外面赤彩。法量は残存器高6.5cm, 底部丸底である。

8は土師器輪型壺である。口縁部~体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ後ヘラナデ, 内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径13.0cm, 残存器高7.0cmを測る。

9は須恵器蓋片である。ロクロ成形, 法量は復元口径12.4cm, 残存器高4.0cmを測る。

10は土師器壺である。胴部~底部2/3遺存する。外面底部ヘラケズリ。内外面に指頭痕あり。内面胴部下端赤彩, 輪積痕がみられる。法量は残存器高5.7cm, 底径6.0cmを測る。

11は土師器小甕である。口縁部~胴部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 内面に輪積痕がみられる。法量は口径11.0cm, 残存器高9.0cmを測る。

12~18は土師器壺である。12は口縁部~胴部1/2遺存する。器面剥落のため調整不明。法量は復元口径10.8cm, 残存器高10.7cmを測る。13は口縁部~胴部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面頸部ハケ後ヘラナデ, 胴部ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は口径13.3cm, 残存器高11.7cmを測る。14は口縁部~底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 輪積痕がみられる。法量は口径16.6cm, 器高11.2cmを測る。15は口縁部~胴部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 内面に輪積痕がみられる。法量は口径14.0cm, 残存器高14.9cmを測る。16は頸部~底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は残存器高19.0cm, 底径7.0cmを測る。17は口縁部~胴部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ後外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は口径16.4cm, 残存器高22.7cmを測る。18は口縁部~胴部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は復元口径27.0cm, 残存器高10.4cmを測る。

H-007 (第51・52・53図)

調査区東部に位置する。規模は6.37m×6.25mを測り, 形状は方形を呈する。

覆土は廐屋後焼却処分し, 埋め戻された。炭化材を含む焼土が住居跡内に点在する。

床にはカマド前面から中央一帯に硬化面が認められる。壁高は約65cmを測る(北壁)。周溝は, 幅30cm, 深さ6.5cmを測り, 全周する。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1(径50cm×48cm, 深さ71cm)・P-2(径41cm×45cm, 深

第2節 壁穴住居跡

さ61cm)・P-3(径39cm×44cm, 深さ77cm)・P-4(径46cm×48cm, 深さ76cm)の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は(径43cm×36cm, 深さ50cm)を測る。カマドは北壁中央部に位置し火床部はよく焼けている。各主柱穴から周溝に向かって4条の間仕切り溝が東西に走る。

炉の北側に位置する貯藏穴は径71cm×60cm, 深さ34cmを測り、梢円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺15点、蓋2点、高壺5点、壺1点、甕5点、小甕1点、手捏1点、支脚1点、石製品1点、玉1点、計33点を図示した。

1~12は土器器坏である。1は口縁部~底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面口縁部赤彩。法量は口径12.0cm、器高4.4cm、底部は丸底である。2は口縁部~底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面体部上端赤彩。法量は口径13.4cm、器高4.4cm、底部は丸底である。3は完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面口縁部および内面赤彩。法量は口径12.8cm、器高4.4cm、底部は丸底である。4は口縁部~体部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径12.3cm、残存器高4.6cmを測る。5は口縁部~底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後丁寧なヘラミガキ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は口径14.0cm、器高5.2cm、底部は丸底である。6は口縁部~体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径12.8cm、残存器高4.2cm、底部は丸底である。7は口縁部~底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面口縁部・内面赤彩。法量は口径14.4cm、器高4.6cm、底部は丸底である。8は口縁部~底部3/8遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径14.0cm、器高3.5cm、底径14.0cmを測る。9は口縁部~底部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面・内面体部上端赤彩。法量は復元口径13.8cm、残存器高4.2cm、底部は丸底である。10は口縁部~底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ。内外面体部上端赤彩。法量は復元口径15.4cm、器高は4.4cm、底部は丸底である。

11はほぼ完形。口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。法量は口径12.2cm、器高4.2cm、底部は丸底である。12は口縁部~底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は復元口径12.8cm、残存器高4.3cm、底部は丸底である。

13・14は須恵器蓋である。13は天井部~口縁部1/4遺存する。ロクロ成形。法量は復元口径11.6cm、残存器高4.1cmを測る。14は天井部~口縁部1/8遺存する。ロクロ成形。法量は復元口径13.0cm、残存器高4.0cmを測る。

15~17は土器器坏である。15は口縁部~体部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ。法量は口径14.0cm、残存器高4.5cm、底部は丸底である。16はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面体部上端赤彩。法量は口径10.4cm、器高は7.5cm、底部は丸底である。17は口縁部~底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面体部上端・内面赤彩。法量は口径11.8cm、器高は8.1cm、底部は丸底である。

18~20は土器器高壺である。18は口縁部~脚部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、壺部・脚部ヘラケズリ、脚部ヘラミガキ。外面・内面壺部赤彩。法量は復元口径15.4cm、器高14.7cm、底径10.7cmを測る。19は完形。壺部・脚部ヘラケズリ。外面・内面壺部赤彩。法量は口径16.9cm、器高9.9cm、底径12.5cmを測る。20は壺部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径17.0cm、残存器高5.4cmを測る。

21・22は土器器高壺の脚部のみである。21は外面ヘラケズリ。外面赤彩。法量は残存器高6.1cmを測る。22は外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は残存器高7.4cmを測る。

23は土師器壺である。口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、指頭痕あり。外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。法量は口径15.0cm、残存器高16.1cmを測る。

24はほぼ完形の土師器小壺である。口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径14.8cm、器高15.9cm、底径8.0cmを測る。

25～29は土師器壺である。25は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径16.4cm、器高30.6cm、底径9.0cmを測る。26は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内面に輪積痕がみられる。法量は口径14.4cm、残存器高は10.7cmを測る。27は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径14.6cm、残存器高22.2cmを測る。28は口縁部～胴部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径16.7cm、残存器高23.6cmを測る。29は胴部～底部1/6遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高11.7cm、復元底径9.6cmを測る。

30は手捏土器。口縁部～底部1/2遺存する。指頭痕あり。法量は器高2.7cmを測る。

31は支脚である。現存長9.1cm、幅5.8cm、重量165.1gである。

32は石製品で、蔽石と思われる。現存長11.5cm、幅9.8cm、厚さ4.4cm、重量802.7gである。

33は土製品の勾玉である。長さ3.3cm、幅1.0cm、厚さ1.0cm、孔径0.2cm、重量4.88gである。

H-008（第54図）

調査区東部に位置する。M-007に切られる。ほとんどが立ち消えてるため全体の規模は不明。形状は方形であろうと思われる。

壁高は約50cmを測る（西壁）。周溝は東部から西部のみ残存し、幅16cm、深さ3.5cmを測る。

ピットは床面に6本検出された。主柱穴はP-1（径36cm×29cm、深さ78cm）・P-2（径34cm×44cm、深さ56cm）・P-3（径40cm×40cm、深さ54cm）・P-4（径36cm×38cm、深さ64cm）の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5は（径18cm×23cm、深さ14cm）を測り、P-3西側に位置するP-6は補助柱と思われ（径43cm×41cm、深さ48cm）を測る。カマドは検出されず、炉が東西壁中央付近に検出された。火床部はよく焼けている。

本住居跡から出土した遺物のうち環2点、鉄製品1点、計3点を図示した。

1、2は土師器壺である。1は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径12.6cm、器高は3.9cm、底部は丸底である。2は完形である。外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面体部下端を除いて内外面赤彩。法量は口径13.6cm、器高は8.0cm、底径4.6cmを測る。

3は鉄器である。飾り金具か。長さ2.1cm、幅1.9cm、厚さ0.2cm、重量2.3gである。

H-009（第55・56図）

調査区東部に位置する。H-010と重複する。規模は6.54m×6.33mを測り、形状は方形をであろう。

覆土は廐屋後焼却処分し埋め戻される。

床は中央部を中心に硬化範囲が認められる。壁高は約90cmを測る（北壁）。周溝は、南東と南西のH-010に切られる部分を、ほぼ全周し、幅28cm、深さ5.4cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径36cm×40cm、深さ48cm）・P-2（径46cm×50cm、深さ47cm）・P-3（径45cm×41cm、深さ49cm）・P-4（径42cm×47cm、深さ54cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径35cm×30cm、深さ23cm）を測り、カマドは北壁中央に検出され、

第2節 烧火住居跡

火床部はよく焼けている。カマドの東側に貯蔵穴が検出され、径106cm×85cm、深さ29cmを測り、梢円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち壺6点、蓋1点、高壺1点、瓶1点、鉄製品1点、計10点を図示した。

1～6は土師器壺である。1ははば完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後丁寧なヘラミガキ、内面ナデ後ヘラミガキ。外面体部赤彩。法量は口径12.0cm、器高6.5cm、底部は丸底である。2は口縁部～体部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径12.4cm、残存器高4.2cm、底部は丸底である。3は口縁片1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面赤彩。法量は復元口径15.0cm、残存器高3.1cmを測る。4は口縁片1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、口縁片のため外面調整判別できず。内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径13.0cm、器高3.0cmを測る。5は口縁部～体部1/8遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面赤彩。法量は復元口径13.0cm、残存器高4.5cmを測る。6は体部～底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩。底部線刻。法量は残存器高3.7cm、底部は丸底である。

7は須恵器蓋である。天井部～口縁部1/4遺存する。ロクロ成形。法量は復元口径11.4cm、残存器高4.1cmを測る。

8は土師器高壺の脚部である。外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面赤彩。法量は残存器高5.4cm、底径12.6cmを測る。

9は土師器瓶である。4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面胴部ハケメ。法量は口径26.5cm、器高27.5cm、底径9.7cmを測る。

10は鉄器で鉄族茎部である。長さ2.6cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm、重量1.24gである。

H-010（第57図）

調査区東部に位置する。H-009に切られる。規模は5.45m×5.03mを測り、形状は方形を呈する。

廐屋後焼却処理をし人為的に埋め戻している。

床は炉を囲むようにやや全体に硬化面が広がっている。壁高は約46cmを測る（西壁）。周溝は、南東側を除いてほぼ全周し、幅20cm、深さ2.0cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径32cm×35cm、深さ16cm）・P-2（径32cm×30cm、深さ26cm）・P-3（径28cm×29cm、深さ41cm）・P-4（径30cm×27cm、深さ47cm）の4本が対角線上に配される。炉が北壁寄りに検出された。火床部はよく焼けている。主柱穴P-3とP-4の外側から周溝に向かって3条の間仕切り溝が西に走る。

本住居跡から出土した遺物のうち壺2点、蓋2点、鉄製品1点、石製品1点、計6点を図示した。

1・2は土師器壺である。1ははば完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径15.8cm、器高4.9cm、底部は丸底である。2は口縁部～体部2/5遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面赤彩。法量は口径16.3cm、残存器高5.7cm、底部は丸底である。

3は土師器壺である。底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面は器面が荒れているので判別不能。底部木葉痕あり。法量は残存器高2.6cm、復元底径で8.0cmを測る。4は底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。底部木葉痕あり。法量は残存器高1.5cm、復元底径で9.4cmを測る。

5は軽石である。長さ15.6cm、幅8.8cm、厚さ5.3cm、重量283.2gである。

6は鉄器で釘か。現存長5.6cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm、重量6.5gである。

H-011（第58・59図）

調査区北東部に位置する。擾乱が激しい。規模は7.39m×7.07mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は人為的に埋め戻されている。

擾乱されてるも、床面の遺りは良好である。壁高は約40cmを測る。周溝は、切れている東の部分を除いてほぼ全周する。幅26cm、深さ8.5cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径25cm×33cm、深さ65cm）・P-2（径40cm×33cm、深さ63cm）・P-3（径27cm×32cm、深さ68cm）・P-4（径35cm×30cm、深さ74cm）の4本が対角線上に配され、南壁よりに位置するP-5は（径24cm×29cm、深さ29cm）を測り、カマドは北壁西よりに検出された。火床部はよく焼けている。

本住居跡から出土した遺物のうち壺11点、甕4点、瓶1点、計16点を図示した。

1~11は土師器壺である。1は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面底部を除いて赤彩。法量は口径15.6cm、器高5.4cm、底径4.0cmを測る。2は口縁部～底部3/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面底部を除いて赤彩。法量は口径12.4cm、器高4.7cm、底部は丸底である。3は口縁部～体部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩。底部は砥石に転用していた形跡あり。法量は口径17.8cm、残存器高5.1cm、底部は丸底である。4は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径14.8cm、器高6.4cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部1/12遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径13.4cm、器高5.4cm、底部は丸底である。6は口縁部～底部1/8遺存する。外面ヘラケズリ。内外面赤彩。法量は復元口径14.8cm、残存器高4.0cmを測る。7は口縁部～底部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面口縁から体部上端に赤彩。底部は砥石に転用されていた形跡あり。法量は復元口径13.8cm、器高5.6cm、底部は丸底である。8は口縁部～体部1/6遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径16.8cm、残存器高4.3cmを測る。9は口縁部～体部1/8遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径18.0cm、残存器高4.0cmを測る。10は体部2/5遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高4.5cmを測る。11は体部～底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面赤彩、内面線刻。

12~15は土師器壺である。12は口縁部～胴部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ハケメ。内外面口縁部から頸部に赤彩。法量は復元口径15.2cm、残存器高8.8cmを測る。13は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕あり。法量は復元口径17.0cm、残存器高8.0cmを測る。14は頸部～胴部1/2遺存する。外面器面剥離のため判別不能、内面口縁部ヨコナデ後胴部ヘラナデ。法量は残存器高9.5cmを測る。15は胴部～底部1/5遺存する。外面ヘラケズリ、内面摩耗のため判別不能。法量は残存器高8.8cm、復元底径8.0cmを測る。

16は土師器甕で胴部～底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。法量は器高4.3cm、底径7.6cmを測る。

軽石1点は写真のみの掲載である。

H-013（第59図）

調査区東北部に位置する。H-012、H-034、H-035に切られる。規模は4.70m×不明を測り、形状は方形と思われる。

覆土は擾乱が激しくプランもはっきりしないが、人為的に埋められている。

第2節 壁穴住居跡

壁高は約30cmを測る（西壁）。周溝は、西側の一部を検出し、幅18cm、深さ4.5cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径30cm×28cm、深さ79cm）・P-2（径33cm×38cm、深さ63cm）と考えられ、P-3（径32cm×40cm、深さ22cm）は梯子穴か。P-4（径35cm×40cm、深さ3.5cm）・P-5（径38cm×62cm、深さ12cm）は用途不明。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺1点、甕2点の計3点を図示した。

1は土師器壺で口縁部～脚部1/6遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径12.0cm、残存器高3.9cmを測る。

2・3は土師器甕である。2は口縁部～胴部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径15.6cm、残存器高8.0cmを測る。3は口縁部～胴部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ。法量は復元口径13.8cm、残存器高23.3cmを測る。

H-014（第60図）

調査区中央部に位置する。M-045と搅乱により規模は不明である。形状は方形であると思われる。

覆土は2層に分層され、人為的に埋め戻されている。

床面はM-045で切られている部分以外、硬化面がみられる。壁高は約30cmを測る（西壁）。周溝は、北壁から南壁にかけて検出され、幅30cm、深さ9.5cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径103cm×110cm、深さ62cm）・P-2（径100cm×100cm、深さ55cm）・P-3（径不明×110cm、深さ60cm）・P-4（径91cm×96cm、深さ58cm）の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5は（径30cm×30cm、深さ14cm）を測る。カマドは北壁中央に検出された。火床部はよく焼けている。

本住居跡から出土した遺物は小片のため、図示できなかった。

H-016（第60・61図）

調査区中央部に位置する。規模は5.20（推定）m×6.50（推定）mを測り、形状は方形と思われる。

周溝は、西側部分のみ検出され、幅17cm、深さ3.0cmを測る。

ピットは床面に不整列であるが4本検出された。主柱穴はP-1（径57cm×57cm、深さ31cm）・P-2（径60cm×82cm、深さ15cm）・P-3（径60cm×64cm、深さ32cm）・P-4（径52cm×55cm、深さ30cm）を測る。カマド、炉とも検出されず、間仕切り溝が3本検出された。主柱穴以外のピットはこの住居に伴わないと考える。

本住居跡から出土した遺物のうち壺4点、高壺1点、鉄製品3点、計8点を図示した。

1は須恵器高壺である。口縁部～脚部1/2遺存する。壺部ロクロ成形、下端部回転ヘラケズリ、脚部搔目。台形状の空かし三方あり。法量は復元口径9.6cm、残存器高6.7cmを測る。

2は土師器椀型壺である。口縁1/8遺存する。外面口縁ヨコナデ後ヘラミガキ、外面体部ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径14.0cm、残存器高4.0cmを測る。

3～5は土師器壺口縁片である。3は口縁片、赤彩。小片により法量計測不能。4は口縁片、赤彩。法量計測不能。5は口縁片、小片により法量計測不能。

6～8は釘である。6は長さ6.7cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm、重量6.16gである。7は長さ4.4cm、幅0.4cm、厚さ0.5cm、重量2.9gである。8は長さ2.9cm、幅0.4cm、厚さ0.5cm、重量1.3gである。

H-018 (第61図)

調査区東部に位置する。H-017に切られる。規模は調査区外により全体を把握できない。形状は方形と思われる。

覆土は4層に分層される。第1層と第2層は自然堆積である。第3層～第6層は人為的な埋め戻しであり、廃屋後、廃材を焼却処分した。

床面は炉を中心で硬化範囲が認められる。壁高は約70cmを測る。周溝は、北壁と西壁側のみ検出され、幅20cm、深さ3.5cmを測る。

ピットは床面に2本検出された。主柱穴はP-1(径33cm×32cm、深さ69cm)・P-2(径33cm×35cm、深さ73cm)を測る。カマドは検出されず、炉が北壁寄りに1基検出された。主柱穴P-1の付近から周溝に向かって1条の間仕切り溝が東西に走る。

白玉が22点が焼土より出土した。これは祭司として天井に吊して奉っていたものが廃屋後焼却処分の際、ともに処分されたと考えられる。

本住居跡から出土した遺物のうち蓋1点、壺1点、玉22点、計24点を図示した。

1は須恵器蓋である。天井部～口縁部1/5遺存する。ロクロ成形。法量は復元口径12.0cm、残存器高4.2cmを測る。

2は土師器壺である。口縁部～胴部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径15.0cm、残存器高21.8cmを測る。

3～24は石製品白玉である。3は径0.5cm、厚さ0.3cm、孔径0.15cm、重量0.09gである。4は径0.5cm、厚さ0.25cm、孔径0.2～0.25cm、重量0.05gである。5は径0.5cm、厚さ0.35cm、孔径0.2cm、重量0.12gである。6は径0.5cm、厚さ0.3cm、孔径0.25～0.3cm、重量0.1gである。7は径0.5cm、厚さ0.25cm、孔径0.2cm、重量0.09gである。8は径0.5cm、厚さ0.2cm、孔径0.15cm、重量0.1gである。9は径0.5cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cm、重量0.15gである。10は径0.5cm、厚さ0.3cm、孔径0.2cm、重量0.16gである。12は径0.4cm、厚さ0.2～0.4cm、孔径0.2cm、重量0.12gである。13は径0.45cm、厚さ0.1～0.3cm、孔径0.15cm、重量0.07gである。14は径0.45cm、厚さ0.2～0.25cm、孔径0.2cm、重量0.07gである。15は径0.5cm、厚さ0.35～0.45cm、孔径0.2cm、重量0.12gである。16は径0.5cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cm、重量0.15gである。17は径0.5cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cm、重量0.4gである。18は径0.5cm、厚さ0.3cm、孔径0.2cm、重量0.12gである。19は径0.5cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cm、重量0.16gである。20は径0.5cm、厚さ0.3cm、孔径0.2cm、重量0.1gである。21は径0.5cm、厚さ0.3cm、孔径0.2cm、重量0.09gである。22は径0.45cm、厚さ0.4cm、孔径0.2～0.25cm、重量0.14gである。23は径0.5cm、厚さ0.3cm、孔径0.2cm、重量0.1gである。24は径0.5cm、厚さ0.2～0.3cm、孔径0.2cm、重量0.09gである。

H-019 (第62・63図)

調査区東部に位置する。H-032に切られる。規模は5.18m×5.06mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は5層に分層される。人為的に埋め戻されている。

床面は炉を中心で硬化範囲が認められる。壁高は約80cmを測る(西壁)。周溝は全周し、幅21cm、深さ4.1cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1(径23cm×21cm、深さ62cm)・P-2(径28cm×28cm、深さ81cm)・P-3(径33cm×25cm、深さ77cm)・P-4(径31cm×37cm、深さ64cm)の4本が対角線上に配され、炉と正対して位置するP-5は(径30cm×28cm、深さ16cm)を測る。炉は東北壁中央に検出され、壺の

第2節 壁穴居跡

半分が伏せられていた。間仕切り溝は東壁に1本、西壁に2本、南側壁に2本、北壁に1本居跡の中心に向かって計6本走る。

本住居跡から出土した遺物のうち壺3点、壺6点、石製品2点、計11点を図示した。

1～3は土師器壺である。1は口縁部～体部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。内面ナデ。外面体部上端・内面赤彩。法量は口径13.8cm、残存器高4.6cmを測る。2は口縁部～体部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径11.4cm、残存器高5.0cmを測る。3は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径18.8cm、残存器高3.9cmを測る。

4～9は土師器壺である。4は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ。法量は口径13.0cm、残存器高15.8cmを測る。5は口縁部～胴部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。胴部孔有り。法量は復元口径18.0cm、残存器高14.9cmを測る。6は口縁部～胴部4/5遺存する。口縁部、頭部ヨコナデ、外面ヘラケズリ。ハケ、内面ナデ。法量は復元口径15.0cm、残存器高18.5cmを測る。7は口縁部～胴部1/2遺存する。外面ヘラケズリ、内面に輪積痕がみられる。法量は口径14.0cm、器高17.7cmを測る。8は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。内面に輪積痕がみられる。法量は復元口径14.4cm、残存器高は21.5cmを測る。9は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径15.2cm、器高28.2cm、底径8.0cmを測る。

10は砥石である。長さ12.80cm、幅6.6cm、厚さ2.2cm、重量348.9g。

11は石製の紡錘車である。現存径3.4cm、厚さ2.3cm、重量24.1gである。

H-020（第64図）

調査区東部に位置する。M-009と重複する。調査区外に切られ、全体の規模は不明である。形状は方形と思われる。

覆土は2層に分層される。人為的に埋め戻されている。

床面は炉を開むように硬化範囲が認められる。壁高は約36cmを測る（東壁）。周溝は、北壁と東壁の一部に検出し、幅27cm、深さ3.0cmを測る。

ピットは床面に2本検出された。主柱穴はP-1（径27cm×22cm、深さ34cm）・P-2（径30cm×25cm、深さ39cm）を測る。西壁付近に検出されたピットはグリットピットである。炉は北壁付近中央に検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺1点、壺1点、計2点を図示した。

1は土師器壺である。体部～底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は残存器高3.4cmを測る。

2は土師器壺、口縁部～胴部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径15.0cm、残存器高4.8cmを測る。

H-024（第64図）

調査区中央北部に位置する。D-024に切られる。規模は3.45m×3.25mと推測できる。形状は方形を呈する。

覆土は1層で、人為的に埋め戻されている。

床面はカマドの前面に硬化範囲が認められるが搅乱が激しく全容は不明。壁高は約24cmを測る。周溝は、

西壁部分が良好に遺っており、北壁、南壁の周溝は搅乱により破壊されていた。幅12cm、深さ3.0cmを測る。

ピットは検出されなかった。カマドは西壁中央に検出され、搅乱で両袖が切られているもの残存している。火床部はよく焼けている。

本住居跡の出土遺物は、流れ込みであったため、図示しなかった。

H-026（第65・66図）

調査区中央部に位置する。H-027と重複する。規模は6.48m×6.23mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は3層に分層できる。廃屋後廃材を焼却処分し、人為的に埋め戻されている。

床面は遺存は良くないが、住居跡全体に硬化範囲が認められる。壁高は約30cmを測る。周溝は、ほぼ全周し、幅15cm、深さ10.5cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径27cm×30cm、深さ60cm）・P-2（径30cm×33cm、深さ78cm）・P-3（径47cm×36cm、深さ72cm）・P-4（径27cm×29cm、深さ82cm）の4本が対角線上に配される。カマドは北壁中央に検出され、搅乱で切られているが両袖は残存している。

本住居跡から出土した遺物のうち環5点、高环1点、鉢1点、壺1点、甕6点、手握1点、計15点を図示した。

1～5は土師器環である。1はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径13.2cm、器高5.2cm、底部は丸底である。2はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径14.8cm、器高5.2cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。底部木葉痕。法量は口径13.0cm、器高6.8cm、底部丸底である。4は口縁部～底部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩、底部木葉痕。法量は口径11.8cm、器高5.3cm、底径3.8cmを測る。

5は土師器環である。口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は復元口径11.0cm、残存器高9.6cmを測る。

6はほぼ完形の土師器高环である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径21.4cm、器高13.8cm、底径13.2cmを測る。

7は土師器鉢である。口縁部～胴部1/6遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面赤彩、内面黒色処理。法量は復元口径18.0cm、残存器高8.2cmを測る。

8は壺である。頭部～胴部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は残存器高9.4cmを測る。

9～13は土師器甕である。9は口縁部～胴部1/2遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。内面に輪積痕がみられる。法量は復元口径18.0cm、残存器高19.5cmを測る。10は口縁部～底部1/2遺存する。外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面黒色処理。法量は口径12.8cm、器高23.8cm、底径6.4cmを測る。11は頭部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高21.5cm、底径8.1cmを測る。12はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラミガキ、内面ナデ。法量は口径14.6cm、器高29.0cm、底径6.9cmを測る。13はほぼ完形。外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内面に輪積痕がみられる。法量は口径14.7cm、器高31.2cm、底径8.0cmを測る。

14はほぼ完形の手握土器である。指頭痕あり。法量は口径4.8cm、器高3.2cm、底面は丸底である。

15は須恵器甕の口縁片である。

第2節 墓穴住居跡

H-027 (第67図)

調査区中央部に位置する。D-032と重複し、H-026、D-031に切られる。規模は4.69m×4.85mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は3層に分層され、人為的に埋め戻される。焼土は埋め戻しの際、混入したものであろう。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約30cmを測る。周溝はD-031部分を除き、ほぼ全周し、幅20cm、深さ4.5cmを測る。

ピットは床面に2本検出され、P-1(径21cm×18cm、深さ7.5cm)・P-2(径36cm×40cm、深さ64cm)を測る。カマドは北壁中央やや東寄りに検出され、擾乱によって両袖が切られている。同仕切り溝が北壁から1本、南壁から2本中央に向かって走っている。

本住居跡から出土した遺物のうち壺4点、鉢1点、瓶1点、鉄製品1点、計7点を図示した。

1～4は土師器壺である。1は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内外面赤彩(底部除く)。法量は口径14.0cm、器高6.1cm、底部丸底である。2は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(底部除く)。法量は口径16.2cm、器高5.3cm、底部丸底である。3は体部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は残存高7.2cm、底部は丸底である。4は口縁部～底部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径13.6cm、器高7.5cm、復元底径6.6cmを測る。

5は土師器鉢である。口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。法量は口径12.8cm、器高11.2cm、底径4.8cmを測る。

6はほぼ完形の土師器瓶である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径24.0cm、器高17.4cm、底径8.5cmを測る。

7は鉄器である。長さ3.4cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm、重量1.94gである。

H-028 (第68・69図)

調査区中央部に位置する。南壁でH-067と重複する。規模は7.63m×7.52mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は7層に分層され、人為的に埋め戻されている。

床面はカマド前面から主柱穴をつなぐように硬化範囲が認められる。壁高は約36cmを測る。周溝は、全周し、幅20cm、深さ8cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1(径40cm×40cm、深さ38cm)・P-2(径50cm×65cm、深さ54cm)・P-3(径41cm×47cm、深さ53cm)・P-4(径55cm×55cm、深さ66cm)の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は(径28cm×26cm、深さ31cm)を測る。カマドは北西壁中央に検出された。火床部はよく焼けている。カマド西側に貯蔵穴が検出され、径130cm×180cm、深さ70cmを測り、梢円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち壺16点、高壺1点、甕2点、瓶1点、計20点を図示した。

1～16は土師器壺である。1は口縁部が一部欠損するがほぼ完形である。外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径12.0cm、器高4.6cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩(体部下端除く)。法量は口径12.8cm、器高4.7cm、底径6.6cmを測る。3は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩(体部下端除く)。法量は口径13.4cm、器高5.1cm、底部は丸底である。4はほぼ完形で、外

面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部～底部ヘラケズリ、内面ナデ。外面体部上端・内面赤彩。法量は口径12.6cm、器高4.7cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は復元口径14.0cm、器高5.0cmを測る。6は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は復元口径12.0cm、器高3.9cm、底部は丸底である。7は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ後ヘラミガキ、内外面黒色処理。法量は口径13.0cm、器高4.6cm、底部丸底である。8は口縁部～底部1/6遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩（底部下端除く）。法量は復元口径16.0cm、器高4.0cm、底部は丸底である。9は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径13.2cm、残存器高3.0cmを測る。10は口縁部～体部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径13.0cm、器高3.1cmを測る。11は口縁部～体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径14.0cm、残存器高3.4cmを測る。12は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、内外面体部丁寧なヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は復元口径16.8cm、残存器高4.7cmを測る。13は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。法量は復元口径12.4cm、残存器高3.7cmを測る。14は口縁部～底部1/8遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ後丁寧なヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は復元口径12.6cm、残存器高3.6cmを測る。15は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、外面ヘラケズリ後丁寧なヘラミガキ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は口径14.0cm、残存器高6.8cm、底部は丸底である。16は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は残存器高2.9cm、底部は丸底である。

17は土師器壺である。壺部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。外面赤彩、内面黒色処理。法量は復元口径12.0cm、残存器高3.4cmを測る。

18・19は土師器甕である。18は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕あり。法量は口径14.6cm、残存器高12.0cmを測る。19は口縁部～胴部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径15.2cm、残存器高14.4cmを測る。

20は土師器瓶である。ほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径27.2cm、残存器高23.7cmを測る。

H-029（第70・71図）

調査区中央部に位置する。規模は6.90m×7.05mを測り、形状は凸形を呈する。

覆土は8層に分層され、人為的に埋め戻されている。廃屋後廃材を焼却処分したと思われる。

床面はカマド前面と主柱穴を結ぶように硬化範囲が認められる。壁高は約36cmを測る（北壁）。周溝は、全周し、幅33cm、深さ7.7cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径68cm×69cm、深さ72cm）・P-2（径57cm×59cm、深さ79cm）・P-3（径50cm×60cm、深さ81cm）・P-4（径53cm×58cm、深さ90cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径37cm×35cm、深さ36cm）を測る。カマドは北西壁中央より北寄りに検出され、両袖残存で状態は比較的良好、火床部もよく焼けている。各主柱穴に向かって間仕切り溝が1本ずつ、計4本が東西に走る。東南壁中央に貯蔵穴が検出され、径96cm×103cm、深さ68cmを測り、梢円

第2節 堅穴住居跡

形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち壺9点、高壺1点、甕4点、瓶1点、手捏土器5点、支脚4点、石製品2点、玉1点、板碑片1点、鉄製品2点、計30点を図示した。

1～9は土師器壺である。1はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面口縁・内面体部上端赤彩。法量は口径11.2cm、器高5.3cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は口径14.0cm、残存器高4.0cmを測る。3はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。法量は口径14.4cm、器高4.2cm、底部は丸底である。4はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ、内外面赤彩（体部下端除く）。法量は口径15.0cm、器高5.0cm、底部は丸底である。5はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩（底面除く）。法量は口径12.2cm、器高4.7cm、底部は丸底である。6はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。法量は口径14.8cm、器高4.9cm、底部は丸底である。7は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面体部下端・内面体部上端赤彩。法量は口径14.6cm、器高5.3cm、底部は丸底である。8は口縁部～体部下端2/5遺存する。外面ハケ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径15.4cm、残存器高5.2cm、底部は丸底である。9は橢型壺で口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。内外面体部上端赤彩。法量は復元口径12.9cm、残存器高8.2cm、底部は丸底である。

10～13は土師器甕である。10は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面口縁部輪積痕あり、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量復元口径12.8cm、器高15.3cm、底径6.0cmを測る。11は口縁部～胴部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕がのこる。法量は口径15.4cm、残存器高13.2cmを測る。12は口縁部～胴部1/2遺存する。外面口縁部荒いヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面口縁部ヨコナデ、内面輪積痕。法量は復元口径17.0cm、残存器高18.2cmを測る。13は口縁部～胴部下端2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラミガキ、内面ナデ。法量は口径22.5cm、残存器高22.3cmを測る。

14は土師器瓶、口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径27.2cm、器高24.0cm、復元底径7.1cmを測る。

15～19は土師器手捏である。15は口縁部～底部1/2遺存する。指頭痕あり。法量は復元口径4.0cm、器高4.0cm、底径3.0cmを測る。16はほぼ完形。指頭痕あり。法量は口径7.0cm、器高3.1cmである。17はほぼ完形。指頭痕あり。法量は口径6.4cm、器高3.4cm、復元底径6.0cmを測る。18は口縁部～底部4/5遺存する。外面ヘラケズリ、内面指頭痕あり。法量は口径7.5cm、器高4.2cm、底径6.8cmを測る。19は口縁部～底部1/2遺存する。指頭痕あり。法量は復元口径7.4cm、器高4.4cm、復元底径6.0cmを測る。

20は土師器高壺の脚部のみである。外面ヘラケズリ、内面黒色処理。法量は残存器高2.4cmを測る。

21～24は土製品の支脚である。21は現存長3.6cm、幅4.8cm、重量38.2gである。22は長さ8.8cm、幅4.1cm、厚さ4.0cm、重量206gである。身も固く、つるんとした支脚である。23は現存長10.2cm、幅5.7cm、厚さ6.0cm、重量305.1gである。24は現存長14.7cm、幅8.2cm、厚さ9.2cm、重量1097.9gである。

25は砥石である。長さ2.7cm、幅2.3cm、厚さ1.7cm、重量21.7gである。

26は板碑片である。長さ7.7cm、幅5.8cm、厚さ0.9cm、重量51.9gである。

27は土玉である。径1.3cm、厚さ1.1cm、孔径0.4cm、重量1.4gである。

28は土製品の紡錘車である。径3.6cm、厚さ2.5cm、孔径0.8cm、重量31.3gである。

29は鉄鎌の茎である。現存長5.4cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm、重量3.09gである。

30は刀子の茎の部分である。現存長4.7cm、幅0.65cm～1.1cm、厚さ0.3cm、重量5.03gである。

H-030 (第72図)

調査区中央部に位置する。規模は7.70m×7.80mを測り、形状は方形を呈する。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約50cmを測る（西壁）。周溝は全周し、幅27cm、深さ10cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径74cm×70cm、深さ59cm）・P-2（径72cm×74cm、深さ53cm）・P-3（径70cm×60cm、深さ57cm）・P-4（径83cm×89cm、深さ67cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径43cm×39cm、深さ4.0cm）を測る。カマドは北壁中央に検出され、両袖残存で火床部はよく焼けている。各主柱穴から周溝に向かって4条の間仕切り溝が東西に、南壁から2本の間仕切り溝が北南に走る。カマドの東側に検出された貯藏穴は、径103cm×80cm、深さ33cmを測り、楕円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち壺5点、高壺1点、支脚1点、石製品1点、鉄製品6点、計14点を図示した。

1～5は土師器壺である。1は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、外面体部ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は口径13.8cm、器高4.0cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径13.0cm、器高4.0cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。外面口縁部・内面体部上端赤彩。法量は復元口径9.9cm、器高5.8cm、底部は丸底である。4は口縁部～底部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は残存器高3.8cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ。外面赤彩、内面体部上端赤彩。法量は復元口径14.0cm、残存器高7.3cm、底部は丸底である。6は土師器高壺片である。7は土製支脚である。現存長5.6cm、幅5.0cm、厚さ5.0cm、重量103.3gである。8は砥石である。長さ8.0cm、幅8.0cm、厚さ6.1cm、重量497.5gである。

9～14は鉄器である。9は釘である。現存長3.8cm、幅0.7cm、厚さ0.7cm、重量5.7gである。10は釘である。現存長5.1cm、幅0.6cm、厚さ0.6cm、重量4.39gである。11は釘である。現存長7.5cm、幅0.5cm、厚さ0.5cm、重量5.76gである。12は鉄錐の茎である。現存長4.1cm、幅0.6cm、厚さ0.6cm、重量3.42gである。13は鎌の先である。現存長4.3cm、幅1.8cm、厚さ0.8cm、重量14.56gである。14は刀子片である。現存長2.5cm、幅1.0cm、厚さ0.6cm、重量3.70gである。

H-031 (第73図)

調査区中央部に位置する。M-001に切られる。規模は4.18m×3.98mを測り、形状は方形と思われる。

覆土は2層に分層され、人為的に埋め戻されている。

床面に硬化面は認められなかった。壁高は約32cmを測る（西壁）。カマドは北壁中央やや西よりに検出され、袖部はなく、火床部の一部が検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺1点と甕1点、計2点を図示した。1は土師器壺である。口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径12.0cm、残存器高5.5cm、底部は丸底である。

2は土師器甕である。口縁部～底部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕がみられる。法量は口径17.4cm、残存器高23.2cmを測る。

第2節 積穴住居跡

H-032 (第74図)

調査区東部に位置する。H-019と重複する。規模は3.41m×3.47mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は4層に分層され、廐屋後廐材等を焼却処分した後、埋め戻されている。

床面はカマド周辺からP-1付近まで硬化範囲が認められる。壁高は約66cmを測る（北壁）。周溝は全周し、幅14cm、深さ4.0cmを測る。

ピットは床面に1本検出された。P-1（径24cm×21cm、深さ5cm）を測る。カマドは東壁中央に検出され、H-019の壁を利用して煙道部の立ち上がりを作っている。カマド南寄りの貯蔵穴は、径60cm×60cm、深さ27cmを測り、不整円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち、壙1点、壺5点、鉢1点、壺1点、計8点を図示した。

1は土師器壺である。口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径14.0cm、器高4.5cm、底部は丸底である。

2は土師器鉢である。口縁部～胴部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内面に輪積痕がみられる。法量は口径17.0cm、残存器高11.2cmを測る。

3は土師器壺である。口縁部一部欠損のはば完形である。口縁部ヨコナデ、外面胴部～底部ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕がみられる。内外面赤彩。法量は口径9.2cm、器高14.0cm、底部は丸底である。

4～8は土師器壺である。4はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。法量は口径14.4cm、器高23.9cm、底径6.8cmを測る。5は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径13.2cm、器高20.1cm、底径8.0cmを測る。6は口縁部～胴部、底部欠損の4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕がみられる。法量は口径14.2cm、残存器高21.6cmを測る。7は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕がみられる。法量は復元口径16.0cm、残存器高15.9cmを測る。8は口縁部～胴部1/6遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕がみられる。法量は復元口径16.2cm、残存器高17.1cmを測る。

H-033 (第75図)

調査区中央北部に位置する。焼乱に激しく破壊されている。規模・形状・壁高ともに不明である。

ピットと炉の一部のみを検出した。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径25cm×28cm、深さ32cm）・P-2（径28cm×30cm、深さ57cm）・P-3（径38cm×40cm、深さ40cm）・P-4（径34cm×40cm、深さ23cm）の4本が対角線上に配される。炉は東側で検出した。

本住居跡から出土した遺物のうち、壙1点、支脚1点、石製品1点、計3点を図示した。

1は壙の口縁片である。

2は支脚である。内外面ヘラケズリ。現存長9.5cm、最大幅9.6cm、重量206.6gである。コップを逆さまにしたような支脚で、中の空洞に砂を入れて使用していたと考えられる。

3は砾石である。長さ3.5cm、幅3.0cm、厚さ1.5cm、重量27.7gである。人為的に穿った穴がある。

H-034 (第75図)

調査区北東部に位置する。H-012、H-013、H-035と重複する。規模・形状ともに不明である。

覆土はH-013の覆土を埋め戻しに使用している。

床面は搅乱が激しい。壁高は約10cmを測る（東壁）。周溝は東壁の一部のみ検出され、幅22cm、深さ4.5cmを測る。

カマドは右側袖部と火床部の一部が残存している。東壁がカマド部分で終わっており、南側に壁が延びるのかもしれないが、搅乱によるためか検出できなかった。ゆえに本住居跡のカマドは東壁コーナーより検出されたような印象になった。

本住居跡から出土した遺物のうち壺1点、石製品1点、計2点を図示した。

1は土師器壺である。口縁部～体部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径13.8cm、残存器高3.5cmを測る。

2は砥石である。長さ5.2cm、幅4.1cm、厚さ1.7cm、重量45.5gである。

H-035（第76・77図）

調査区北東部に位置する。H-012に切られ、H-013、H-034と重複する。規模は6.50m×6.65mを測り、形状は方形を呈する。

床面はほぼ全体に硬化範囲が認められる。壁高は約50cmを測る（西壁）。周溝は、H-012に切られている部分を除きほぼ全周し、幅30cm、深さ9.5cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径70cm×80cm、深さ75cm）・P-2（径63cm×72cm、深さ64cm）・P-3（径74cm×87cm、深さ66cm）・P-4（径70cm×77cm、深さ64cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径53cm×55cm、深さ38cm）を測る。カマドは北壁中央に検出され、H-012に切られている。各主柱穴に向かって間仕切り溝が東西に3本走っている。南壁中央に検出された貯蔵穴は、径85cm×78cm、深さ28cmを測り、円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺4点、高壺1点、甕5点、瓶2点、鉢1点、壙1点、支脚1点、石製品2点、計17点を図示した。

1～4は土師器壺である。1は口縁部～底部1/8遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径12.0cm、残存器高3.1cm底部は丸底である。2は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径13.0cm、器高3.5cm、底部丸底である。3は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は復元口径13.0cm、残存器高4.0cm、復元底径4.0cmを測る。4は口縁部～底部1/8遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径13.0cm、残存器高2.5cmを測る。

5は土師器高壺の脚部で上部のみ遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高4.1cmを測る。

6は土師器鉢である。口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径19.0cm、器高9.1cm、底径7.0cmを測る。

7は土師器壙（台付）である。胴部～底部1/5遺存する。内面ナデ。法量は残存器高1.7cm、底径3.6cmを測る。

8～12は土師器甕である。8は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径11.0cm、器高11.5cm、底径6.4cmを測る。9は口縁部～胴部1/8遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径16.0cm、残存器高10.7cmを測る。10は口縁片である。口縁部ヨコナデ。法量は復元口径16.0cm、残存器高3.9cmを測る。11は胴部～底部1/3遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高5.8cm、底径7.0cmを測る。12は口縁部～胴部片である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。法量は復元口径30.0cm、残存器高11.8cmを測る。

第2節 塚穴住居跡

13・14は土師器瓶である。13は口縁部～胴部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。法量は復元口径25.4cm、残存器高18.0cmを測る。14は胴部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高15.1cm、底径8.0cmを測る。

15は支脚である。現存長19.4cm、幅8.6cm、厚さ7.7cm、重量1127.3gである。

16は砥石である。長さ9.0cm、幅6.9cm、厚さ2.9cm、重量222.7gである。

17は敲石である。長さ5.8cm、幅6.1cm、厚さ4.6cm、重量233.3gである。

H-036 (第78図)

調査区中央部に位置する。H-040、D-028、D-029と重複する。規模は6.15m×5.90mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は3層に分層され、人為的に埋め戻されている。廐屋後焼却処理されていると思われる。

床面は住居跡全体に硬化範囲が認められる。壁高は約60cmを測る(西壁)。周溝はカマド部分を除き全周し、幅20cm、深さ4.5cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1(径34cm×36cm、深さ61cm)・P-2(径31cm×28cm、深さ70cm)・P-3(径25cm×30cm、深さ120cm)・P-4(径42cm×35cm、深さ84cm)の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は(径28cm×28cm、深さ8.7cm)を測る。カマドは北壁中央に検出された。各主柱穴の外側から周溝に向かって4条の間仕切り溝が東西に走り、P-5の両脇に2条走る。南東の角に検出された貯蔵穴は、径113cm×80cm、深さ28cmを測り、楕円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺5点、高壺1点、壺1点、鉢1点、手捏1点、計9点を図示した。

1～5は土師器壺である。1は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径12.0cm、残存器高4.9cmを測る。2は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。外面部上端・内面部赤彩。法量は口径13.2cm、器高5.7cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面赤彩。法量は口径14.0cm、残存器高6.2cmを測る。4は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面部上端赤彩。法量は口径14.4cm、器高9.7cm、底径6.3cmを測る。5は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径16.0cm、残存器高4.5cmを測る。

6は土師器高壺である。口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面赤彩。法量は口径16.0cm、残存器高5.2cmを測る。

7は土師器鉢である。口縁部～底部1/3遺存する。外面口縁部ヘラナデ後ヘラミガキ。外面ヘラケズリ、内面口縁部ヨコナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径20.0cm、残存器高7.8cmを測る。

8は土師器壺である。口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径15.2cm、器高24.8cm、復元底径6.5cmを測る。

9は手捏土器である。口縁部～底部1/2遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ後指頭痕。法量は復元口径10.0cm、残存器高4.6cmを測る。

H-038 (第79図)

調査区中央部に位置する。H-025、H-041に切られ、H-037と重複する。規模は5.08m×5.05mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は10層に分層され、人為的に埋め戻されている。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径42cm×39cm、深さ8.5cm）・P-2（径49cm×37cm、深さ37cm）・P-3（径32cm×29cm、深さ25cm）・P-4（径29cm×29cm、深さ24cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径31cm×35cm、深さ16cm）を測る。カマドは東壁中央から検出され、搅乱に切られている。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺3点、甕1点、石製品1点、計5点を図示した。

1～3は土師器壺である。1は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ。内外面赤彩（外面底部除く）。法量は口径11.8cm、器高4.5cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は復元口径13.8cm、器高6.3cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面体部上端・内面赤彩。法量は復元口径19.0cm、器高7.6cm、底部は丸底である。

4は土師器甕である。口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面器面剥落。法量は口径12.4cm、器高16.7cm、底径6.0cmを測る。

5は勾玉の石製模造品である。長さ2.9cm、幅2.0cm、厚さ0.65cm、重量5.54gである。

H-040（第80図）

調査区中央部に位置する。H-036、D-029に切られる。規模は(5.10)m×4.86mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は3層に分層され、人為的に埋め戻されている。

周溝は、北壁、北東、南壁のみ検出し、幅16cm、深さ5.2cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径33cm×40cm、深さ72cm）・P-2（径36cm×40cm、深さ75cm）・P-3（径40cm×51cm、深さ62cm）・P-4（径41cm×45cm、深さ68cm）の4本が対角線上に配され、南壁よりに位置するP-5は（径24cm×31cm、深さ37cm）を測る。主柱穴P-1、P-2の外側から周溝に向かって2条の間仕切り溝が東西に走る。H-036と本遺構の床面の高さは同じ。D-029は本遺構より新しい覆土であった。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺2点、甕1点、計3点を図示した。

1、2は土師器壺である。1は土師器壺である。口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径11.8cm、器高6.2cm、底径6.5cmを測る。2は口縁部～体部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ。法量は口径12.0cm、残存器高8.1cmを測る。

3は土師器甕である。口縁部～胴部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、外面口縁部に輪積み痕がみられる。頸部に穿孔あり。法量は復元口径17.0cm、残存器高12.7cmを測る。

H-041（第81・82・83図）

調査区中央部に位置するH-038、H-042、H-045、H-046、H-053、H-059と重複する。規模は9.80m×9.85mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は9層に分層される。廐屋後焼却処分をし、人為的に埋め戻されている。

床面は住居跡全域に硬化範囲が認められる。壁高は約70cmを測る（西壁）。周溝はカマド部分を除き全周し、幅26cm、深さ6.4cmを測る。

ピットは床面に7本検出された。主柱穴P-2～P-4に付属する小さなピットは主柱穴に伴うピットと

第2節 壺穴住居跡

みなしひット番号はふらなかつた。主柱穴はP-1（径92cm×87cm, 深さ86cm）・P-2（径100cm×108cm, 深さ80cm）・P-3（径77cm×92cm, 深さ77cm）・P-4（径100cm×104cm, 深さ82cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径70cm×62cm, 深さ40cm）を測る。

カマドは北壁中央から検出された。火床部はよく焼けている。各主柱穴の外側から周溝に向かって4条の間仕切り溝が東西に走る。カマド西側に貯蔵穴が検出されている。途中拡張したと思われる。一番カマドよりが元来の貯蔵穴である。径157cm×100cm, 深さ42cmを測り、不整椎円形を呈する。P-5付近の焼土下からP-6・7を検出した。位置的にP-5と同じ意味合いをもつそうだが、用途不明である。

本住居跡から出土した遺物のうち、壙9点、高壙1点、壺9点、壺1点、土製品1点、鉄製品5点、石製品3点、計29点を図示した。

1～8は土師器壙である。1は口縁部～体部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ内面ナデ。法量は口径13.1cm、器高4.6cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部3/4遺存する。外面ヘラケズリ後口縁部ヨコナデ、内面口縁部ヨコナデ・ヘラナデ後ヘラミガキ。法量は口径12.9cm、残存器高4.8cm、底部は丸底である。3は口縁部～体部1/6遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径13.6cm、残存器高3.9cmを測る。4は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ後ヘラミガキ。内外面黒色処理。外面底部に線刻あり。法量は口径13.2cm、器高3.7cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部3/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外口縁部赤彩。法量は口径11.8cm、器高3.8cmを測る。6は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ。法量は口径15.0cm、器高2.8cm、底部は丸底である。7は口縁部～底部1/3遺存する。外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部ヘラケズリ後ヘラナデ、内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部ヘラナデ後ヘラミガキ。法量は復元口径14.0cm、残存器高6.4cm、底部は丸底である。

8は口縁部～底部3/4遺存する。外面口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ後ヘラナデ、内面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ、体部ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は口径14.2cm、器高4.2cm、底部は丸底である。

9は須恵器壙である。口縁～底部1/6遺存する。ロクロ成形である。法量は復元口径11.2cm、残存器高2.9cmを測る。

10は土師器高壙である。壙部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後丁寧なヘラミガキ。外面赤彩。内面黒色処理。法量は復元口径12.8cm、残存器高4.4cmを測る。

11～19は土師器壺である。11は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径13.6cm、残存器高6.5cmを測る。12は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径13.2cm、残存器高9.5cmを測る。13はほぼ完形4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面器面剥落。法量は口径13.3cm、器高10.6cm、底径6.6cmを測る。14は口縁部～胴部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径14.4cm、残存器高10.9cmを測る。15は口縁部～胴部上半1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。法量は復元口径14.0cm、残存器高8.6cmを測る。16は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径13.8cm、器高13.2cm、底径6.6cmを測る。17は口縁部～胴部下端1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後粗いヘラミガキ、内面ナデ。法量は復元口径17.0cm、残存器高30.5cmを測る。18は底部のみ3/4遺存する。法量は残存器高1.8cm、底径6.3cmを測る。19は底部のみ1/4遺存する。法量は残存器高3.1cm、復元底径7.4cmを測る。

20は土師器壺である。口縁部～胴部上半1/3遺存する。外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面粗いヘラナデ。

法量は口径13.9cm、残存高10.5cmを測る。

21~23は砥石である。長さ3.0cm、幅3.9cm、厚さ0.8cm、重量20.5gである。22は長さ2.6cm、幅4.7cm、厚さ2.5cm、重量41.1gである。23は長さ5.8cm、幅4.4cm、厚さ1.6cm、重量69.9gである。

24は勾玉である。現存長1.6cm、幅1.0cm、厚さ0.9cm、重量1.1gである。

25・26は鉄鎌茎部である。25は現存長2.5cm、幅0.6cm、厚さ0.4cm、重量1.7gである。26は現存長2.9cm、幅0.9cm、厚さ0.4cm、重量2.8gである。

27・28は釘である。27は現存長3.2cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm、重量1.9gである。28は現存長7.7cm、幅0.7cm、厚さ0.8cm、重量32.8gである。

29は鉄鎌と思われる。現存長6.9cm、幅2.9cm、厚さ0.4cm、32.3gである。

H-042（第81図）

調査区中央部に位置する。H-041に切られる。規模、形状は不明である。

周溝と床面のみ検出された。周溝は幅16cm、深さ8.0cmを測る。

遺物は出土しなかった。

H-043（第83図）

調査区中央北部に位置する。M-012に切られ、規模は不明であるが、形状は方形と考えられる。

覆土は自然堆積で3層に分層される。

床面は主柱穴を結ぶように硬化範囲が認められる。壁高は約10cmを測る。周溝は、幅8.0cm、深さ4.0cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径34cm×34cm、深さ36cm）・P-2（径40cm×40cm、深さ99cm）・P-3（径52cm×40cm、深さ59cm）・P-4（径38cm×40cm、深さ86cm）を測る。炉が東側に検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺1点、土製品1点、鉄製品1点、計3点を図示した。

1は土師器壺である。口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径14.4cm、器高6.8cm、底部は丸底である。

2は管玉形土製品である。長さ1.7cm、径0.7cm、孔径0.2cm、重量0.8gである。中空になっている。

3は鉄鎌茎部と思われる。長さ4.1cm、幅1.1cm、厚さ0.4cm、重量3.3gである。

H-045（第84図）

調査区中央部に位置する。H-041、H-053に切られ、H-038、H-046と重複する。規模は6.35m×6.30mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は2層に分層される。廃屋後廃材を焼却処分され、人為的に埋め戻されている。

床面は住居跡全域に硬化範囲が認められる。壁高は約40cmを測る。周溝は幅26cm、深さ4.5cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径27cm×30cm、深さ37cm）・P-2（径38cm×35cm、深さ59cm）・P-3（径28cm×31cm、深さ60cm）・P-4（径25cm×33cm、深さ53cm）の4本が対角線上に配される。炉は西壁付近に検出された。周溝から東向かって3条の間仕切り溝が東西に走る。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺1点を図示した。

1は土師器壺である。口縁部～体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面口縁部ヨコ

第2節 墓穴住居跡

ナデ後ヘラミガキ、体部ヘラナデ後ヘラミガキ。法量は復元口径11.6cm、残存器高3.1cmを測る。

H-046（第85図）

調査区中央部に位置する。H-041に切られ、H-045と重複する。規模は4.68m×4.65mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は廐屋後焼却処分し、人為的に埋め戻されている。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約36cmを測る。周溝はカマド部分とH-041に切られる部分を除き、ほぼ全周し、幅25cm、深さ6.5cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径23cm×28cm、深さ69cm）・P-2（径30cm×32cm、深さ51cm）・P-3（径31cm×35cm、深さ82cm）・P-4（径34cm×34cm、深さ81cm）を測る。カマドは西壁中央に検出された。火床部はよく焼けている。南壁角に貯藏穴が検出され、径80cm×62cm、深さ34cmを測り、橢円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺1点、鉢1点、甕1点、計3点を図示した。

1は土師器壺である。口縁部～体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径12.4cm、残存器高3.5cmを測る。

2は土師器鉢である。口縁部～胴部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径15.0cm、残存器高8.7cmを測る。

3は土師器甕である。口縁部～胴部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕がみられる。法量は口径14.0cm、残存器高13.5cmを測る。

土製品1点は写真のみの掲載である。

H-047（第86・87図）

調査区中央北部に位置する。規模は7.38m×7.20mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は3層に分層される。人為的に埋め戻されている。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約20cmを測る。周溝はカマド部分を除き全周し、幅18cm、深さ5.7cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径75cm×84cm、深さ90cm）・P-2（径73cm×72cm、深さ87cm）・P-3（径76cm×82cm、深さ79cm）・P-4（径75cm×73cm、深さ90cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径38cm×33cm、深さ45cm）を測る。カマドは北壁中央に検出された。間仕切り溝が西壁から2本、東壁から3本、中央に向かって走る。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺5点、甕4点、瓶1点、手握1点、支脚1点、石製品3点、玉32点、鉄製品1点、計48点を図示した。

1～5は土師器壺である。1はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面口縁部ヨコナデ後ヘラナデ、ヘラミガキ。内面黒色処理。法量は口径12.8cm、器高4.2cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。法量は復元口径13.0cm、器高3.7cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ後ヘラミガキ。法量は復元口径13.4cm、器高4.6cm、底部は丸底である。4は口縁部～底部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径14.0cm、器高4.7cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径

17.8cm, 器高9.1cm, 底径7.8cmを測る。

6～9は土器器毫である。6は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は口径14.4cm, 器高14.2cm, 底径7.8cmを測る。7は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデか、器面剥落のため判別困難である。二次焼成の可能性あり。法量は口径13.0cm, 器高15.3cm, 底径7.2cmを測る。8は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 法量は口径10.9cm, 器高10.2cm, 底径5.8cmを測る。9は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は口径14.6cm, 器高14.8cm, 底径7.4cmを測る。

10は土器瓶である。口縁部～胴部下端4/5遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は口径29.8cm, 残器高24.0cmを測る。

11はほぼ完形の手捏土器である。外面ヘラケズリ, 内面指頭痕あり。法量は口径5.5cm, 器高2.2cm, 底径5.0cmを測る。

12は支脚である。現存長14.5cm, 幅4.7cm, 厚さ4.0cm, 重量292.9gである。

13は砥石である。現存長3.7cm, 幅4.3cm, 厚さ1.3cm, 重量30.3gである。

14は軽石である。現存長4.4cm, 幅4.1cm, 厚さ2.8cm, 重量12.8gである。

15は打製石器である。長さ7.3cm, 幅3.2cm, 厚さ2.0cm, 重量74.3gである。

16・17は石製品の管玉である。16は径0.6cm, 厚さ0.4cm, 孔径0.2cm, 重量0.23gである。17は径0.6cm, 厚さ0.4cm, 孔径0.2～0.3cm, 重量0.2gである。

18～46は土製品の土玉である。18は径0.8cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.1cm, 重量0.31gである。19は径0.7cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.1～0.15cm, 重量0.5gである。20は径0.75cm, 厚さ0.6cm, 孔径0.21cm, 重量0.31gである。21は径0.65cm, 厚さ0.8cm, 孔径0.15cm～0.2cm, 重量0.41gである。22は径0.7cm, 厚さ0.6cm, 孔径0.2cm～0.35cm, 重量0.41gである。23は径0.8cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.1cm, 重量0.38gである。24は径0.8cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.2cm, 重量0.72gである。25は径0.9cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.2cm～0.3cm, 重量0.62gである。26は径0.8cm, 厚さ0.9cm, 孔径0.25cm～0.3cm, 重量0.77gである。27は径0.8cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.15cm, 重量0.42gである。28は径0.85cm, 厚さ0.8cm, 孔径0.2cm～0.3cm, 重量0.69gである。29は径1.0cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.2cm～0.3cm, 重量0.76gである。30は径0.9cm, 厚さ0.8cm, 孔径0.2～0.25cm, 重量1.11gである。31は径0.9cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.2cm, 重量0.65gである。32は径0.9cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.2～0.25cm, 重量0.68gである。33は径0.9cm, 厚さ0.9cm, 孔径0.1cm, 重量0.85gである。34は径0.9cm, 厚さ0.9cm, 孔径0.35cm～0.5cm, 重量0.85gである。35は径1.0cm, 厚さ0.8cm, 孔径0.2cm～0.3cm, 重量0.66gである。36は径1.0cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.2cm～0.3cm, 重量0.77gである。37は径0.9cm, 厚さ0.7cm, 孔径0.25cm～0.3cm, 重量0.84gである。38は径1.0cm, 厚さ0.8cm, 孔径0.1cm～0.2cm, 重量0.8gである。39は径1.0cm, 厚さ0.8cm, 孔径0.2cm, 重量0.73gである。40は径1.0cm, 厚さ0.9cm, 孔径0.2cm～0.3cm, 重量1.13gである。41は長さ1.8cm, 径0.9cm, 孔径0.25cm～0.3cm, 重量2.1gである。42は長さ1.4cm, 径1.0cm, 孔径0.2cm, 重量1.2gである。43は長さ1.4cm, 径0.9cm, 孔径0.1cm, 重量1.2gである。44は径1.2cm, 厚さ1.0cm, 孔径0.2cm～0.4cm, 重量1.43gである。45は径1.3cm, 厚さ1.2cm, 孔径0.2cm, 重量2.28gである。46は長さ2.2cm, 径0.8cm, 孔径0.2cm, 重量1.9gである。

47は土製品の勾玉である。長さ2.8cm, 幅1.1cm, 厚さ1.1cm, 孔径0.1cm, 重量3.77gである。

48は鋸の刃先か。現存長5.0cm, 幅1.4cm, 厚さ0.2cm, 重量8.1gである。

種子2点は写真のみの掲載である。

第2節 壁穴住居跡

H-048 (第88図)

調査区北西部に位置する。M-014, H-055と重複する。規模は $5.38m \times 5.65m$ を測り、形状は方形を呈する。

廃屋後焼却処分された。

床面は全体に硬化範囲が認められる。壁高は約20cmを測る。周溝はカマド部分を除き全周し、幅21cm、深さ4.8cmを測る。

ピットは床面に6本検出された。主柱穴はP-1(径28cm×36cm、深さ88cm)・P-2(径48cm×38cm、深さ64cm)・P-3(径30cm×28cm、深さ83cm)・P-4(径43cm×47cm、深さ96cm)の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は(径26cm×36cm、深さ15cm)を割る。補助柱穴のP-6は径40cm×36cm、深さ57cmを測る。カマドは東壁中央に検出された。東壁南寄りに貯蔵穴が検出され、径93cm×90cm、深さ44cmを測り、不整規円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺5点、甕3点、壺2点、手握1点、計11点を図示した。

1～5は土師器壺である。1はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(底部除く)。法量は口径13.8cm、器高5.8cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩(底部除く)。法量は口径13.0cm、器高5.1cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩(底部除く)。法量は口径13.2cm、器高5.2cm、底部は丸底である。4は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(底部除く)。法量は口径14.8cm、器高5.2cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(底部除く)。法量は口径15.2cm、器高5.9cm、底部は丸底である。

6・7は土師器壺である。6はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(内外面脇部下端除く)。法量は口径11.0cm、器高8.4cmを測る。7は完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は口径11.8cm、器高11.4cm、底径7.0cmを測る。

8～10は土師器壺である。8は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕あり。法量は口径14.8cm、器高32.7cm、底径6.8cmを測る。9はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径16.4cm、器高24.8cm、底径7.0cmを測る。10は口縁部～脇部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径18.0cm、残存器高17.5cmを測る。

11は完形の土師器手握である。外面指頭模、内面指ナデ。法量は口径4.6cm、器高2.6cmを測る。

H-049 (第89図)

調査区中央部に位置する。B-016に切られ、M-014と重複する。規模は $4.95m \times 4.97m$ を測り、形状は方形を呈する。

覆土は5層に分層され、人為的に埋め戻されている。

床面はカマド前面と主柱穴を結ぶように硬化範囲が認められる。壁高は約36cmを測る。周溝は、カマド部分貯蔵穴、B-016に切られる部分を除いて全周し、幅18cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1(径44cm×38cm、深さ39cm)・P-2(径41cm×39cm、深さ47cm)・P-3(径40cm×36cm、深さ62cm)・P-4(径35cm×30cm、深さ54cm)を測る。カマドは北東壁右側に検出された。貯蔵穴は南東壁より検出した。

本住居跡から出土した遺物のうち、蓋1点、鉢1点、石製品2点、計4点を図示した。

1は須恵器蓋である。天井部～口縁部1/4遺存する。ロクロ成形。法量は復元口径11.0cm、残存器高3.9cmを測る。

2は土師器鉢である。口縁部1/6遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径17.0cm、残存器高3.0cmを測る。

3・4は石製品の紡錘車である。3は径3.7cm、厚さ2.2cm、孔径0.6cm、重量27.9gである。4は径4.5cm、厚さ3.1cm、孔径0.7cm、重量32gである。

H-050（第90・91図）

調査区中央部に位置する。規模は5.72m×5.80mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は4層に分層される。人為的に埋め戻されている。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約60cmを測る（西壁）。周溝は、カマド部分を除き全周し、幅30cm、深さ2.5cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径68cm×88cm、深さ67cm）・P-2（径44cm×46cm、深さ89cm）・P-3（径55cm×55cm、深さ89cm）・P-4（径58cm×50cm、深さ72cm）の4本が対角線上に配される。カマドと正対して位置するP-5は（径25cm×30cm、深さ18cm）を測る。カマドは北壁中央に検出された。遺存状態は良好で、火床部東側がよく焼けている。主柱穴P-1、P-2、P-3、P-4外側から周溝に向かって4条の間仕切り溝が東西に走る。東壁北寄りに貯蔵穴が検出され、径80cm×56cm、深さ29cmを測り、隅丸長方形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺5点、甕3点、瓶1点、手捏3点、計12点を図示した。

1～5は土師器壺である。1は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径7.0cm、器高2.4cm、復元底径4.0cmを測る。2は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、外面・内面底部除いて赤彩。法量は口径13.4cm、器高4.3cm、底部丸底である。3は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径14.4cm、器高4.3cm、底部丸底である。4はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径15.1cm、器高5.3cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ。法量は残存器高7.4cm、底部は丸底である。

6～8は土師器甕である。6は口縁部～胴部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。器面剥落少々。法量は口径13.5cm、残存器高9.4cmを測る。7は口縁部～胴部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、内外面ヘラケズリ。法量は口径13.8cm、残存器高19.0cmを測る。8はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径18.1cm、器高32.8cm、底径8.0cmを測る。

9は完形の土師器瓶である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。輪積痕あり。法量は口径25.9cm、器高25.2cm、底径7.4cmを測る。

10～12は手捏土器である。10はほぼ完形。指痕あり。法量は口径1.8cm、器高1.7cm、底径1.8cmを測る。11は口縁部～底部3/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面指痕あり。法量は口径4.0cm、器高3.3cmを測る。12は口縁部～底部3/4遺存する。内外指痕あり。法量は復元口径10.5cm、器高3.0cm、底径7.4cmを測る。

H-051（第91・92図）

調査区中央部に位置する。M-014、H-050に切られる。規模は5.51m×5.74mを測り、形状は方形を呈する。

第2節 壁穴住居跡

覆土は10層に分層され、自然堆積である。

床面はカマド前面から硬化範囲が認められる。壁高は約23cmを測る（北壁）。周溝は、北側を除いて検出され、幅16cm、深さ4cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径70cm×65cm、深さ78cm）・P-2（径29cm×27cm、深さ28cm）・P-3（径21cm×31cm、深さ22cm）・P-4（径33cm×29cm、深さ95cm）の4本が対角線上に配される。カマドは南西壁中央に検出された。南西壁隅付近の貯蔵穴は、径69cm×65cm、深さ49cmを測り、不整長方形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺3点、高壺1点、罐1点、甕3点、計8点を図示した。

1～3は土師器壺である。1はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は口径13.4cm、器高6.7cm、底部丸底である。2はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は口径14.4cm、器高5.9cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩（外面体部下端・内面底部除く）。法量は口径14.2cm、器高6.2cm、底部は丸底である。

4は土師器高壺である。口縁部～脚部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、壺部ヘラケズリ、内面ナデ、脚部ヘラケズリ、内外面赤彩（壺部下端除く）。法量は口径15.4cm、残存器高10.8cmを測る。5はほぼ完形の土師器壺である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩（外面胴部下端・内面底部除く）。法量は口径11.2cm、器高9.8cm、底部は丸底である。

6～8は土師器甕である。6は口縁部～胴部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径12.8cm、残存器高11.1cmを測る。7は口縁部～胴部下端4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径22.6cm、残存器高20.2cmを測る。8は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径15.9cm、器高27.4cm、底径7.0cmを測る。

H-053（第92図）

調査区中央部に位置する。H-025、H-037、H-038、H-041、H-045と重複する。規模は4.85m×4.88mを測り、形状は方形と思われる。

覆土は1層であり、H-038にほとんど破壊されている。壁高は約30cmを測る（南壁）。周溝は重複部分を除き全周し、幅24cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径32cm×37cm、深さ51cm）・P-2（径28cm×38cm、深さ57cm）・P-3（径31cm×36cm、深さ52cm）・P-4（径28cm×31cm、深さ53cm）の4本が対角線上に配される。カマドは西壁中央に検出された。

遺物は小片のため、図示できなかった。

H-056（第93・94図）

調査区西北部に位置する。H-057とM-017を切り、M-001と重複する。規模は6.80m×6.95mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は5層に分層される。人為的に埋め戻されている。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約50cmを測る。周溝はカマド部分と重複部分を除き全周し、幅23cm、深さ6cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径68cm×44cm、深さ61cm）・P-2（径65cm×63cm、深

さ64cm)・P-3(径67cm×60cm, 深さ55cm)・P-4(径68cm×67cm, 深さ74cm)の4本が対角線上に配され, カマドと正対して位置するP-5は(径50cm×38cm, 深さ50cm)を測る。カマドは北壁中央に検出された。主柱穴から周溝に向かって間仕切り溝が東に2本, 西に2本走る。カマドの東寄りの貯蔵穴は, 径89cm×80cm, 深さ23cmを測り, 隅丸長方形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち, 壁6点, 高環3点, 瓶1点, 支脚1点, 玉2点, 鉄製品3点, 計16点を図示した。

1~6は土師器壺である。1は口縁部~底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ後ヘラミガキ。内面黒色処理。法量は復元口径11.3cm, 器高3.4cm, 底部は丸底である。2はほぼ完形。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ後ヘラミガキ。法量は口径10.9cm, 器高4.5cm, 底部は丸底である。3は口縁部~底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, ヘラナデ後ヘラミガキ。内外面黒色処理。法量は復元口径11.2cm, 器高3.7cm, 底部は丸底である。4は口縁部~底部1/2遺存する。体部外面ヘラケズリ, 口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 内面ナデ。法量は復元口径12.2cm, 器高3.4cm, 底部は丸底である。5は口縁部~体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は復元口径11.6cm, 残存器高2.8cmを測る。6は口縁部~底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ後ヘラミガキ, 内面ナデ後ヘラミガキ。内面赤彩。法量は復元口径12.0cm, 残存器高4.3cmを測る。

7~9は土師器高環である。7は环部1/2遺存する。内外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ。外面环部ヘラケズリ, 内面ナデ後ヘラミガキ, 内面黒色処理。法量は復元口径17.6cm, 残存器高4.1cmを測る。8はほぼ完形。内外面口縁部ヨコナデ後ヘラミガキ, 外面环部, 脚部ヘラケズリ後一部ヘラミガキ, 内面ナデ後ヘラミガキ。内面环部黒色処理, 外面赤彩。法量は口径13.2cm, 器高7.5~8.0cm, 底径9.4cmを測る。9は脚部4/5遺存する。外面ヘラケズリ後ヘラミガキ, 内面ナデ。法量は残存器高10.5cm, 底径14.0cmを測る。

10は土師器瓶である。胴部~底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ, 内面粗いヘラナデ。法量は残存器高17.2cm, 底径8.8cmを測る。

11は支脚である。現存長13.8cm, 幅7.0cm, 厚さ7.0cm, 重量600.0gである。

12~14は鉄鎌である。12は現存長2.6cm, 幅0.6cm, 厚さ0.2cm, 重量1.29gである。13は茎部である。長さ4.3cm, 幅1.1cm, 厚さ0.3cm, 重量3.37gである。14は茎部である。長さ6.7cm, 幅0.6cm, 厚さ0.3cm, 重量5.22gである。

15は石製品勾玉である。長さ0.9cm, 幅0.7cm, 厚さ0.6cm, 孔径0.1cm, 重量0.9gである。

16は土製品勾玉である。孔径跡がある。現存長3.1cm, 幅1.0cm, 厚さ1.0cm。重量3.7gである。

H-058 (第94図)

調査区西北部に位置する。M-015, D-036と重複する。規模, 形状は不明である。

主柱穴はP-2(径70cm×不明, 深さ99.8cm)・P-3(径76cm×径72cm, 深さ108.1cm)を測る。P-5は(径約44cm×径48cm, 深さ18.9cm), P-6(33cm×10cm, 32cm)は補助柱穴と思われる。

壁高は約40cmを測る。周溝は、東・西側のみ検出し、幅15cm, 深さ3cmを測る。壁と周溝はやや離れており、南側の周溝は検出できなかった。南壁中央の土坑は径110cm×55cm, 深さ27cmを測り、隅丸方形を呈し、入口に伴うものである。

本住居跡から出土した遺物のうち、壁7点、鉢1点、手握1点、石製品1点、計10点を図示した。

1~7は土師器壺である。1は口縁部~体部1/10遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径12.2cm, 残存器高4.5cmを測る。2は口縁部~体部1/10遺存する。口縁部

第2節 壁穴住居跡

ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内面赤彩。外面も赤彩の痕跡はあるが剥離している。法量は復元口径14.8cm、残存器高3.7cmを測る。3は口縁部～体部1/10遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径15.8cm、残存器高5.0cmを測る。4は口縁部～体部1/10遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径15.4cm、残存器高5.0cmを測る。5は口縁部～体部1/8遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩。法量は復元口径15.5cm、残存器高4.5cmを測る。6は口縁部～体部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径15.5cm、残存器高5.5cmを測る。7はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径15.8cm、器高5.9cm、底部は丸底である。8はほぼ完形の土師器壺である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（内面胴部下端除く）。法量は口径11.4cm、器高9.3cm、底部は丸底である。

9は手捏土器である。口縁部～底部1/5遺存する。口径3.5cm、器高1.6cmを測る。

10は砥石である。長さ9.8cm、幅7.2cm、厚さ3.4cm、重量335.1gである。

H-059（第81・83図）

調査区中央部に位置する。H-041に切られるため、規模、形状は不明である。

周溝・床面の一部のみ検出した。床はよく貼っていた。壁高は約31cmを測る（北壁）。周溝は北側のみ検出し、幅18cm、深さ5.0cmを測る。

本住居跡から出土した遺物のうち、甕1点を図示した。

1は土師器甕の口縁部～胴部1/10遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径15.0cm、残存器高7.1cmを測る。

H-060（第95図）

調査区西北部に位置する。M-043に切られる。規模は4.93m×4.85mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は廐屋後廐材を消却処分し、人為的に埋め戻されている。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約16cmを測る。周溝は西側のみ検出し、幅22cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に6本検出された。主柱穴はP-1（径28cm×25cm、深さ14cm）・P-2（径26cm×32cm、深さ61cm）・P-3（径24cm×26cm、深さ39cm）・P-4（径28cm×26cm、深さ32cm）の4本が対角線上に配され、南壁中央付近に位置するP-5は（径25cm×25cm、深さ13cm）を測り、南西の角付近に位置するP-6は（径15cm×16cm、深さ6cm）を測る。カマドはM-043に切られ残存せず。南壁東寄りの貯蔵穴は、径83cm×55cm、深さ50cmを測り、長方形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち、甕4点、高坏1点、小甕1点、甕2点、瓶1点、手捏土器1点、計10点を図示した。

1～4は土師器壺である。1はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、内面ナデ。内面は被熱による剥離がみられる。薄くではあるが内外面口縁部赤彩。法量は口径13.5cm、器高5.6cm、底部は丸底である。2はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は口径16.0cm、器高6.1cm、底部が丸底である。3は口縁部～底部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径12.7cm、残存器高5.6cmを測る。4はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径15.0cm、器高5.5cm、底部は丸底である。

5は土師器壺である。壺部～基部1/5遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存高4.5cmを測る。

6は土師器小型甕である。口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。剥離面多数あり。法量は口径10.5cm、器高10.6cm、底部は丸底である。

7・8は土師器甕である。7は胴部～底部1/3遺存する。外面ヘラケズリ、内面荒いヘラナデ。法量は残存高12.0cm、底径6.2cmを測る。8は胴部～底部1/8遺存する。器面剥落および摩耗著しいため調整不明。法量は残存高5.5cm、底径7.0cmを測る。

9は土師器瓶である。口縁部～底部。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径23.6cm、器高21.2cm、底径8.0cmを測る。

10はほぼ完形の手捏土器である。法量は口径5.3cm、器高4.0cm、底部は丸底である。

H-062（第96図）

調査区西北部に位置する。M-042、M-043、H-063と重複する。規模は4.91m×4.92mを測り、形状は方形と思われる。

覆土は5層に分層され、人為的に埋め戻されている。

床面全体に硬化範囲が認められる。壁高は約50cmを測る（南壁）。周溝は、調査区外部分を除き全局し、幅21cm、深さ7cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径81cm×75cm、深さ49cm）、P-2（径68cm×77cm、深さ45cm）、P-3（径77cm×84cm、深さ62cm）に配され、カマドと正対して位置するP-4は（径32cm×27cm、深さ17cm）を測る。カマドは片袖のみ検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺3点、甕1点、土製品1点、石製品2点、計7点を図示した。

1・2は土師器壺である。1は口縁部～底部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。法量は復元口径12.3cm、器高3.6cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部1/3遺存する。ロクロ成形。体部下端回転ヘラケズリ、底部静止糸切り後ヘラケズリ、内外面赤彩。法量は復元口径12.5cm、器高4.0cm、復元底径9.0cmを測る。

3は須恵器壺である。口縁部～底部1/4遺存する。ロクロ成形。体部下端回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り。法量は復元口径12.6cm、器高4.6cm、底径7.4cmを測る。

4は土師器甕である。口縁部～胴部2/3遺存する。外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ。法量は口径14.5cm、残存高13.5cmを測る。

5・6は石製品である。5は砥石である。長さ7.7cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm、重量14.1gを測る。6は石皿である。長さ9.3cm、幅8.8cm、厚さ3.9cm、重量438.4gを測る。

7は完形の土製軽車である。径5.2cm、厚さ2.6cm、孔径0.7cm、重量83.1gを測る。

H-064（第97図）

調査区西部に位置する。H-071、D-037、D-042に切られる。規模は5.95m×5.90mを測り、形状は方形と思われる。

覆土は廐屋後焼却処分され、人為的に埋め戻されている。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約40cmを測る（東壁）。周溝は西壁一部を除いて検出され、幅23cm、深さ3cmを測る。

第2章 壁穴住居跡

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径40cm×33cm、深さ71cm）・P-2（径38cm×35cm、深さ67cm）・P-3（径38cm×33cm、深さ65cm）・P-4（径40cm×65cm、深さ33cm）の4本が対角線上に配され、南壁付近に位置するP-5は（径26cm×26cm、深さ8cm）を測る。カマドの袖は検出されなかつたが、火床部が北壁寄りに検出された。各主柱穴の外側から周溝に向かって3条の間仕切り溝が東西に走る。南壁西寄りの貯蔵穴は、径97cm×74cm、深さ36cmを測り、隅丸長方形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち环2点を図示した。

1は須恵器環である。口縁部～体部1/10遺存する。ロクロ成形。外面下端回転ヘラケズリ。法量は復元口径11.8cm、残存器高3.8cmを測る。

2は土師器環である。口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面摩耗のため調整不明。法量は復元口径13.8cm、器高5.6cm、底部は丸底である。

H-067（第98・99図）

調査区中央部に位置する。H-028に切られる。規模は不明×6.15mを測り、形状は方形と思われる。

覆土は3層に分層され、人為的に埋め戻されている。

壁高は約30cmを測る。周溝は切られる部分を除き全周し、幅20cm、深さ3cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径40cm×38cm、深さ81cm）・P-2（径35cm×38cm、深さ87cm）・P-3（径49cm×44cm、深さ89cm）・P-4（径40cm×41cm、深さ92cm）の4本が対角線上に配される。周溝からP-1、P-3、P-4に向かって3条の間仕切り溝が走る。南東壁寄りの貯蔵穴は、径90cm×68cm、深さ24cmを測り、楕円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち环12点、壺3点、壺1点、甕4点、すり鉢1点、石製品2点、鉄製品1点、土製品1点、瑪瑙1点、計26点を図示した。

1～8は土師器環である。1は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、輪積痕あり、内面ナデ。法量は復元口径11.8cm、器高4.9cm、底部は丸底である。2はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩（外面体部下端除く）。法量は口径13.8cm、器高5.7cm、底径5.2cmを測る。3は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内面赤彩。法量は口径13.7cm、器高5.2cm、底部は丸底である。4は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。法量は復元口径13.4cm、器高4.9cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（外面体部下端除く）。法量は復元口径14.1cm、器高5.3cm、底部は丸底である。6は完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（外面体部下端除く）。法量は口径14.3cm、器高6.2cm、底部は丸底である。7は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は復元口径13.8cm、器高3.3cm、底部は丸底である。8は口縁部～体部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（外面体部下端除く）。法量は復元口径16.9cm、残存器高4.6cmを測る。

9～12は土師器碗型環である。9は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。輪積痕あり。内外面赤彩（外面体部下端・内面体部除く）法量は復元口径10.0cm、器高8.6cm、底径5.1cmを測る。10は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径11.5cm、器高7.2cm、底径5.2cmを測る。11はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、口縁部ヨコナデ後内面ナデ。内外面赤彩、内面底部に赤彩で「×」印あり。法量は口径14.4cm、器高6.9cm、

底部は丸底である。12は口縁部～体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（内面部下端除く）。法量は復元口径15.0cm、残存器高6.5cmを測る。

13～15は土師器壺である。13は口縁部～体部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕がみられる。内外面赤彩（外面胴部下端・内面胴部除く）。14はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内外面赤彩（外面底部・内面胴部除く）。法量は口径8.2cm、器高13.0cm、底部は丸底である。15は口縁部～底部6/8遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（外面胴部下端・内面胴部除く）。法量は口径10.3cm、器高12.6cm、底部は丸底である。

16～18は土師器壺である。16は口縁部～胴部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面に輪積痕がみられる。法量は口径14.8cm、残存器高5.7cmを測る。17は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕がみられる。法量は復元口径15.8cm、残存器高15.0cmを測る。18は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径14.1cm、器高23.9cm、復元底径7.0cmを測る。

19は土師器壺である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径11.8cm、器高15.0cm、底部は丸底である。

20は須恵器壺の胴部片である。外面にタクキ目とカキ目、残存器高8.8cmである。

21は土師器のすり鉢片である。

22は砥石である。残存長4.0cm、幅3.8cm、厚さ0.5cm、重量14.2gである。

23は瑪瑙である。長さ9.8cm、幅6.9cm、厚さ6.1cm、重量698.8gを測る。

24は軽石である。長さ8.2cm、幅9.8cm、厚さ6.1cm、重量78.4gである。

25は土製品で勾玉形模造品である。長さ3.6cm、幅1.0cm、厚さ0.9cm、重量3.2gである。

26の鉄製品は円形を呈すると思われる。長さ2.5cm、幅1.0cm、厚さ0.1cm、重量2.0gである。

H-069 (第100図)

調査区中央北部に位置する。H-072と重複する。規模は4.35m×4.10mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は3層に分層され、人為的に埋め戻されている。

床面は貼り床で黒色ロームで固めてある。壁高は約36cmを測る。薄い周溝がカマド部分を除いて幅5cm、深さ2.5cmを測り、全層する。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径38cm×44cm、深さ78cm）・P-2（径26cm×27cm、深さ69cm）・P-3（径27cm×31cm、深さ56cm）・P-4（径30cm×22cm、深さ51cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径30cm×36cm、深さ15cm）を測る。カマドは北壁中央に検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺1点、壺1点、壺1点、支脚1点、鉄製品1点、計5点を図示した。

1は土師器壺である。完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。法量は口径12.4cm、器高3.7cm、底部は丸底である。

2は須恵器壺の頸部片である。

3は土師器壺である。口縁部～胴部1/6遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面口縁部ヨコナデ後ヘラナデ。法量は復元口径22.4cm、残存器高10.7cmを測る。

4は支脚である。残存長5.3cm、幅4.3cm、厚さ4.1cm、重量75.1gを測る。

5は刀子である。現存長10.4cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重量8.9gを測る。茎部には木製柄が遺る。

第2節 壁穴住居跡

H-071 (第101図)

調査区西部に位置する。H-065, H-066, D-040と重複する。規模は不明、形状は長方形と思われる。

壁高は約30cmを測る（南壁）。周溝は検出されなかった。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径26cm×27cm、深さ34cm）・P-2（径34cm×33cm、深さ51cm）・P-3（径40cm×35cm、深さ73cm）・P-4（径30cm×33cm、深さ60cm）の4本が対角線上に配される。東壁付近に検出されたP-5は（径35cm×43cm、深さ16cm）を測る。カマドは検出されなかった。

本住居跡から出土した遺物のうち坏2点を図示した。

1・2は土師器坏である。1は口縁部～体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。内面赤彩。法量は復元口径14.6cm、残存器高4.3cmを測る。2は体部～底部1/2遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端）。法量は残存器高5.8cm、底部は丸底である。

H-072 (第102図)

調査区中央北部に位置する。H-069と重複する。規模は5.37m×5.45mを測り、形状は方形を呈する。

床面は中央一帯に縦化範囲が認められる。壁高は約20cmを測る。周溝は、貯蔵穴部分を除き、幅30cm、深さ2.5cmを測り、全周する。

ピットは床面に7本検出された。主柱穴はP-1（径28cm×26cm、深さ59cm）・P-2（径34cm×33cm、深さ59cm）・P-3（径40cm×35cm、深さ61cm）・P-4（径36cm×37cm、深さ54cm）の4本が対角線上に配される。P-5（径19cm×17cm、深さ9.2cm）・P-6（径44cm×42cm、深さ10.9cm）・P-7（径60cm×48cm、深さ10.9cm）を測る。カマドも炉も検出されなかった。遺存状態は良好で、火床部東側がよく焼けている。南壁東寄りの貯蔵穴は、径150cm×118cm、深さ22cmを測り、椭円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち坏2点、高坏1点、壺1点、玉2点、石製品2点、計8点を図示した。

1・2は土師器坏である。1は口縁部～体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面丁寧なミガキ、内面ナデ。内外面赤彩。復元口径13.6cm、残存器高4.4cmを測る。2は口縁部～体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径16.0cm、残存器高5.6cmを測る。

3は土師器高坏のミニチュアである。脚部のみ遺存する。外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。内面黒色處理。法量は残存器高2.7cm、底径4.4cmを測る。

4は土師器壺である。口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径14.8cm、残存器高14.8cmを測る。

5・6は打石である。5は長さ5.2cm、幅10.3cm、厚さ4.2cm、重量294.3gである。6は長さ8.2cm、幅10.5cm、厚さ4.1cm、重量530.6gを測る。

7・8は石製玉である。縁岩石と思われる。7は径0.3cm、厚さ0.35cm、孔径0.1cm、重量0.11gを測る。8は径0.6cm、厚さ0.4cm、孔径0.1cm、重量0.21gを測る。

H-074 (第103図)

調査区西部に位置する。M-024に切られる。規模・形状ともに不明。壁高は約10cmを測る（東壁）。周溝は検出されなかった。

ピットは床面に2本検出された。主柱穴はP-1（径38cm×45cm、深さ51cm）・P-2（径38cm×45cm、深さ42cm）・P-3（径37cm×42cm、深さ22cm）を測る。カマドは検出されず、火床部が北壁に検出された。

H-076 (第104図)

調査区西部に位置する。H-075, D-048, D-052と重複する。規模、形状はともに不明である。

覆土は擾乱が激しい。

周溝は、北東の隅のみ検出され、幅12cm、深さ3cmを測る。

ピットは床面に7本検出された。主柱穴はP-1（径57cm×60cm、深さ74cm）・P-2（径58cm×48cm、深さ50cm）・P-3（径83cm×60cm、深さ47cm）・P-4（径67cm×55cm、深さ48cm）の4本が対角線上に配される。また、P-5（径40cm×52cm、深さ10cm）・P-6（径57cm×59cm、深さ11cm）・P-7（径66cm×42cm）は補助柱穴と考えられる。カマドは検出されず、火床部が北壁寄りに検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち环2点を図示した。

1・2は土器器环である。1は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。体部上端内外面赤彩。法量は復元口径13.4cm、器高4.3cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面体部上端赤彩。法量は口径12.9cm、器高5.6cm、底部は丸底である。

H-077 (第103図)

調査区西部に位置する。D-047, D-049, D-050, D-053に切られる。規模は4.35m×4.35mを測り、形状は方形と思われる。

壁高は約16cmを測る（東壁）。周溝検出されなかった。

ピットは床面に11本検出された。主柱穴はP-1（径45cm×14.2cm、深さ14cm）・P-2（径45cm×16.8cm、深さ16cm）・P-3（径40cm×12.3cm、深さ13cm）・P-4（径50cm×17.0cm、深さ27cm）を測り、補助柱穴はP-5（径35cm×17cm、深さ18cm）、P-6（径32cm×15cm、深さ15cm）、P-7（径30cm×16cm、深さ16cm）、P-8（径20cm×24cm、深さ24cm）、P-9（径28cm×12.6cm、深さ13cm）、P-10（径22cm×13.6cm、深さ14cm）、P-11（径30cm×61cm、深さ21cm）を測る。カマドは検出されず、南の隅に貯蔵穴が検出され、径52cm×83cm、深さ27cmを測り、不整梢円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち环3点、手捏2点、計5点を図示した。

1～3は土器器环である。1は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径8.8cm、器高4.1cm、復元底径3.2cmを測る。2は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（内面底部除く）。法量は口径14.9cm、器高5.1cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径12.6cm、器高5.5cm、底部は丸底である。

4・5は手捏土器である。4はほぼ完形である。外面指頭痕、内面輪積痕あり。法量は口径5.5cm、器高6.1cm、底径4.0cmを測る。5はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面荒いヘラナデ。法量は口径8.8cm、器高6.1cm、底径3.0cmを測る。

H-078 (第105・106図)

調査区西南部に位置する。H-079と重複する。規模は5.45m×5.55mを測り、形状は不整梢円形を呈する。

壁高は約40cmを測る（東壁）。周溝は北壁と東壁のみ検出し、幅30cm、深さ6cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径39cm×45cm、深さ28cm）・P-2（径44cm×38cm、深

第2節 壁穴住居跡

さ21cm)・P-3(径39cm×43cm, 深さ24cm)・P-4(径37cm×36cm, 深さ36cm)の4本が対角線上に配され, P-5は(径44cm×51cm, 深さ27cm)を測る。カマドは検出されず, 炉が中央やや南よりに検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺7点, 壺3点, 甌2点, 手捏土器1点, 支脚1点, 玉1点, 鉄製品1点, 計16点を図示した。

1~7は土師器壺である。1は完形である。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。内外面赤彩(内面体部下端除く), 外面の赤彩は一部はげている。法量は口径14.1cm, 器高4.8cm, 底部は丸底である。2は完形である。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は口径13.5cm, 器高5.1cm, 底部は丸底である。3は口縁部~底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は口径12.8cm, 残存器高5.3cm, 底部は丸底である。4は口縁部から底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。内外面赤彩(外面底部, 内面体部下端除く)。法量は口径12.8cm, 器高5cm, 底部は丸底である。5は口縁部~底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。内外面赤彩(外面底部, 内面体部下端除く)。法量は口径13.5cm, 器高5.2cm, 底部は丸底である。6は口縁部~底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。内外面赤彩(底部除く)。法量は復元口径14.0cm, 残存器高4.3cm, 底部は丸底である。7はほぼ完形である。ロクロ成形。底部回転糸切り。外面に「大」の墨書がある。法量は口径12.9cm, 器高4.6cm, 底径6.5cmを測る。

8は手捏土器である。ほぼ完形である。外面ヘラケズリ, 内面ナデ, 外面底部に木葉痕か。法量は口径6.4cm, 器高2.5cm, 底部は2.5cmを測る。

9~11は土師器壺である。9は底部1/5遺存する。外面ヘラケズリ, 内面ナデ。残存器高2.2cm, 底径8.0cmを測る。10は胴部~底部1/5である。外面ヘラケズリ, 内面ナデ。残存器高5.3cm, 底径6.0cmである。11は口縁部~胴部1/10遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は復元口径17.5cm, 残存器高6.0cmである。

12・13は土師器甌である。12は口縁部~底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。法量は口径24.4cm, 器高19.8cm, 底径7.5cmを測る。13は口縁部~胴部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ。内面口縁部から頸部には輪積痕がみられる。法量は口径24.2cm, 残存器高17.0cmを測る。

14は支脚である。長さ10.5cm, 幅3.8cm, 厚さ4.5cm, 重量306.6gである。

15は釘である。長さ5.9cm, 幅0.5cm, 厚さ0.4cm, 重量4.5gである。

16は土製管玉である。長さ2.7cm, 径1.2cm, 孔径0.1cm, 重量4.9gである。

H-080(第106・107図)

調査区西部に位置する。M-037に切られる。規模は5.40m×5.09mを測り, 形状は方形を呈する。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約40cmを測る(西壁)。周溝は, カマド部分, M-037に切られる部分を除き全周し, 幅29cm, 深さ5cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1(径27cm×23cm, 深さ50cm)・P-2(径29cm×27cm, 深さ45cm)・P-3(径32cm×31cm, 深さ74cm)・P-4(径30cm×32cm, 深さ74cm)の4本が対角線上に配され, カマドと正対して位置するP-5は(径25cm×28cm, 深さ4cm)を測る。カマドは北壁中央に, 炉は住居跡中央から検出された。併用していたようだが, 炉は使用されなくなってからの期間が長いと考えられる。

本住居跡から出土した遺物のうち壺8点, 高壺1点, 壺2点, 玉9点, 計20点を図示した。

1~8は土師器壺である。1は完形である。口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面口縁部ヨコナデ。法

量は口径13.8cm、器高5.2cm、底部は丸底である。2はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラミガキカ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径11.2cm、器高5.2cm、底部は丸底である。3はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径14.7cm、器高5.1cm、底部は丸底である。4は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径14.8cm、残存器高5.7cmを測る。5は口縁部～底部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径12.9cm、器高4.0cm、底部は丸底である。6は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径13.0cm、器高5.8cm、底部は丸底である。7は口縁部～体部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径17.8cm、残存器高5.1cmを測る。8は椀型坏で口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。法量は口径11.8cm、器高8.8cm、底部は丸底である。

9は土師器高坏である。脚部1/3遺存する。脚部外面ヘラケズリ、裾部外面ヨコナデ。脚部内面ナデ。脚部下端赤彩。法量は残存器高7.1cm、復元底径10.2cmを測る。

10・11は土師器壺である。10は口縁部～胴部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径15.6cm、残存器高10.0cmを測る。11は胴部～底部1/4遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ、輪積痕がみられる。法量は残存器高16.2cm、底径7.5cmを測る。

12～20は土玉である。12は完形である。径0.9cm、厚さ0.7cm、孔径0.1cm～0.2cm、重量0.6gを測る。13は完形である。径0.8cm、厚さ0.85cm、孔径0.1cm～0.2cm、重量0.6gを測る。14は完形である。径0.9cm、厚さ0.7cm、孔径0.15cm～0.2cm、重量0.6gを測る。15は完形である。径0.85cm、厚さ0.8cm、孔径0.15cm、重量0.8gを測る。16は完形である。径1.0cm、厚さ0.7cm、孔径0.2cm～0.3cm、重量0.8gを測る。17は完形である。径0.9cm、厚さ0.8cm、孔径0.1cm～0.3cm、重量0.8gを測る。18は完形である。径0.9cm、厚さ0.7cm、孔径0.1cm～0.2cm、重量0.6gを測る。19は完形である。径0.8cm、厚さ0.7cm、孔径0.1cm～0.2cm、重量0.6gを測る。20は完形である。径0.9cm、厚さ0.7cm、孔径0.1cm～0.2cm、重量0.6gを測る。

H-081（第107・108図）

調査区中央部に位置する。H-082、M-042、M-043に切られ、D-059、D-063と重複する。規模は不明。形状は方形と思われる。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約16cmを測る。周溝は切られた部分を除き全周し、幅21cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径32cm×30cm、深さ43cm）・P-2（径32cm×33cm、深さ62cm）・P-3（径33cm×31cm、深さ38cm）・P-4（径30cm×31cm、深さ61cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径25cm×22cm、深さ18cm）を測る。カマドは西壁中央に検出され、H-082に切られる。南壁の東隅に貯蔵穴が検出され、径88cm×78cm、深さ43cmを測り、円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち壺4点、鉢2点、小甕1点、甕1点、手捏土器1点、計10点を図示した。

1～4は土師器壺である。1は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径12.8cm、器高5.5cm、底部は丸底である。2は口縁部～体部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径15.0cm、残存器高3.7cmを測る。3は口縁部～底部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（外面部下端除く）。法量は復元口径16.0cm、残存器高4.4cmを測る。

第2節 壁穴住居跡

4は土師器焼型壺である。口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ、内外面赤彩（体部下端除く）。法量は口径12.4cm、器高9.2cmを測る。

5、6は土師器鉢である。5はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面荒いヘラナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は口径17.6cm、器高7.4cmを測る。6は口縁部～底部3/4遺存する。縱方向のヘラケズリ、底部横方向のヘラケズリ、内外面赤彩（胴部下端除く）。法量は口径16.1cm、器高11.9cm、底径5.8cmを測る。

7は土師器小型甕である。口縁部～胴部2/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリか（摩滅により詳細不明）。法量は口径12.3cm、器高9.0cmを測る。

8は土師器瓶である。3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面荒いヘラナデ。法量は口径22.8cm、器高16.0cm、底径5.5cmを測る。

9はほぼ完形の手捏土器である。内外面指頭痕。法量は口径4.9cm、器高2.6cmを測る。

10は須恵器甕である。頸部のみ1/10遺存する。ロクロ成形。頸部墜帯直下に崩落波状紋あり。

H-082（第108・109図）

調査区中央部やや西よりに位置する。H-081、H-083と重複する。規模は6.20m×6.19mを測り、形状は方形を呈する。

床面は全体に硬化範囲が認められる。壁高は約36cmを測る。周溝は、カマド部分を除き全周し、幅21cm、深さ6cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径45cm×42cm、深さ68cm）・P-2（径68cm×82cm、深さ64cm）・P-3（径41cm×73cm、深さ63cm）・P-4（径62cm×103cm、深さ89cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径49cm×45cm、深さ37cm）を測る。カマドは北壁中央に検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺5点、甕1点、石製品1点、支脚1点、計8点を図示した。

1～5は土師器壺である。1はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は口径11.6cm、器高4.9cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ。外面体部ヘラケズリ。内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は復元口径13.3cm、器高5.2cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（底部除く）。法量は復元口径13.3cm、器高6.0cm、底部は丸底である。4は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ後ヘラナデ。内外面赤彩（外面体部下端除く）。法量は復元口径11.6cm、器高4.0cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部1/10遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。法量は復元口径13.1cm、残存器高2.9cmを測る。

6は土師器甕である。口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径18.2cm、器高27.2cm、底径6.7cmを測る。

7は土製支脚である。長さ10.1cm、幅5.5cm、重量122.2gを測る。

8は砥石か。長さ11.0cm、幅8.0cm、厚さ1.3cm、重量は167.4gを測る。

H-083（第109・110・111図）

調査区中央部やや西よりに位置する。H-082、M-037に切られる。規模は5.50（推定）m×5.50mと推測できる。形状は方形と思われる。

廐屋後廐材を焼却処分している。焼土や炭を床面より検出した。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約30cmを測る。周溝は他造構に切られる部分と南壁中央を除き、検出した。幅22cm、深さ7cmを測る。南壁の周溝は途中で断ち切れている。

ピットは床面に6本検出された。主柱穴はP-1（径36cm×33cm、深さ54cm）・P-2（径24cm×27cm、深さ23cm）・P-3（径34cm×31cm、深さ51cm）・P-4（径30cm×27cm、深さ70cm）・P-5（径35cm×34cm、深さ25cm）・P-6（径40cm×35cm、深さ52cm）を測る。カマドは北壁中央に検出された。南壁中央付近に検出された貯蔵穴は、径129cm×85cm、深さ37cmを測り、隅丸長方形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち壺3点、高壺1点、小鉢1点、壺5点、瓶2点、石製品1点、計13点を図示した。

1・2は土師器壺である。1は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径14.9cm、器高5.5cmを測る。2は口縁部～体部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は復元口径12.9cm、残存器高5.5cmを測る。

3は土師器高壺である。壺部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内外面赤彩。この時期の高壺部の特徴が顕著に現れている。法量は復元口径15.5cm、残存器高7.8cmを測る。

4はほぼ完形の土師器小鉢である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径8.2cm、器高5.0cm、底径4.0cmを測る。

5はほぼ完形の土師器コップ型壺である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ、内面体部下端に輪積痕あり。法量は口径9.2cm、器高8.9cm、底径4.0cmを測る。

6～10は土師器壺である。6は口縁部のみ1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面荒いヘラナデ。法量は口径15.7cm、残存器高6.1cmを測る。7は口縁部～底部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内面下端、器面斑状に剥落。法量は復元口径13.0cm、器高21.2cm、復元底径6.8cmを測る。8は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径16.2cm、残存器高24.0cmを測る。9は口縁部～胴部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径17.1cm、残存器高23.4cmを測る。10は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径20.8cm、残存器高19.9cmを測る。

11・12は土師器瓶である。11は口縁部～底部3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径25.7cm、器高28.6cm、底径7.0cmを測る。12は口縁部～胴部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径22.2cm、器高22.0cm、復元底径9.5cmを測る。

13は砥石である。長さ8.1cm、幅8.1cm、厚さ4.3cm、重量270.5gを測る。

H-084（第111図）

調査区西南部に位置する。規模は4.40（推定）m×3.65mを測り、形状は楕円形を呈する。

周溝は、東側を除いて検出した。幅16cm、深さ3cmを測る。

ピットは床面に1本検出された。主柱穴はP-1（径60cm×13.1cm、深さ20cm）を測る。

炉が住居跡中央、西よりに検出された。

H-085（第112図）

調査区西部に位置する。H-080、H-086、M-026と重複する。規模は5.25m×5.40mを測り、形状は方

第2節 壁穴住居跡

形を呈する。

床面全体に貼っている。壁高は約30cmを測る。周溝はカマドと搅乱部分を除き全周し、幅19cm、深さ7cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径34cm×68cm、深さ58cm）・P-2（径39cm×38cm、深さ54cm）・P-3（径50cm×61cm、深さ57cm）・P-4（径68cm×52cm、深さ52cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径不明×30cm、深さ10cm）を測る。カマドは北西壁中央に検出された。火床部はよく焼けている。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺1点、支脚1点、計2点を図示した。

1は土師器壺である。1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径17.0cm、残存器高5.6cmを測る。

2は土製支脚である。現存長10.7cm、幅8.0cm、厚さ7.5cm、重量715.6gを測る。

H-086（第113図）

調査区西部に位置する。H-087、H-088、H-089、H-091と重複する。規模は8.00m×7.90mを測り、形状は方形であろう。

廃屋後廃材を焼却処分している。床面は全体に硬化範囲が認められる。壁高はほとんどない。周溝は切られた部分を除いて検出され、幅19cm、深さ6cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径53cm×63cm、深さ75cm）・P-2（径58cm×54cm、深さ90cm）・P-3（径52cm×53cm、深さ60cm）・P-4（径57cm×64cm、深さ88cm）の4本が対角線上に配される。カマドは西壁中央北よりに検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺3点、鉢1点、壺2点、支脚1点、玉2点、計9点を図示した。

1～3は土師器壺である。1は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は口径14.4cm、残存器高5.0cmを測る。2は口縁部～底部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。内外面赤彩（外面体部・内面体部下端除く）。法量は復元口径14.0cm、器高4.6cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は口径14.1cm、器高6.0cm、底径4.8cmを測る。

4は土師器鉢である。口縁部～体部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ、内外巻上痕疾す。法量は復元口径19.1cm、残存器高8.8cmを測る。

5・6は土師器壺である。5は胴部～底部1/2遺存する。外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ後ヘラナデ。法量は残存器高12.0cmを測る。6は口縁部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径18.8cm、残存器高7.4cmを測る。

7は土製支脚である。長さ15.4cm、幅5.0cm、厚さ5.4cm、重量542.8gを測る。

8・9は土玉である。8は径0.8cm、厚さ0.6cm、孔径0.2cm、重量も0.2gである。9は径1.2cm、厚さ0.8cm、孔径0.1cm～0.3cm、重量1.22gである。

H-087（第112図）

調査区西部に位置する。H-080、H-085、H-086、H-088、H-089、M-037と重複する。規模は6.10m×6.30mを測り、形状は方形であろう。

床面は全体に貼っている。壁高はほとんどない。周溝は、重複部分を除いて検出され、幅17cm、深さ4cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径40cm×30cm、深さ53cm）・P-2（径33cm×35cm、深さ76cm）・P-3（径50cm×55cm、深さ57cm）・P-4（径37cm×43cm、深さ62cm）の4本が対角線上に配され、P-5は（径31cm×30cm、深さ36cm）を測る。カマドも炉も検出されず、東壁中央に貯蔵穴が検出され、径92cm×70cm、深さ19cmを測り、楕円形を呈する。周辺の住居では一番古いと思われる。

本住居跡の遺物は、小片であったため図示できなかった。

H-088（第114図）

調査区西部に位置する。H-089、D-072と重複する。規模は5.15m×5.15mを測り、形状は方形を呈する。

床面は全体に硬化面がみられる。壁高は20cmを測る。周溝はカマド部分を除き全周し、幅22cm、深さ4cmを測る。

ピットは床面に7本検出された。主柱穴はP-1（径62cm×52cm、深さ77cm）・P-2（径43cm×65cm、深さ70cm）・P-3（径66cm×65cm、深さ78cm）・P-4（径47cm×69cm、深さ62cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は（径34cm×26cm、深さ9cm）を測る。P-6（径35cm×24cm、深さ17cm）・P-7（径27cm×35cm、深さ14cm）は用途不明。カマドは北壁中央に検出された。P-2から周溝に向かって1条の間仕切り溝が東西に走る。北壁東寄りの貯蔵穴は、径70cm×64cm、深さ46.7cmを測り、隅丸方形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち壺6点、高壺2点、甕1点、玉2点、計11点を図示した。

1～4は土師器壺である。1は3/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（外面底部・内面体部除く）。法量は口径14.1cm、器高5.3cm、底部は丸底である。2はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラ削り、内面ナデ。法量は口径14.9cm、器高3.8cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径13.6cm、残存器高3.5cmを測る。4は体部～底部3/4遺存する。外面体部下端ヘラケズリ、法量は残存器高4.0cm、底部は丸底で小型である。

5は椀型壺である。口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面赤彩（下端除く）。法量は復元口径8.2cm、残存器高6.6cmを測る。

6は須恵器壺である。1/5遺存する。ロクロ成形。口縁部内面に返りがつく。法量は残存器高2.7cmを測る。

7・8は土師器高壺である。7は壺部の一部と脚部上端のみである。外面ヘラケズリ後ヘラナデ。内面ナデ。壺部黒色処理。法量は残存器高3.0cmを測る。8は壺部の一部と脚部のみである。壺部・脚部外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高6.9cmを測る。

9は土師器甕である。1/3遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高10.2cmを測る。

10、11は土製勾玉である。10は長さ2.0cm、幅0.8cm、厚さ0.7cm、孔径0.2cm、重量1.79gを測る。11は長さ2.0cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm、重量1.49gを測る。

H-089（第115図）

調査区西部に位置する。H-086、H-088、H-090、M-037と重複する。規模は7.50（推定）m×7.50mを推測し、形状は方形と思われる。

第2節 壁穴住居跡

周溝は、重複部分とカマド部分を除いて全周し、幅25cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径50cm×65cm、深さ63cm）・P-2（径67cm×75cm、深さ47cm）・P-3（径50cm×45cm、深さ52cm）・P-4（径60cm×不明、深さ55cm）の4本が対角線上に配される。周溝に沿って補助柱穴15本を検出した。P-5（径25cm×不明、深さ7cm）・P-6（径20cm×不明、深さcm）・P-7（径26cm×不明、深さ22cm）・P-8（径28cm×不明、深さ11cm）・P-9（径20cm×不明、深さ8cm）・P-10（径15cm×14cm、深さ9cm）・P-11（径27cm×20cm、深さ7cm）・P-12（径25cm×不明、深さ8cm）・P-13（径21cm×24cm、深さ12cm）・P-14（径15cm×不明、深さ9cm）・P-15（径30cm×不明、深さ8cm）・P-16（径32cm×不明、深さ4cm）・P-17（径35cm×不明、深さ7cm）・P-18（径36cm×不明、深さ3cm）・P-19（径20cm×不明、深さ5cm）を測る。カマドは北壁中央に検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺3点、蓋1点、手捏1点、玉1点、計6点を図示した。

1～3は土師器壺である。1はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。法量は口径12.3cm、器高4.7cm、底部は丸底である。2は口縁部欠損4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリおよびヘラミガキ、口縁部内面ヨコナデ後ヘラミガキ、法量は口径14.4cm、器高5.0cm、底部は丸底である。3は口縁部1/4遺存する。口縁部外表面ヨコナデ後ヘラミガキ、内面ヨコナデ後ヘラミガキ。法量は復元口径14.7cm、残存器高3.0cmを測る。

4は須恵器蓋である。天井部～口縁部1/10遺存する。ロクロ成形。法量は復元口径13.0cm、残存器高4.4cmを測る。

5は手捏土器である。1/4遺存する。全体に指頭痕が顕著である。法量は復元口径5.8cm、残存器高2.5cmを測る。

6は土玉である。径0.9cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cm、重量0.4gである。

H-090（第116図）

調査区南西部に位置する。M-037、D-062、D-084、D-085、D-087、D-088と重複する。規模は6.60m×6.40（推定）mと推測し、形状は方形と思われる。

周溝は断続的に検出され、幅23cm、深さ4cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径56cm×44cm、深さ62cm）・P-2（径28cm×24cm、深さ30cm）・P-3（径45cm×51cm、深さ96cm）・P-4（径41cm×44cm、深さ63cm）の4本が対角線上に配される。炉が西壁寄りに2基検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺1点と壺片1点、計2点を図示した。

1は土師器壺である。口縁部～底部2/3遺存する。外面ヘラケズリ後体部ヘラナデ、内面ナデ。内外赤彩。法量は口径15.2cm、器高5.9cm、底部は丸底である。

2は土師器壺の底部片である。外面ヘラケズリ後ヘラナデ、内面ナデ。法量は残存器高2.1cm、底径4.9cmを測る。

H-091（第117図）

調査区西部に位置する。H-086、H-088、H-089、D-112と重複する。規模は5.50m×5.80mと推測し、形状は方形と思われる。

床面はカマド前面から中央部にかけて硬化範囲が認められる。周溝は断続的に検出され、幅18cm、深さ3cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1(径42cm×47cm, 深さ69cm)・P-2(径65cm×53cm, 深さ87cm)・P-3(径61cm×52cm, 深さ85cm)・P-4(径55cm×60cm, 深さ83cm)の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5は(径25cm×22cm, 深さ15cm)を測る。カマドは北西壁中央に検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺2点、甕2点、小甕1点、玉2点、計7点を図示した。

1, 2は土師器壺である。1は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(体部下端除く)。法量は復元口径12.4cm、器高5.5cm、底部は丸底である。2は口縁部欠損4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(底部除く)。法量は口径14.4cm、器高5.1cm、底部は丸底である。

3は土師器小型甕である。胴部～底部1/5遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。外面器面剥離。法量は残存器高8.5cm、底径4.6cmを測る。

4, 5は土師器甕である。4は口縁部～胴部1/10遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径14.0cm、残存器高8.0cmを測る。5は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径16.8cm、残存器高14.7cmを測る。

6, 7は土玉である。6は径0.9cm、厚さ0.6cm、孔径0.1cm～0.3cm、重量0.56gを測る。7は径0.9cm、厚さ0.7cm、孔径0.15cm、重量0.5gを測る。

種子2点は写真のみの掲載である。

H-092(第118・119図)

調査区西部に位置する。D-068, D-113, D-119, D-120, D-121, D-122と重複する。規模は5.50m×5.10mを測り、形状は方形を呈する。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約26cmを測る(東壁)。周溝は重複部分とカマド部分を除き全周し、幅21cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1(径42cm×38cm、深さ66cm)・P-2(径30cm×32cm、深さ56cm)・P-3(径22cm×25cm、深さ61cm)・P-4(径37cm×42cm、深さ60cm)の4本が対角線上に配される。カマドは北西壁中央に検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺5点、鉢1点、高壺1点、小甕1点、甕1点、瓶1点、玉1点、石製品1点、軽石1点、計13点を図示した。

1～5は土師器壺である。1は口縁部一部欠損しているがほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(外面体部下端を除く)。法量は口径12.8cm、器高5.0cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径13.6cm、残存器高4.4cmを測る。3は口縁部～底部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(外面底部除く)。法量は復元口径13.8cm、残存器高5.6cm、底部は丸底である。4は1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径13.9cm、器高5.4cm、底部は丸底である。5は口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(外面体部下端除く)。法量は復元口径13.7cm、器高5.3cm、底部は丸底である。

6は土師器鉢である。口縁部～胴部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径13.8cm、残存器高4.3cmを測る。

7は土師器高壺である。脚部1/5遺存する。内外面ヘラケズリ。外面赤彩。法量は残存器高4.8cmを測る。

第2節 壁穴住居跡

8は土器器小型壺である。口縁部～底部2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径12.8cm、器高16.5cm、底径6.1cmを測る。

9は土器器壺である。口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径14.4cm、器高27.3cm、底径5.5cmを測る。

10はほぼ完形の土器器瓶である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径18.8cm、器高22.5cm、底径7.0cmを測る。

11は土製支脚である。長さ9.1cm、幅6.5cm、重量161.2gを測る。

12は軽石である。長さ9.7cm、幅8.5cm、厚さ6.0cm、重量116.0gを測る。

13は石製の臼玉である。径0.55cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cm、重量0.1gを測る。

H-093（第120・121図）

調査区中央部に位置する。H-081、H-094、M-032、M-042と重複する。規模は6.63m×6.35mを測り、形状は不整方形を呈する。

覆土は4層に分層され、人為的に埋め戻されている。

床面は全体に硬化範囲が認められる。壁高は約40cmを測る（西壁）。周溝はほぼ全周し、幅24cm、深さ3cmを測る。

ピットは床面に7本検出された。主柱穴はP-1（径30cm×35cm、深さ70cm）・P-2（径38cm×25cm、深さ71cm）・P-3（径38cm×34cm、深さ82cm）・P-4（径30cm×38cm、深さ79cm）の4本が対角線上に配され、カマドと正対して位置するP-5（径30cm×28cm、深さ28cm）・P-6（径30cm×25cm、深さ9cm）、P-3とP-4の間のP-7（径32cm×31cm、深さ40cm）を測る。カマドは北壁中央に検出された。本住居跡中央より土玉が多量に検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺7点、鉢1点、甕1点、手捏土器2点、支脚1点、石製品3点、玉21点、計36点を図示した。

1～7は土器器壺である。1は完形。口縁部ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径10.6cm、器高4.8cm、底部は丸底である。2は完形。口縁部ヨコナデ、ヘラケズリ後ナデ、内面ナデか（中心部剥離で不明）。内外面赤彩（底部除く）。法量は口径10.9cm、器高5.2cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径10.4cm、残存器高5.1cmを測る。4は口縁部～体部1/6遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（内面下端除く）。法量は復元口径13.6cm、残存器高5.0cmを測る。5は1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は復元口径14.0cm、器高5.2cm、底部は丸底である。6は1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ナデ、内面ナデ。内外面赤彩（内面底部除く）。法量は復元口径14.2cm、器高4.2cm、底部は丸底である。7は口縁部～体部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径12.8cm、残存器高3.9cmを測る。

8は土器器鉢である。胴部～底部1/5遺存する。外面ヘラケズリ、内面荒れていて調整不明。法量は残存器高7.8cmを測る。

9は土器器壺である。口縁部～胴部1/10遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径14.8cm、残存器高8.5cmを測る。

10・11は手捏土器である。10は口縁部一部欠損しているがほぼ完形。指頭痕あり。法量は口径3.9cm、器高1.4cmを測る。11は口縁部～底部4/5遺存する。指頭痕あり。法量は口径5.5cm、器高3.1cmを測る。

12は土製支脚である。長さ7.3cm、幅6.2cm、厚さ3.2cm、重量135.2gを測る。

13・14は軽石である。13は長さ3.8cm、幅4.9cm、厚さ2.0cm、重量6.0gを測る。14は長さ4.7cm、幅4.6cm、厚さ4.3cm、重量26.0gである。

15は石製軽車の完形である。径3.4cm、厚さ1.5cm、孔径0.8cm、重量25.0gを測る。

16～35は土玉である。16は径0.7cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cm、重量0.1gを測る。17は径0.8cm、厚さ0.4cm、孔径0.1cm～0.2cm、重量0.2gを測る。18は径0.7cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cm、重量0.2gを測る。19は径0.8cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cm、重量0.3gを測る。20は径0.8cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cm、重量0.2gを測る。21は径0.8cm、厚さ0.7cm、孔径0.2cm、重量0.4gを測る。22は径0.8cm、厚さ0.6cm、孔径0.2cm、重量0.3gを測る。23は径0.8cm、厚さ0.7cm、孔径0.1cm～0.2cm、重量0.4gを測る。24は径0.9cm、厚さ0.7cm、孔径0.2cm～0.3cm、重量0.4gを測る。25は径0.9cm、厚さ0.6cm、孔径0.2cm、重量0.5gを測る。26は径0.8cm、厚さ0.7cm、孔径0.2cm、重量0.4gを測る。27は径0.9cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cm、重量0.3gを測る。28は径0.9cm、厚さ0.7cm、孔径0.3cm、重量0.3gを測る。29は径0.9cm、厚さ0.6cm、孔径0.2cm～0.3cm、重量0.5gを測る。30は径1.0cm、厚さ0.7cm、孔径0.1cm～0.2cm、重量0.4gを測る。31は径1.0cm、厚さ0.7cm、孔径0.2cm、重量0.5gを測る。32は径0.9cm、厚さ0.7cm、孔径0.2cm、重量0.5gを測る。33は径1.0cm、厚さ0.7cm、孔径0.2cm、重量0.4gを測る。34は径1.2cm、厚さ0.8cm、孔径0.1cm～0.3cm、重量0.8gを測る。35は径1.3cm、厚さ1.0cm、孔径0.2cm～0.3cm、重量1.16gを測る。36は土製勾玉である。長さ2.8cm、厚さ0.9cm、孔径0.2cm～0.3cm、重量5.1gを測る。

H-094 (第119図)

調査区南西部に位置する。H-093、M-032、M-037と重複する。規模は不明×5.50mを測り、形状は方形と思われる。

床面はD-225付近一部を除いて硬化範囲が認められる。壁高は約50cmを測る(北壁)。周溝は、西壁一部を検出し、幅24cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に2本検出された。主柱穴はP-1(径30cm×25cm、深さ34cm)・P-2(径30cm×34cm、深さ38cm)を測る。カマドも炉も検出されなかった。

本住居跡から出土した遺物のうち、手捏土器1点、壺1点、計2点を図示した。

1は手捏土器の高壺か。脚部1/2遺存する。指頭痕あり。法量は残存器高2.9cm、底径4.8cmを測る。

2は土器壺である。口縁部～胴部片である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径19.8cm、残存器高6.5cmを測る。

H-095 (第122図)

調査区西南部に位置する。規模は5.00m×5.60mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は5層に分層され、廃屋後廃材を焼却処分した後、人为的に埋め戻されている。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約40cmを測る。周溝は南東側を除き、ほぼ全周し、幅25cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1(径19cm×21cm、深さ42cm)・P-2(径34cm×29cm、深さ25cm)・P-3(径30cm×32cm、深さ15cm)・P-4(径80cm×95cm、深さ24cm)の4本が対角線上に配される。カマドは破壊されてはいるが西壁中央より検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺3点、壺2点、玉4点、支脚1点、計10点を図示した。

第2節 壁穴住居跡

1～3は土器器坏である。1はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデか（赤彩のため単位方向不明）。内外面赤彩（外面体部下端除く）。法量は口径9.5cm、器高5.8cm、底部は丸底である。

2は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（内面底部除く）。法量は口径13.0cm、器高8.3cm、底部は丸底である。3は口縁部～体部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ。内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径15.2cm、残存器高5.0cmを測る。

4・5は土器器壺である。4は胴部～底部1/5遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は残存器高6.5cm、底径7.2cmを測る。5は口縁部～胴部1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径13.8cm、残存器高10.5cmを測る。

6は土製支脚である。法量は長さ13.5cm、幅7.3cm、重量634.3gを測る。

7・8は石製臼玉である。7は綠岩石製である。径0.5cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cm、重量0.1gを測る。8は綠岩石製である。径0.8cm、厚さ0.8cm、孔径0.3cm、重量0.4gを測る。

9・10は土玉である。9は径0.8cm、厚さ1.0cm、孔径0.1cm、重量0.6gを測る。10は径1.0cm、厚さ0.4cm、孔径0.2cm、重量0.1gを測る。

H-096（第123図）

調査区南西部に位置する。規模は不明、形状は方形と思われる。

壁高は約40cmを測る。周溝は、調査区外にかかるため北壁、東壁部分のみ検出され、幅22cm、深さ2cmを測る。

ピットは床面に2本検出された。主柱穴はP-1（径45cm×55cm、深さ25cm）・P-2（径35cm×39cm、深さ41cm）を測る。補助柱穴はP-3（径50cm×50cm、深さ20cm）を測る。カマドは北壁に検出された。火床部はよく焼けている。

本住居跡から出土した遺物のうち环2点、壺2点、鉄製品1点、計5点を図示した。

1は須恵器壺である。体部～底部1/3遺存する。ロクロ成形。体部下端から底部は手持ちヘラケズリ。法量は残存器高2.0cm、底径7.5cmを測る。

2は須恵器壺である。口縁部から体部1/5遺存する。ロクロ成形、法量は復元口径14.0cm、残存器高1.8cmを測る。

3・4は土器器壺である。3は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ（器面はかなり荒れている）、内面ナデ。法量は復元口径20.4cm、残存器高29.2cm、底径12cmを測る。

4は口縁部～胴部1/10遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面は荒れていて調整痕不明。法量は口径15.1cm、残存器高6.2cmを測る。

5は鉄製鎌の刃部である。推測長さ19.0cm、現存幅1.8cm～3.3cm、厚さ0.3cm、重量51.0gを測る。

H-102（第123・124図）

調査区中央南部に位置する。M-040と重複する。規模は5.00m×4.70mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は7層に分層され、人為的に埋め戻されている。

床面は全体に硬化範囲が認められる。壁高は約76cmを測る。周溝は、カマド部分を除き全周し、幅28cm、深さ3cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径91cm×75cm、深さ45cm）・P-2（径53cm×65cm、深さ69cm）・P-3（径67cm×72cm、深さ42cm）・P-4（径41cm×39cm、深さ59cm）の4本が対角線上に配さ

れ、カマドと正対して位置するP-5は（径45cm×42cm、深さ59cm）を測る。カマドは北壁中央に検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺2点、甕1点、玉1点、鉄製品1点、計5点を図示した。

1、2は土師器壺である。1は1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径13.6cm、器高3.4cm、底部は丸底である。2は1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ。法量は口径15.1cm、器高6.0cm、底部は丸底である。

3は土師器甕である。底部1/10遺存する。外面ヘラケズリ、内面剥離で調整不明。法量は残存器高3.8cm、底径9.5cmを測る。

4は土玉である。径1.1cm、厚さ0.7cm、孔径0.2cm、重量0.4gを測る。

5は鉄鎌の茎の一部分である。現存長3.3cm、幅0.5cm、厚さ0.3cm、重量3.0gを測る。

H-105（第124図）

調査区中央南部に位置する。D-215に切られる。規模は6.70m×6.40mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は廐屋後、柱内などを除き焼却し、その後人為的に埋め戻されている。

床面は全体に硬化範囲が認められる。壁高は約40cmを測る。周溝は、南東、南西の隅とカマド部分を除き、ほぼ全周し、幅21cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径38cm×43cm、深さ81cm）・P-2（径39cm×41cm、深さ81cm）・P-3（径30cm×31cm、深さ85cm）・P-4（径43cm×33cm、深さ95cm）の4本が対角線上に配される。カマドは東壁中央より南により検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち壺3点、玉1点、計4点を図示した。

1～3は土師器壺。1は口縁部～体部1/2遺存。外面ヘラケズリ、内面ナデ後ミガキ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は復元口径13.6cm、残存器高5.0cmを測る。2は完形、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径15cm、器高5.8cmを測る。3は口縁部～底部1/2遺存。外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径16.0cm、器高4.9cmを測る。

4は土玉である。径1.1cm、厚さ0.9cm、孔径0.2cm、重量1.04gを測る。

H-106（第125図）

調査区西南部に位置する。H-103、H-108、H-109、M-032と重複する。規模は5.54m×5.70mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は2層に分層され、人為的に埋め戻されている。

周溝は、重複部分を除き全周し、幅18cm、深さ4cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径45cm×32cm、深さ58cm）・P-2（径30cm×29cm、深さ63cm）・P-3（径30cm×32cm、深さ66cm）・P-4（径33cm×40cm、深さ76cm）の4本が対角線上に配される。炉が西壁寄りに検出された。周溝から主柱穴に向かって3条の間仕切り溝が東西に走る。

本住居跡から出土した遺物のうち壺1点、鉢1点、鉄製品1点、計3点を図示した。

1は土師器壺型壺である。口縁部～底部1/4を遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（内面体部除く）。法量は復元口径11.8cm、残存器高6.9cmを測る。

2は土師器鉢である。口縁部～胴部1/4を遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（内面胴部除く）。法量は復元口径14.4cm、残存器高4.6cmを測る。

第2節 壁穴住居跡

3は鉄鍵である。現存長3.1cm、幅2.4cm、厚さ0.4cm、重量2.80cmを測る。

H-107（第126図）

調査区中央南部に位置する。H-101、H-102、M-040と重複する。規模は4.75m×4.40（推定）mを測り、形状は方形と思われる。

覆土は4層に分層され、廃屋後廃材を焼却処分した後、人為的に埋め戻されている。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約30cmを測る（東壁）。周溝は、重複部分を除き全周し、幅25cm、深さ3cmを測る。

ピットは床面に5本検出された。主柱穴はP-1（径41cm×40cm、深さ47cm）・P-2（径42cm×44cm、深さ54cm）・P-3（径31cm×33cm、深さ55cm）・P-4（径44cm×35cm、深さ49cm）の4本が対角線上に配され、P-5は（径26cm×31cm、深さ55cm）を測る。

本住居跡から出土した遺物のうち土師器壺4点を図示した。

1は土師器壺で完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデか（内面剥離で調整不明）。法量は口径14.0cm、器高5.6cm、底部丸底である。2はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面は剥離で調整不明。法量は口径14.3cm、器高6.2cm、底部は丸底である。3は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径14.1cm、器高7.5cm、底部は丸底である。4はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径16.5cm、器高7.4cm、底部は丸底である。

H-110（第127・128図）

調査区中央部に位置する。H-111、H-112、M-001、M-008、D-204と重複する。規模は7.50m×7.50mを測り、形状は方形を呈する。

床面の硬化範囲は認められない。周溝は、重複部分とカマド部分を除き全周し、幅14cm、深さ6cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径47cm×46cm、深さ60cm）・P-2（径43cm×39cm、深さ100cm）・P-3（径42cm×44cm、深さ86cm）・P-4（径45cm×55cm、深さ91cm）の4本が対角線上に配される。カマドは北壁中央に検出された。東南壁寄りに貯蔵穴が検出され、径118cm×84cmを測り、梢円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち壺2点、甕1点、瓶2点、玉1点、石1点、支脚1点、計8点を図示した。

1、2は土師器壺である。1は口縁部～底部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩（体部下端除く）。法量は復元口径14.0cm、器高4.6cm、底部は丸底である。2は口縁部～体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩法量は復元口径15.0cm、残存器高4.6cmを測る。

3は土師器甕である。口縁部～胴部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径12.6cm、残存器高7.5cmを測る。

4・5は土師器瓶である。4は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径25.0cm、器高21.7cm、底径6.8cmを測る。5は口縁部～胴部3/8遺存する。外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径26.0cm、残存器高20.9cmを測る。

6は土製支脚である。現存長12.9cm、幅7.6cm、厚さ7.2cm、重量415.4gを測る。

7は石器である。現存長3.8cm、幅4.4cm、厚さ3.5cm、重量79.3gを測る。

8は土玉である。径0.8cm, 厚さ0.8cm, 孔径0.2cm, 重量0.5gを測る。

H-111 (第128図)

調査区中央部に位置する。H-110, M-008と重複する。規模は4.70(推定)m×4.70(推定)mを測り、形状は方形と思われる。

廐屋後廐材を焼却処分している。周溝は、南壁と東壁のみ検出され、幅14cm, 深さ2cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1(径21cm×22cm, 深さ27cm)・P-2(径40cm×37cm, 深さ78cm)・P-3(径28cm×29cm, 深さ74cm)・P-4(径30cm×25cm, 深さ78cm)の4本が対角線上に配される。東壁寄りに貯蔵穴が検出され、径75cm×63cm, 深さ27cmを測り、円形を呈する。

本住居跡から出土した遺物のうち、高坏1点、手捏土器1点、計2点を図示した。

1は土師器高坏である。坏部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリおよびヘラミガキ、内面ナデ。法量は復元口径13.0cm、残存器高4.5cmを測る。

2は手捏土器である。1/4遺存する。指頭痕あり。法量は復元口径6.0cm、器高4.0cm、底径3.3cmを測る。

H-114 (第129図)

調査区東南部に位置する。規模は1.50(推定)m×2.40(推定)mを測り、形状は方形と思われる。

周溝は、西壁と南壁の一部を検出し、幅10cm、深さ2cmを測る。

ピットは床面に3本検出された。主柱穴はP-2(径40cm×43cm、深さ47cm)・P-4(径40cm×15cm、深さ79cm)を検出し、カマドと正対する位置にあるP-5は(径50cm×49cm、深さ15cm)を測る。

本住居跡から出土した遺物のうち坏5点、壺1点、鉢1点、瓶2点、玉1点、計10点を図示した。

1~4は土師器坏である。1は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(外面下端除く)。法量は口径14.0cm、器高4.5cm、底部は丸底である。2は口縁部～底部1/2遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径13.4cm、残存器高4.6cmを測る。

3はほぼ完形。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は口径14.5cm、器高4.2cm、底部は丸底である。4は口縁部～体部1/4遺存する。外面体部ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩。法量は復元口径15.0cm、残存器高3.6cmを測る。

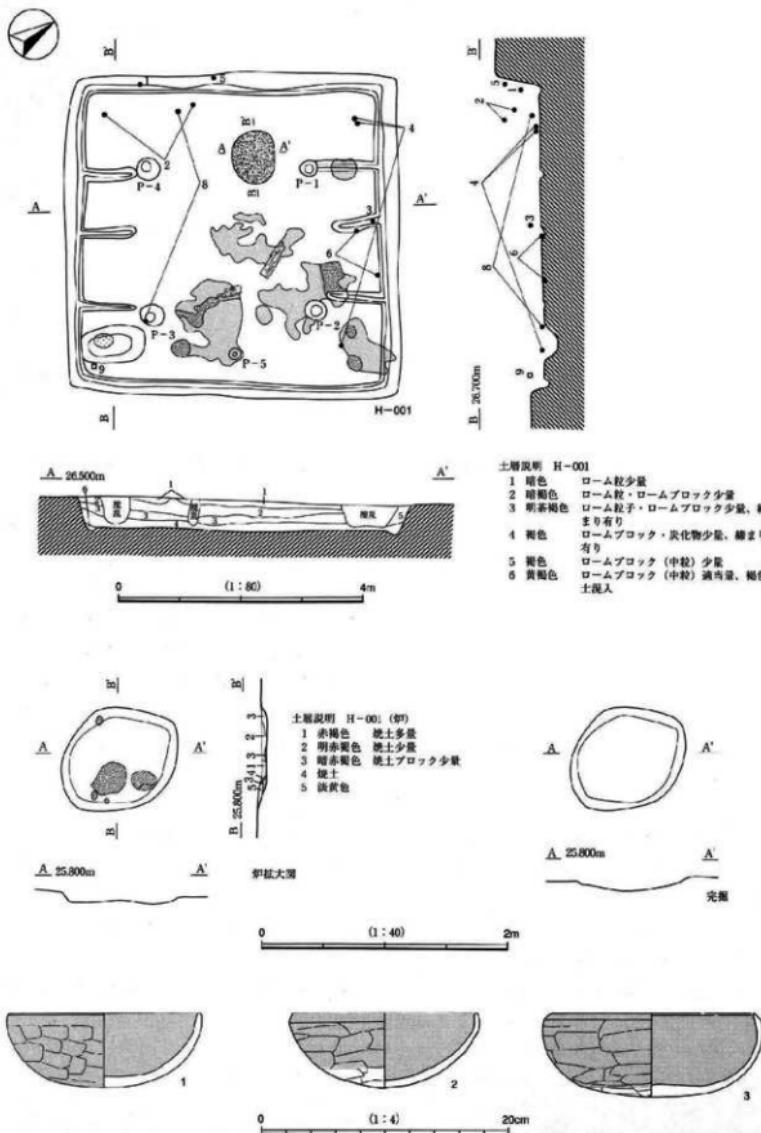
5は土師器碗型坏である。口縁部～体部1/4遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。内外面赤彩(外面下端・内面底部除く)。法量は復元口径13.0cm、器高8.0cm、底部は丸底である。

6は土師器鉢である。1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は復元口径24.0cm、残存器高7.3cmを測る。

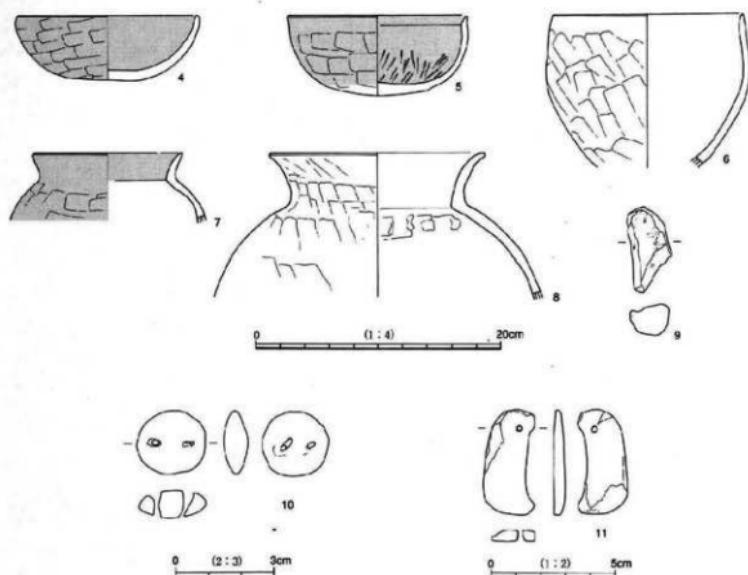
7は土師器壺である。底部欠損で4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径15.6cm、残存器高25.5cmを測る。

8・9は土師器瓶である。8はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径24.8cm、器高23.1cm、底径7.0cmを測る。9は口縁部～底部4/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径32.0cm、器高19.4cm、底径7.2cmを測る。

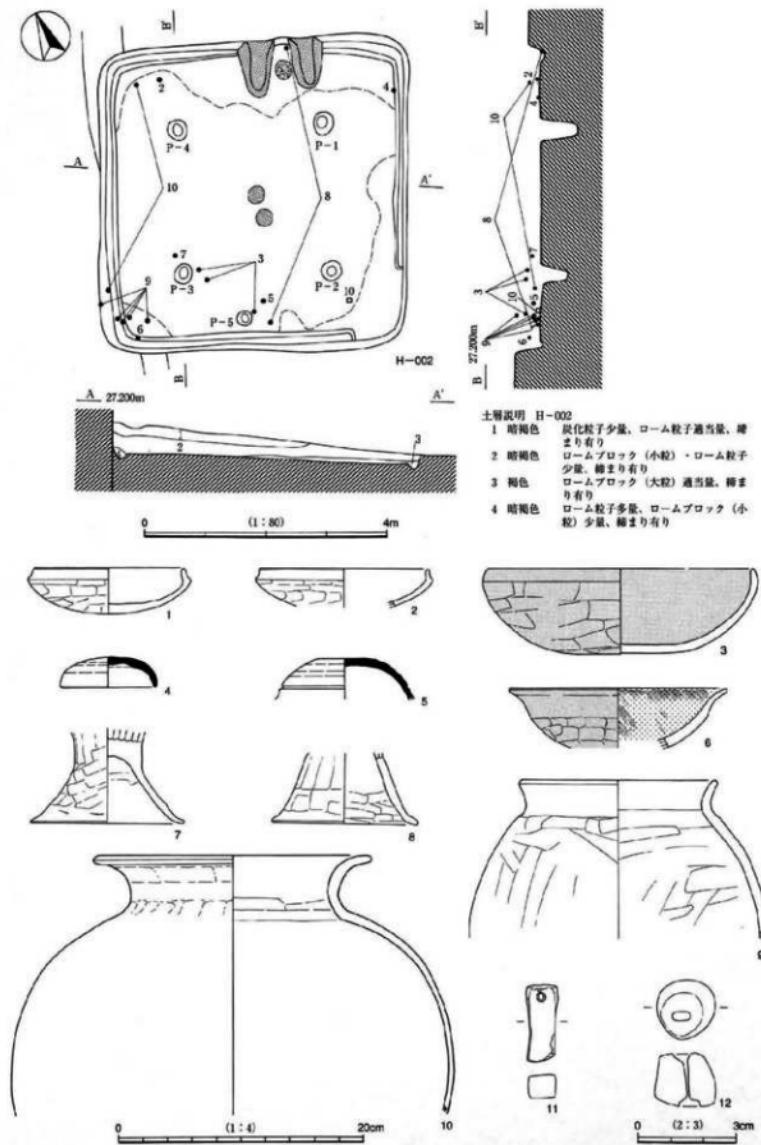
10は土玉である。径1.2cm、厚さ0.9cm、孔径0.3cm～0.4cm、重量1.3gを測る。



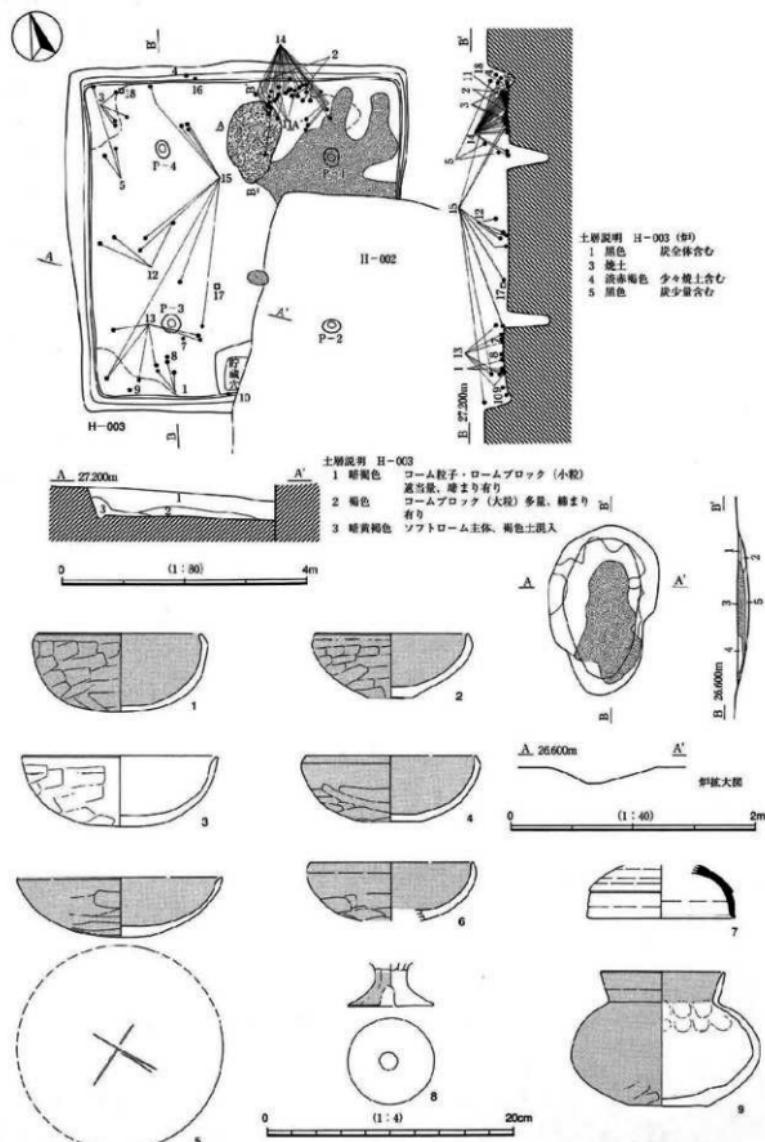
第40図 H-001実測図・出土遺物 (1)



第41図 H-001出土遺物（2）

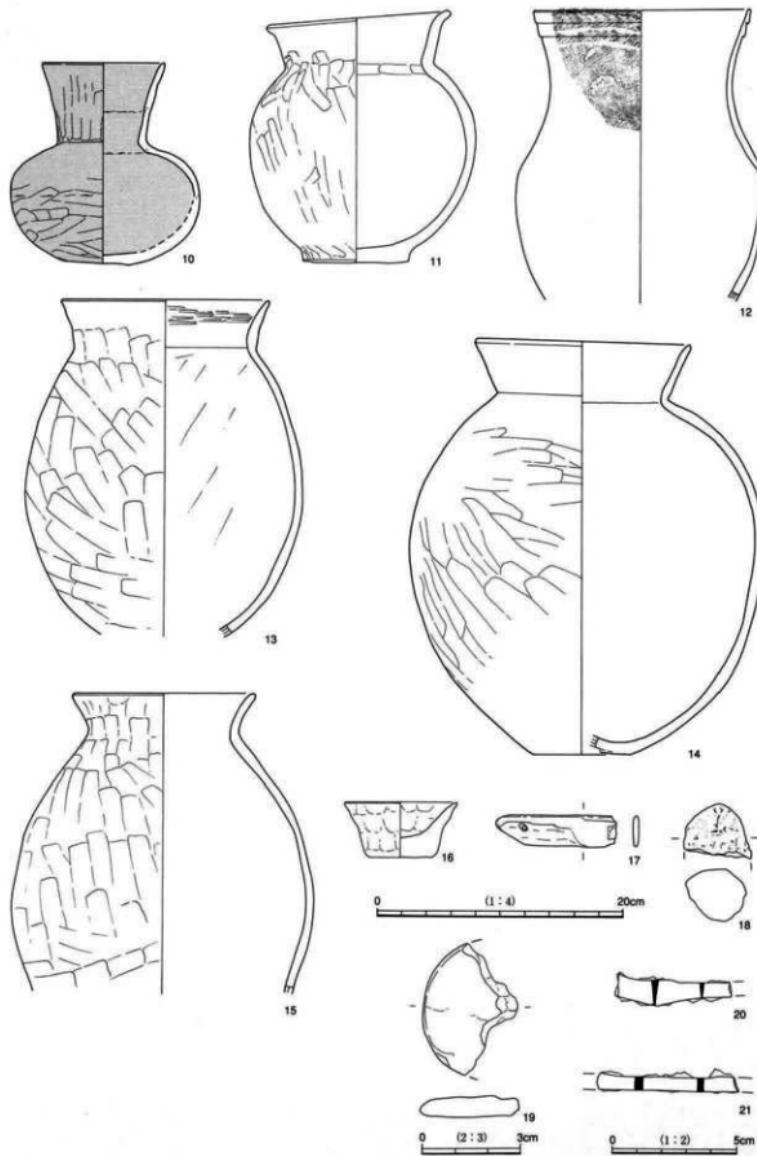


第42図 H-002実測図・出土遺物

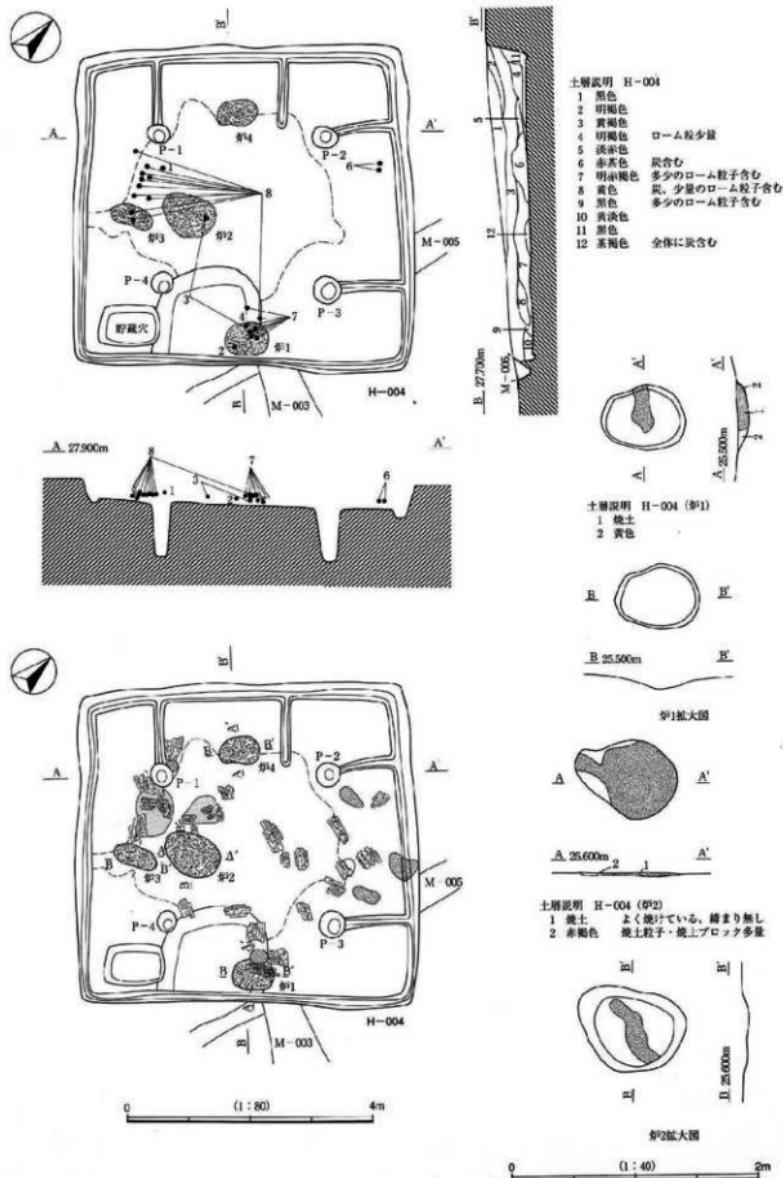


第43図 H-003実測図・出土遺物 (1)

第2節 壓穴住居跡

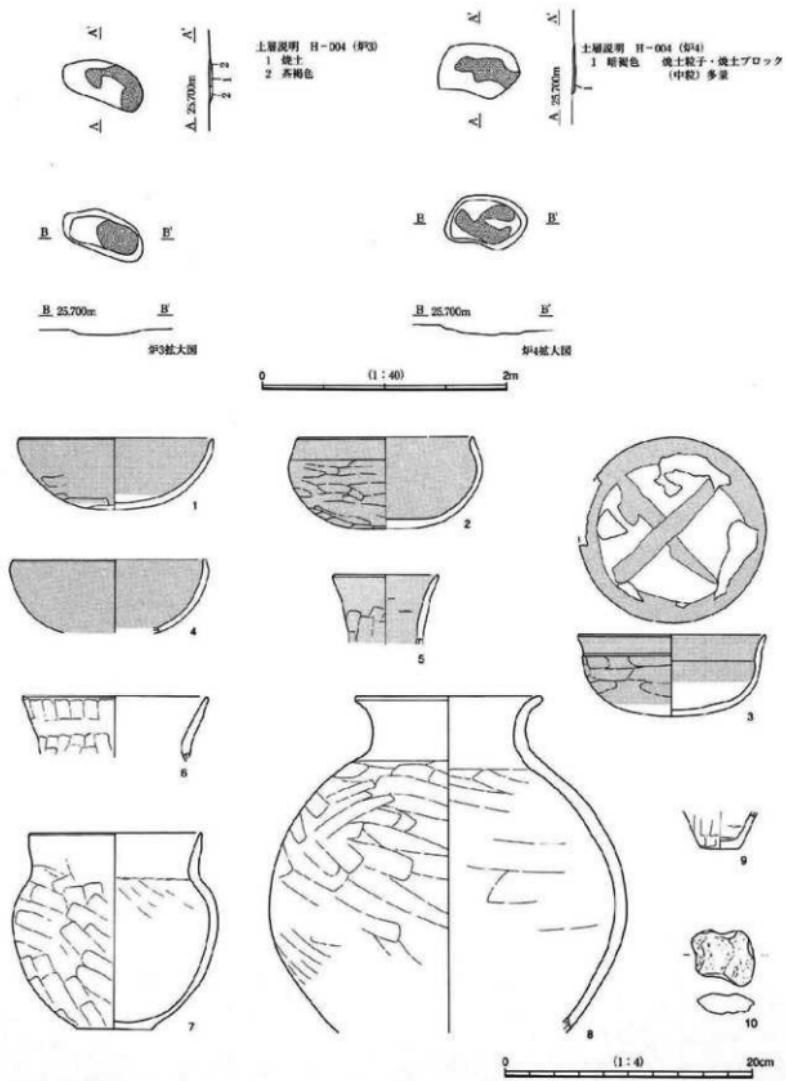


第44図 H-003出土遺物（2）

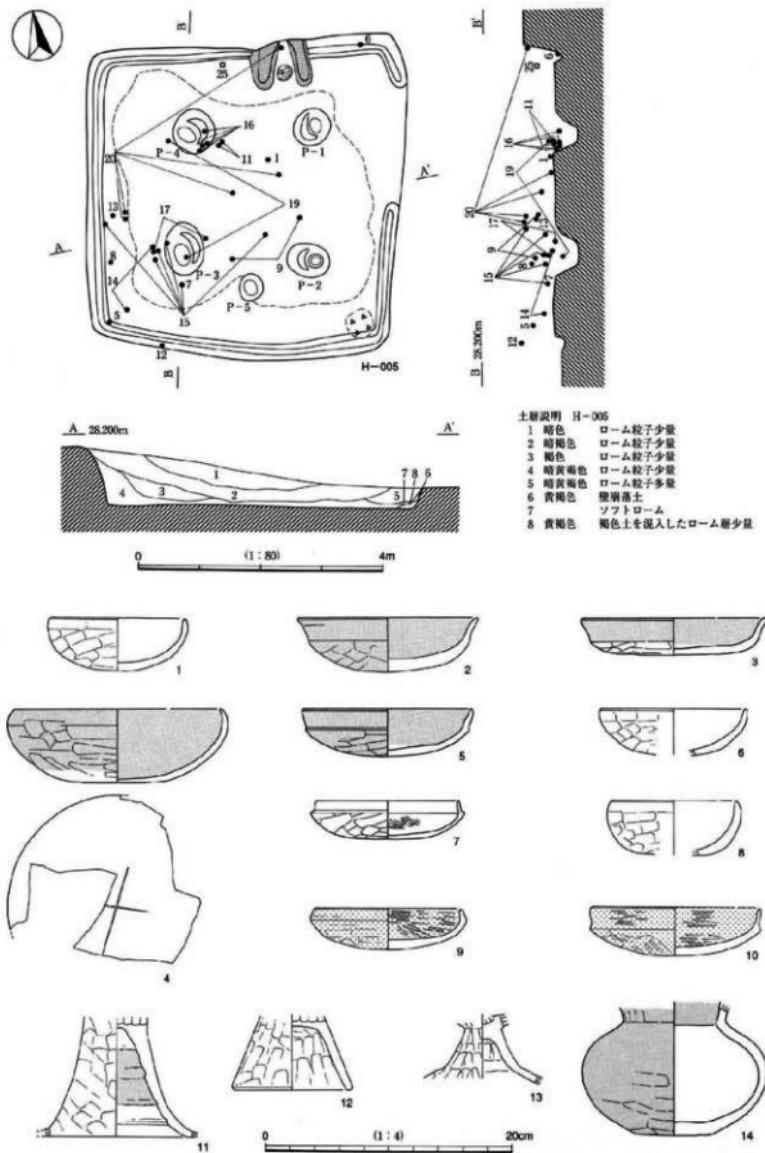


第45図 H-004実測図（1）

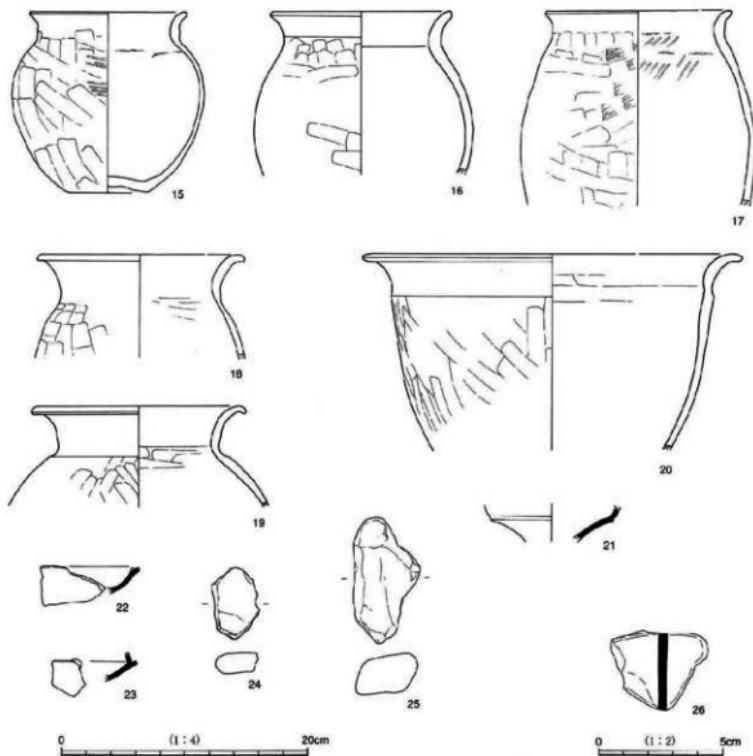
第2節 坪穴住居跡



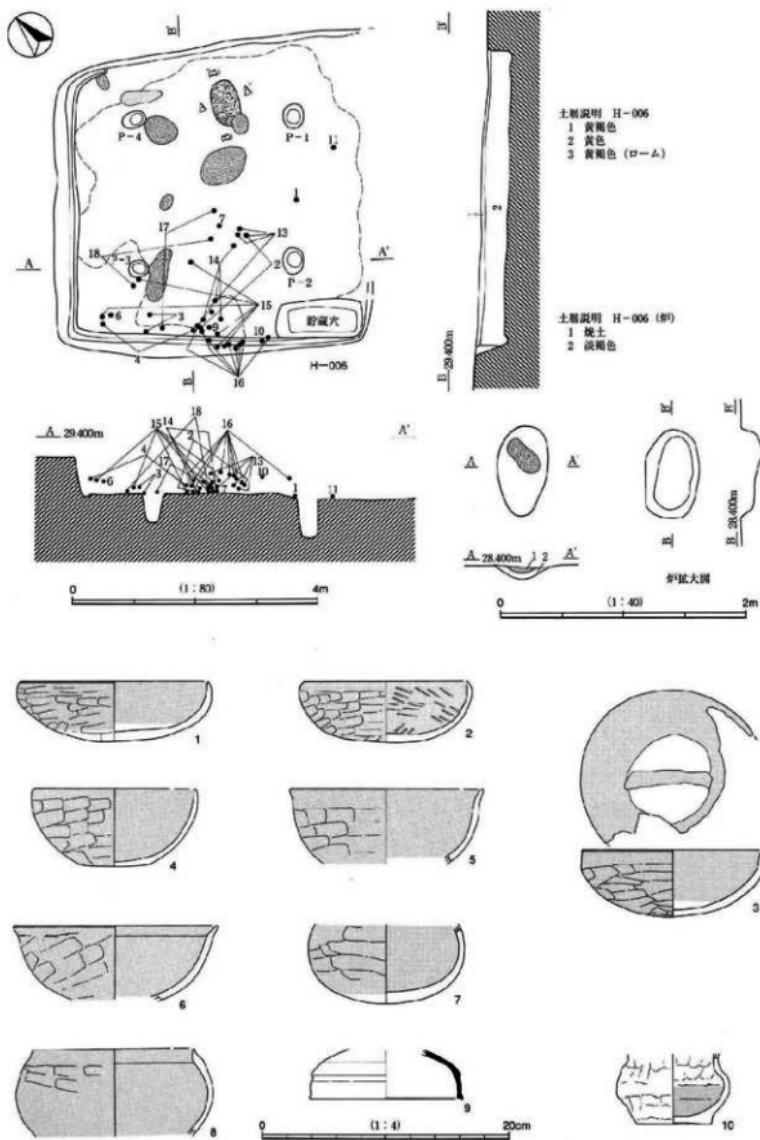
第46図 H-004実測図(2)・出土遺物



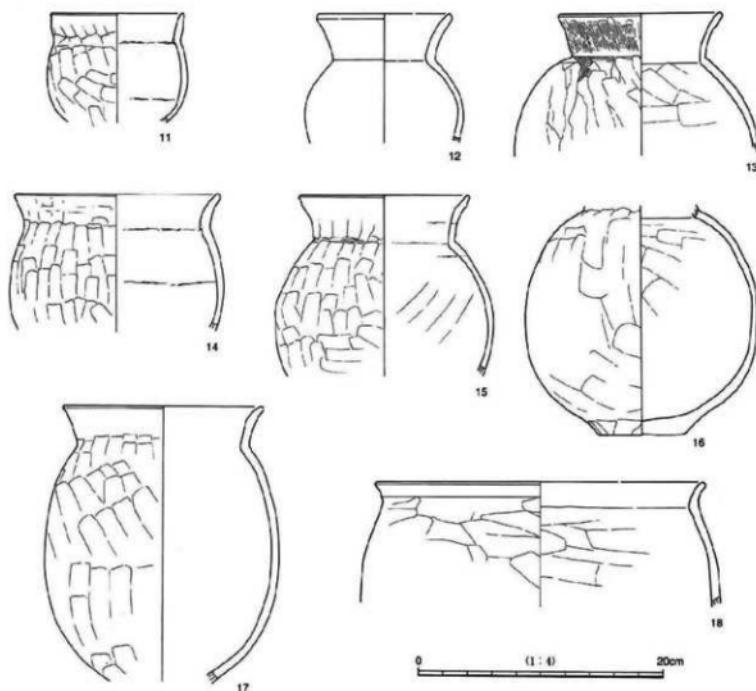
第47図 H-005実測図・出土遺物(1)



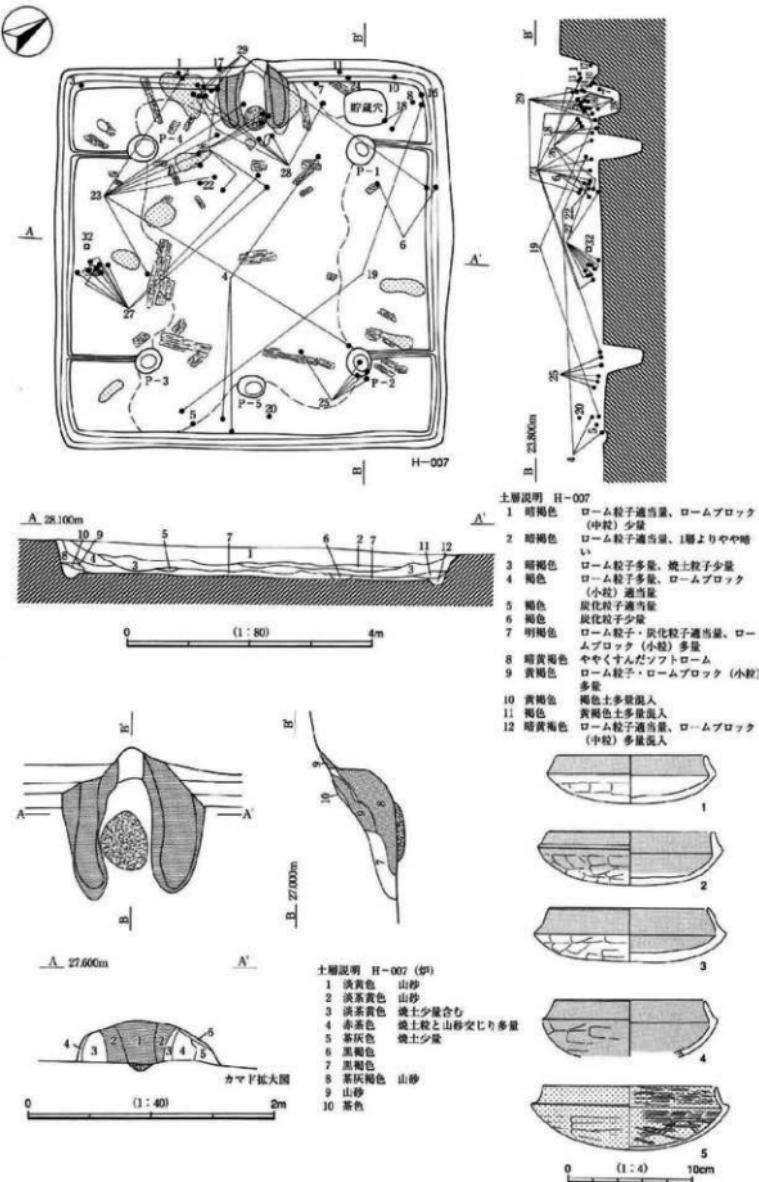
第48図 H-005出土遺物（2）



第49図 H-006実測図・出土遺物 (1)

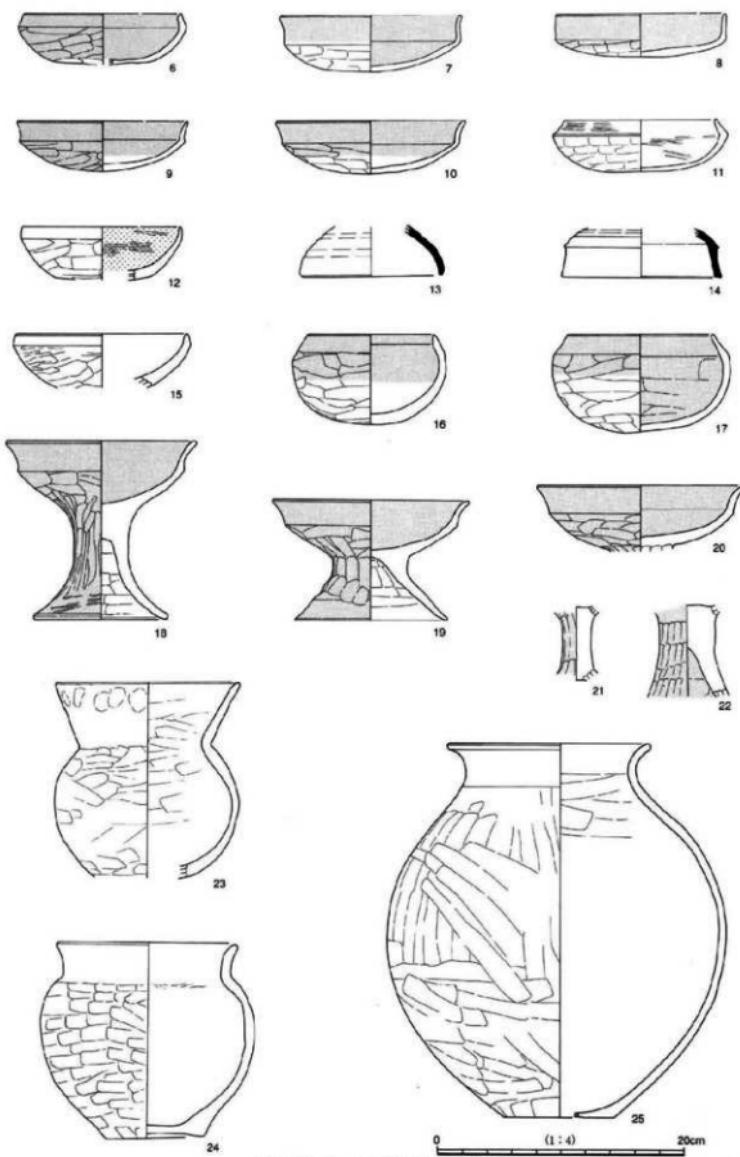


第50図 H-006出土遺物（2）

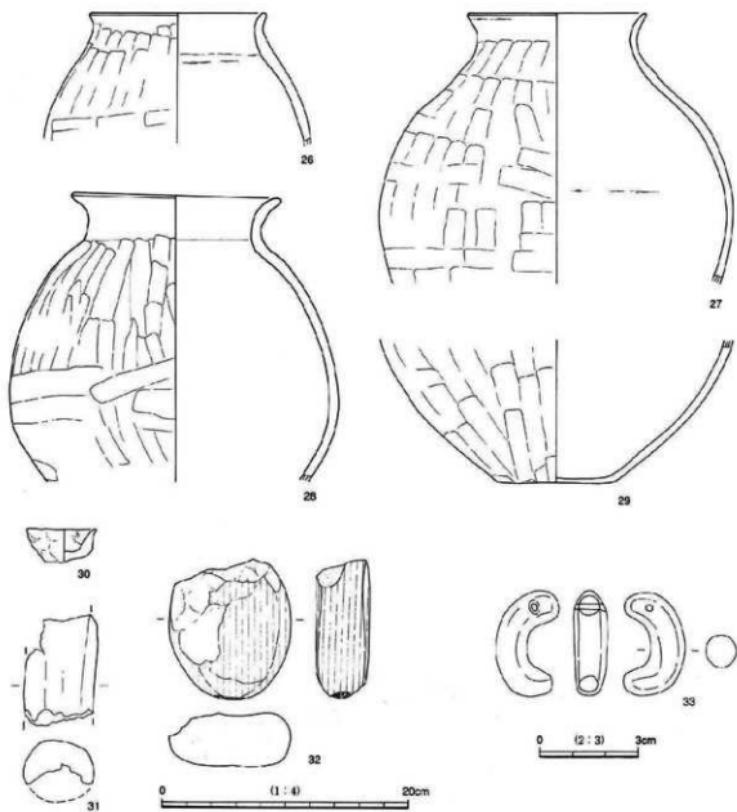


第51図 H-007実測図・出土遺物 (1)

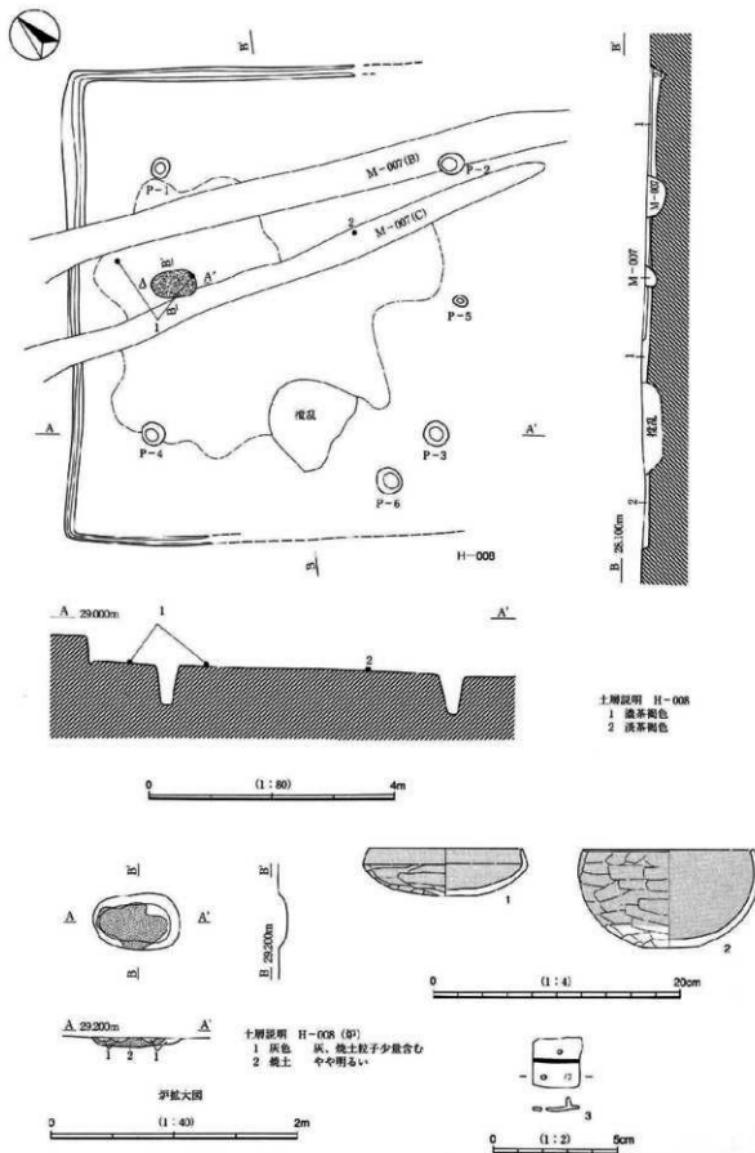
第2節 坪穴住居跡



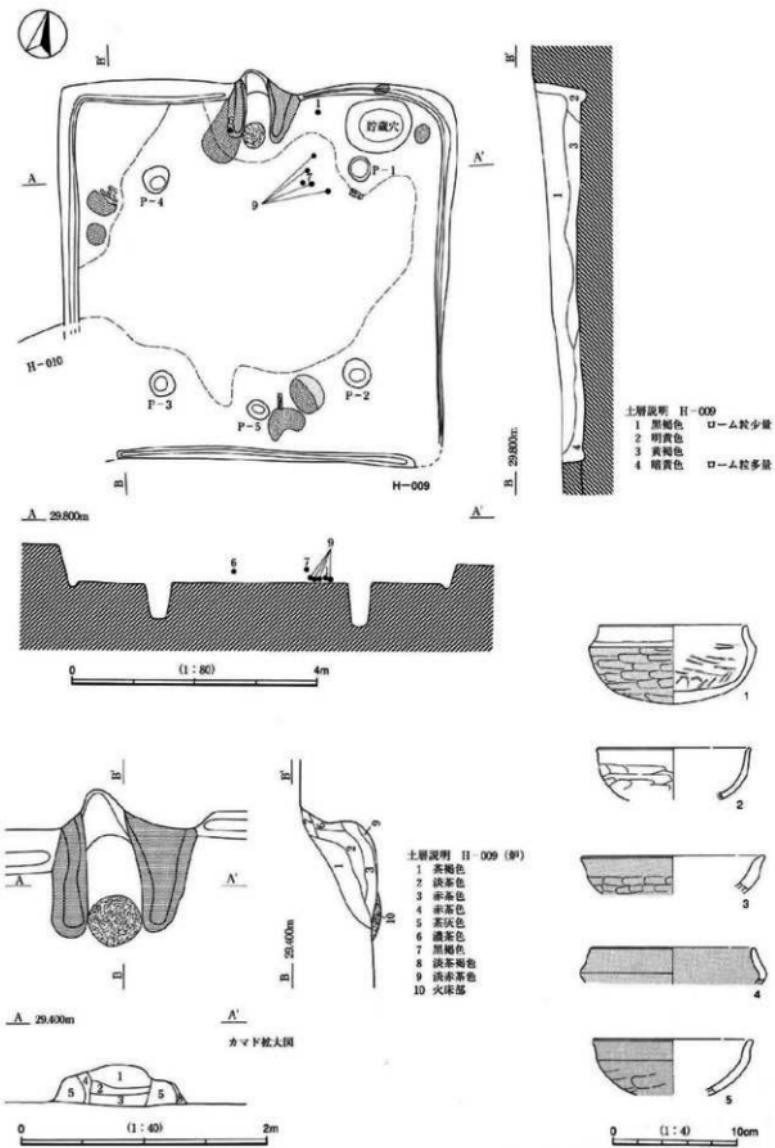
第52図 H-007出土遺物 (2)



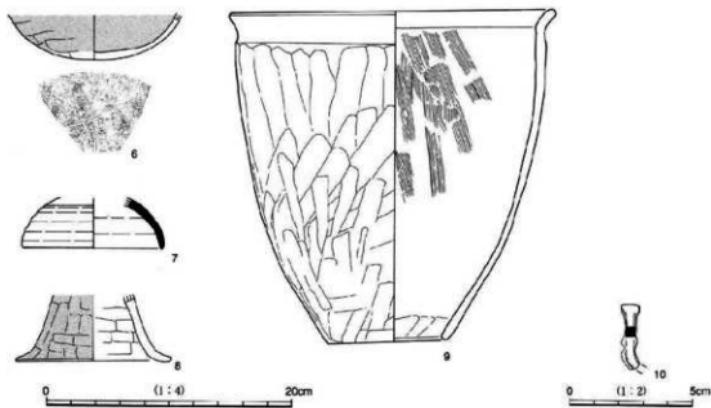
第53図 H-007出土遺物（3）



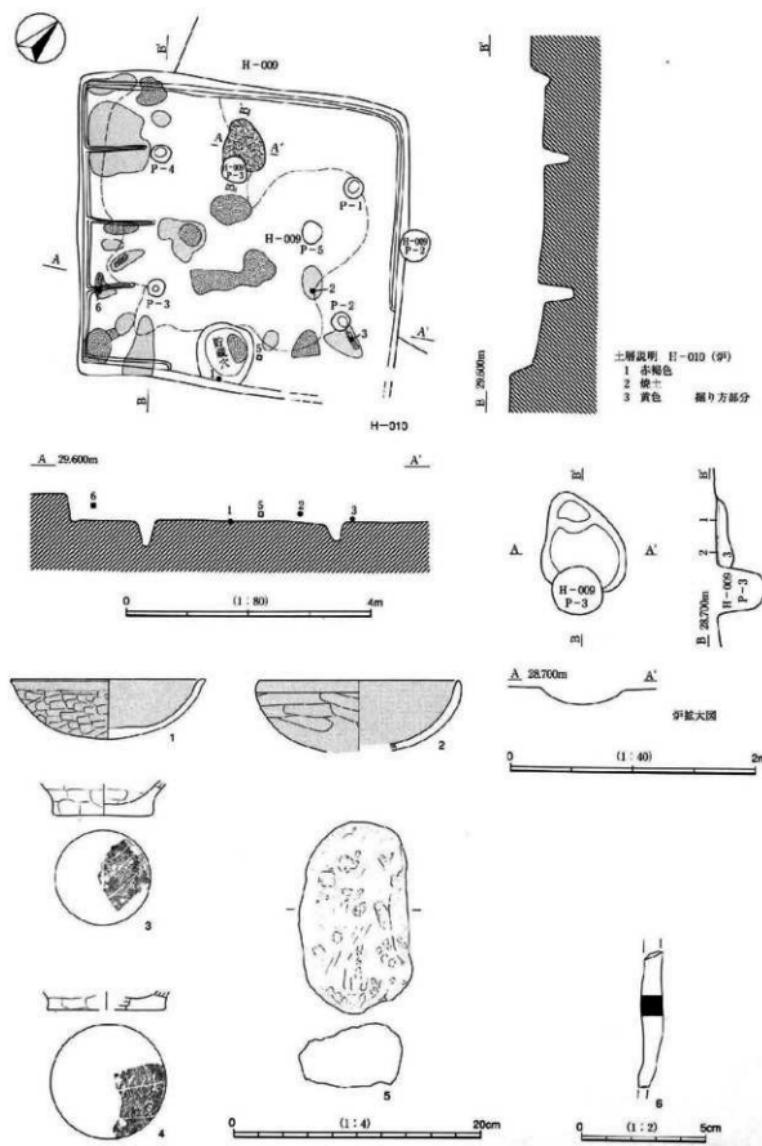
第54図 H-008実測図・出土遺物



第55図 H-009実測図・出土遺物 (1)

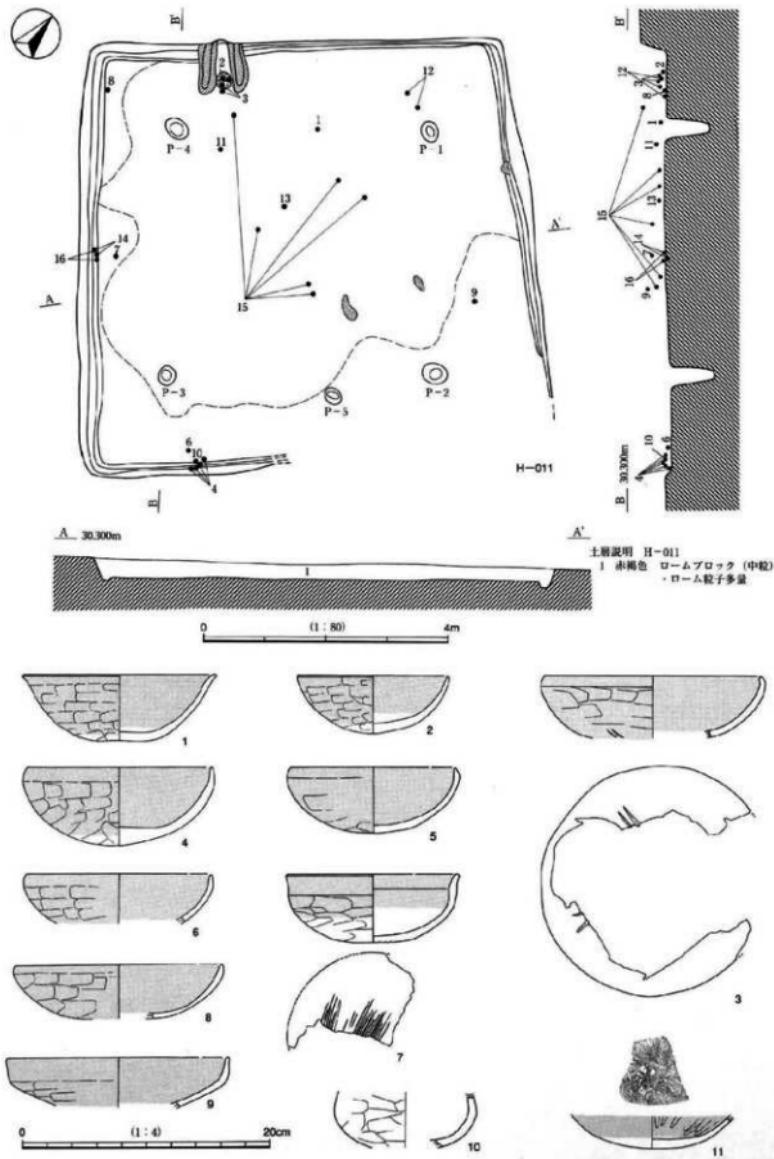


第56図 H-009出土遺物（2）

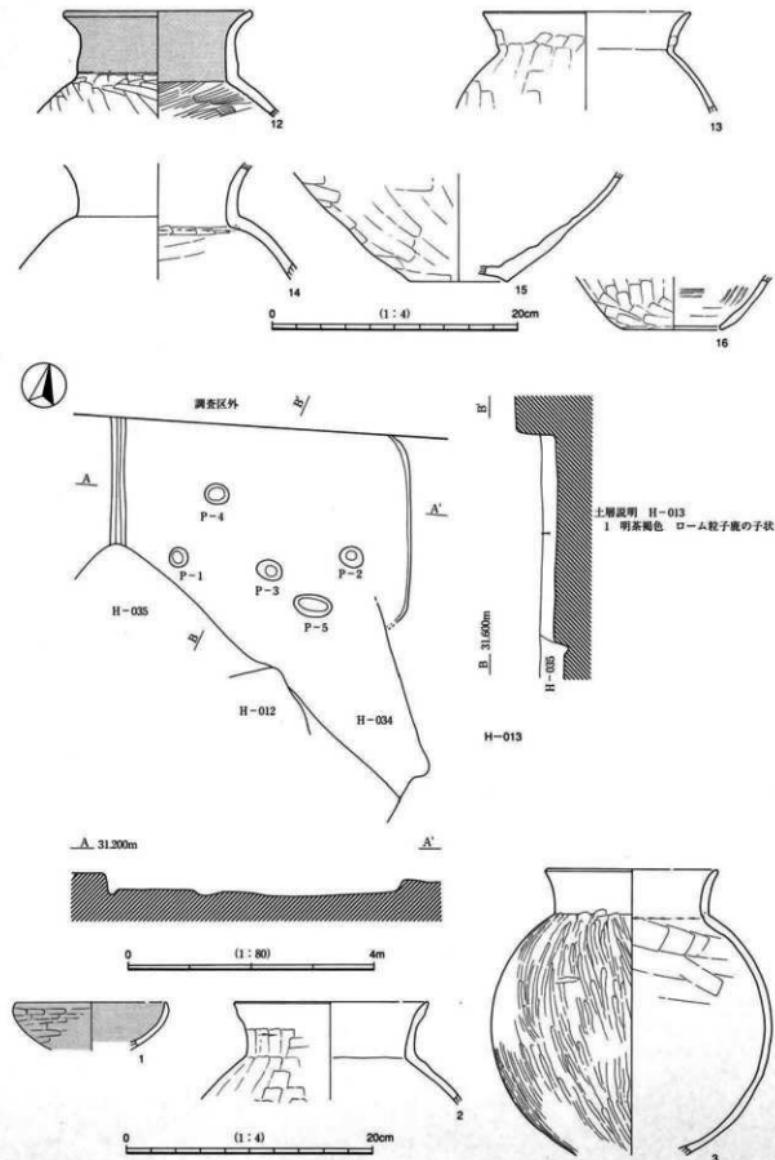


第57図 H-010実測図・出土遺物

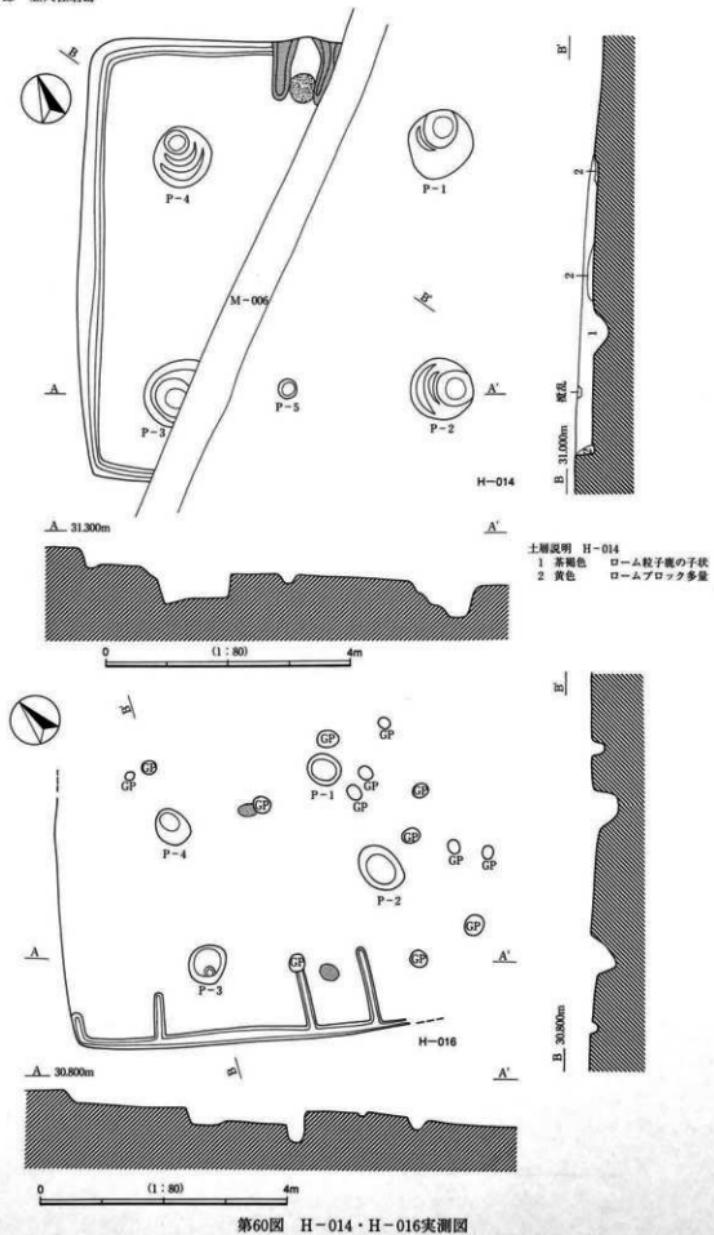
第2節 坪穴住居跡



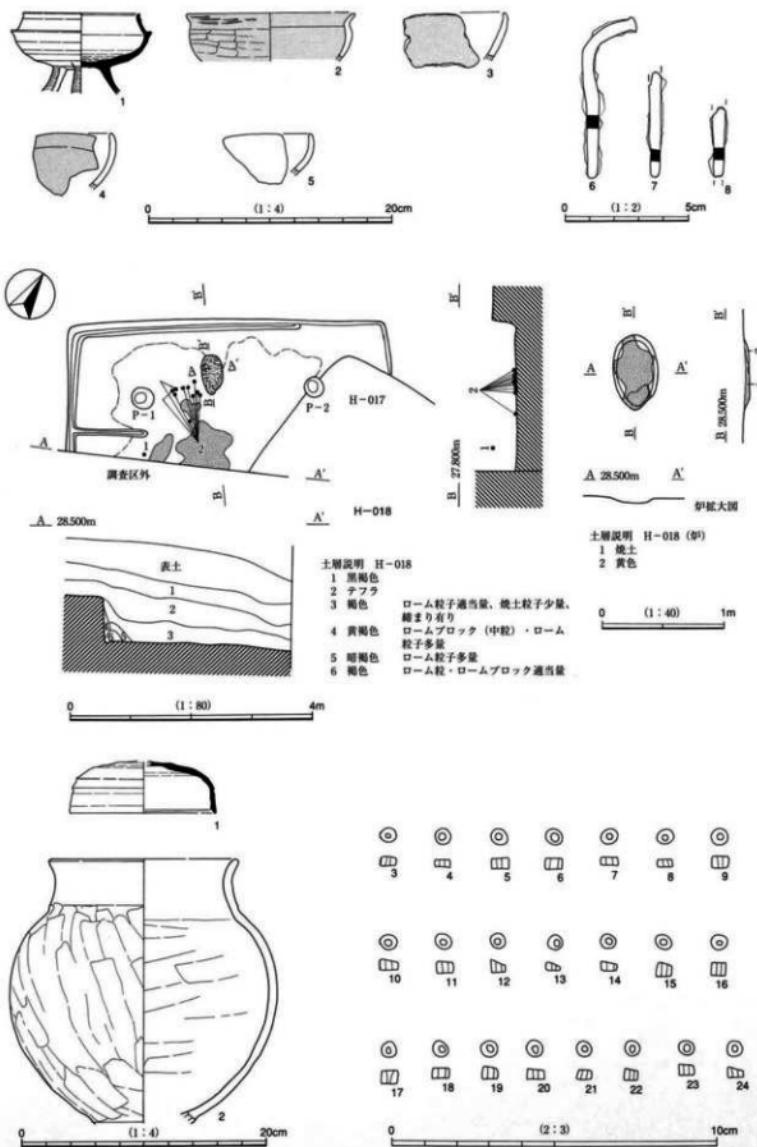
第58図 H-011実測図・出土遺物（1）



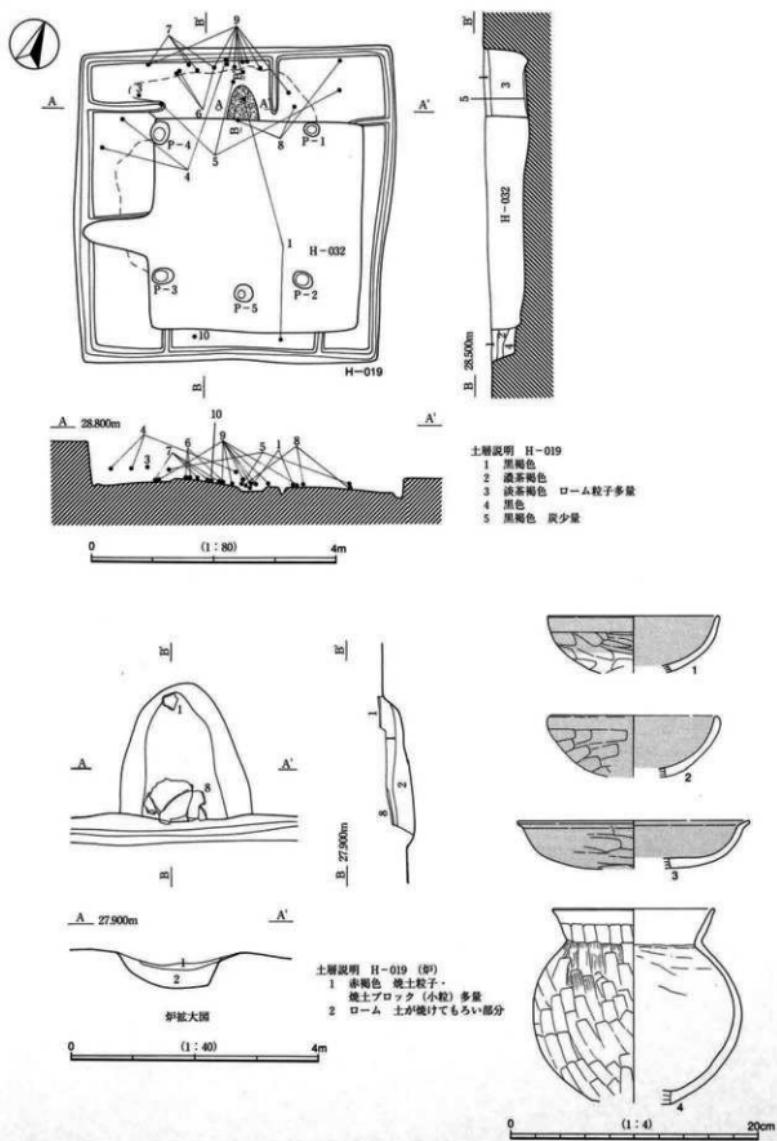
第59図 H-011出土遺物 (2)・H-013実測図・出土遺物



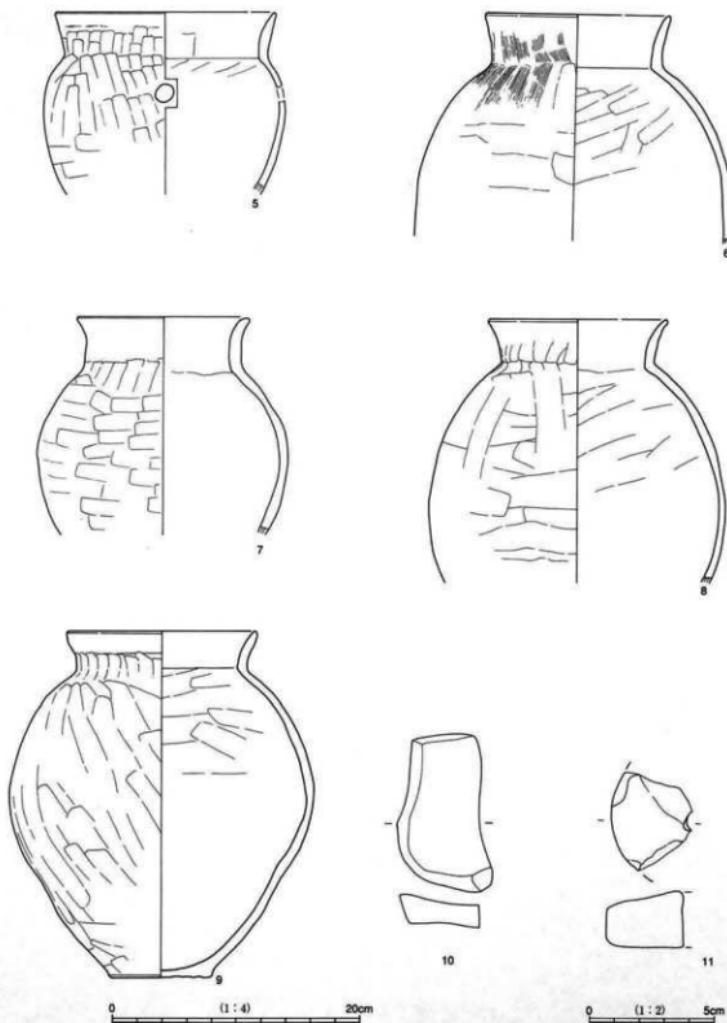
第60図 H-014・H-016実測図



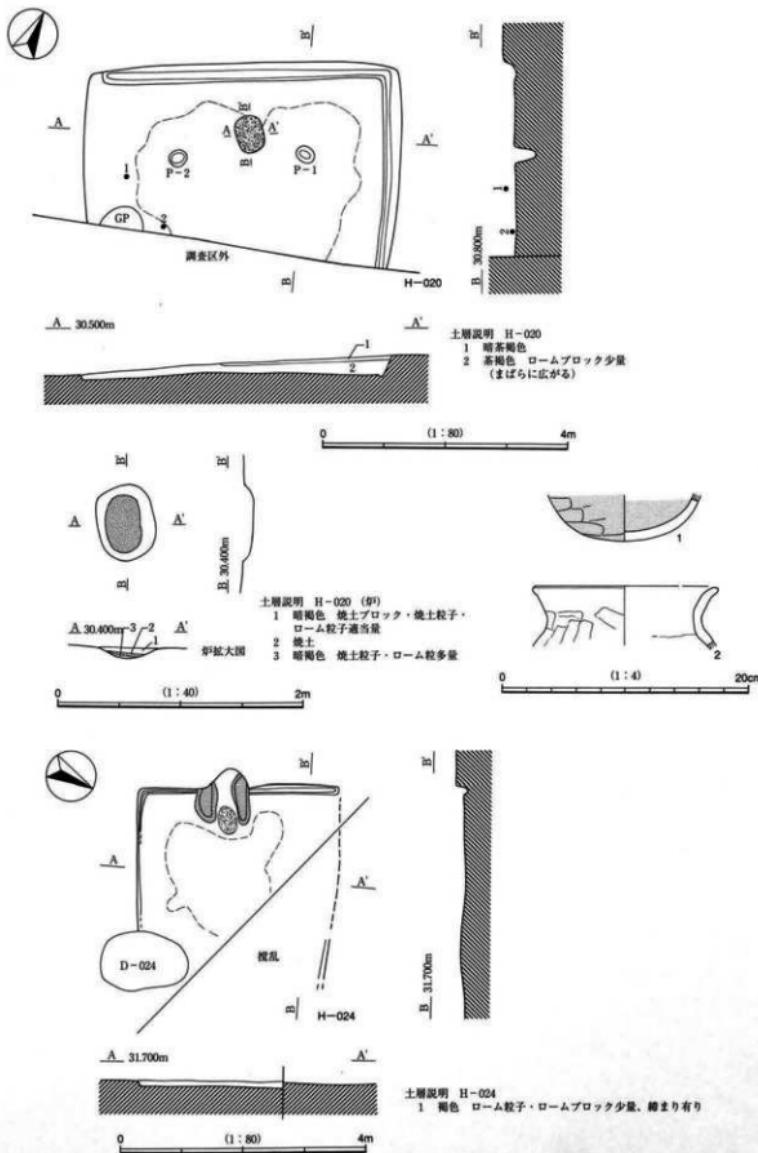
第61図 H-016出土遺物・H-018実測図・出土遺物



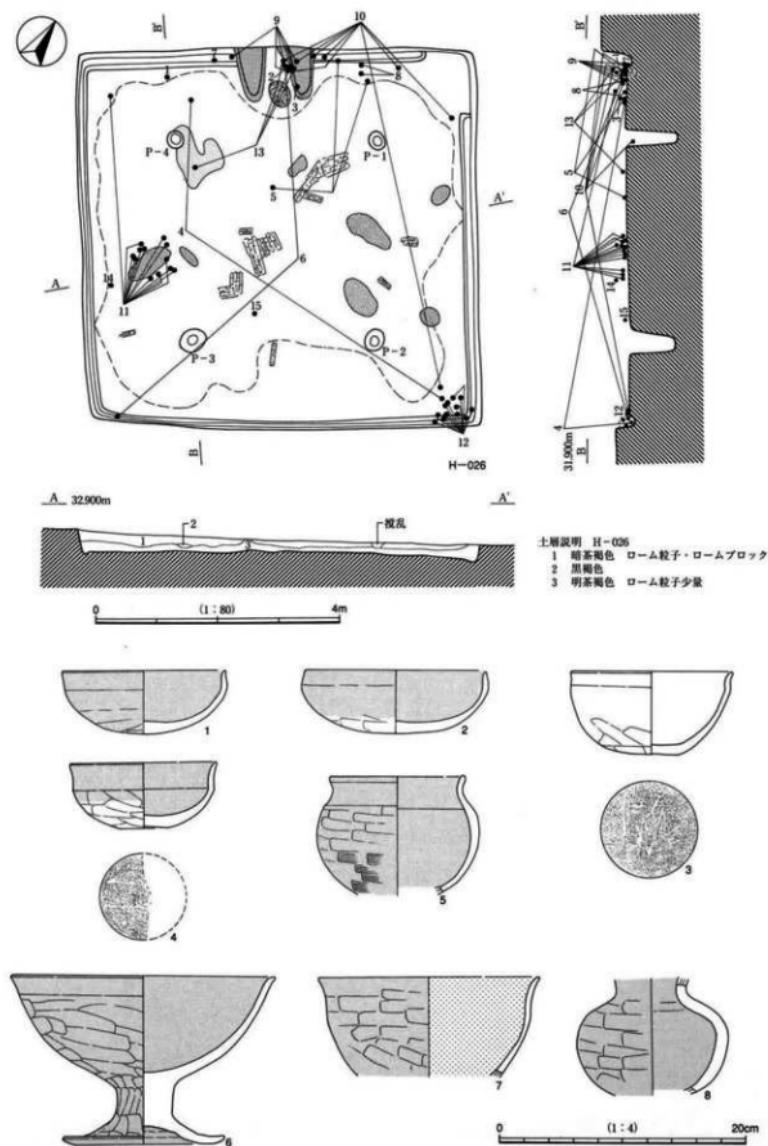
第62図 H-019実測図・出土遺物 (1)



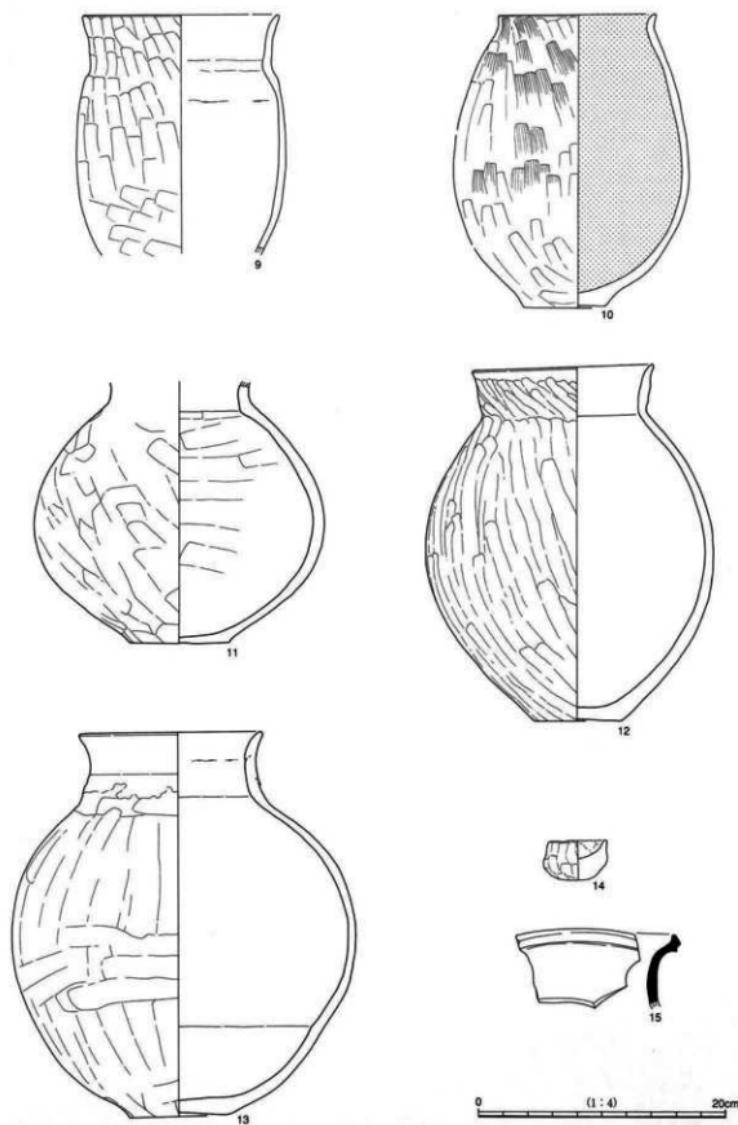
第63図 H-019出土遺物（2）



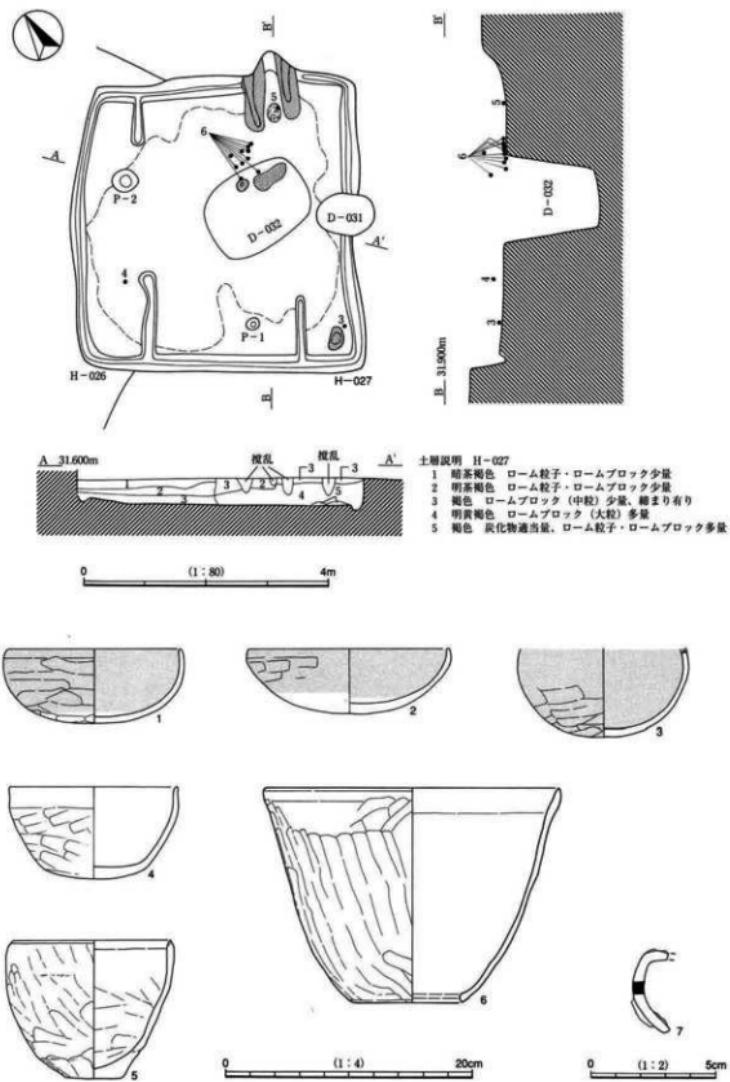
第64図 H-020実測図・出土遺物・H-024実測図



第65図 H-026実測図・出土遺物（1）

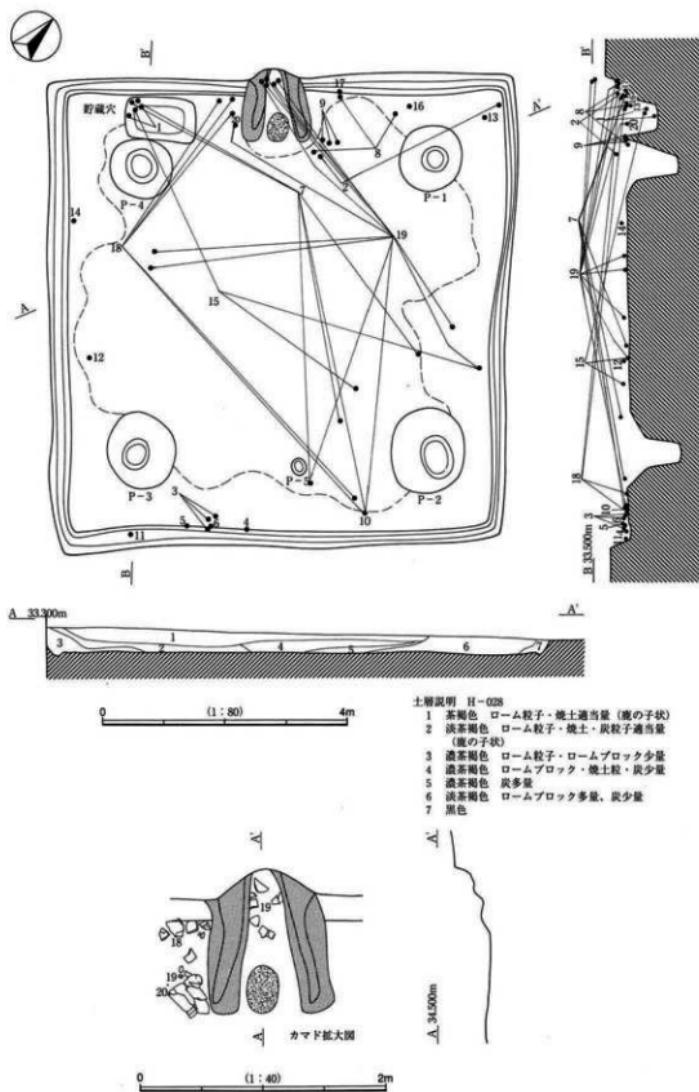


第66図 H-026出土遺物（2）

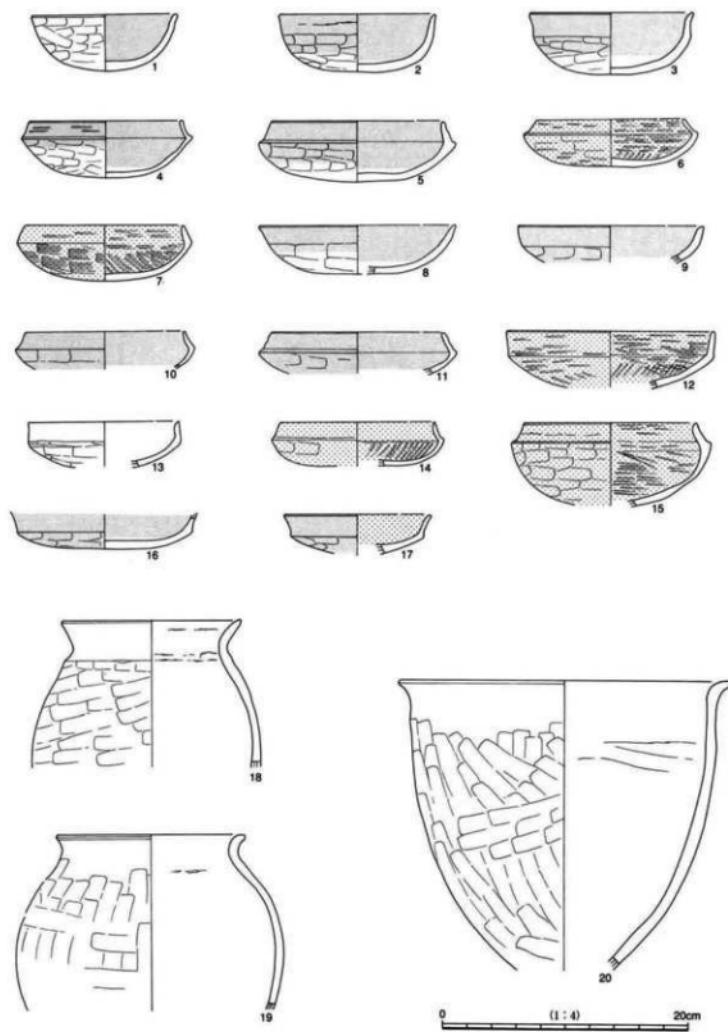


第67図 H-027実測図・出土遺物

第2節 堅穴住居跡

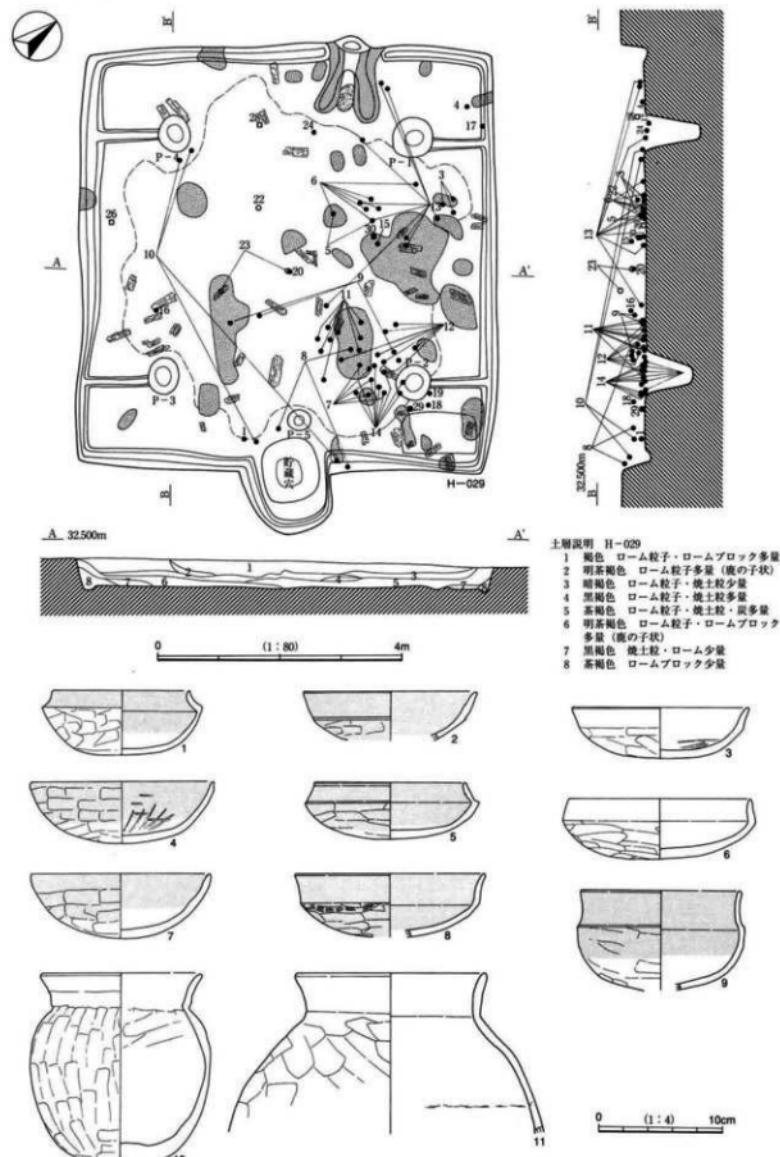


第68図 H-028実測図

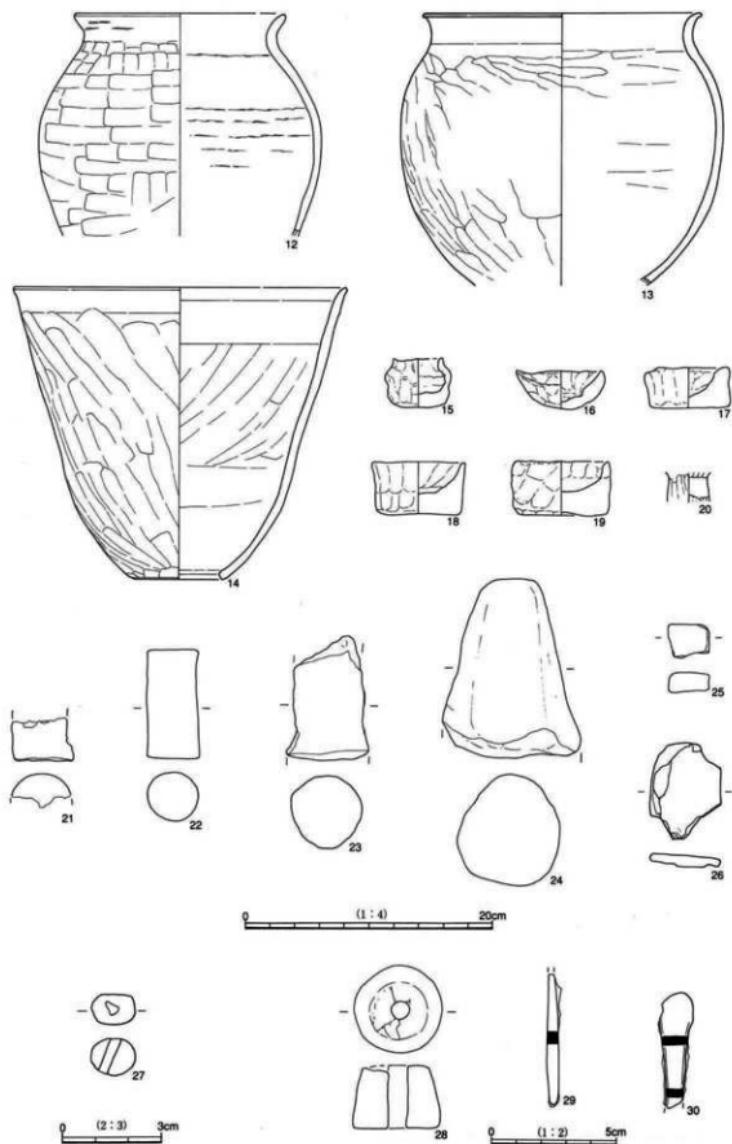


第69図 H-028出土遺物

第2節 堅穴住居跡

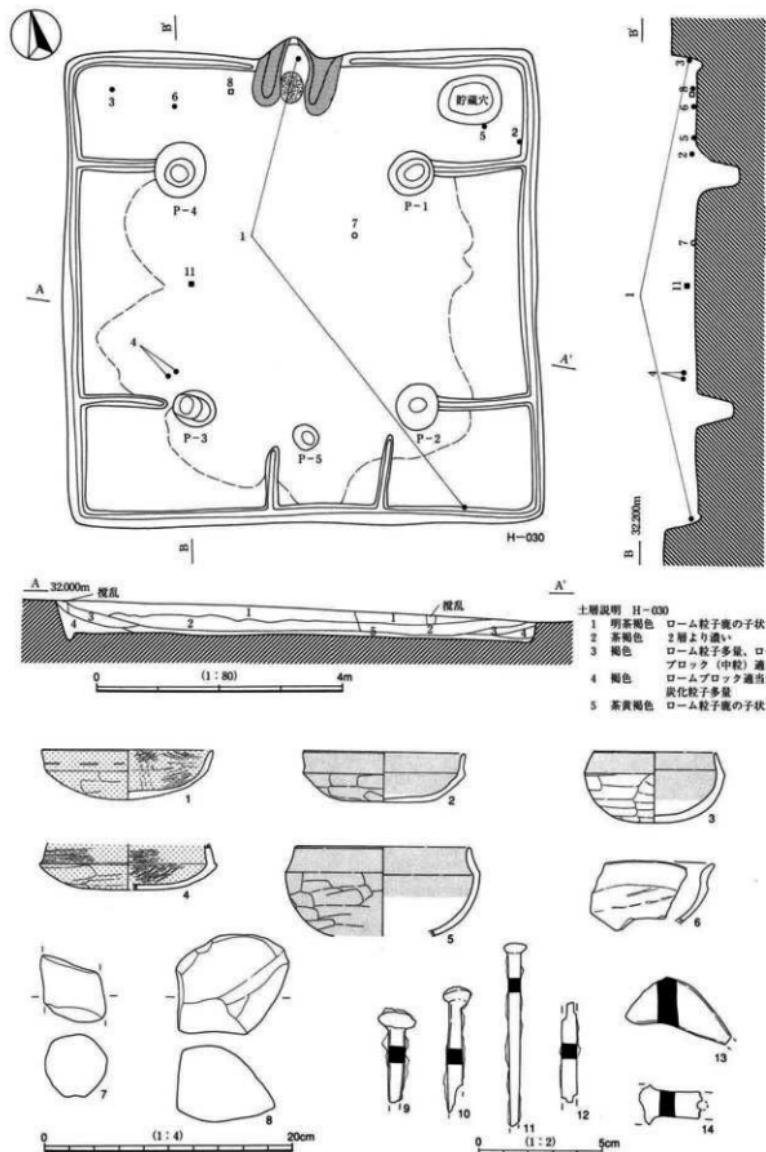


第70図 H-029実測図・出土遺物（1）

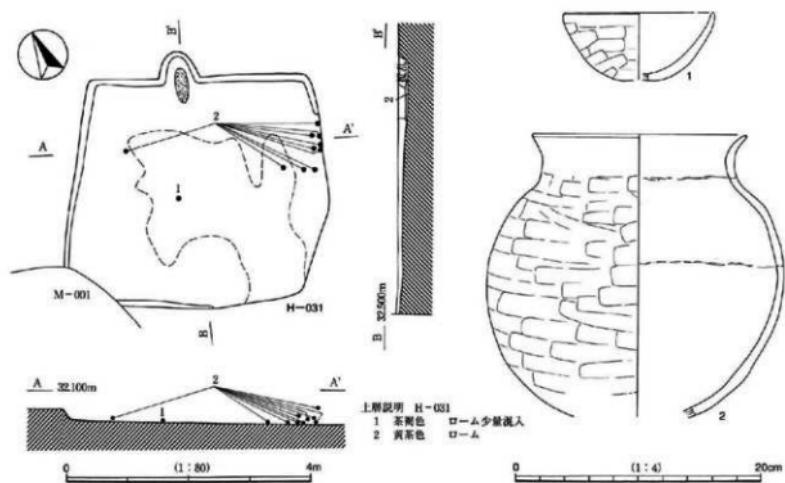


第71図 H-029出土遺物 (2)

第2節 壁穴住居跡

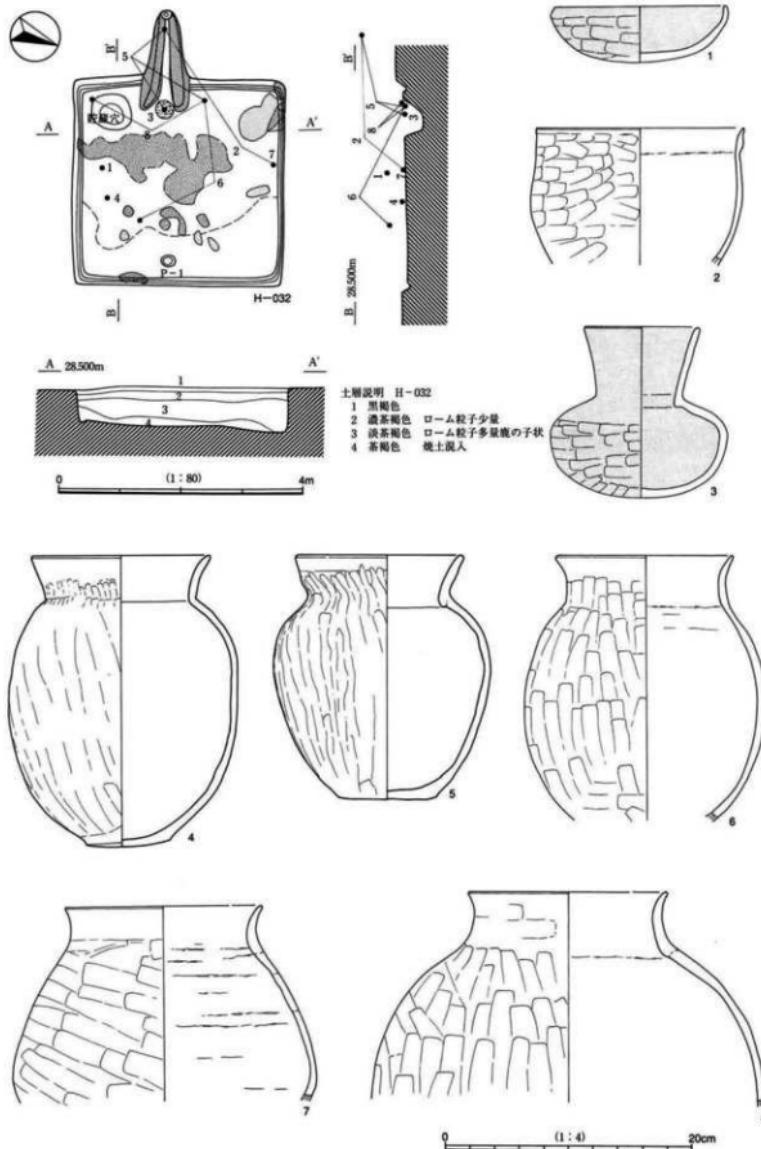


第72図 H-030実測図・出土遺物

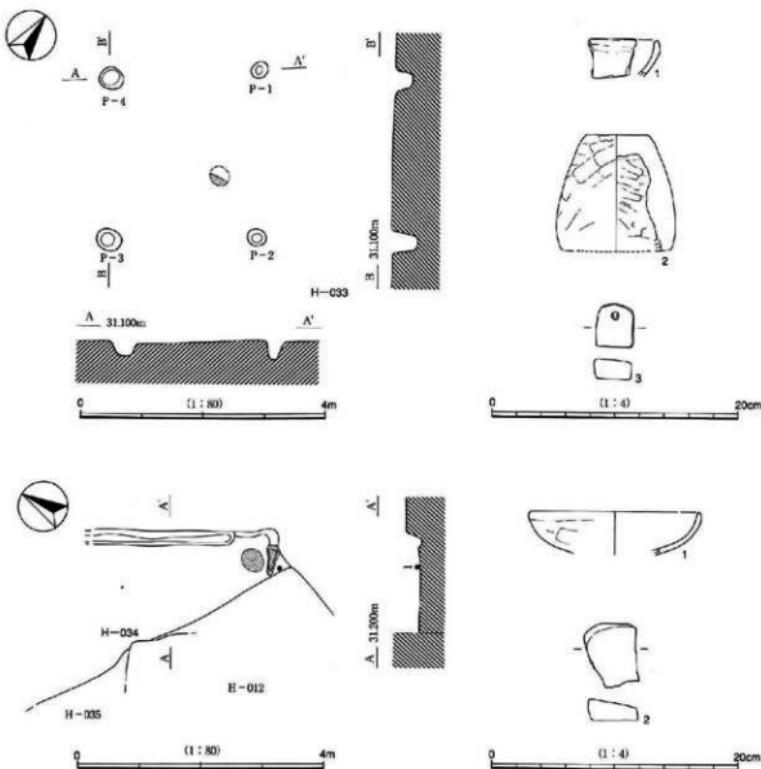


第73図 H-031実測図・出土遺物

第2節 壁穴住居跡

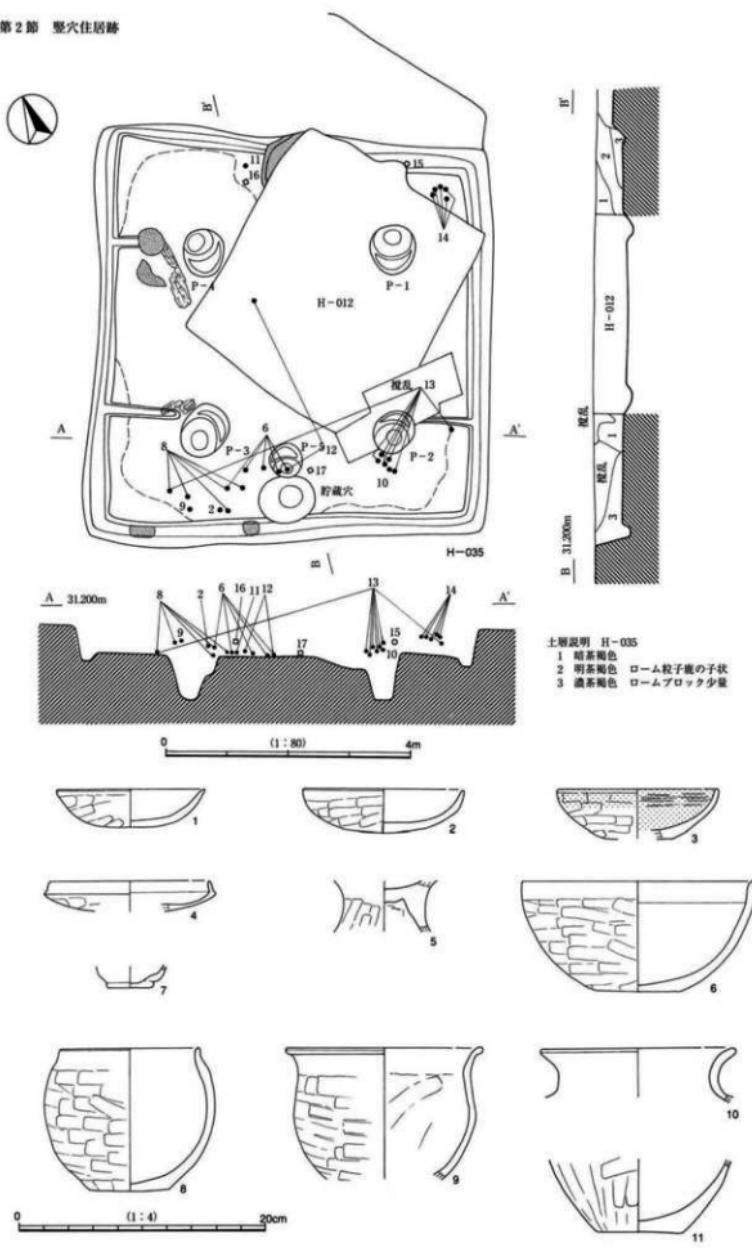


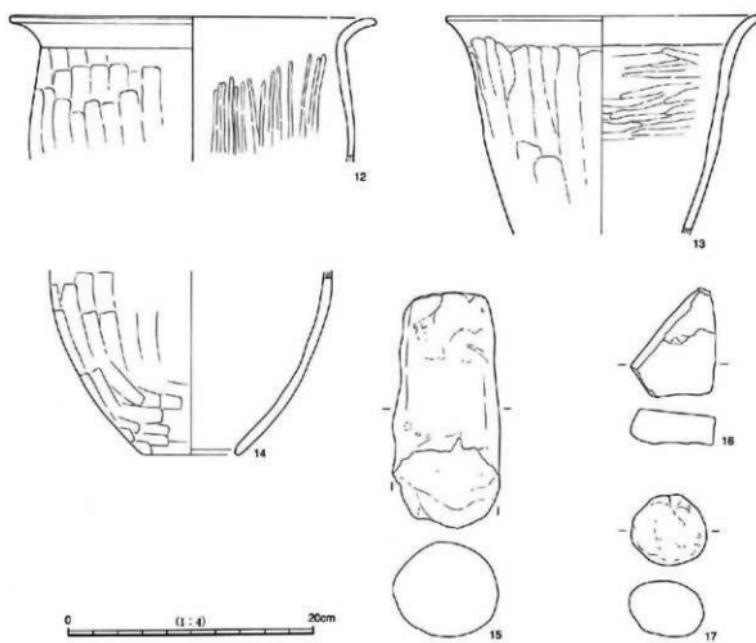
第74図 H-032実測図・出土遺物



第75図 H-033・H-034実測図・出土遺物

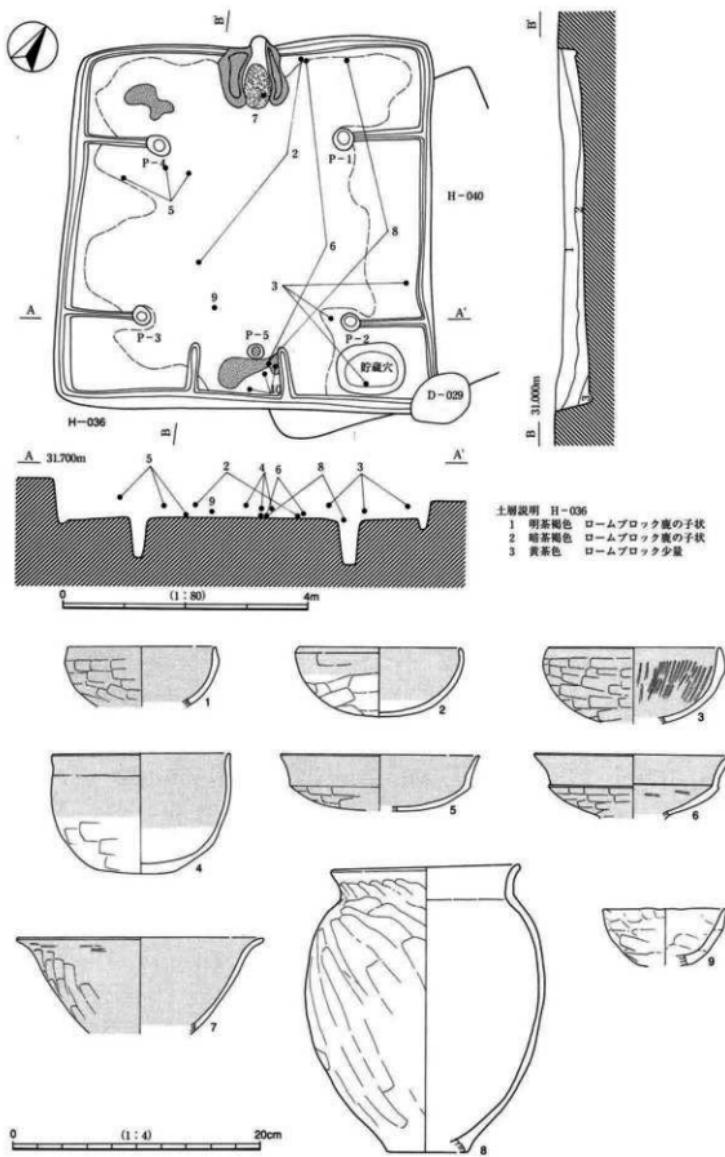
第2節 壁穴住居跡



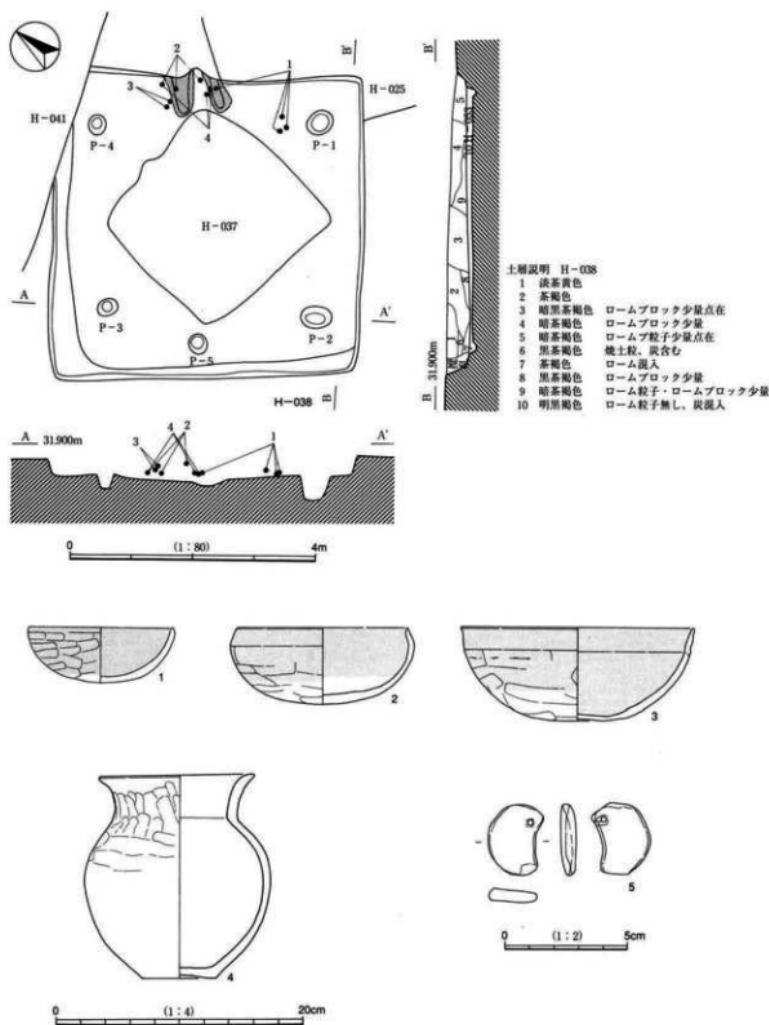


第77図 H-035出土遺物（2）

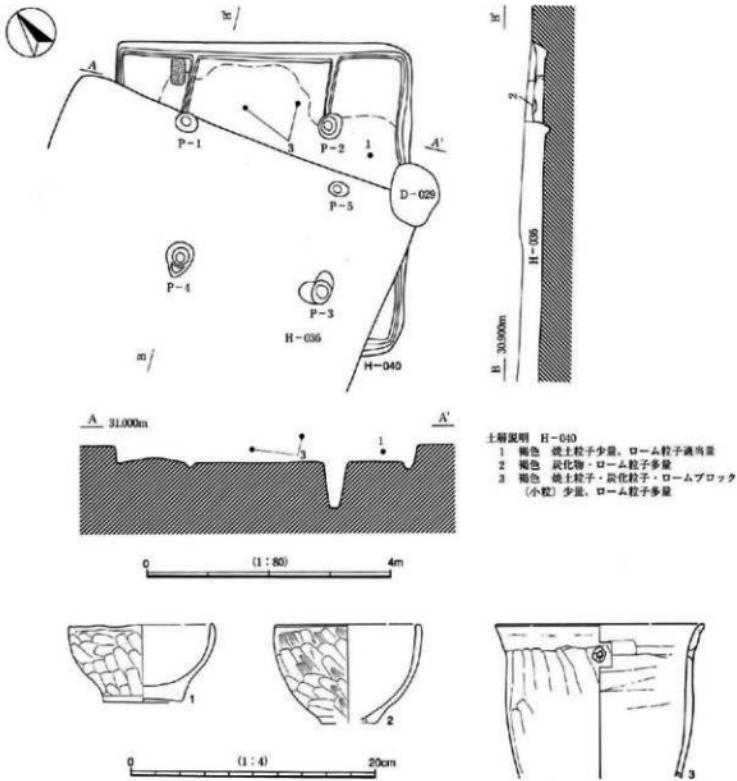
第2節 壓穴住居跡



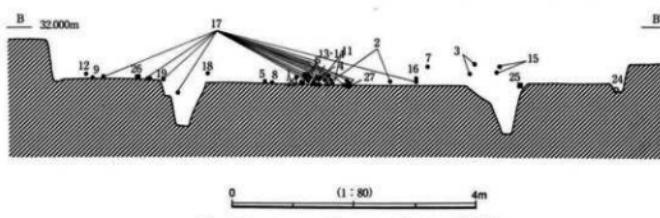
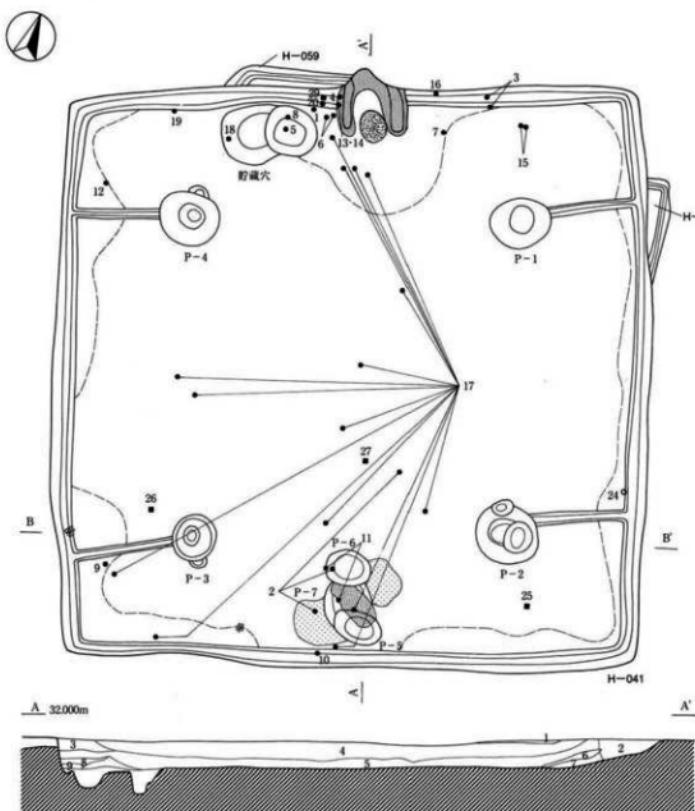
第78図 H-036実測図・出土遺物



第79図 H-038実測図・出土遺物

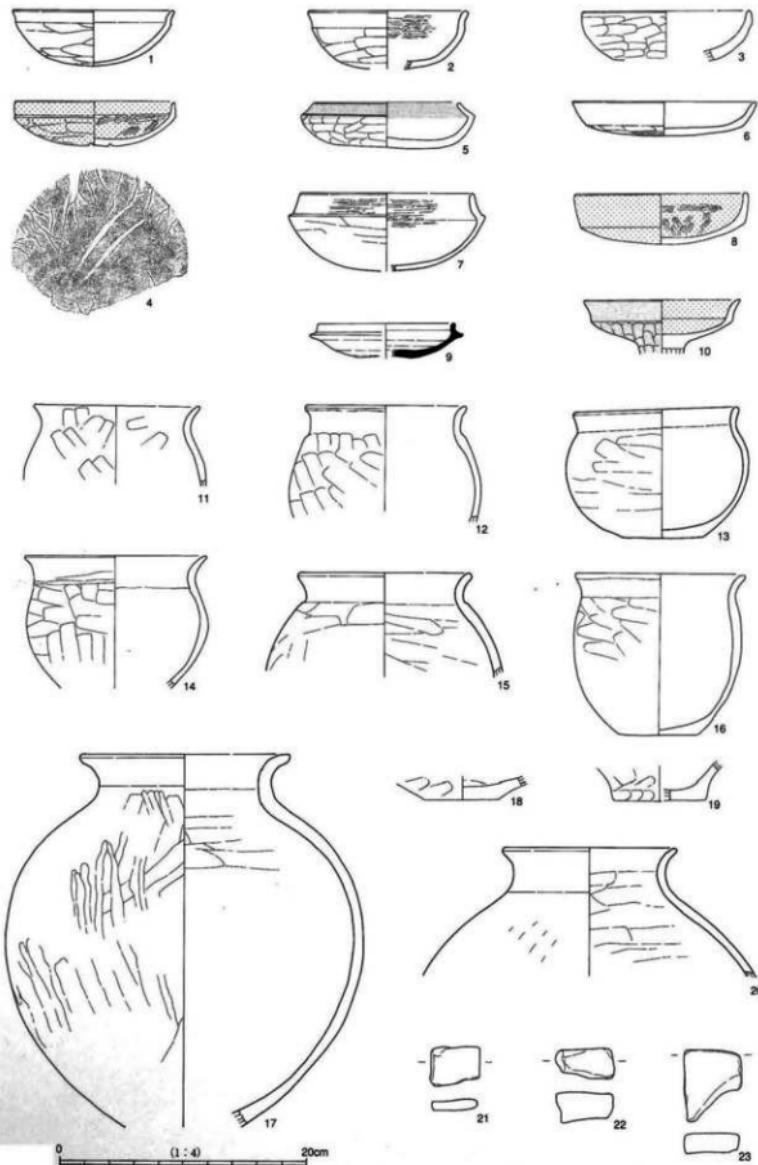


第80図 H-040実測図・出土遺物

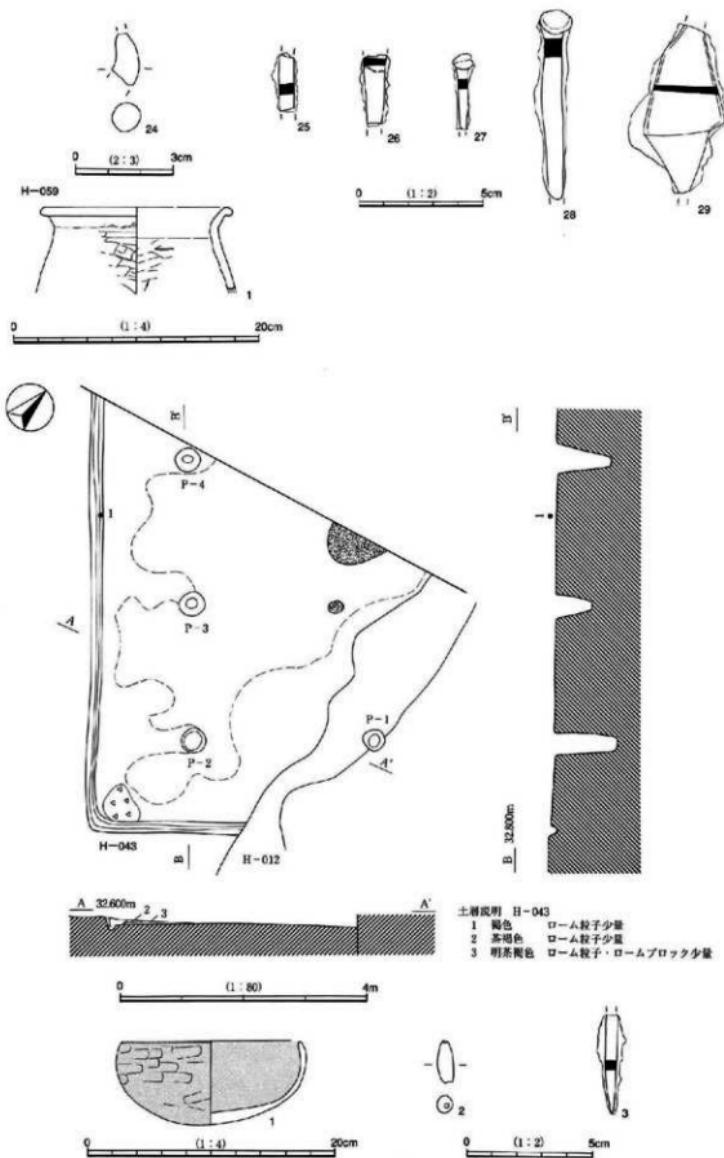


第81図 H-041・H-042・H-059実測図

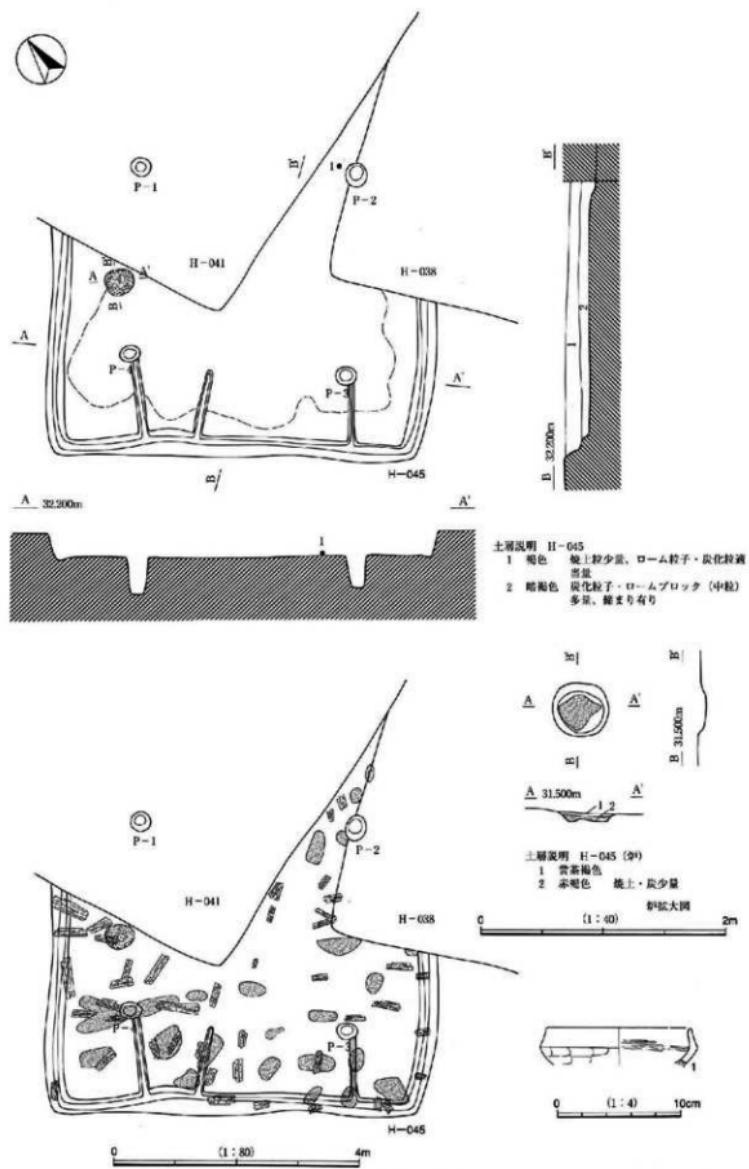
第2節 壁穴住居跡



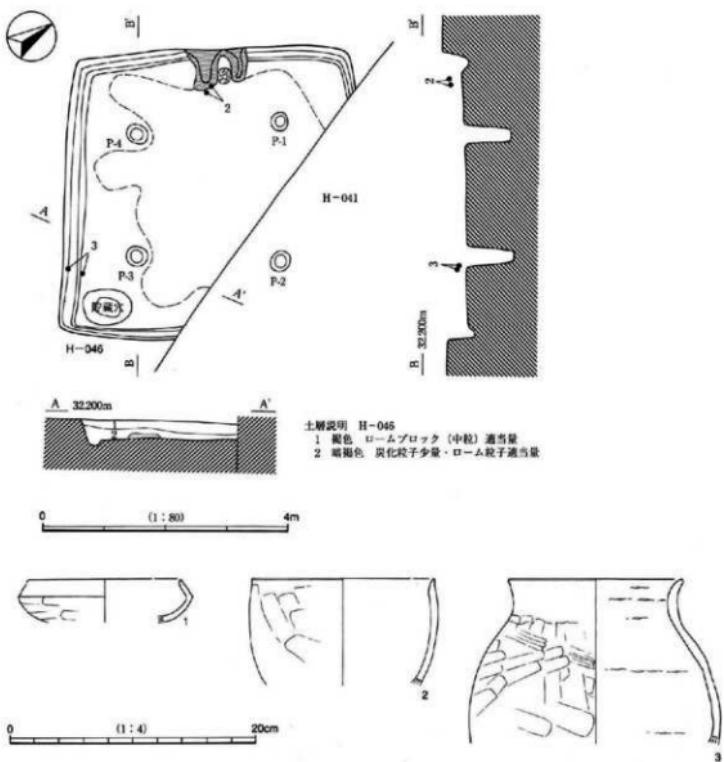
第82図 H-041出土遺物（1）



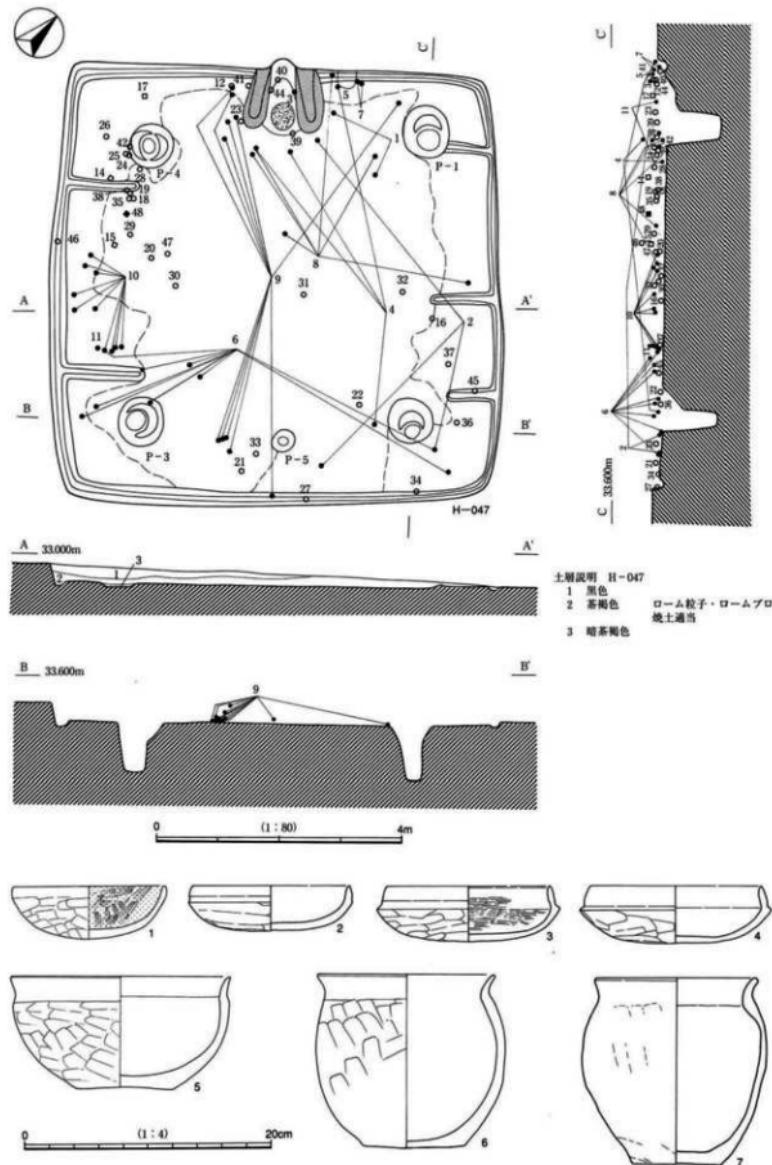
第83図 H-041・H-059出土遺物（2）・H-043実測図・出土遺物



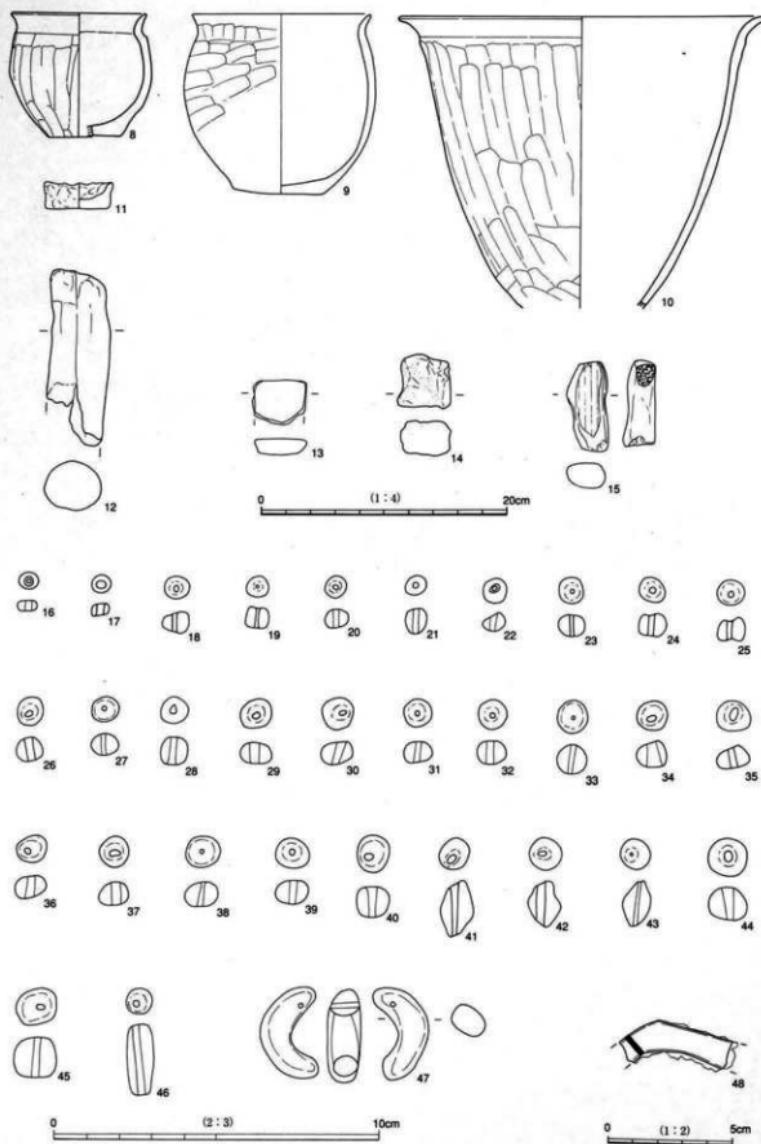
第84図 H-045実測図・出土遺物



第85図 H-046実測図・出土遺物

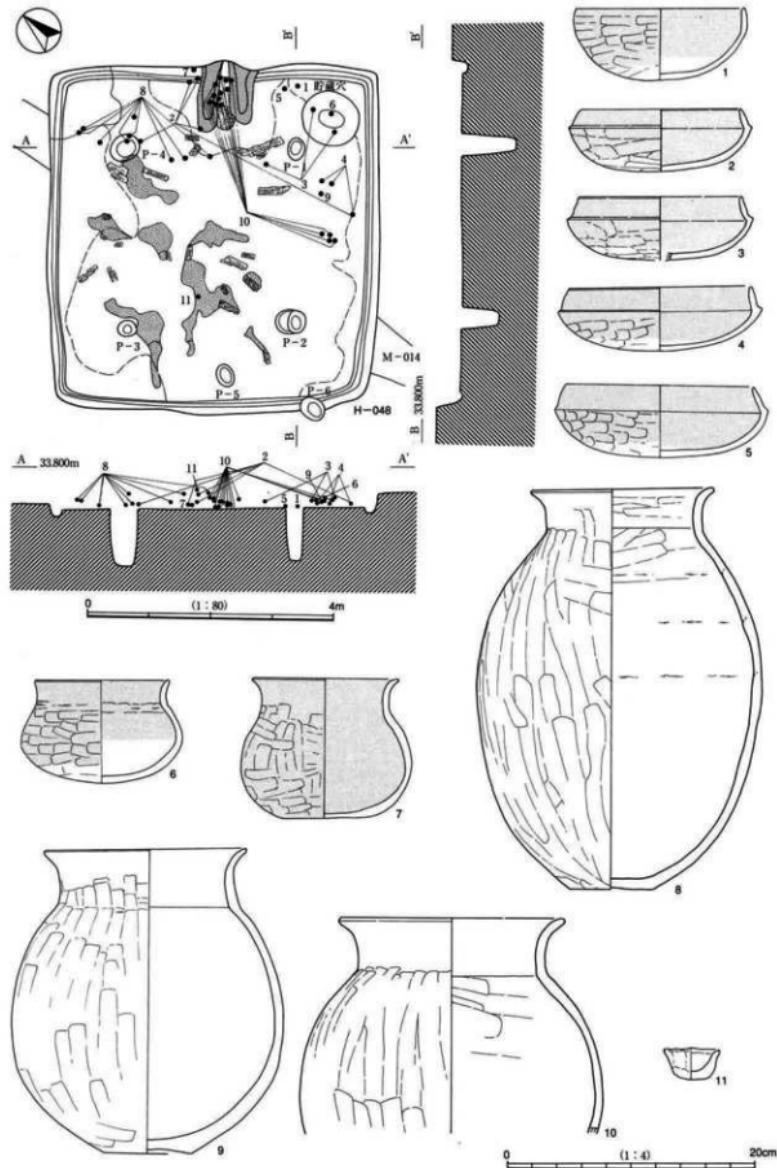


第86図 H-047実測図・出土遺物（1）

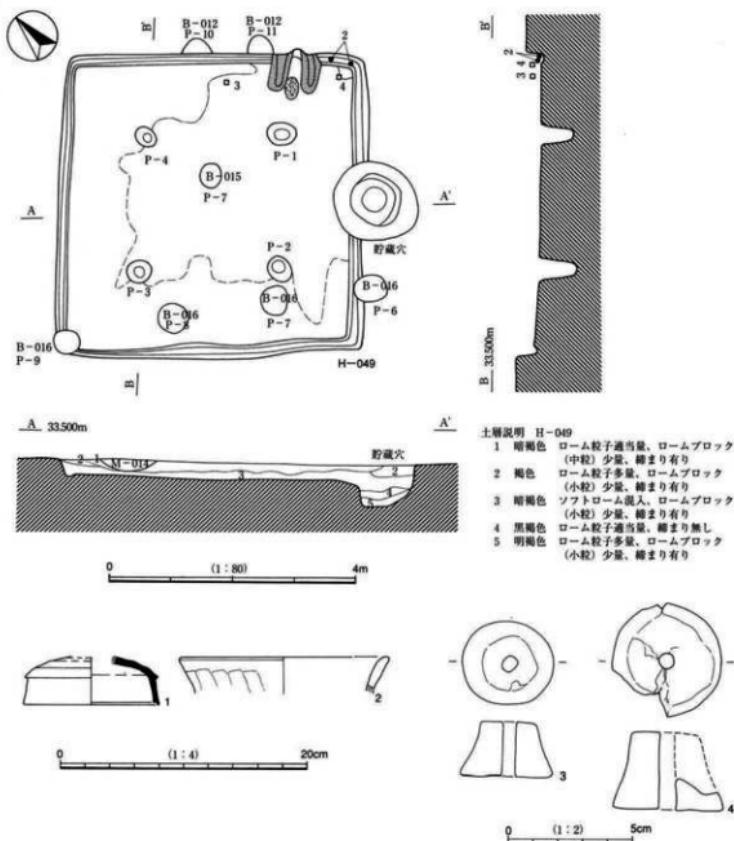


第87図 H-047出土遺物（2）

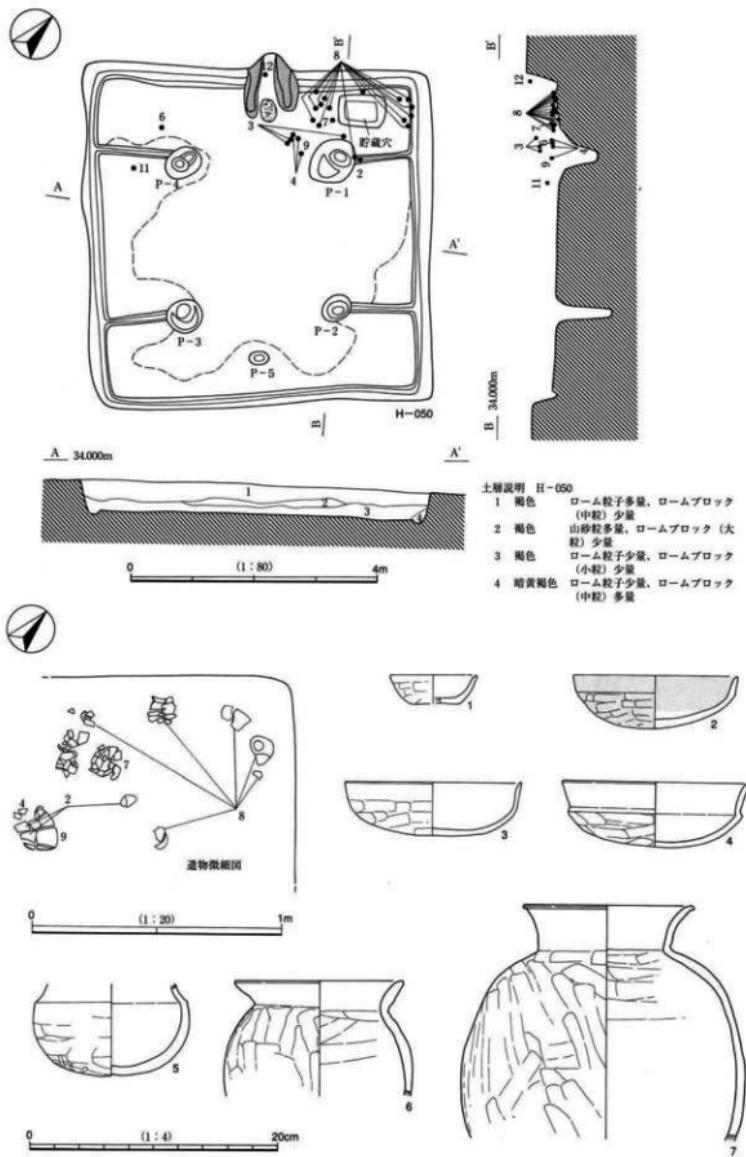
第2節 壓穴住居跡



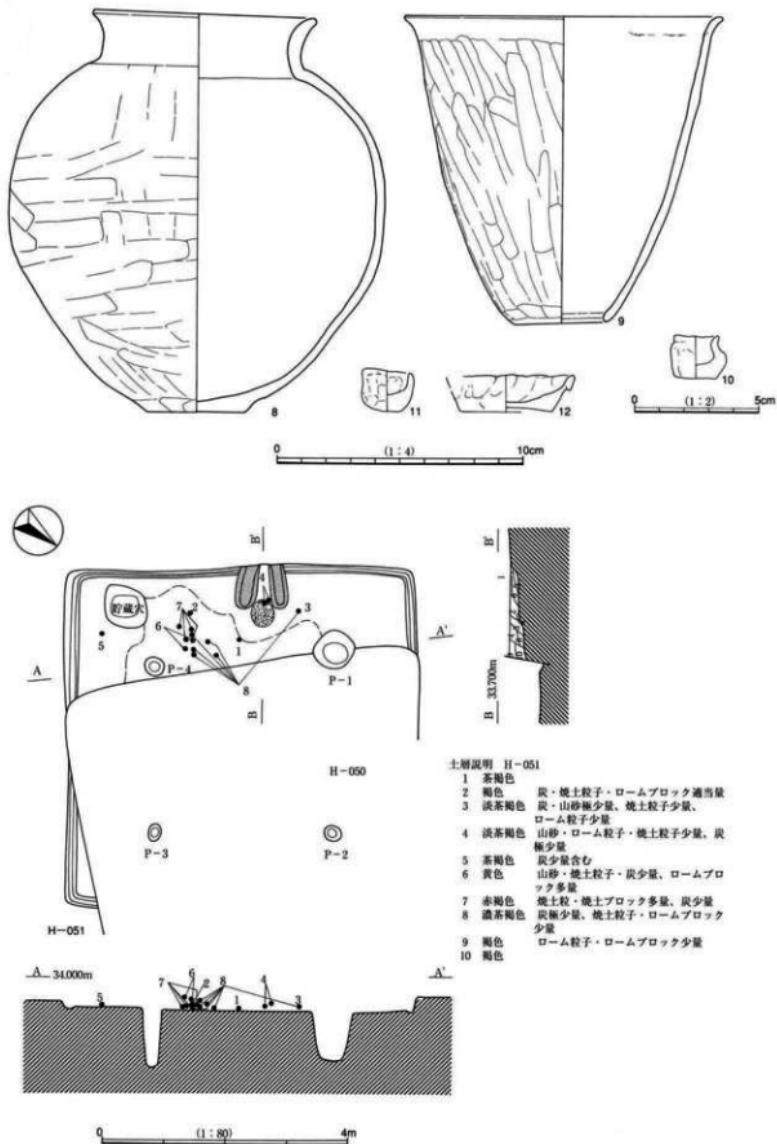
第88図 H-048実測図・出土遺物



第89図 H-049実測図・出土遺物

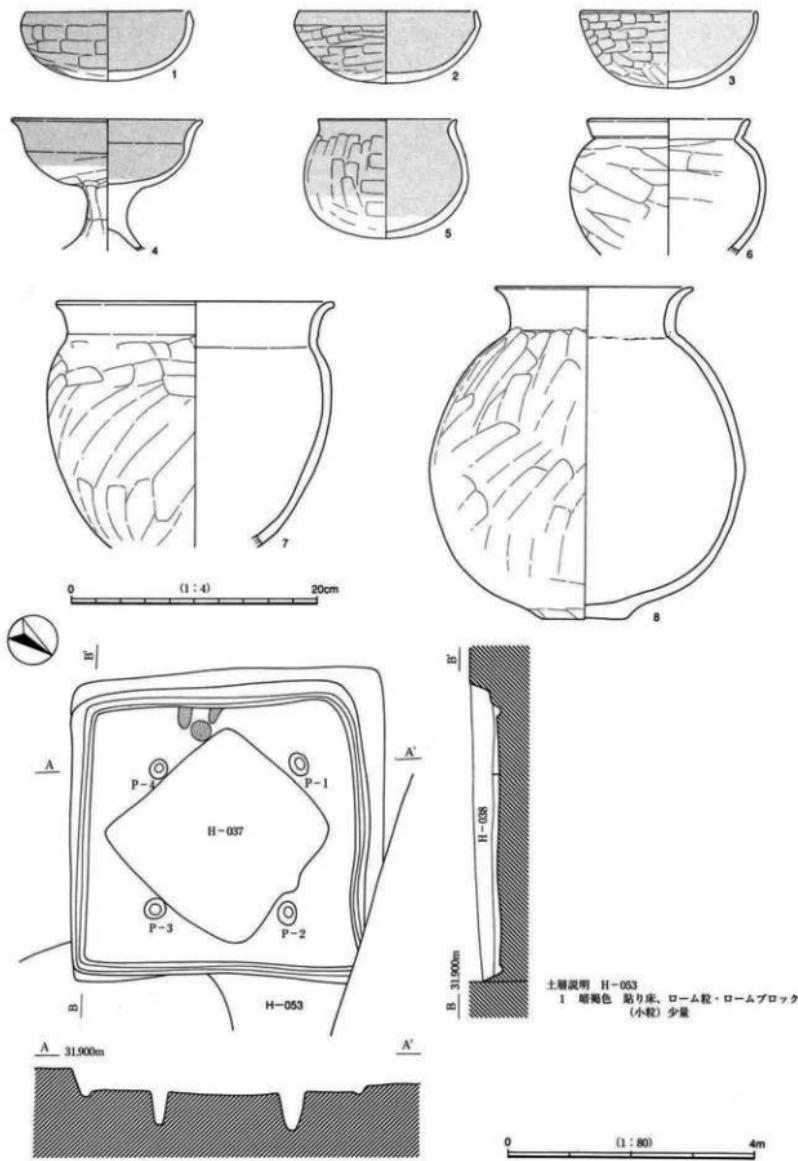


第90図 H-050実測図・出土遺物 (1)

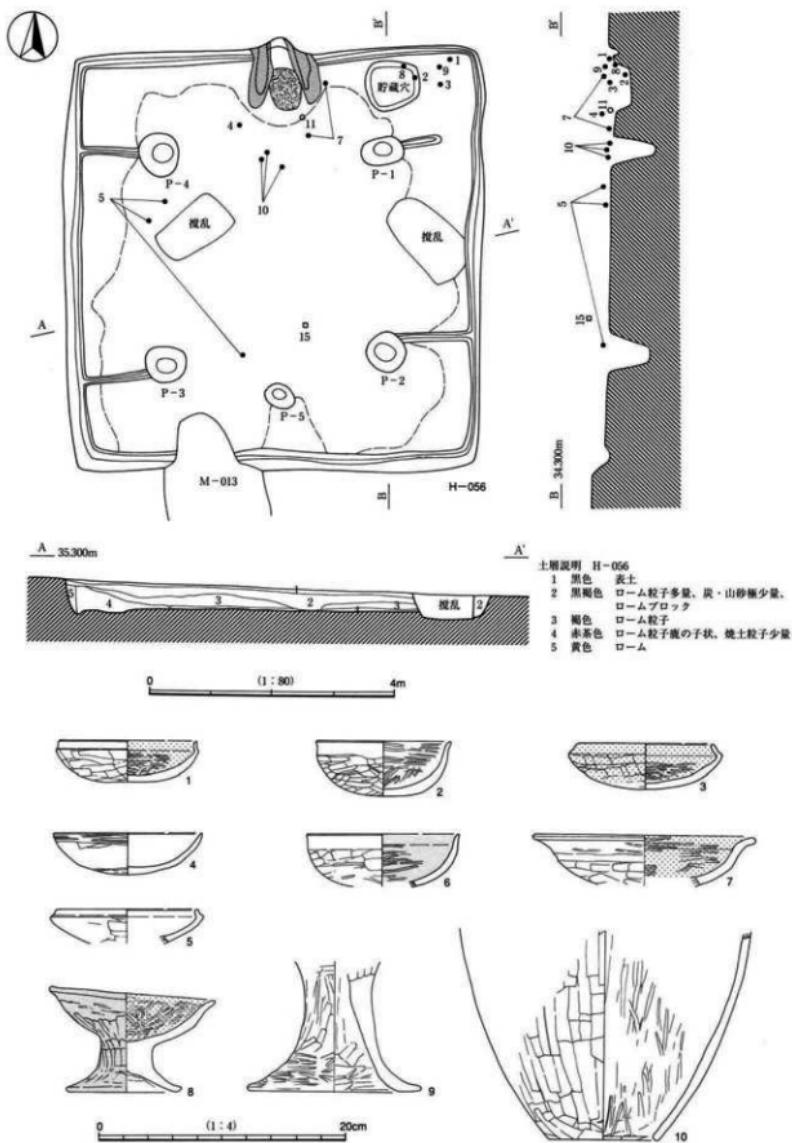


第91図 H-050出土遺物（2）・H-051実測図

第2節 壓穴住居跡

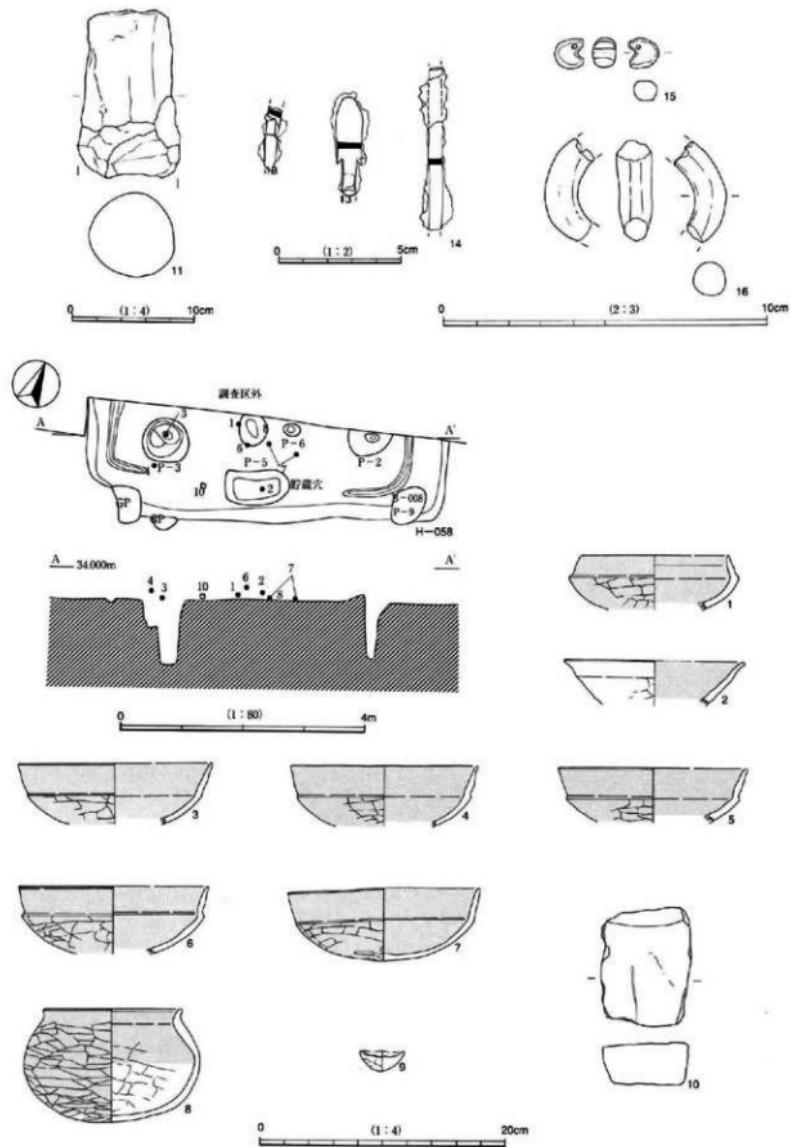


第92図 H-051出土遺物 (2)・H-053実測図

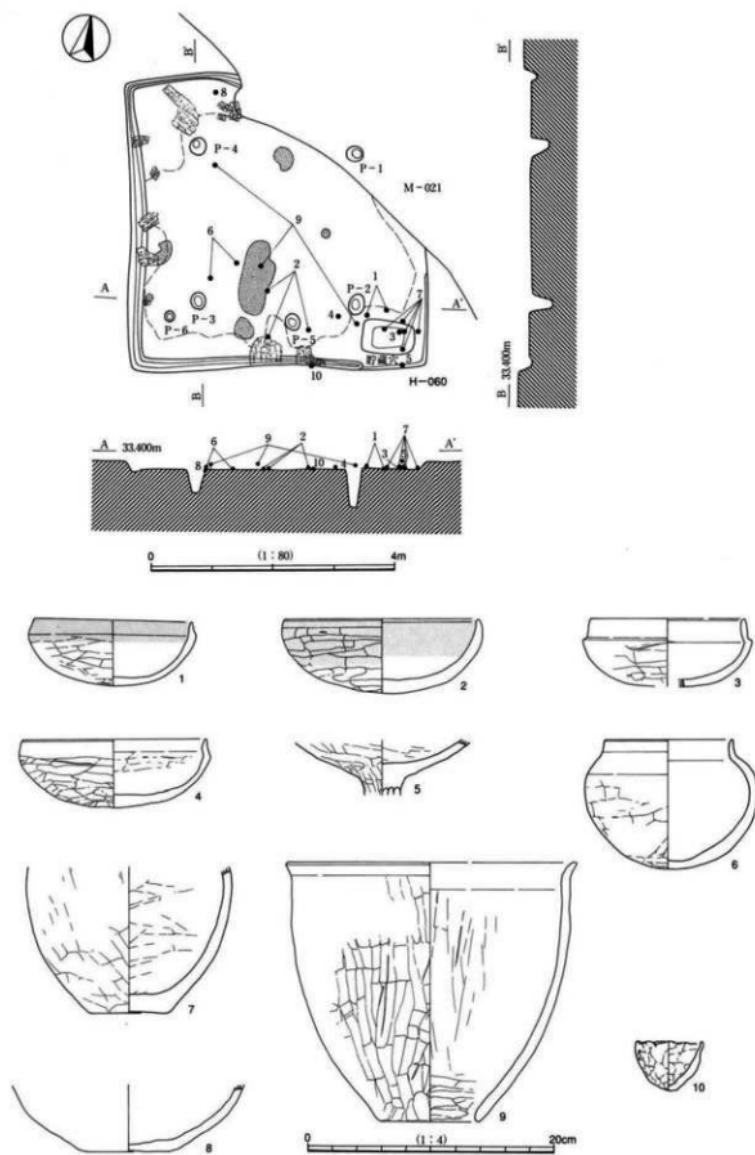


第93図 H-056実測図・出土遺物（1）

第2節 壁穴住居跡

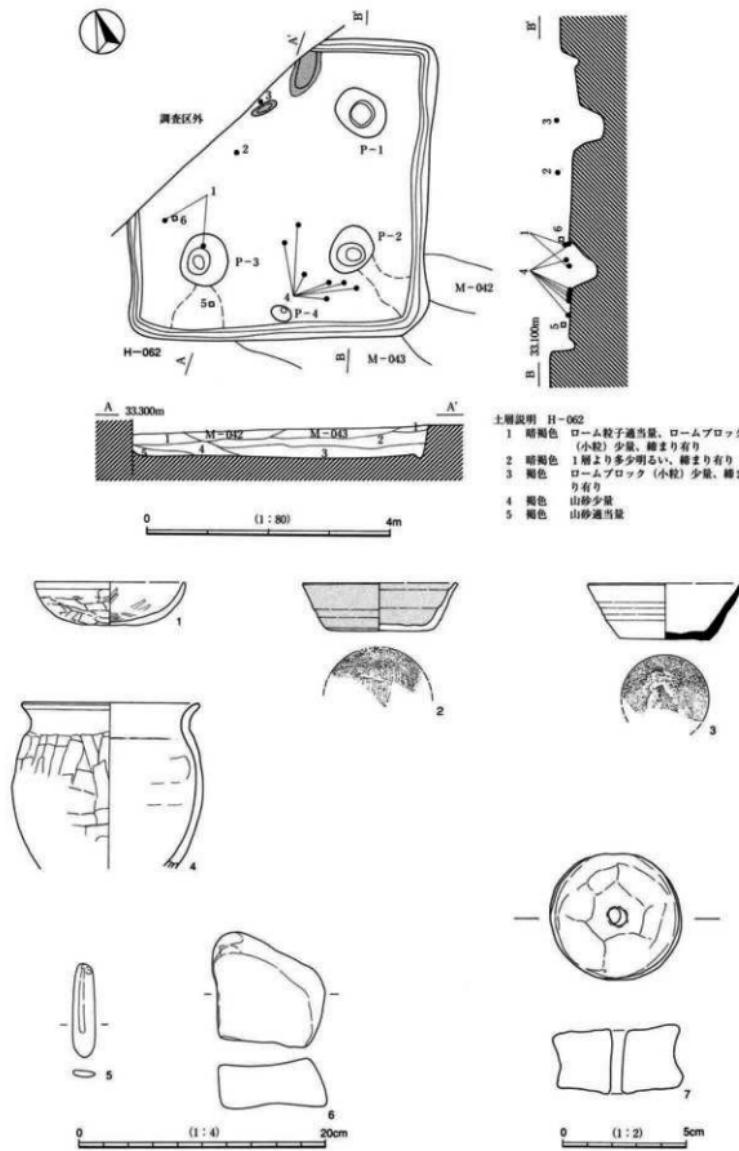


第94図 H-056出土遺物 (2)・H-058実測図・出土遺物

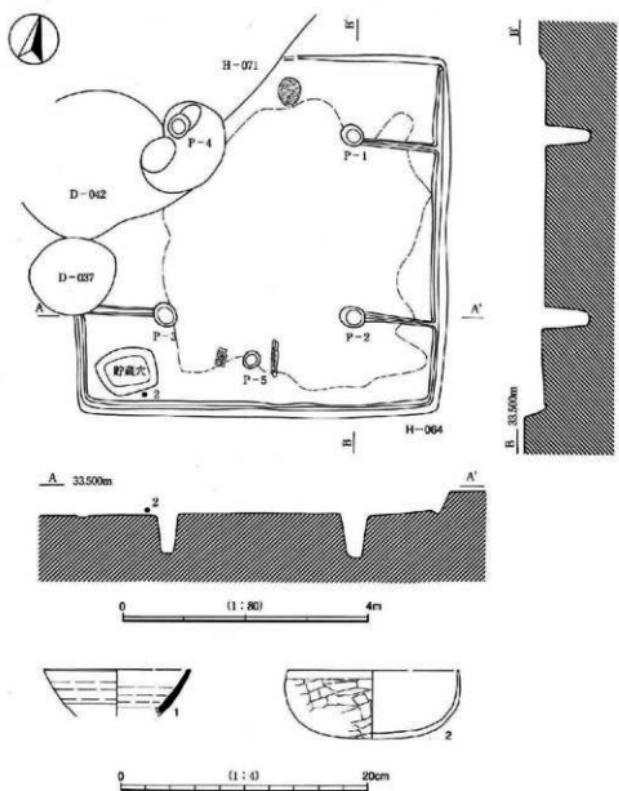


第95図 H-060実測図・出土遺物

第2節 坑穴住居跡

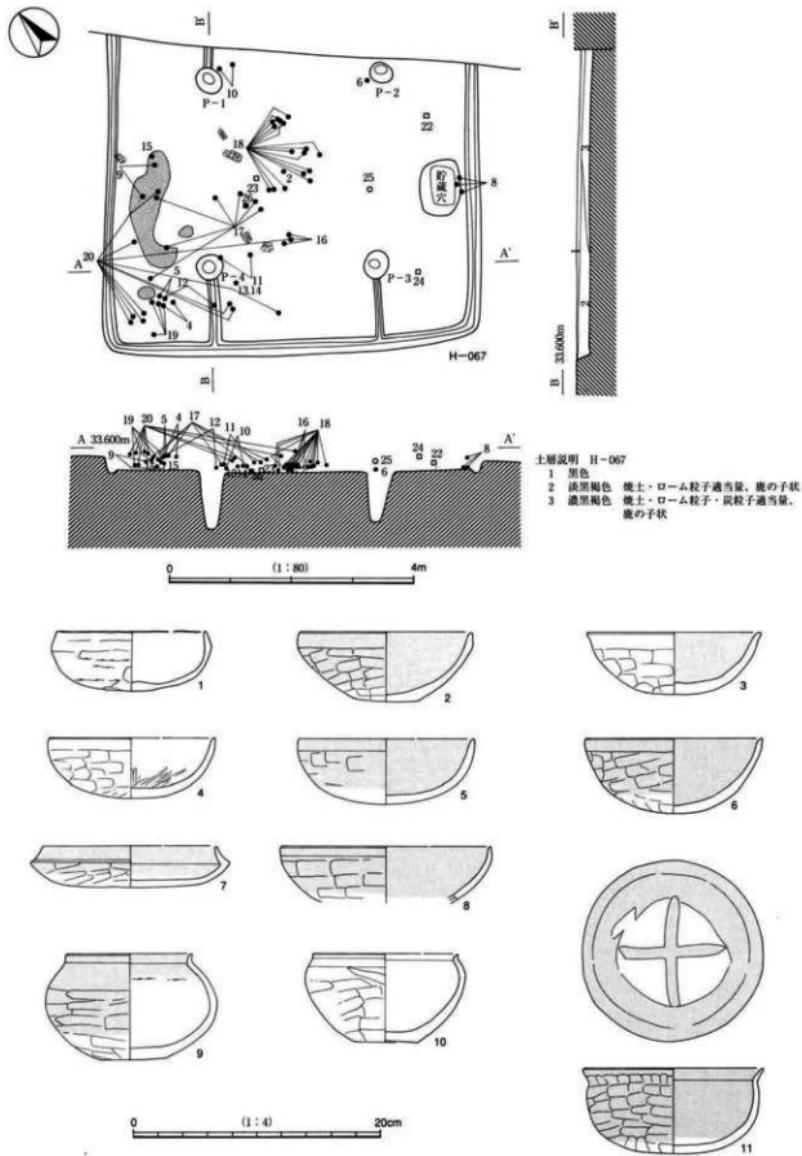


第96図 H-062実測図・出土遺物

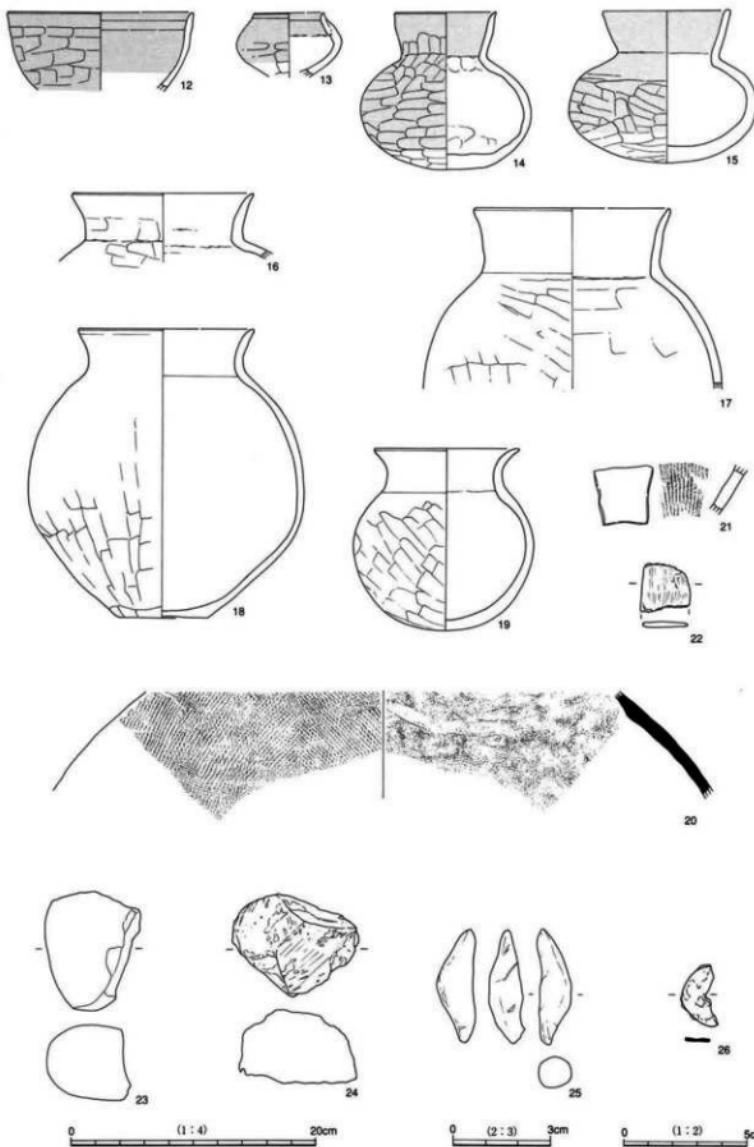


第97図 H-064実測図・出土遺物

第2節 壁穴住居跡

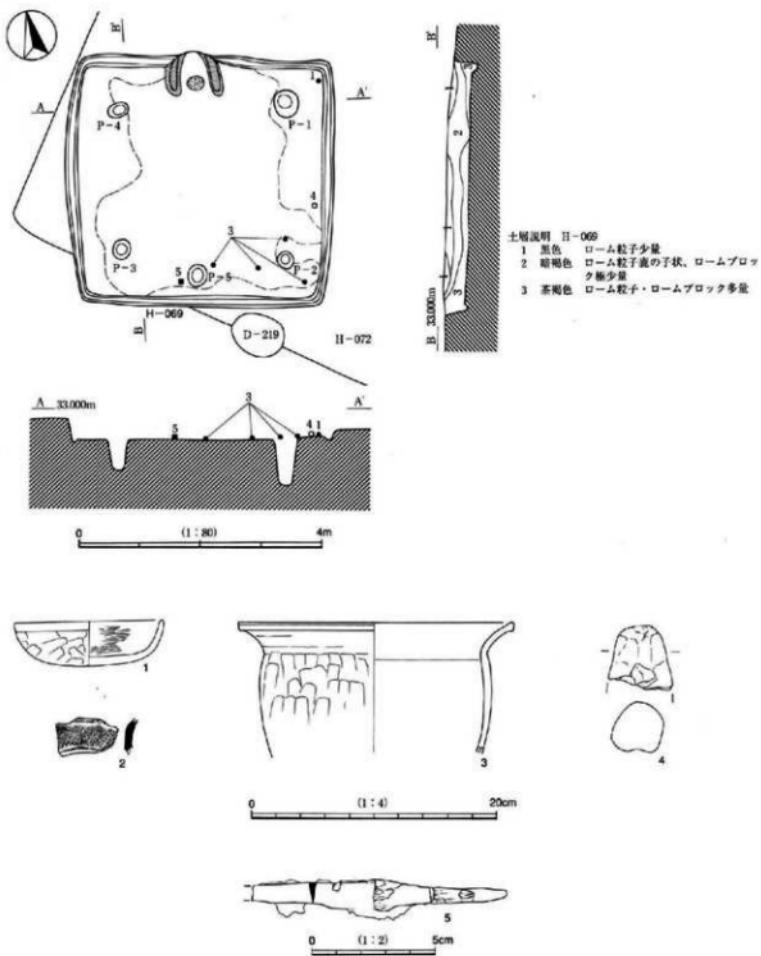


第98図 H-067実測図・出土遺物（1）

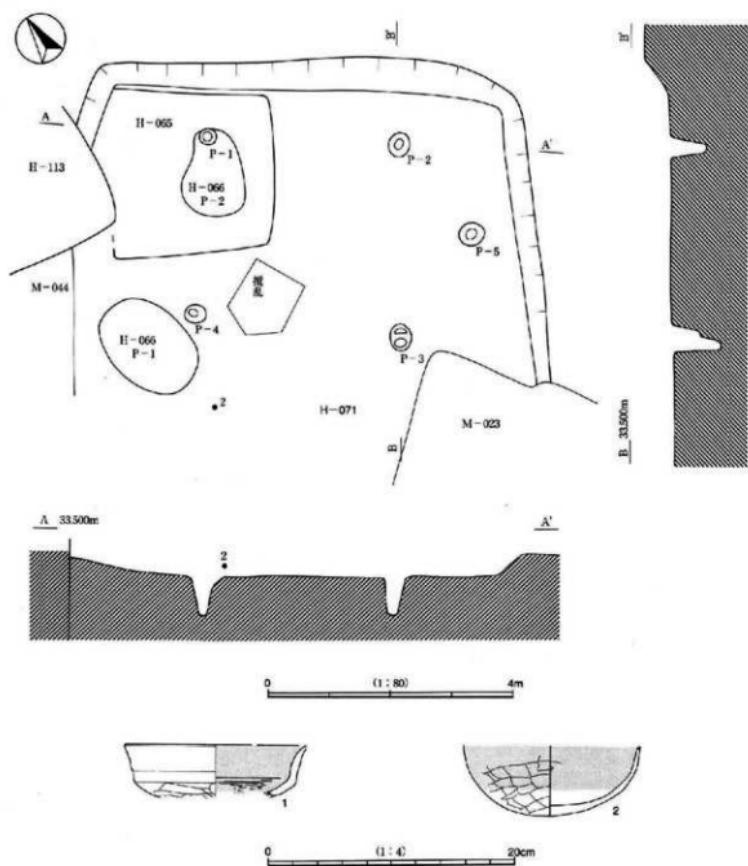


第99図 H-067出土遺物 (2)

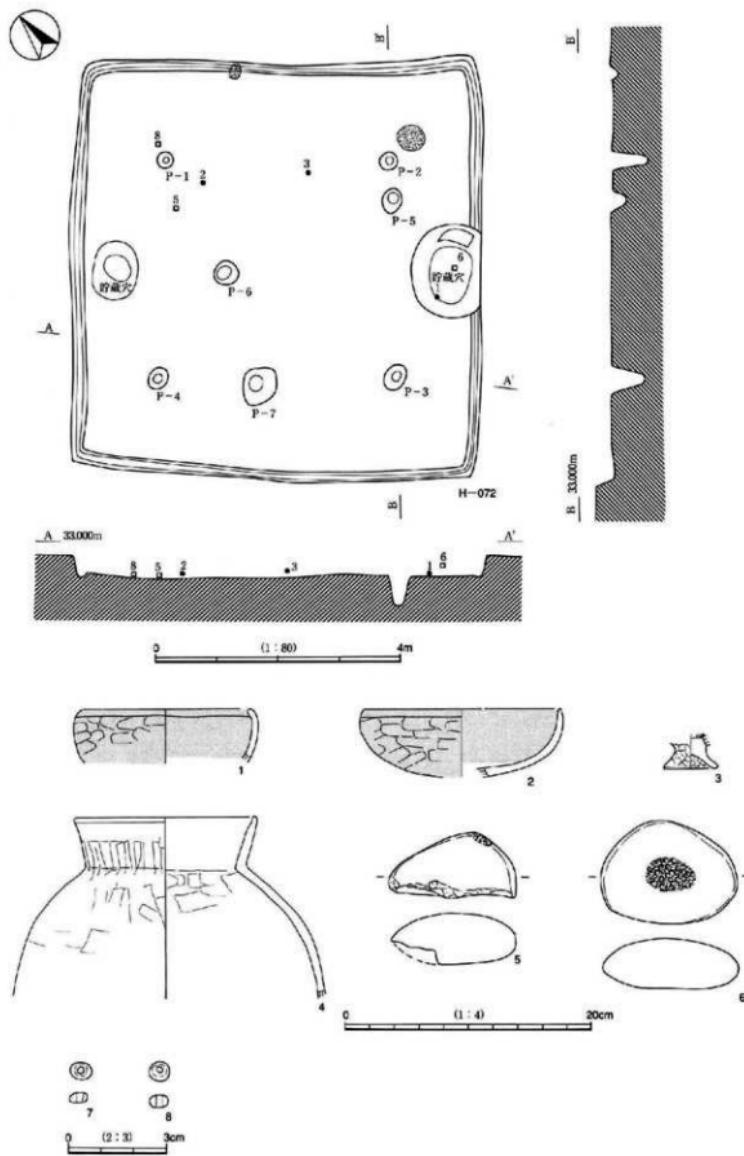
第2節 墓穴住居跡



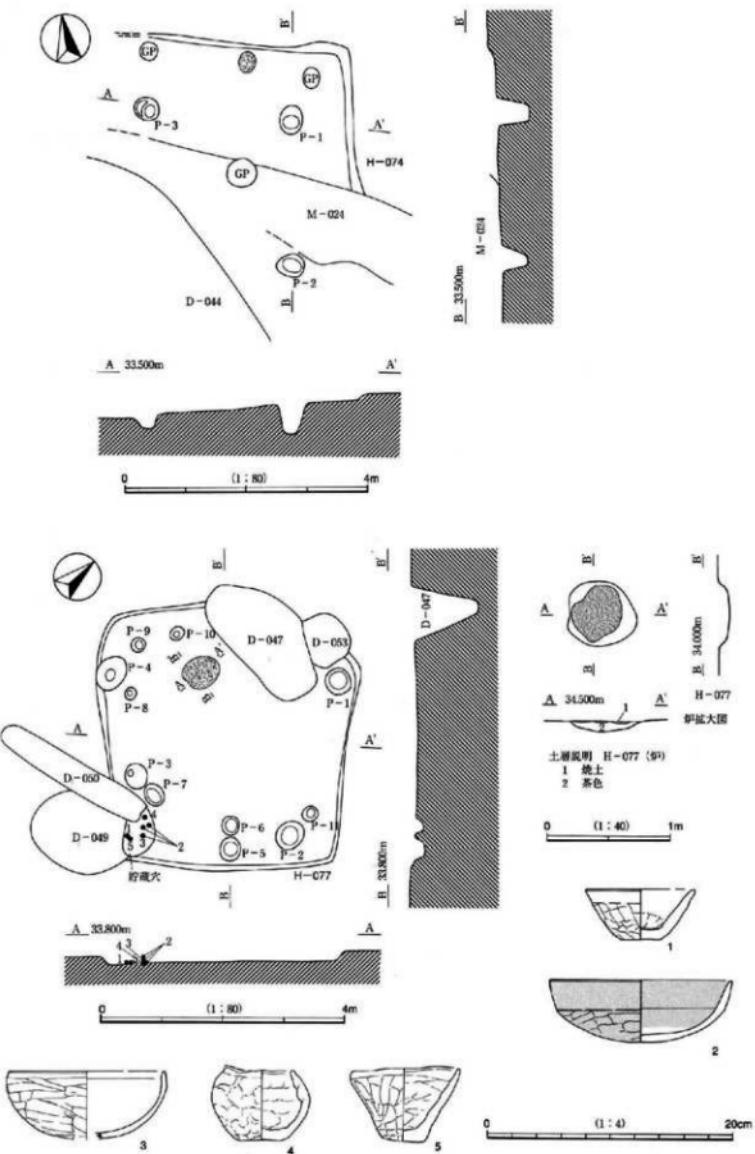
第100図 H-069実測図・出土遺物



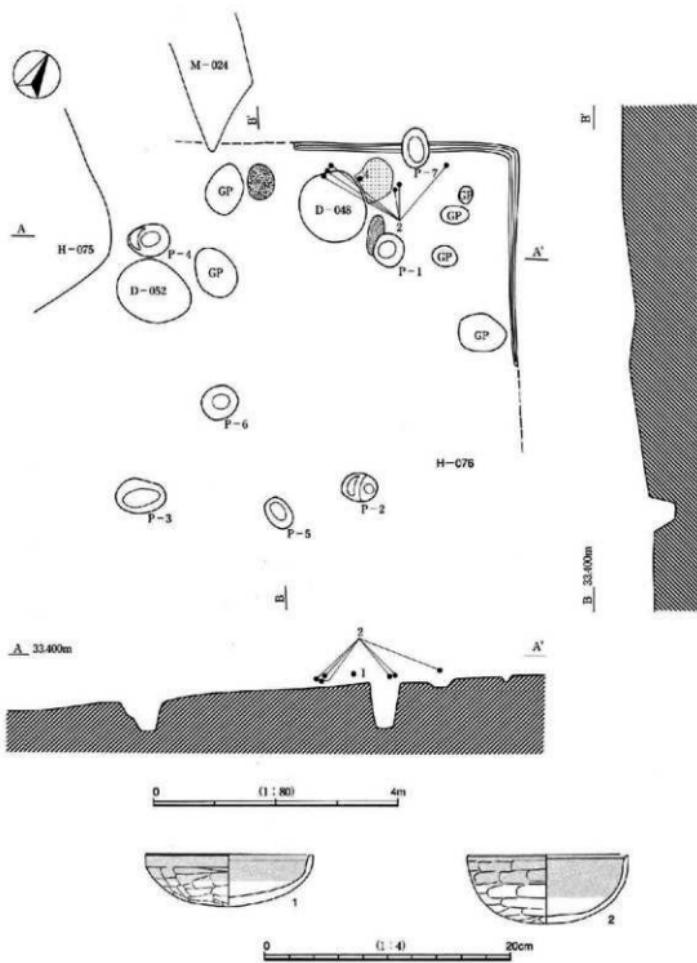
第101図 H-071実測図・出土遺物



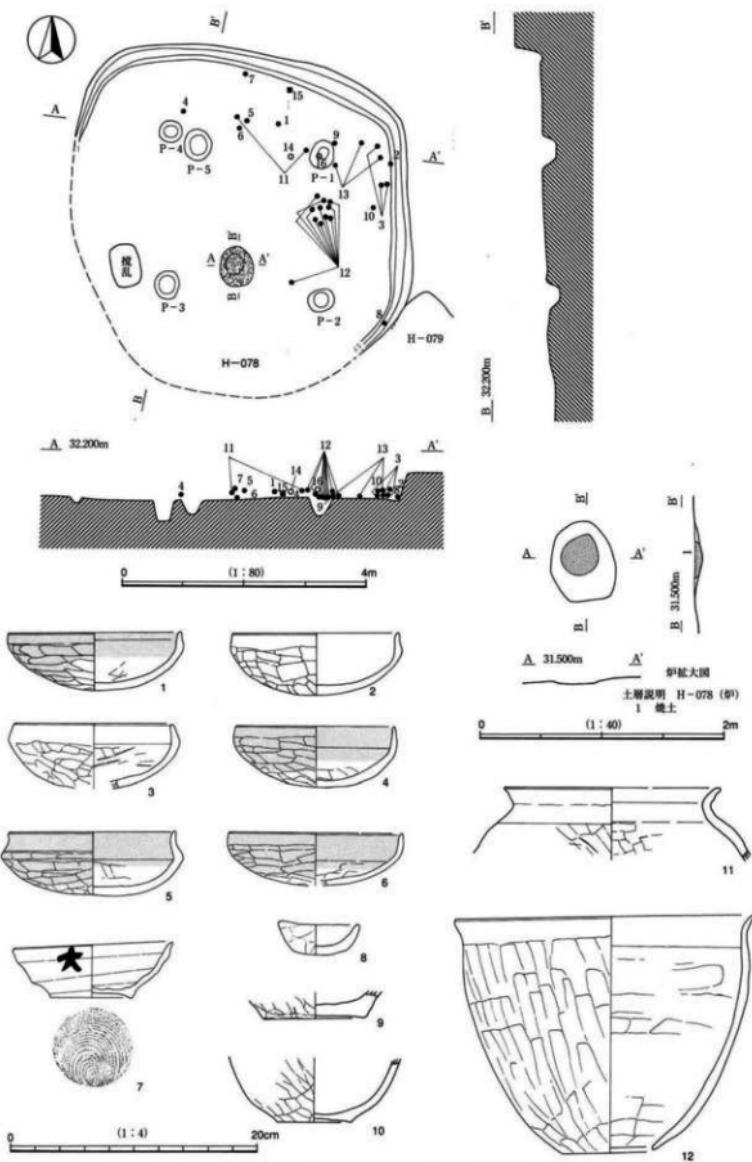
第102図 H-072実測図・出土遺物



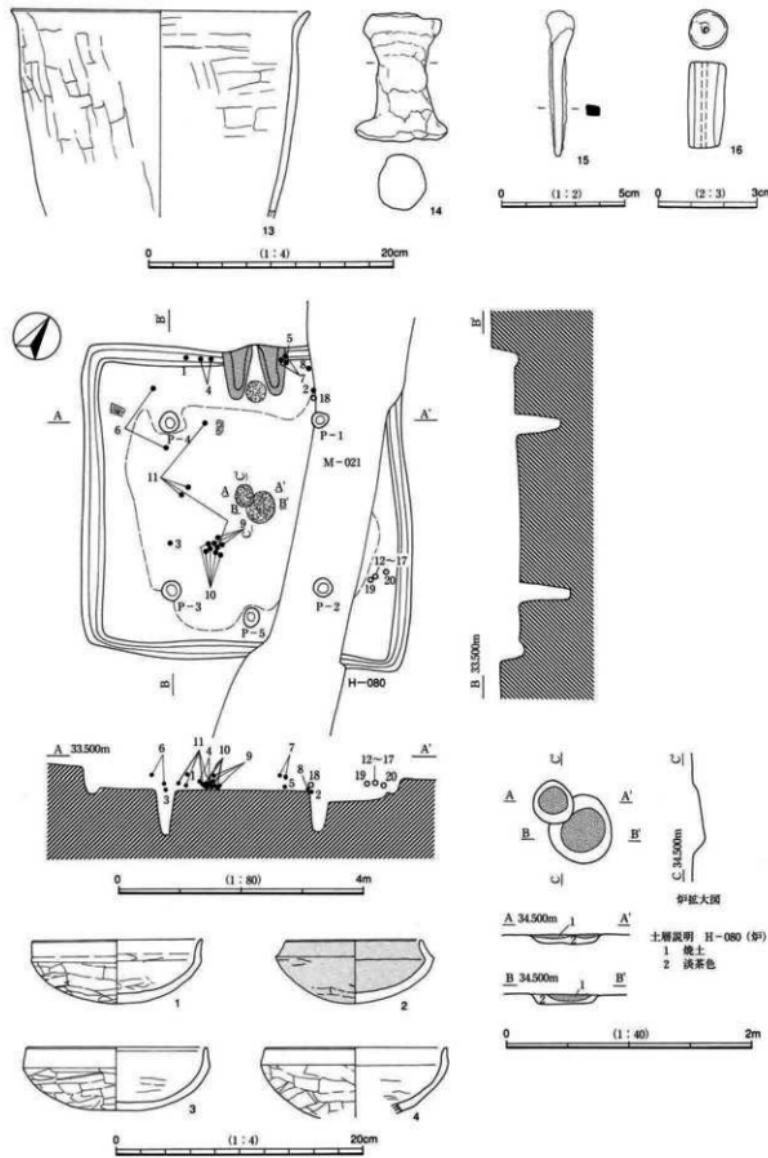
第103図 H-074・H-077実測図・出土遺物



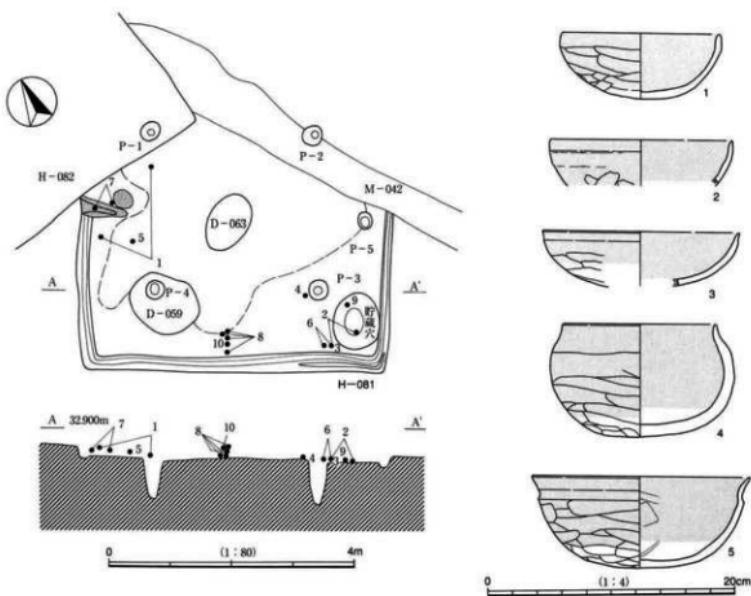
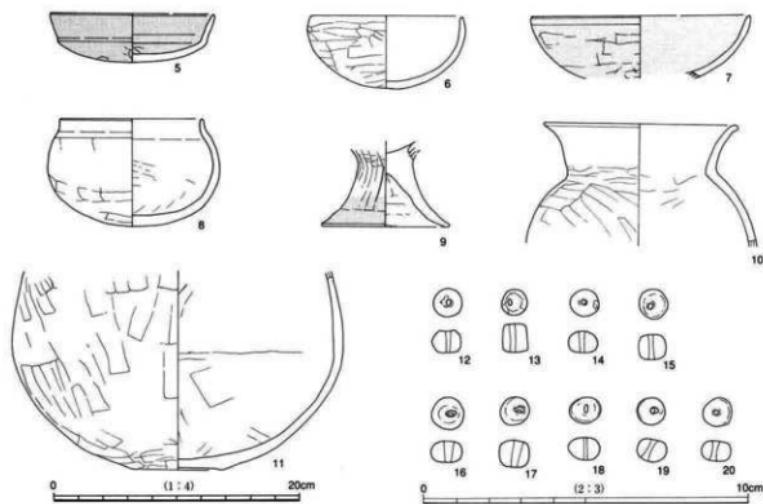
第104図 H-076実測図・出土遺物



第105図 H-078実測図・出土遺物（1）

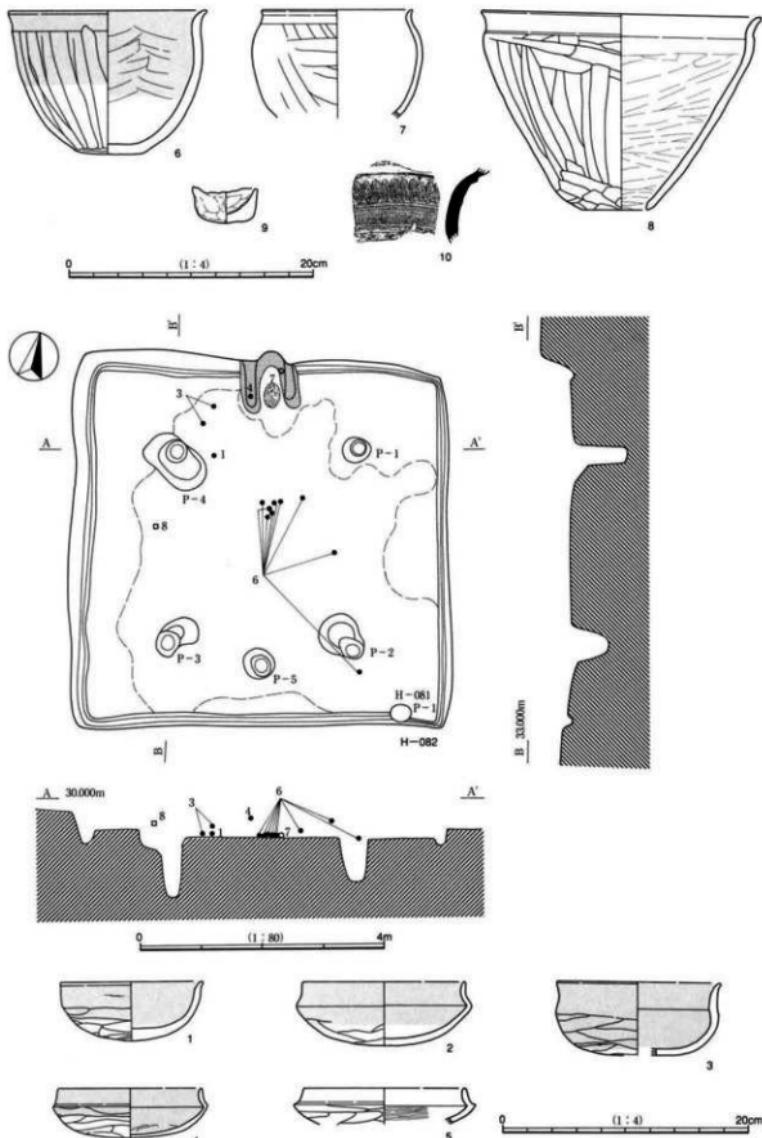


第106図 H-078出土遺物 (2)・H-080実測図・出土遺物 (1)

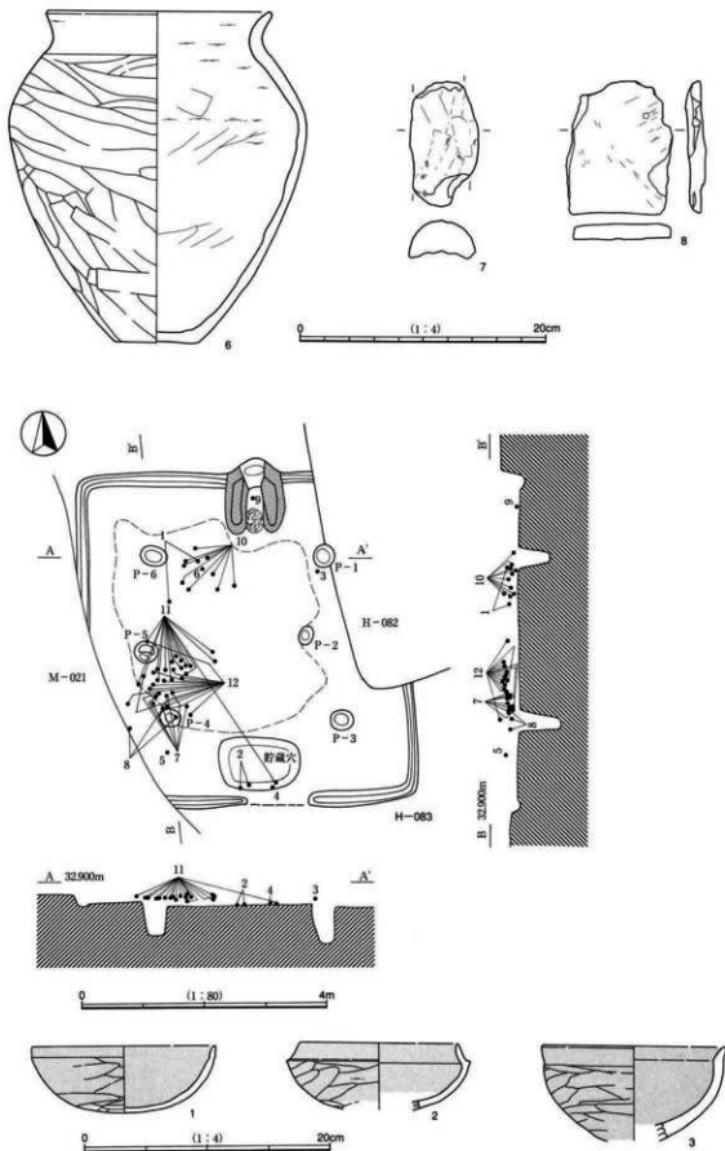


第107図 H-080出土遺物 (2)・H-081実測図・出土遺物 (1)

第2節 壺穴住居跡

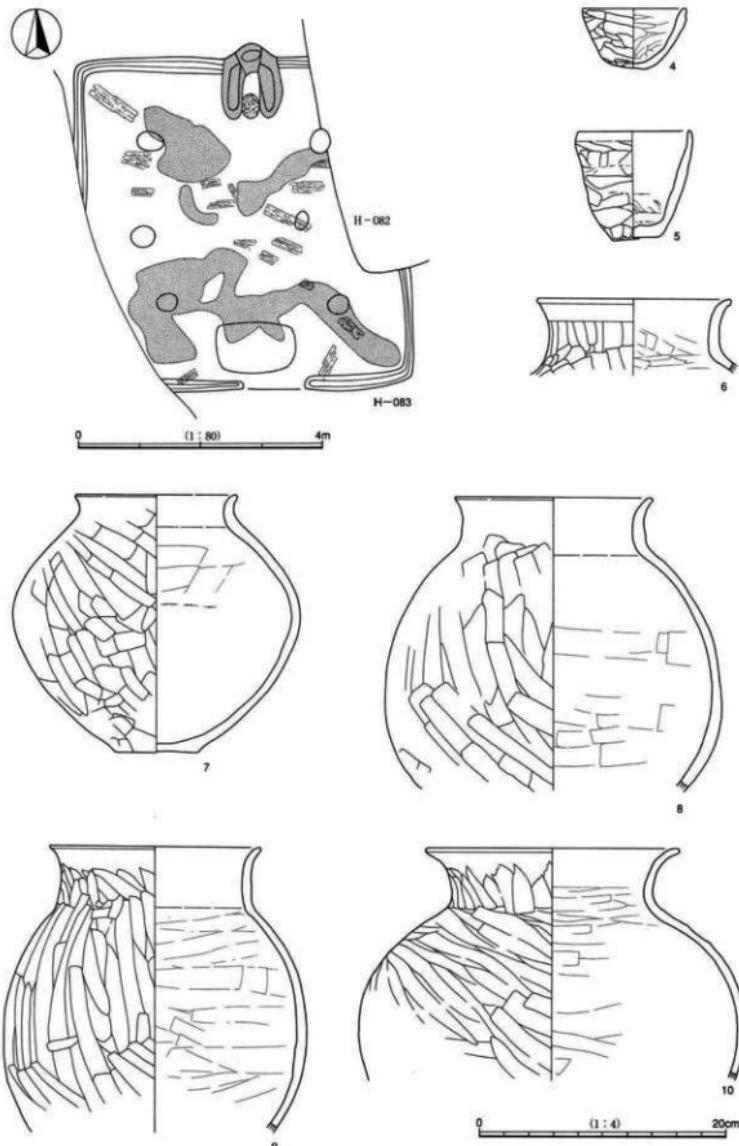


第108図 H-081出土遺物 (2)・H-082実測図・出土遺物 (1)

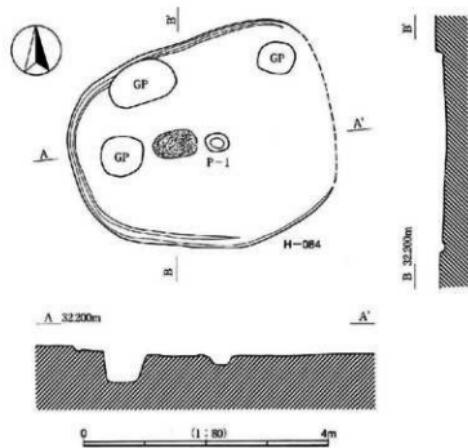
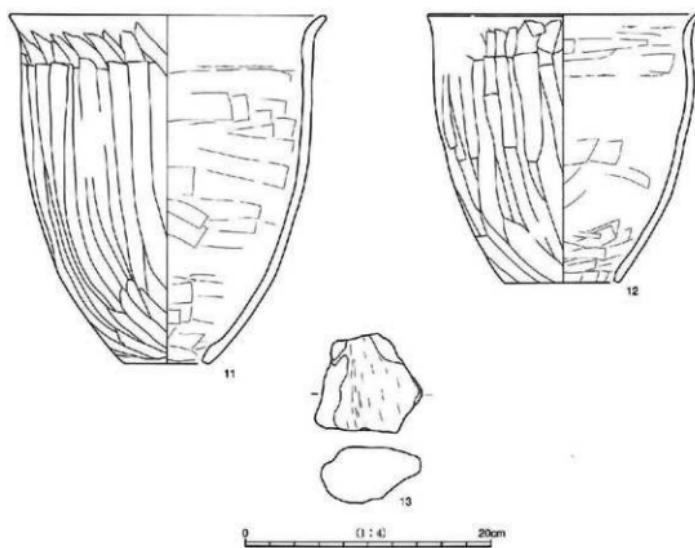


第109図 H-082出土遺物（2）・H-083実測図・出土遺物（1）

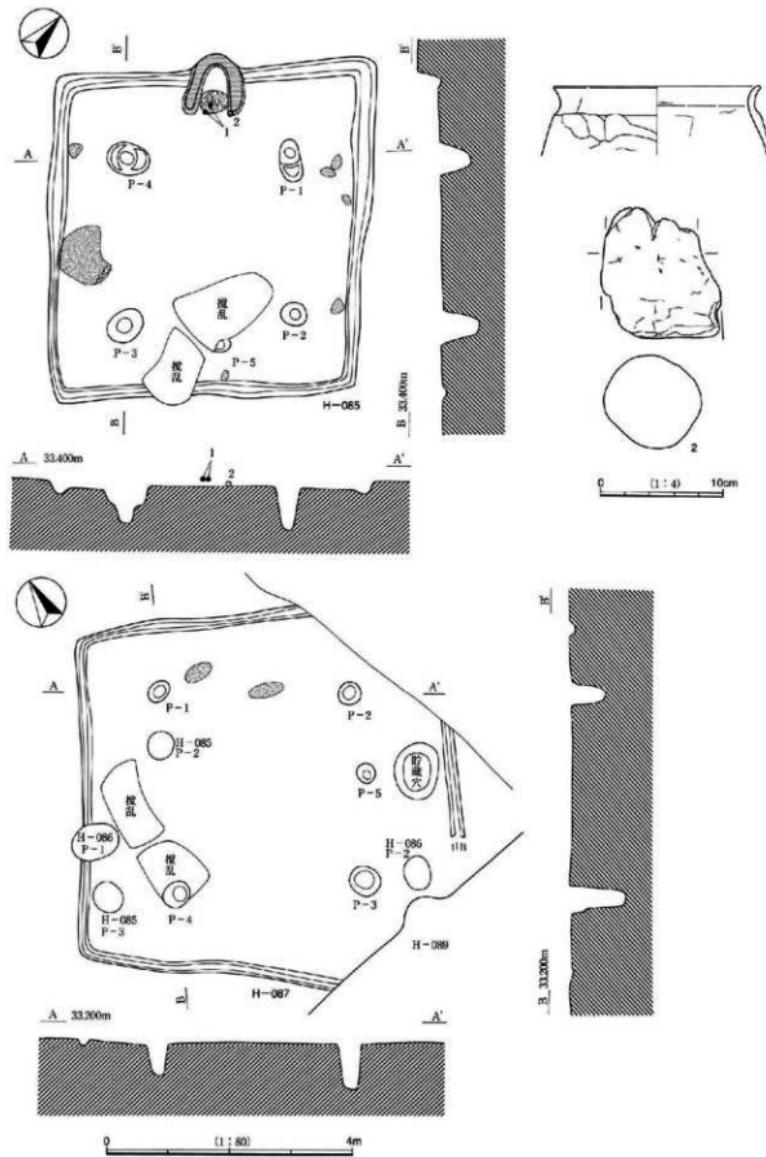
第2節 壓穴住居跡



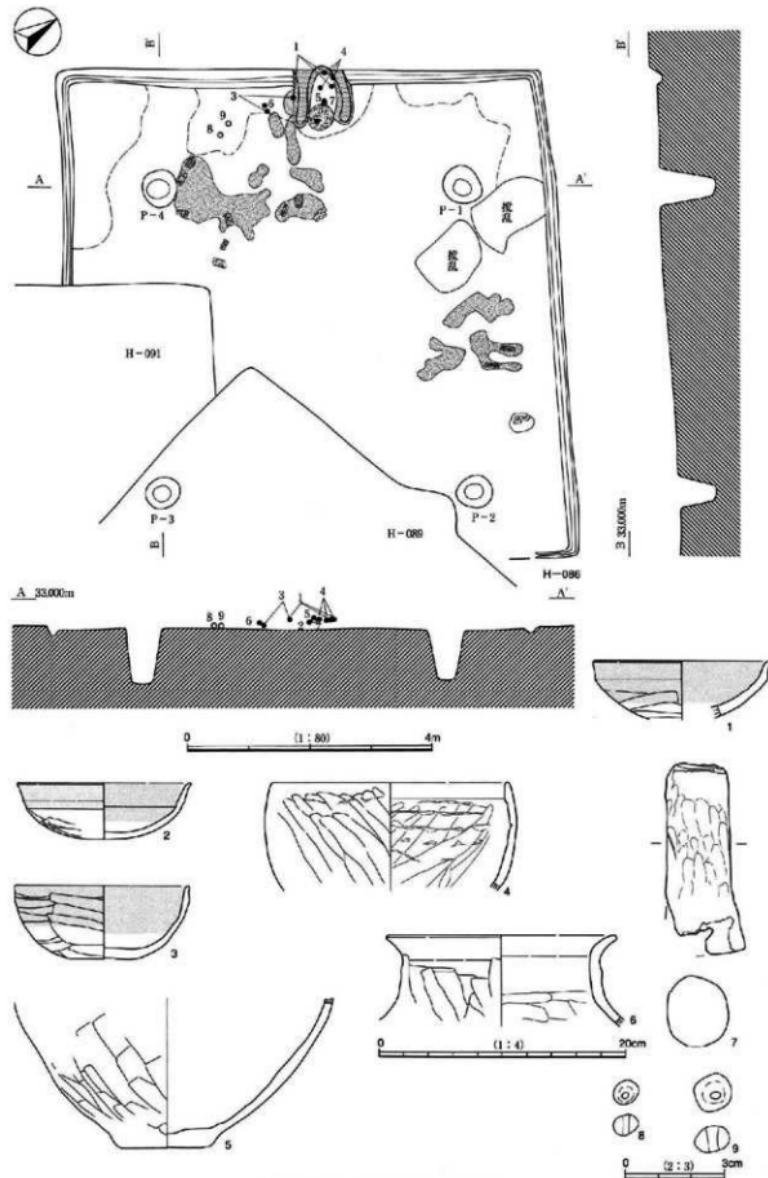
第110図 H-083実測図・出土遺物（2）



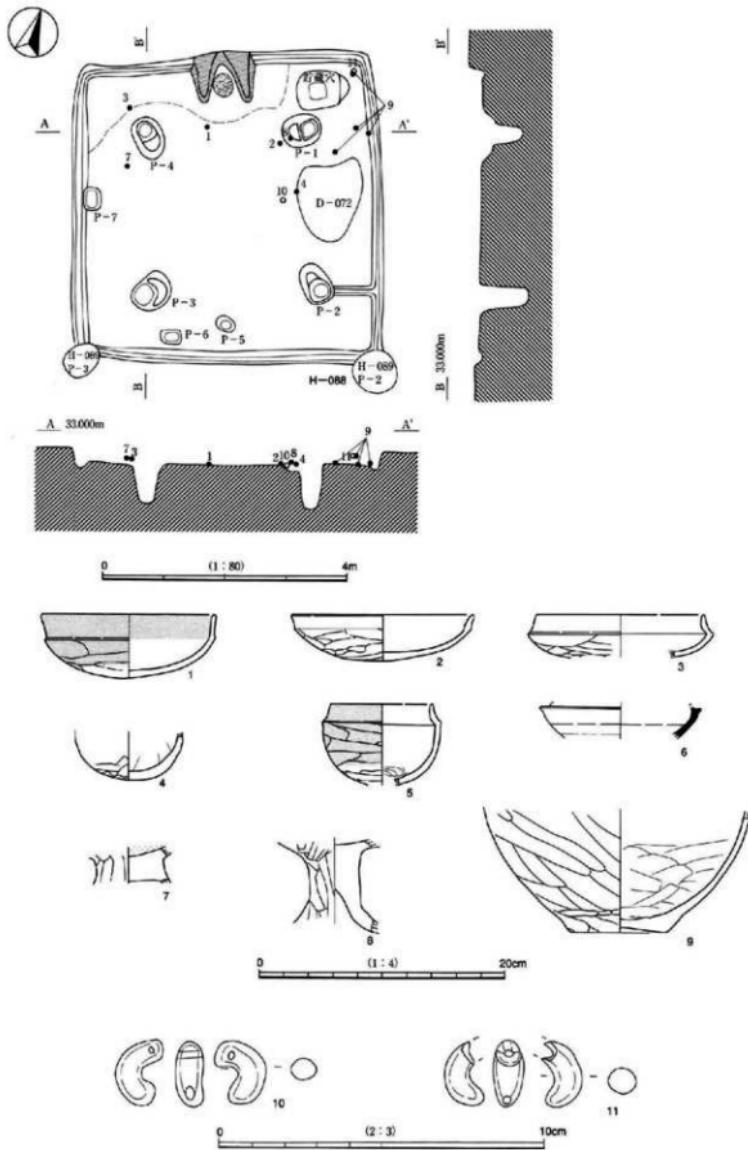
第111図 H-083出土遺物（3）・H-084実測図



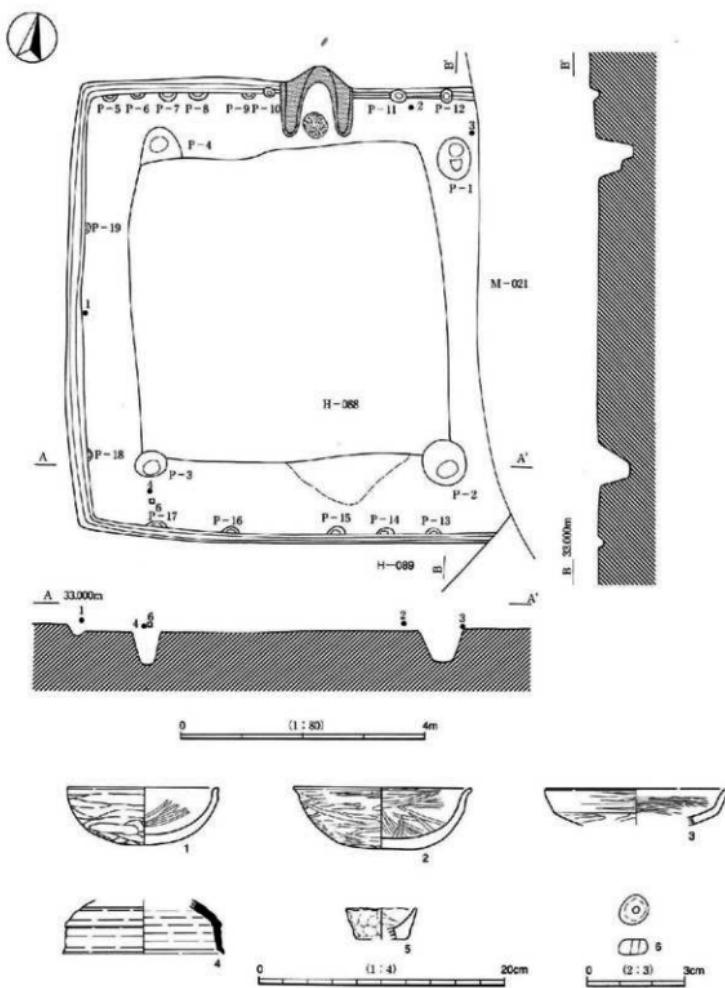
第112図 H-085実測図・出土遺物・H-087実測図



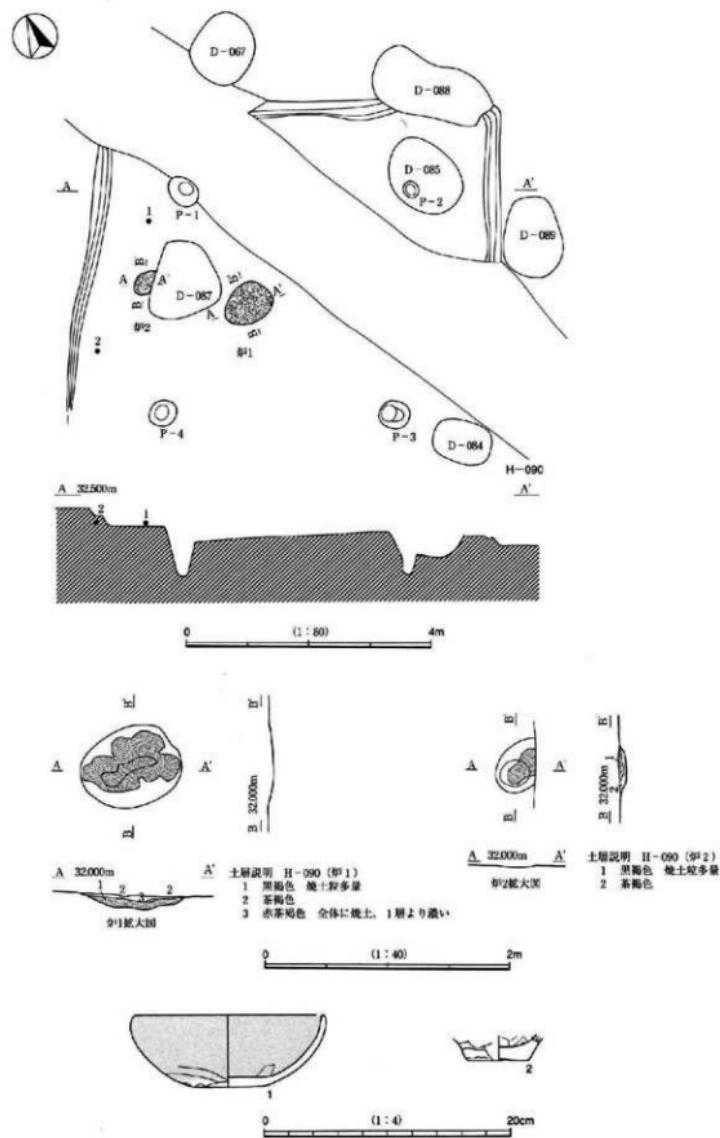
第113図 H-086実測図・出土遺物



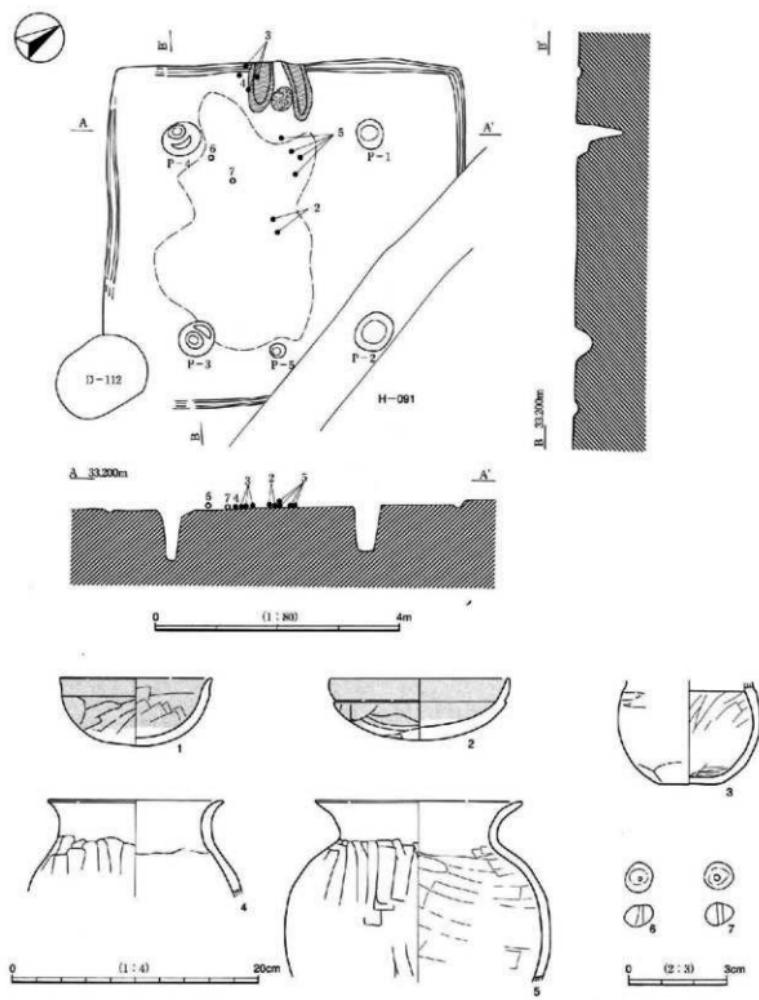
第114図 H-088実測図・出土遺物



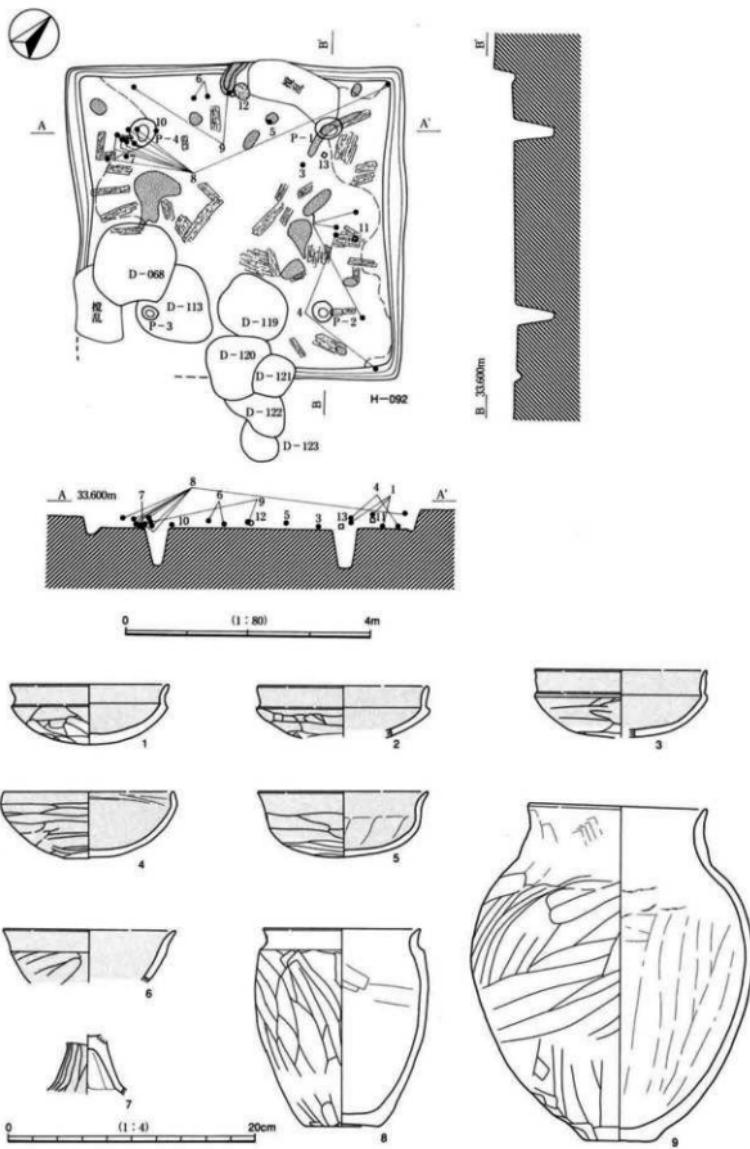
第115図 H-089実測図・出土遺物



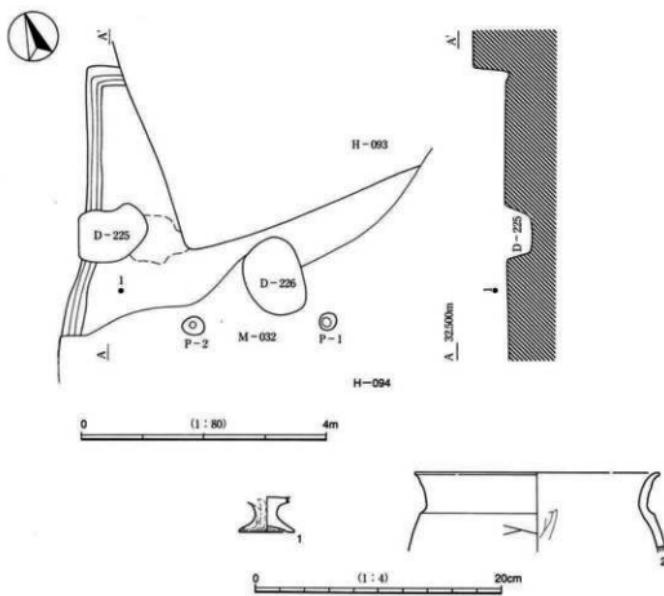
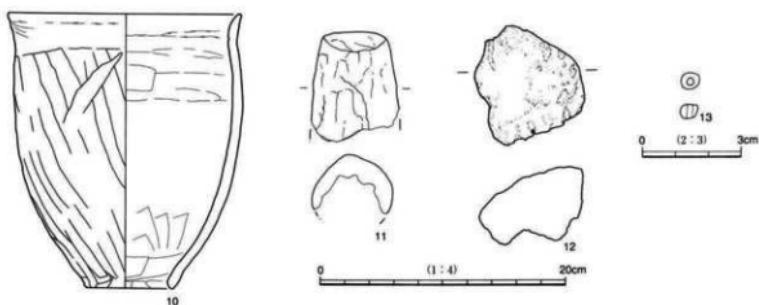
第116図 H-090実測図・出土遺物



第117図 H-091実測図・出土遺物

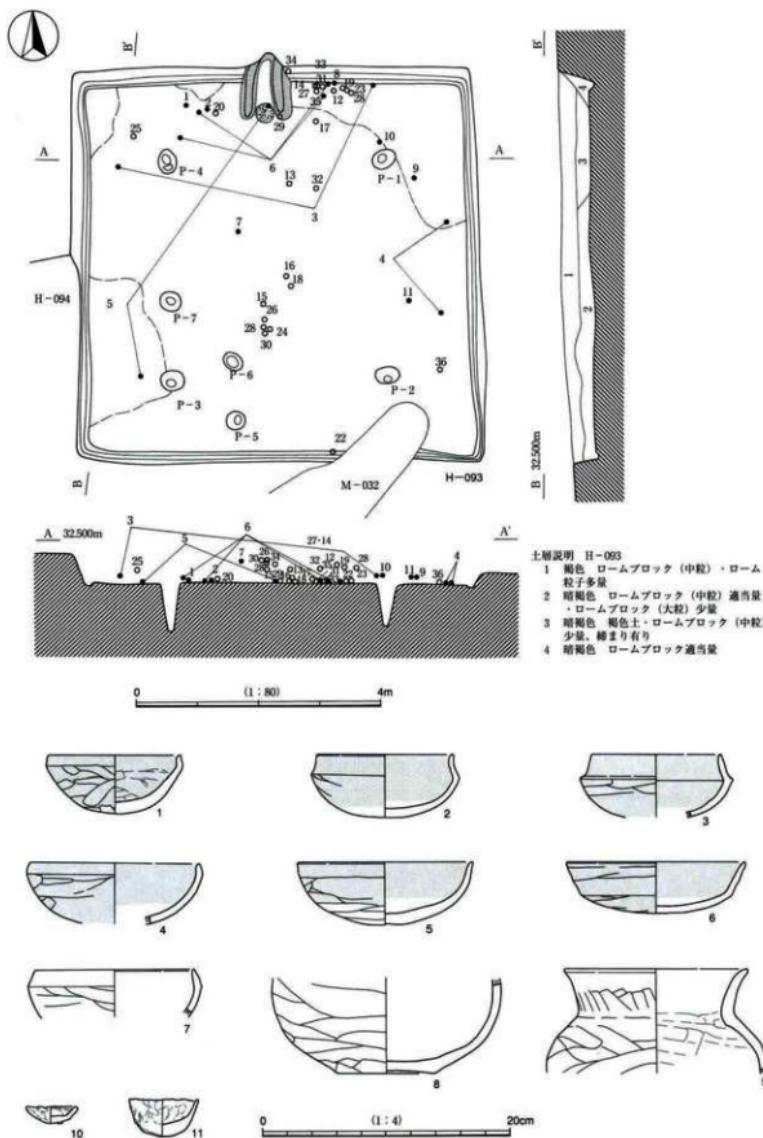


第118図 H-092実測図・出土遺物（1）

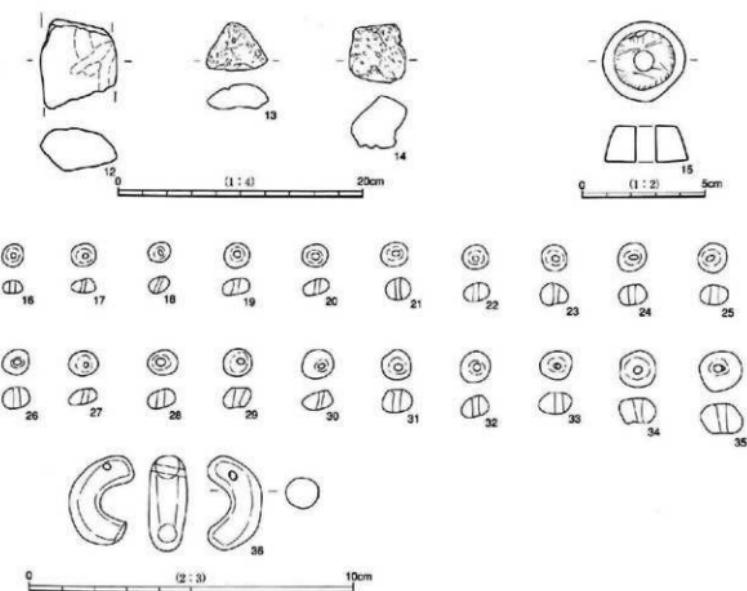


第119図 H-092出土遺物（2）・H-094実測図・出土遺物

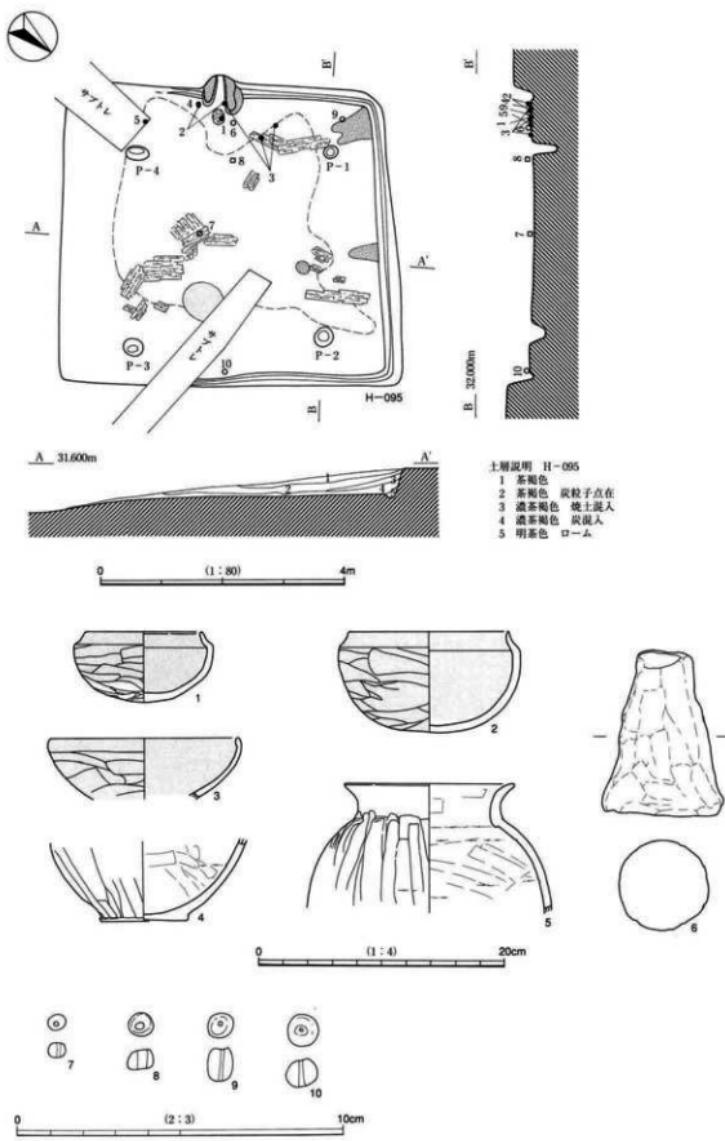
第2節 堅穴住居跡



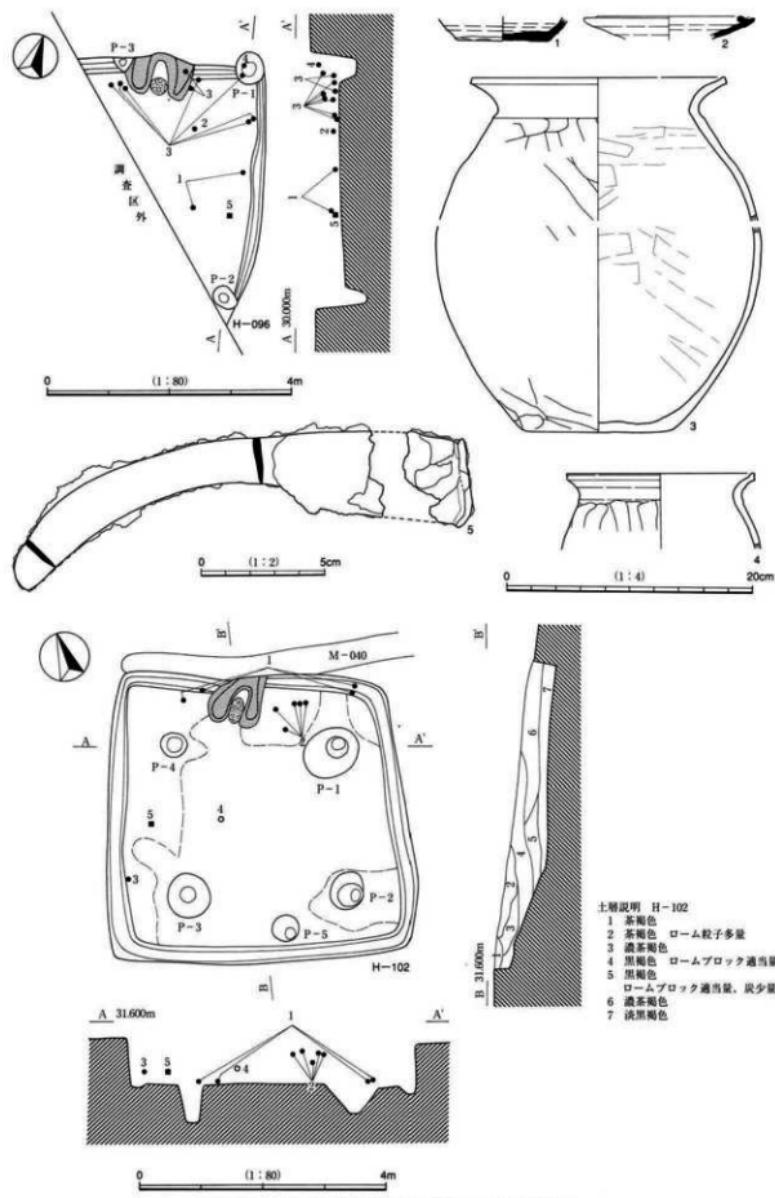
第120図 H-093実測図・出土遺物（1）



第121図 H-093出土遺物（2）

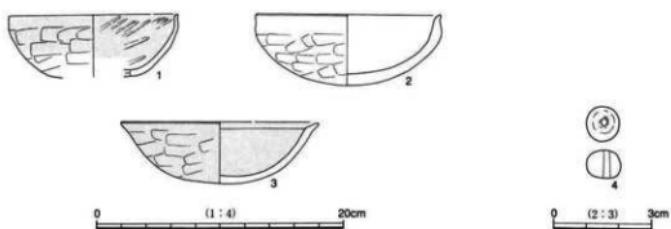
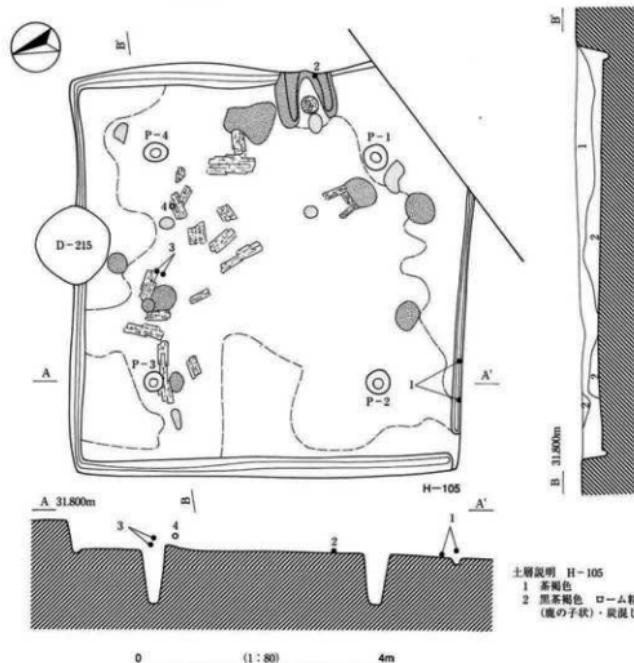
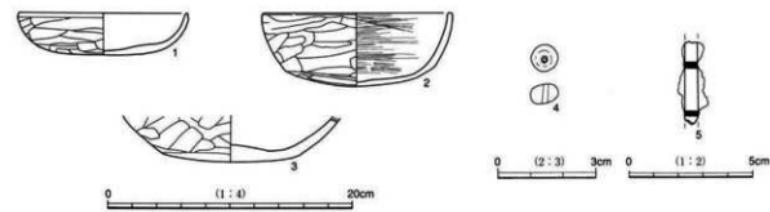


第122図 H-095実測図・出土遺物

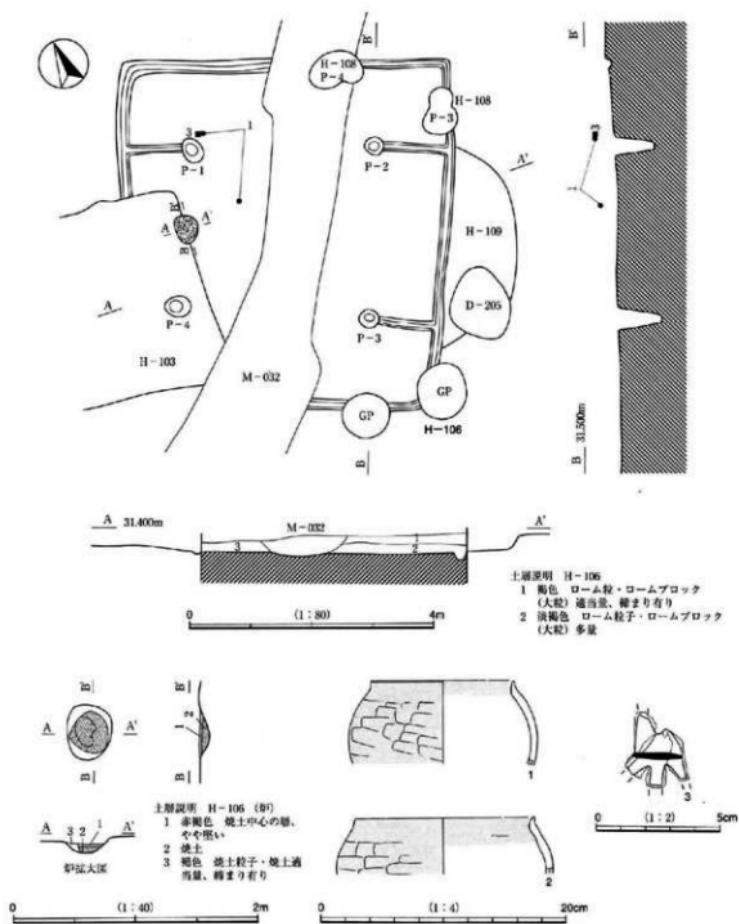


第123図 H-096実測図・出土遺物・H-102実測図

第2節 壁穴住居跡

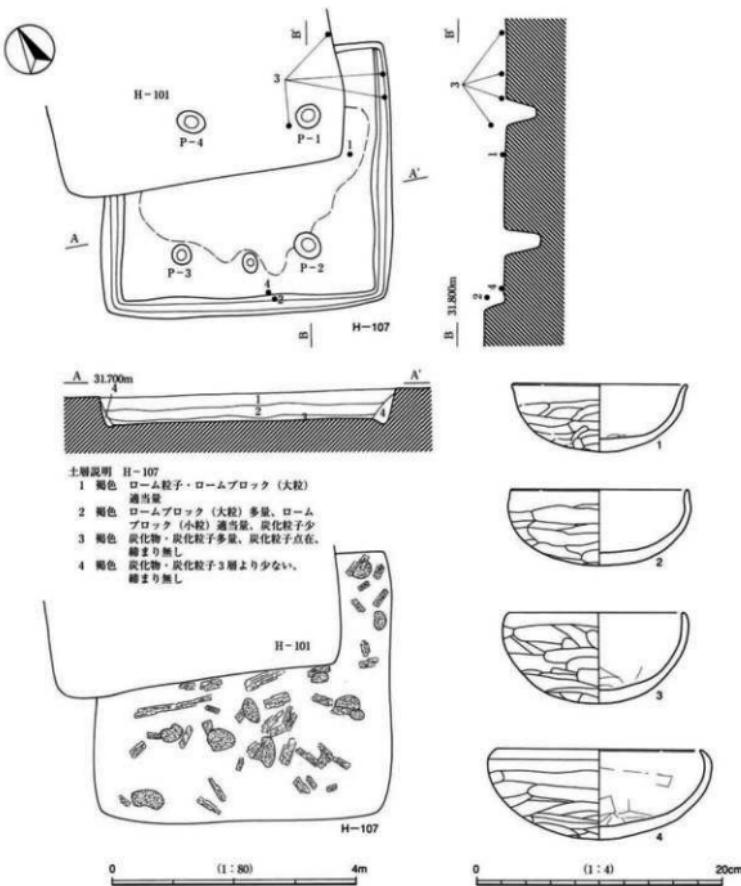


第124図 H-102出土遺物・H-105実測図・出土遺物

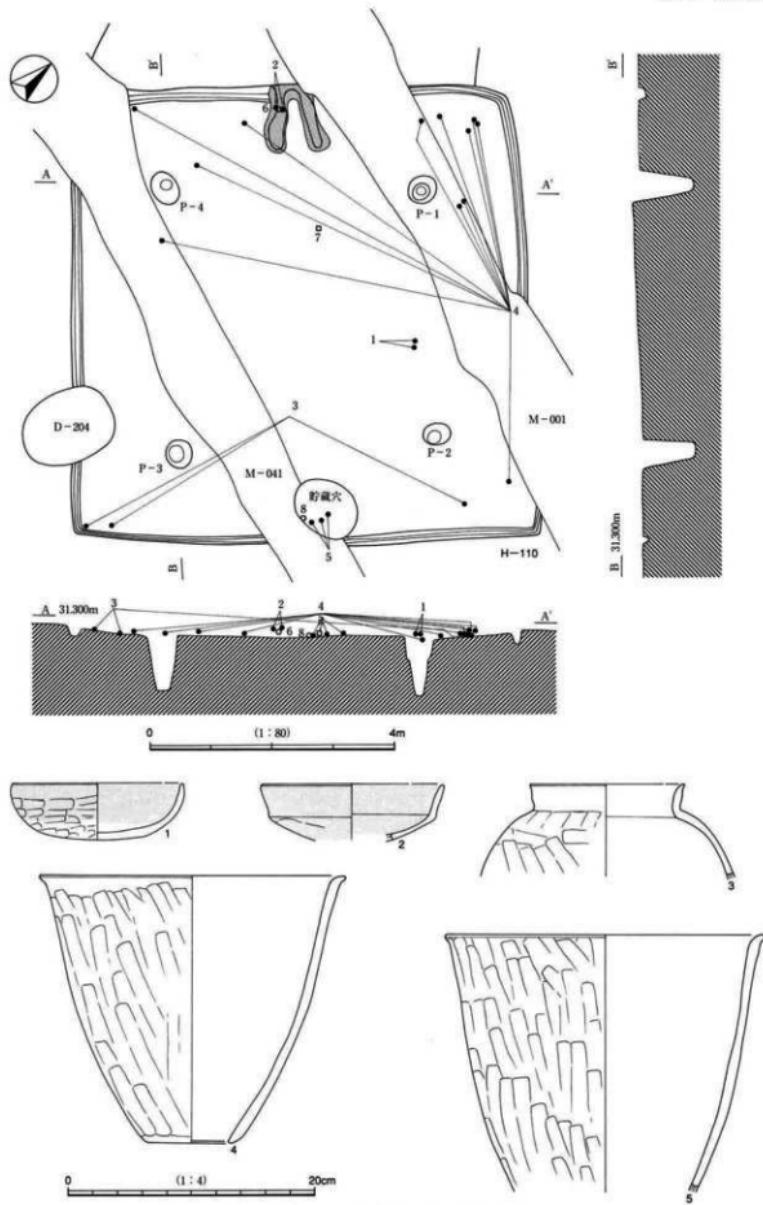


第125図 H-106実測図・出土遺物

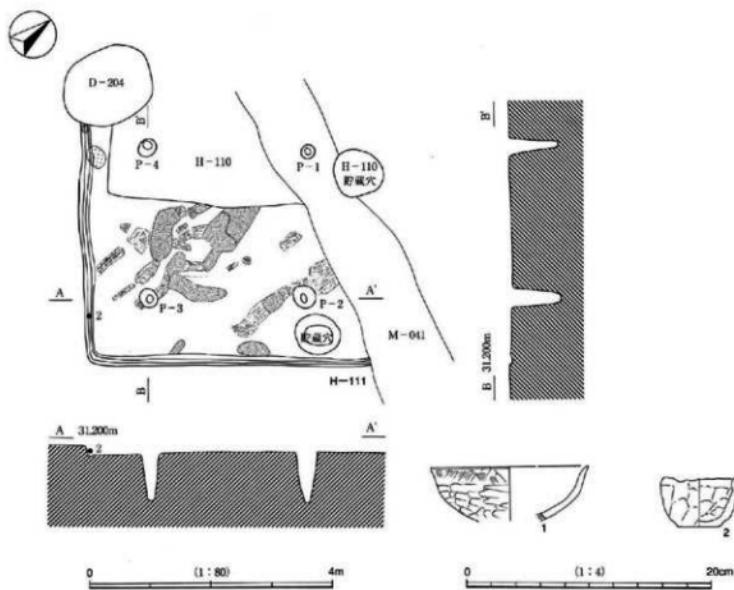
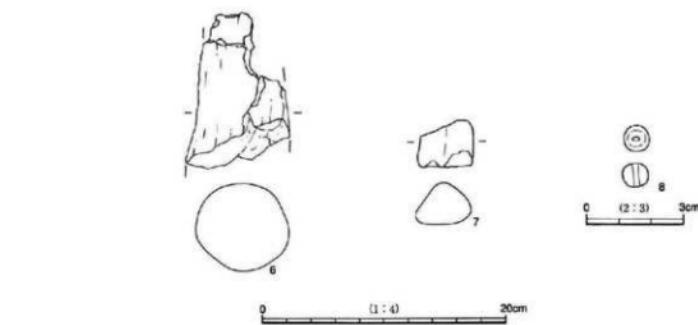
第2節 壁穴住居跡



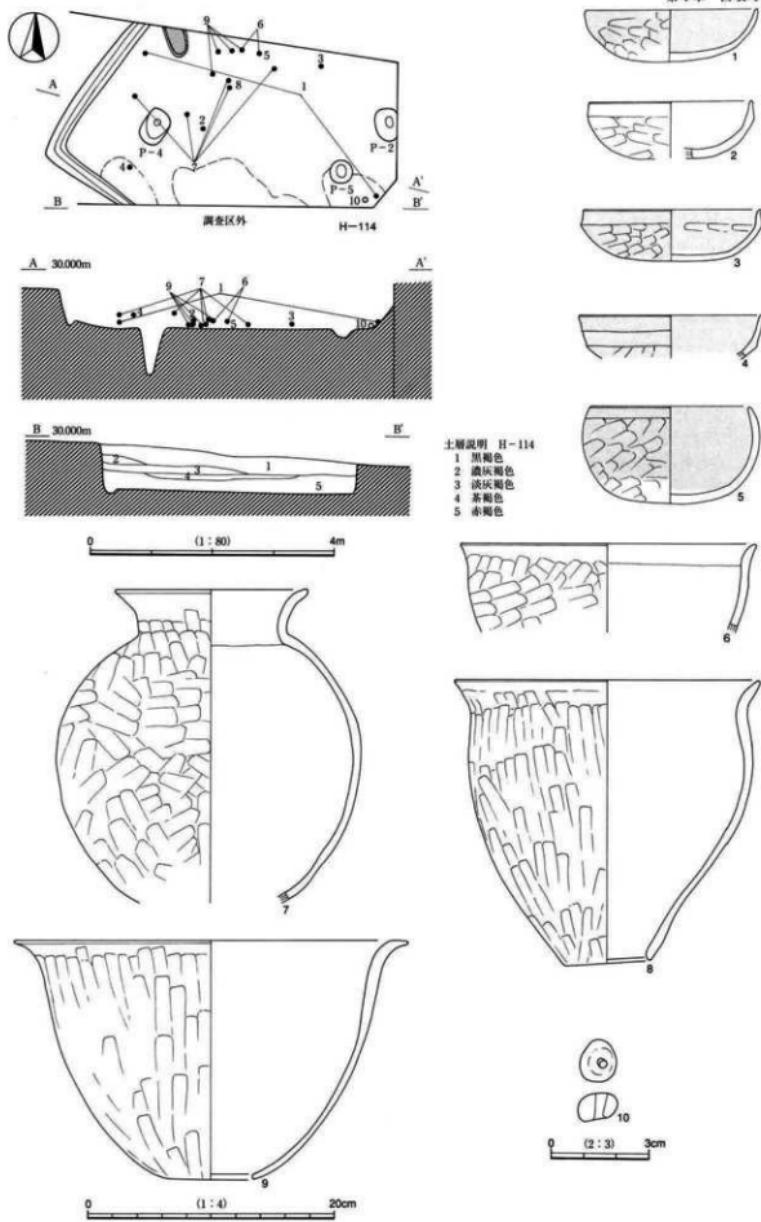
第126図 H-107実測図・出土遺物



第127図 H-110実測図・出土遺物（1）



第128図 H-110出土遺物(2)・H-111実測図・出土遺物



第129図 H-114実測図・出土遺物

第3章 土 坑

第3節 土 坑 (古墳)

D-028 (第130図)

調査区中央部に位置する。H-036が重複している。平面形は、プラン・底部とも不明である。長径0.92m×短径(0.42)m×深さ0.31mを測る。

本土坑の性格は不明である。

D-029 (第130図)

調査区中央部に位置する。H-036, 040が重複する。平面形は、プラン・底部とも梢円形を呈する。長径1.1m×短径0.8m×深さ0.37mを測る。

本土坑の性格は不明である。

D-030 (第130図)

調査区中央部に位置する。平面形は、プラン・底部とも円形を呈する。長径0.83m×短径0.70m×深さ0.27mを測る。

本土坑の性格は不明である。

D-035 (第130図)

調査区中央部に位置する。平面形は、プラン・底部とも円形を呈する。長径1.1m×短径1.1m×深さ0.54mを測る。

本土坑の性格は不明である。

D-193 (第130図)

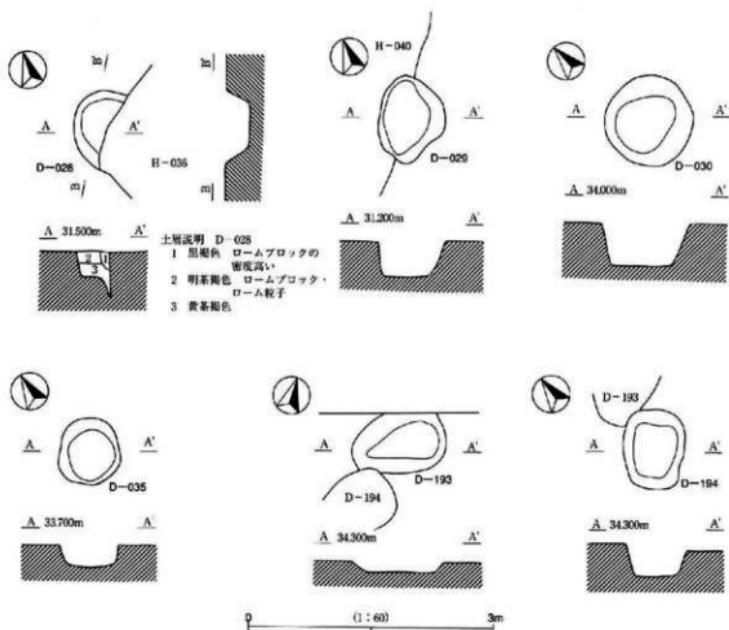
調査区北部に位置する。調査区域外、D-194に切られている。平面形は、プラン・底部とも梢円形を呈する。長径1.16m×短径(0.75)m×深さ0.18mを測る。

本土坑の性格は不明である。

D-194 (第130図)

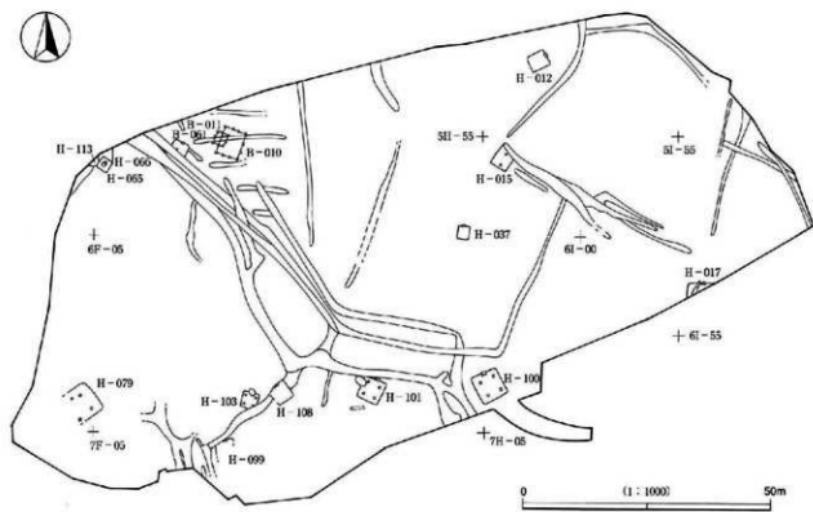
調査区北部に位置する。平面形は、プラン・底部とも隅丸長方形を呈する。長径1.0m×短径0.75m×深さ0.39mを測る。

本土坑の性格は不明である。



第130図 D-028・029・030・035・193・194実測図

第5章 奈良・平安時代



第131図 奈良・平安時代造構配置図

第5章 奈良・平安時代

第1節 概要

住居跡14軒、掘立柱建物2軒、土坑13基、溝4条が検出された。住居跡の数は減少し、住居も小型化していく。調査区の北側や南側に点在している。

第2節 穴住居跡

H-012（第132図）

調査区東北部に位置する。H-013、H-034、H-035に切られる。規模は3.65m×4.08mを測り、形状は正方形を呈している。

覆土は3層に分層される。

カマド周辺からほぼ全体に硬化範囲である。周溝は、擾乱で切られる南側以外全周し、幅22cm、深さ9.2cmを測る。

ピットは床面に1本検出された。主柱穴ではなく、入り口付近に検出されたピットのみである。P-1（径41cm×55cm、深さ41cm）を測る。カマドは北東壁中央部に位置し、火床部は検出されなかった。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺4点、甕1点、瓶1点、玉1点、鉄製品1点、計8点を図示した。

1～4は土器器坏である。1は口縁から底部の1/3が遺存する。ロクロ成形で、底部下端手持ちヘラケズリ、底部には「長子天」の墨書が施されている。法量は復元口径11.8cm、残存器高4.0cm、復元底径5.4cmを測る。2は口縁から体部の1/5遺存する。口縁部ヨコナデ後体部外表面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ、薄くはなっているが内外に黒色処理がみとめられる。法量は復元口径13.0cm、残存器高3.0cmを測る。3は口縁部から体部1/5遺存する。口縁部ヨコナデ、外表面ヘラミガキ、内面ナデが施されている。復元口径12.4cm、残存器高4.0cmを測る。4は口縁から体部の1/4遺存する。ロクロ成形である。復元口径13.0cm、残存器高2.7cmを測る。

5は土器器壳である。口縁から胴部の1/3遺存する。口縁部ヨコナデ、体部外表面ヘラケズリ、内面ナデ、外面赤彩。復元口径13.4cm、残存器高12.2cmを測る。

6は土器器瓶である。口縁から底部の3/4が遺存する。口縁部ヨコナデ、外表面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ。口径26.8cm、器高27.0cm、底径8.0cmを測る。

7は土玉である。径2.1cm、幅1.7cm、孔径0.2cm、重量6.7gである。

8は鉄堵である。完形である。長さ32.5cm、厚さ0.5cm、重さ168.5gである。

H-015（第133図）

調査区東部に位置する。D-026、M-007に切られる。規模は3.45m×3.42mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は、3層に分層される。2・3層の山砂はカマドを壊した際に飛んだと思われる。

硬化範囲が認められる。壁高は約20cmを測る。周溝は、北壁を除いて全周し、幅18cm、深さ3.7cmを測る。

ピットは床面に1本検出された。P-1（径23cm×24cm、深さ20cm）を測り、梯子穴と考えられる。カマドはM-007に壊され、北壁中央に火床部が検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺3点、石製品1点、鉄製品1点、計5点を図示した。

1～3は土器器坏である。1は口縁から底部の1/4が遺存する。口縁部ヨコナデ、外表面ヘラケズリ後ヘ

第2節 壁穴住居跡

ラミガキ、内面ナデ後ヘラミガキを施されている。法量は復元口径12.0cm、残存器高3.4cm、復元底径8.0cmを測る。2・3は土師器壺口縁片で、内外面に赤彩が施されている。

4は砥石である。長さ7.1cm、幅8.8cm、厚さ4.4cm、重さ455.4gを測る。

5は鉄製の紡錘車である。直径5.7cm、厚さ0.5cm、重さ17.69gを測る。

H-017 (第134図)

調査区東南部に位置する。H-018, M-004に切られる。形状は正方形と思われる。

覆土は、3層に分層され人為的に埋め戻されている。

床面は中央一帯に硬化範囲が認められる。壁高は約30cmを測る(西壁)。周溝は、北西の隅部分のみ検出された。幅23cm、深さ6.0cmを測る。

ピットは床面に2本検出された。主柱穴はP-1(径80cm×60cm、深さ94cm)を測る。P-2は補助柱と思われ(径25cm×20cm、深さ20cm)を測る。カマドは北壁中央に検出され、両袖残存でよく焼けている。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺4点、高壺1点、小甕1点、計6点を図示した。

1~4は土師器壺である。1は口縁から底部の4/5が遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径12.0cm、器高4.4cm、底径4.0cmを測る。2は口縁から底部の4/5が遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。法量は口径12.8cm、器高4.0cm、底径は丸底である。3はほぼ完形である。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデが施されている。法量は口径12.8cm、器高4.2cm、底径は丸底である。4はほぼ完形である。栗圓式土器である。外面ヘラケズリ、内面ナデ後ミガキか。法量は口径12.4cm、器高4.0cm、底部は丸底である。

5は土師器高壺である。壺部から脚部の1/3が遺存する。壺部内面ナデ、脚部外面ヘラケズリ、脚部内面ヘラナデが施されている。残存器高7.4cmを測る。

6は土師器小型甕である。口縁から底部の4/5が遺存する。口縁部内外面ヨコナデ後ヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径11.4cm、器高9.0cm、底径5.4cmを測る。

H-037 (第134図)

調査区中央部に位置する。H-038, H-053と重複する。規模は2.85m×2.86mを測り、形状は正方形を呈する。

覆土は、4層に分層され、人為的に埋め戻されている。

床面はカマド周辺から南壁にむかって硬化範囲が認められる。壁高は約36cmを測る。周溝はカマド部分と南東の角を除き全周し、幅17cm、深さ4.2cmを測る。

ピットは床面に1本検出され、P-1(径25cm×29cm、深さ10cm)を測る。カマドは北壁中央に検出された。両袖は残存しよく焼けている。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺1点、甕2点、手捏土器1点、陶器1点、土製品1点、計5点を図示した。

1は土師器壺である。口縁から底部の1/3が遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。復元口径15.8cm、器高5.4cm、復元底径7.3cmを測る。

2と3は土師器甕である。2は口縁部から胴部の3/4が遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。口径13.4cm、残存器高7.3cmを測る。3は口縁部から胴部の1/4が遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。復元口径14.0cm、残存器高6.7cmを測る。

4は手捏土器である。高台のみが残存する。残存器高2.10cm、底径4.0cmである。

5は陶器の口縁片である。

6は棒状土製品である。長さ2.9cm、幅1.2cm、厚さ1.1cm、重量5.0gを測る。孔を穿こうとした痕がみとめられる。

土製品1点は写真のみの掲載である。

H-061 (第135図)

調査区西北部に位置する。M-017に切られる。規模は3.13m×2.86mを測り、形状は正方形方形を呈する。

床面はカマド前面からP-1、P-2まで硬化範囲が認められる。壁高は約10cmを測る。周溝は、カマド部分及び重複部分を除きほぼ全周し、幅16cm、深さ8cmを測る。

ピットは床面に3本検出された。主柱穴はP-1(径40cm×36cm、深さ30cm)・P-2(径47cm×41cm、深さ23cm)・P-3(径60cm×43.9cm、深さ47cm)を測る。カマドは北壁中央に検出された。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺2点、甕1点、計3点を図示した。

1は土師器壺である。1は口縁部から底部の3/4が遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、底部静止糸切り。法量は復元口径12.5cm、器高3.9cm、復元底径8.8cmを測る。

2は高台付壺で、ほぼ完形である。ロクロ成形。体部下端外面ヘラケズリ、底部静止糸切り後回転ヘラケズリ。法量は口径13.8cm、器高5.0cm、底径9.5cmを測る。

3は土師器甕である。口縁から胴部の1/10が遺存する。調整は内外面とも器面剥離が激しく不明である。

法量は復元口径16.0cm、残存器高6.0cmを測る。

H-065 (第135図)

調査区西部に位置する。H-066とH-113に切られる。規模は2.56m×2.5mを測り、形状は正方形と思われる。

周溝は、西側壁を除き検出され、幅18cm、深さ4cmを測る。

本住居跡から出土した遺物のうち、壺3点を図示した。

1～2は土師器壺である。口縁から底部の1/6が遺存する。ロクロ成形。底部ヘラケズリ、外面に薄く赤彩がみとめられる。法量は復元口径14.4cm、器高3.7cm、復元底径9.0cmを測る。

3は口縁片である。外面に赤彩が施されており、調整は内外面ともに器面剥離のため不明である。法量は復元口径15.8cm、残存器高3.0cmを測る。

4は須恵器壺の底部片である。ロクロ成形。底部ヘラ切りか。法量は残存器高0.9cm、復元底径8.6cmを測る。

H-066 (第136図)

調査区西部に位置する。H-065、H-071、H-113、M-044に切られる。規模、形状は不明。北東側一部の壁と床を検出した。ピットは床面に1本検出した。P-1(径29cm×25cm、深さ36cm)を測る。

本住居跡の出土遺物のうち、壺1点を図示した。

1は、土師器壺である。口縁から底部の1/2が遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。復元口径12.0cm、器高4.0cm、底部は丸底である。

第2節 壁穴住居跡

H-079 (第136・137図)

調査区西南部に位置する。H-078と南西側を中世台地整形に切られる。規模は6.2m×5.8mで、形状は正方形と思われる。

床面は中央に硬化範囲が認められる。周溝は、北東、南東壁のみ検出し、幅24cm、深さ4cmを測る。

ピットは床面に9本検出された。主柱穴はP-1（径37cm×42cm、深さ70cm）・P-2（径65cm×65cm、深さ27cm）・P-3（径90cm×85cm、深さ71cm）・P-4（径38cm×40cm、深さ70cm）の4本が対角線上に配され、南壁付近にP-5（径43cm×43cm、深さ24cm）が配される。補助柱穴と考えられるP-6（径106cm×不明、深さ40cm）・P-7（径60cm×55cm、深さ47cm）・P-8（径32cm×48cm、深さ26cm）・P-9（径48cm×51cm、深さ23cm）・P-10（径44cm×62cm、深さ20cm）・P-11（径28cm×28cm、深さ16cm）を測る。

本住居跡の出土遺物のうち、壺2点、小甕1点、計3点を図示した。

1は土師器壺である。口径から胴部の1/8が遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ。法量は復元口径19.7cm、残存器高6.8cmを測る。2は底部3/4が遺存する。外面ヘラケズリ。法量は残存器高2.0cm、復元底径8.2cmを測る。

3は土師器小型甕である。底部のみが遺存する。外面にヘラケズリがみとめられる。法量は残存器高1.3cm、器高3.6cmを測る。

H-099 (第137図)

調査区西南部に位置する。M-032と重複、南東側を中世台地整形に切られる。形状は方形と思われる。

覆土は人為堆積で3層に分層される。

床面はカマド右側に硬化範囲が認められる。壁高は約33cmを測る。周溝は、南東側部分を除いて検出され、幅20cm、深さ5cmを測る。

ピットは床面に1本検出された。主柱穴はP-1（径19cm×46cm、深さ35cm）を測る。カマドは北壁中央東より検出された。

本住居跡の出土遺物のうち、壺4点を図示した。

1～4は土師器壺である。1は口縁部から底部の2/3遺存する。外面ロクロナデ調整、体部下端から底部は回転ヘラケズリ、底部ヘラ切り。外面底部には、ひだつき。法量は口径13.7cm、器高4.2cm、底径7.6cmを測る。2は口縁部から底部の1/3遺存する。外面ロクロ成形、体部下端から底部は手持ちヘラケズリ。法量は復元口径14.0cm、器高4.1cm、底径8.1cmを測る。3は口縁から底部の1/3遺存する。外面ロクロ成形、体部下端から底部は手持ちヘラケズリ、内面にはヘラミガキがみとめられるが、器面剥離が激しい。法量は復元口径12.8cm、器高3.8cm、復元底径8.8cmを測る。4は口縁部から底部の2/3遺存する。口縁部ヨコナデ、外面ヘラケズリ、内面ナデ。法量は口径12.2cm、器高4.2cm、底部は丸底である。

H-100 (第138図)

調査区南部に位置する。規模は5.80m×6.07mを測り、形状は方形を呈する。

覆土は、人為堆積で2層分層される。

床面は住居跡中央に硬化範囲が認められる。壁高は約40cmを測る（西壁）。周溝は、カマド部分を除いて全周する。幅29cm、深さ4cmを測る。

ピットは床面に4本検出された。主柱穴はP-1（径37cm×27cm、深さ77cm）・P-2（径28cm×42cm、深さ87cm）・P-3（径46cm×38cm、深さ88cm）・P-4（径38cm×28cm、深さ69cm）の4本が対角線上に配さ